兵庫県文化財調査報告　第190冊

三田市

北摂ニュータウン内
遺跡調査報告書　V

1999年3月

兵庫県教育委員会

三田市

北摂ニュータウン内
遺跡調査報告書　V

西山遺跡群（にしやまいせきぐん）
西山西遺跡群（にしやまにしいせきぐん）

1999年3月

兵庫県教育委員会

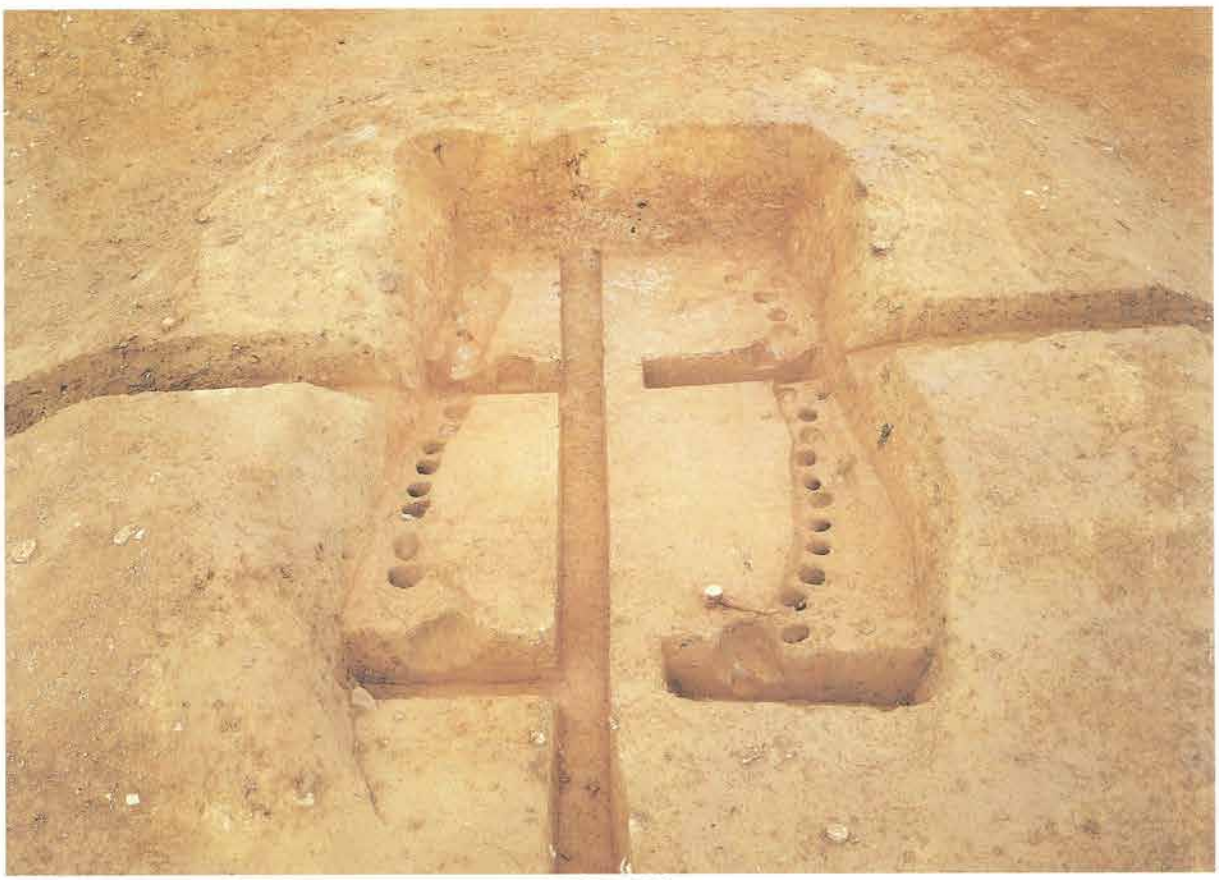
北摂ニュータウン中央地区（ウッディタウン）全景

カラー図版 2

西山古墳群全景

西山 2 号墳

西山 9 号墳



西山13号墳

カラー図版 4

西山18号墳

西山19号墳

西山古墳群　耳環・ガラス小玉

西山19号墳　土玉

例　言

1．本書は三田市けやき台３丁目に所在する西山遺跡群・西山西遺跡群の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は北摂ニュータウン中央地区（ウッディタウン）建設事業に伴うもので、住宅・都市整備公団の依頼を受けて、昭和63年度以前は兵庫県教育委員会社会教育・文化財課が、平成元年度以降は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。また整理作業は平成２年度と平成10年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。

3．遺構図に使用した方位は国土座標（第Ⅳ系）の座標北を示す。また標高は東京湾平均海水準（Ｔ．Ｐ．）を基準とした海抜高度である。

4．挿図番号は章立てごとに１からふり直しているが、写真図版番号はすべて通し番号である。

5．遺物番号は遺跡群ごとにふり、本文・実測図・写真に共通して用いた。なお金属器には‘Ｆ’、玉類には‘Ｊ’、石器には‘Ｓ’のアルファベットを頭文字として付している。土器の実測図の断面は須恵器・陶磁器を黒ベタ、土師器を白抜きとして区別している。

6．本文の執筆は久保弘幸・中川　渉・菱田淳子・鐵　英記が行った。分担は目次に示した。

7．遺物の整理は菱田が、挿図・写真図版の版組みは久保・中川・鐵が分担し、編集は柏原美音・大前篤子の協力のもと中川が担当した。

8. 出土遺物に付着した繊維の分析鑑定に、奈良国立文化財研究所遺物処理室の佐藤昌憲先生のお手を煩せた。

9. 発掘調査で出土した遺物、作成した図面・写真類は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で保管・管理している。

10. 発掘調査および報告書作成にあたり、以下の方々の助力を得た。記して感謝の意を表する。

（敬称略）

西村　康（奈良国立文化財研究所）、中村　浩（大谷女子大学）、菱田哲郎（京都府立大学）、高島信之・山崎敏昭（三田市教育委員会）、樫田　誠（小松市教育委員会）、藤井太郎（神戸市教育委員会）、乾哲也（和泉市教育委員会）

目　次

第１章　調査にかかる経緯

第１節　北摂ニュータウン建設と埋蔵文化財……（中川）　1

第２節　昭和62年度の調査……　5

第３節　平成３年度の調査……（久保）　7

第４節　整理作業……（中川）　8

第５節　遺跡をとりまく環境……　9

第２章　西山遺跡群の調査

第１節　遺跡の位置……（中川）　11

第２節　これまでの調査経過……　11

第３節　今回の調査の経過……　12

第４節　西山古墳群……（中川・菱田）　19

第５節　西山遺跡（弥生時代）……（中川）　89

第６節　西山遺跡（飛鳥～平安時代）……（鐵）　98

第３章　西山西遺跡群の調査

第１節　地形と遺跡の立地……（久保）117

第２節　調査の方法と経過……117

第３節　西山西古墳群……119

第４節　西山西遺跡……123

第４章　西山古墳群の検討

第１節　西山古墳群の変遷と群構成……（中川）127

第２節　横穴式木室について……137

挿　図　目　次

第１図　北摂ニュータウンの位置……１
第２図　西山遺跡群・西山西遺跡群の位置……２
第３図　北摂ニュータウン中央地区
　　（ウッディタウン）内の遺跡……４
第４図　西山遺跡群・西山西遺跡群の
　　年次別調査位置図……６
第５図　三田盆地周辺の古墳群……10

西山遺跡群

第１図　調査前地形測量図……15・16
第２図　調査後地形測量図……17・18

西山古墳群

第３図　２号墳墳丘測量図……20
第４図　２号墳主体部……21
第５図　２号墳木室礫床と副葬品の出土状況……　22
第６図　２号墳出土土器・鉄鏃・耳環……23
第７図　９号墳地形測量図……24
第８図　９号墳主体部……25
第９図　９号墳副葬品の出土状況（１）……26
第10図　９号墳副葬品の出土状況（２）……27
第11図　９号墳出土土器（１）……28
第12図　９号墳出土土器（２）……29
第13図　10号墳墳丘測量図……31
第14図　10号墳主体部と周溝内の遺構・遺物……32
第15図　11号墳墳丘測量図……34
第16図　11号墳主体部……35
第17図　11号墳出土土器……35
第18図　12号墳地形測量図……36
第19図　12号墳主体部……37
第20図　12号墳副葬品の出土状況……37
第21図　12号墳出土土器……38
第22図　13号墳墳丘測量図……41
第23図　13号墳主体部……42
第24図　13号墳副葬品の出土状況……43
第25図　13号墳出土土器……44
第26図　13号墳出土鉄釘……45
第27図　13号墳出土耳環……45
第28図　14号墳墳丘測量図……47
第29図　14号墳主体部……48
第30図　14号墳出土土器……48
第31図　15号墳墳丘測量図……50
第32図　15号墳副葬品の出土状況……51
第33図　15号墳出土土器……51
第34図　16号墳地形測量図……52
第35図　16号墳主体部……53
第36図　16号墳出土土器……54
第37図　16号墳出土耳環・ガラス小玉……54
第38図　17号墳地形測量図……55
第39図　17号墳周溝内の遺構……56
第40図　17号墳出土土器……56
第41図　18号墳墳丘測量図……58
第42図　18号墳主体部……59
第43図　18号墳副葬品の出土状況……61
第44図　18号墳出土土器（１）……63
第45図　18号墳出土土器（２）……64
第46図　18号墳出土土器（３）……64
第47図　18号墳出土鉄鏃・刀子……65
第48図　18号墳出土耳環……65
第49図　19号墳墳丘測量図……67
第50図　19号墳主体部……68
第51図　19号墳副葬品の出土状況（鉄鏃・土玉）……68
第52図　19号墳副葬品の出土状況（土器）……69
第53図　19号墳出土土器（１）……70
第54図　19号墳出土土器（２）……71
第55図　19号墳出土鉄鏃・刀子……71
第56図　19号墳出土土玉（１）……72
第57図　19号墳出土土玉（２）……73
第58図　19号墳土玉の細部写真……74
第59図　20号墳墳丘測量図……76
第60図　20号墳墳丘断面図・周溝内の遺構……77
第61図　20号墳出土土器……79
第62図　20号墳出土鉄鏃・刀子……79
第63図　溝状遺構西側出土の土器……80
第64図　竪穴住居跡ＳＨ01……82
第65図　ＳＨ01出土土器……83
第66図　竪穴住居跡ＳＨ02……85
第67図　ＳＨ02出土土器……86
第68図　土坑ＳＫ07・08……87
第69図　ＳＫ07・08出土土器……87
第70図　包含層出土の土器……88

西山遺跡（弥生時代）

第71図　木棺墓群……89
第72図　木棺墓ＳＸ01～03……91
第73図　木棺墓ＳＸ04～06……92
第74図　木棺墓ＳＸ07～09……93
第75図　木棺墓ＳＸ10～12……94
第76図　木棺墓ＳＸ13、土坑ＳＸ14～16……96
第77図　弥生時代の石器（１）……97
第78図　弥生時代の石器（２）……97

西山遺跡（飛鳥～平安時代）
第79図　Ａ地区全体図……99
第80図　掘立柱建物跡ＳＢ01・02 ……100
第81図　掘立柱建物跡ＳＢ03 ……101
第82図　掘立柱建物跡ＳＢ04・05 ……102
第83図　掘立柱建物跡ＳＢ06・07 ……103
第84図　溝ＳＤ01 ……104
第85図　溝ＳＤ02 ……105
第86図　集石土坑ＳＫ09 ……105
第87図　Ｂ地区全体図 ……106
第88図　掘立柱建物跡ＳＢ08 ……107
第89図　掘立柱建物跡ＳＢ09 ……108
第90図　掘立柱建物跡ＳＢ10・12 ……109
第91図　掘立柱建物跡ＳＢ11 ……110
第92図　掘立柱建物跡ＳＢ13・14 ……111
第93図　溝ＳＤ03断面図 ……112
第94図　出土土器（１） ……113
第95図　出土土器（２） ……114
第96図　出土鉄器 ……115
第97図　出土石器 ……115
第98図　出土銭貨 ……116
西山西遺跡群
第１図　地形測量図・遺構分布図 ……118
第２図　１～３号墳墳丘測量図 ……120
第３図　１～３号墳墳丘断面 ……121
第４図　１～３号墳主体部 ……122
第５図　出土遺物（１） ……123
第６図　掘立柱建物跡１ ……124
第７図　掘立柱建物跡２～４ ……125
第８図　出土遺物（２）鉄斧 ……126
西山古墳群の検討
第１図　Ⅰ～Ⅲ期の土器
第２図　Ⅳ期（古相）の土器
第３図　Ⅳ期（中相）の土器
第４図　Ⅳ期（中～新相）・Ⅴ期の土器
第５図　西山古墳群の変遷
第６図　西山古墳群の群構成
第７図　摂津・河内・播磨の横穴式木室
補遺
第99図　出土平玉

図　版　目　次

カラー図版１　北摂ニュータウン中央地区
（ウッディタウン）全景
カラー図版２　１．西山古墳群全景
２．西山２号墳
カラー図版３　１．西山９号墳
２．西山13号墳
カラー図版４　１．西山18号墳
２．西山19号墳
カラー図版５　１．西山古墳群　耳環・ガラス小玉
２．西山19号墳　土玉
図版１　１．北摂ニュータウン中央地区
（ウッディタウン）南東から
２．調査前の西山遺跡群と
西山西遺跡群（北西から）
図版２　１．調査前の西山遺跡群と
西山西遺跡群（真上から）
２．調査前の西山古墳群（真上から）
西山古墳群
図版３　１．西山古墳群全景（西上空から）
２．　同　上（南上空から）
図版４　１．西山古墳群と西山西古墳群
（真上から）
２．西山古墳群全景（真上から）
図版５　１．西山古墳群全景（南上空から）
２．　同　上（真上から）
図版６　１．西山古墳群（南上空から）
２．　同　上（同　上）
図版７　１．調査前全景（南西から）
２．　同　上（南から）
図版８　１．表土掘削後（北西から）
２．　同　上（南から）
図版９　１．２号墳全景（南から）
２．　同　上（東から）
図版10　１．２号墳主体部（南から）
２．　同　上（前庭部から）
図版11　１．２号墳主体部（北から）
２．奥壁付近の副葬品出土状況
（南から）
図版12　１．２号墳礫床面の鉄鏃出土状況
（南西から）
２．２号墳墳丘断ち割り（西から）
図版13　１．９号墳主体部（南から）
２．　同　上（東から）
３．　同　上（西から）

図版14　9号墳副葬品の出土状況
1．西小口側（東から）
2．中央部（東から）
3．東小口側（西から）
図版15　9号墳主体部
1．長軸断面（南西から）
2．掘り方断ち割り状況（南西から）
3．掘り方の遺物（西から）
図版16　1．10号墳全景（南から）
2．　同　上（東から）
図版17　1．10号墳墳丘断ち割り（南から）
2．　同　上（東から）
図版18　1．10号墳周溝内の箱式石棺（北から）
2．　同　上（西から）
図版19　1．10号墳周溝北側断面（西から）
2．10号墳周溝内の土坑ＳＫ01（西から）
図版20　1．11号墳全景（南から）
2．11号墳主体部（南東から）
図版21　1．11号墳墳丘断ち割り（南から）
2．　同　上（西から）
図版22　1．12号墳と弥生時代の木棺墓群（南から）
2．　同　上（西から）
図版23　1．12号墳主体部とＳＸ02の短軸断面（西から）
2．12号墳副葬品の出土状況（西から）
図版24　1．11・13～15号墳全景（南から）
2．13～15号墳全景（西から）
図版25　13号墳主体部
1．玄門付近の埋土上層の集石（南から）
2．埋土上層の集石（南東から）
3．埋土西側のたわみ込み（南から）
4．埋土東側のたわみ込み（南から）
5．埋土の断面（北西から）
6．南半部の埋土の断面（西から）
7．玄門付近の集石と土器の出土状況
8．耳環・鉄釘の出土状況
図版26　1．13号墳主体部埋土（南から）
2．13号墳主体部埋土（西から）
図版27　1．13号墳全景（南から）
2．13号墳主体部（北から）
図版28　1．13号墳主体部（前庭部から）
2．13号墳副葬品の出土状況（南から）
図版29　1．13号墳主体部　ピット列検出後（南から）
2．　同　上（北から）
図版30　1．13号墳主体部　ピット列検出後（西から）
2．西側ピット列検出状況（南から）
3．東側ピット列検出状況（南から）
4．西側ピット列掘削後（南から）
5．東側ピット列掘削後（南から）
図版31　1．13号墳墳丘断ち割り（南から）
2．　同　左　完掘後（南から）
3．主体部床面断ち割り（北西から）
4．　同　左（南西から）
5．北西主柱穴断ち割り（南から）
6．北東主柱穴断ち割り（南から）
7．南西主柱穴断ち割り（南から）
8．南東主柱穴断ち割り（南から）
図版32　1．13・14号墳全景（南から）
2．14号墳全景（南から）
図版33　1．14号墳墳丘断ち割り（南から）
2．14・15号墳墳丘断ち割り（西から）
図版34　1．15号墳全景（西から）
2．棺内土器枕出土状況（西から）
図版35　1．16号墳主体部（南から）
2．　同　上（東から）
図版36　16号墳主体部
1．主体部断面（南東から）
2．　同　上（西から）
3．副葬品出土状況（南から）
図版37　17号墳
1．周溝と土坑（南から）
2．土坑ＳＫ02の土器出土状況（南から）
3．土坑ＳＫ02の断面（西から）
図版38　1．18号墳主体部検出状況（北西から）
2．主体部サブトレンチ断面（北西から）
図版39　1．18号墳主体部断面（南から）
2．　同　上（西から）
図版40　1．18号墳全景（南から）
2．18号墳主体部（南から）
図版41　1．18号墳主体部（前庭部から）
2．　同　上　（北から）
図版42　1．18号墳全景（西から）
2．18号墳主体部（西から）
図版43　1．18号墳主体部　奥壁（南から）
2．西側壁（南から）
3．東側壁（南から）
4．東側壁（北から）

5．西側壁（北から）
図版44　1．18号墳主体部　西袖部（東から）
2．　同　上　東袖部（西から）
図版45　18号墳主体部
1．西側壁　ピット列検出状況(南東から)
2．奥壁　ピット列検出状況（南から）
3．ピット列検出状況（アップ）
4．玄門付近（西から）
5．奥壁付近の副葬品出土状況（南から）
6．　同　左（同　左）
7．床面断ち割り　西側壁側（南から）
8．　同　左　東側壁側（南から）
図版46　1．18号墳墳丘断ち割り（南から）
2．　同　上　完掘後（南西から）
図版47　18号墳横穴式木室の復元（1）
1．四隅の垂木
2．棟木を乗せる
3．垂木の角度
4．垂木を架ける
5．藤の蔓
6．棟木と垂木の結縛
7．玄門の構え
8．復元に係わった方々
図版48　18号墳横穴式木室の復元（2）
1．骨組みの状態（南から）
2．　同　上（南正面から）
3．　同　上（西から）
図版49　18号墳横穴式木室の復元（3）
1．粗朶を葺く
2．垂木に結わえる
3．下から上へ葺き上げる
4．粗朶を束ねる
5．奥壁側の状態
6．玄門側の状態
7．玄門から内部を覗く
8．木室内の状態
図版50　18号墳横穴式木室の復元（4）
1．粗朶で葺いた状態（南から）
2．　同　上（南正面から）
3．　同　上（西から）
図版51　1．19号墳墳丘全景（南から）
2．19号墳掘削後（南から）
図版52　1．19号墳主体部（南から）
2．　同　上（西から）
図版53　1．19号墳主体部土器の出土状況
（西から）
2．鉄鏃・刀子・土玉・赤色顔料の
出土状況（南から）
図版54　1．20号墳全景（南から）
2．　同　上（西から）
図版55　20号墳周溝内の土坑ＳＫ04
1．検出状況（南東から）
2．長軸断面（南東から）
3．完掘状況（南東から）
図版56　20号墳周溝内の土坑ＳＫ05と
溝状遺構西側の土器
1．ＳＫ05内の土器（南東から）
2．ＳＫ05断面（南西から）
3．溝状遺構西側の土器出土状況
図版57　1．竪穴住居ＳＨ01（南から）
2．ＳＨ01断面（北西から）
図版58　1．竪穴住居ＳＨ01カマド付近
土器出土状況（南から）
2．　同　上（東から）
図版59　1．竪穴住居ＳＨ01カマド付近
土器出土状況（南東から）
2．　同　上（西から）
図版60　1．竪穴住居ＳＨ02（南から）
2．ＳＨ02　カマド（南から）
図版61　竪穴住居ＳＨ02　カマド
1．埋土断面（南から）
2．炭層短軸断面（南から）
3．炭層長軸断面（西から）
図版62　1．土坑ＳＫ07断面（西から）
2．土坑ＳＫ08断面（東から）
西山遺跡（弥生時代）
図版63　1．木棺墓群ＳＸ02～09（東から）
2．木棺墓群ＳＸ03～08（西から）
図版64　1．木棺墓ＳＸ01（南から）
2．木棺墓ＳＸ02（南から）
3．木棺墓ＳＸ06（西から）
図版65　1．木棺墓群ＳＸ03～05・07（南から）
2．木棺墓群ＳＸ03～05（南から）
図版66　1．木棺墓ＳＸ07（南から）
2．木棺墓ＳＸ08（南から）
3．木棺墓ＳＸ09（南から）
図版67　1．木棺墓群ＳＸ11～16（北東から）
2．　同　上（南東から）
図版68　1．木棺墓ＳＸ10（南東から）
2．木棺墓ＳＸ11（南東から）
3．木棺墓ＳＸ12（南東から）
図版69　1．木棺墓ＳＸ13（南東から）

2．木棺墓ＳＸ04小口穴検出状況
（西から）
3．木棺墓ＳＸ02小口穴検出状況
（南西から）

西山遺跡（確認調査）

図版70　1．確認調査１トレンチ（北から）
2．確認調査２トレンチ（北から）
3．確認調査１トレンチ西拡張区
（南から）
4．確認調査１トレンチ東拡張区
（南から）
5．確認調査６トレンチ（西から）
6．確認調査８トレンチ（北西から）

西山遺跡（飛鳥～平安時代）

図版71　1．調査区　Ａ地区全景（西から）
2．　同　上（南から）
図版72　1．調査区　Ｂ地区全景（南西から）
2．　同　上（南から）
図版73　1．掘立柱建物跡ＳＢ01（南から）
2．　同　上（西から）
図版74　1．掘立柱建物跡ＳＢ02（南から）
2．掘立柱建物跡ＳＢ01・02（東から）
図版75　1．掘立柱建物跡ＳＢ03（南から）
2．　同　上（西から）
図版76　1．掘立柱建物跡ＳＢ04（北から）
2．　同　上（東から）
図版77　1．掘立柱建物跡ＳＢ05（南から）
2．　同　上（西から）
図版78　1．掘立柱建物跡ＳＢ06（南から）
2．　同　上（西から）
図版79　1．掘立柱建物跡ＳＢ07（南から）
2．　同　上（西から）
図版80　1．Ａ地区集石坑（西から）
2．溝ＳＤ02（南から）
図版81　1．溝ＳＤ02遺物出土状況（東から）
2．Ａ地区ピット遺物出土状況
（南から）
図版82　1．掘立柱建物跡ＳＢ11（南東から）
2．　同　上（南西から）
図版83　1．掘立柱建物跡ＳＢ12（南から）
2．　同　上（東から）
図版84　1．掘立柱建物跡ＳＢ13・14（南から）
2．　同　上（東から）

西山西古墳群

図版85　1．１～３号墳全景（南から）
2．　同　上（北から）
図版86　1．２号墳主体部（北から）
2．３号墳主体部（北から）

西山西遺跡

図版87　1．掘立柱建物跡ＳＢ01（西から）
2．掘立柱建物跡ＳＢ02（南から）
図版88　1．掘立柱建物跡ＳＢ03（北から）
2．掘立柱建物跡ＳＢ04（南から）

西山古墳群の遺物

図版89　２号墳　須恵器・鉄鏃・耳環
図版90　９号墳　須恵器
図版91　９号墳　須恵器
図版92　９号墳　須恵器・土師器
図版93　10号墳　土師器／11号墳　須恵器
図版94　12号墳　須恵器
図版95　13号墳　須恵器
図版96　13号墳　須恵器・土師器
図版97　13号墳　鉄釘・耳環
図版98　14号墳　須恵器・青磁／15号墳　須恵器
図版99　15号墳　須恵器／
16号墳　須恵器・耳環・ガラス小玉
図版100　17号墳　須恵器・土師器／
18号墳　須恵器
図版101　18号墳　須恵器
図版102　18号墳　須恵器
図版103　18号墳　須恵器・土師器
図版104　18号墳　鉄鏃・刀子・耳環
図版105　19号墳　須恵器
図版106　19号墳　須恵器
図版107　19号墳　鉄鏃・刀子・土玉
図版108　20号墳　須恵器・土師器
図版109　20号墳　須恵器
図版110　20号墳　鉄鏃・刀子
図版111　ＳＨ01・02　須恵器／
ＳＫ07・08　須恵器／包含層　須恵器

西山遺跡の遺物

図版112　出土須恵器
図版113　出土須恵器・土師器／鉄器
図版114　出土石器

西山西遺跡群の遺物

図版115　出土須恵器／鉄斧
図版116　出土須恵器・土師器

第　1　章

調査にかかる経緯

第１章　調査にかかる経緯

第１節　北摂ニュータウン建設と埋蔵文化財調査

１．事業内容

北摂ニュータウンは阪神間のベッドタウンとして、三田盆地西北部の丘陵上に建設された。事業は兵庫県と住宅・都市整備公団（当初は日本住宅公団、昭和56年に改組）によって昭和40年代から計画され、人口100,000人規模の街づくりを目指したものであった。すでに南地区（フラワータウン）・中央地区（ウッディタウン）では入居開始以来10数年が経過し、市の新しい中核となりつつある。また西地区（カルチャータウン）には関西学院大学の一部が移転し、北地区（テクノパーク）にもハイテク関連企業の誘致が進行中である。

２．埋蔵文化財の分布調査

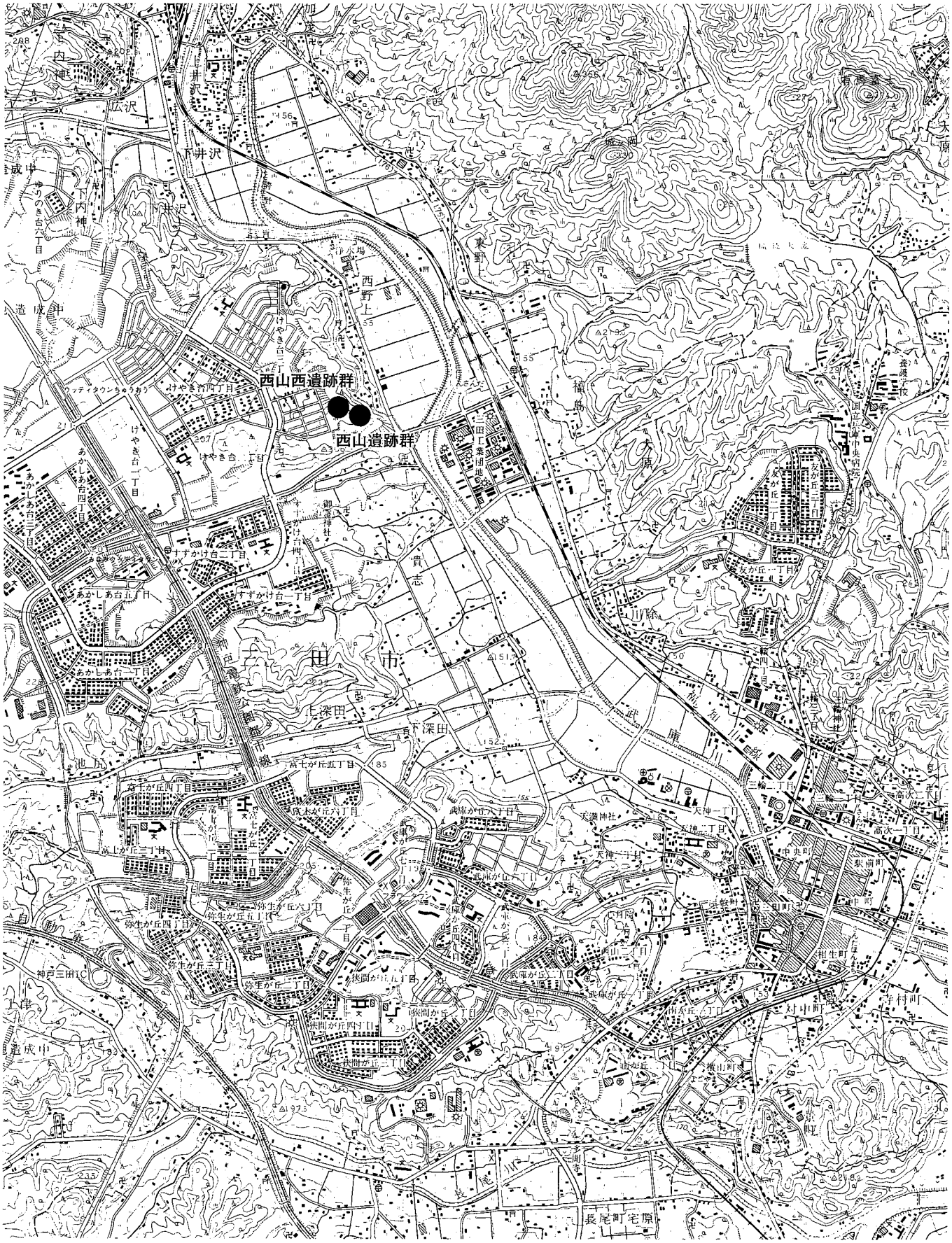
埋蔵文化財に対する取り組みは昭和44・45年度に行われた分布調査に始まる。調査は高井悌三郎氏を調査主任として２箇年度にわたるもので、計85箇所の包蔵地が見つかった。調査内容は『北摂ニュータウン計画地域内　埋蔵文化財分布調査遺跡地図及地名表』第１・２集に詳しい。

３．中央地区（ウッディタウン）における発掘調査

分布調査の結果と事業計画の進展に伴い、昭和46年度から昭和53年度にかけて行政外の研究者による発掘調査が南地区と中央地区の一部で行われた。西山１～８号墳の調査もその一環であり、成果は『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅰ』に所収されている。

発掘調査の大規模化に伴い、昭和53年度の途中からは兵庫県教育委員会が中央地区の調査を継続的に行っている。その成果の一部はすでに『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅱ』『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅲ』で報告している。ここで中央地区内における他の遺跡を簡単に紹介する。

第１図　北摂ニュータウンの位置



第２図　西山遺跡群・西山西遺跡群の位置（１：25,000「三田」「藍本」）

遺跡のほとんどは盆地を見下ろす丘陵上の平坦面を中心に立地している。またいずれの地点も複数の時代の、異なる性格の遺構が重複しているのが特徴である。

奈カリ与遺跡　弥生時代中期後半の高地性集落、古墳時代終末期の奈カリ与古墳、戦国時代の釜屋城跡からなる。この調査以来、北摂地域の高地性集落が注意されるようになった。また奈カリ与古墳は１基のみの単独墳で、凝灰質砂岩の板石を組み合わせて作った横口式箱式石棺様石室と呼ばれる特異な主体部をもつ。

五良谷古墳群　古墳時代後期の五良谷古墳群、戦国時代の五良谷城跡からなる。調査された五良谷11号墳は２基の木棺が並列しており、６世紀前半代の造営になる。

奈良山遺跡　古墳時代前期・後期～終末期の奈良山古墳群、奈良時代の製鉄遺跡などからなる。奈良山１号墳は礫槨をもち４世紀代に遡る可能性がある。２号墳は方形台状墓の可能性がある。12号墳は奈カリ与古墳よりもより整美な板石を用いた横口式石棺墓である。古墳群の大半は公園内に保存されている。

梶下ヶ谷遺跡　縄文時代の落とし穴群、奈良時代の集落などからなる。谷部で見つかった唯一の遺跡である。

下西山遺跡　飛鳥時代の鍛冶遺構を伴う竪穴住居群が見つかっており、生産関連の集落であったとみられる。

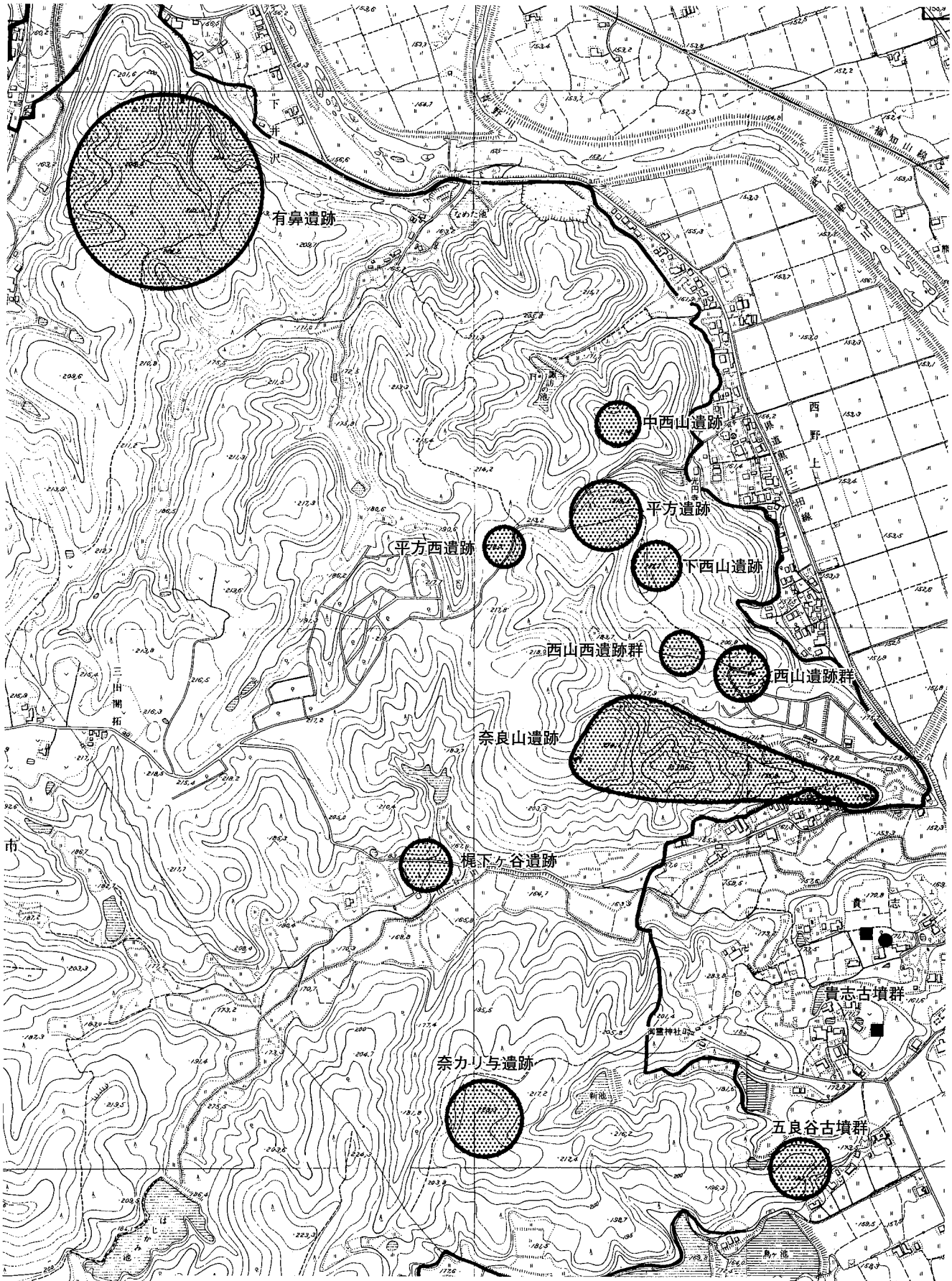
平方遺跡　弥生時代中期後半の高地性集落、古墳時代後期の須恵器窯跡群・工房・古墳群、戦国時代の平方城などからなる。弥生時代の住居跡や柱穴から小銅鐸の土製鋳型一対と銅鐸舌が出土している。また平方窯産の須恵器が西山古墳群で出土し、平方古墳群にも２基の横穴式木室がある点など、両者は密接なつながりを有している。

平方西遺跡　古墳時代後期の集落、時期不明の木棺墓群などからなる。本来は平方遺跡と一連の遺跡である。

中西山遺跡　弥生時代中期後半の高地性集落、古墳時代後期の古墳群、戦国時代の中西山城などからなる。中西山３号墳は北摂ニュータウン内唯一の横穴式石室墳である。

有鼻遺跡　弥生時代中期後半の高地性集落などからなる。近畿地方で最古の鉄剣が出土している。震災復興のために派遣された支援職員によって、広大な面積が調査された遺跡でもある。

貴志古墳群　北摂ニュータウン中央地区の用地外ではあるが、貴志の集落の中に３基からなる古墳群かある。そのうち２号墳は一辺15m、高さ３mの方墳で、内部に横穴式石室の存在が推定され、昭和47年に兵庫県指定文化財となっている。３号墳も一辺20m、高さ５mの方墳で、横穴式石室をもつとされている。



第３図　北摂ニュータウン中央地区（ウッディタウン）内の遺跡（縮尺１：10,000）

第２節　昭和62年度の調査

１．西山古墳群内での新たな発見

年度の前半には中西山遺跡の全面調査と、平方遺跡・梶下ヶ谷遺跡の確認調査を実施した。その当時周辺の丘陵は、文化財の未調査地や未買収地などを残す以外、ほとんどが造成で削り取られてしまっていた。そこでまだ残っていた丘陵の法面を観察したところ、多数の遺物が散布しているのが見つかり、これまで把握されていた範囲以上に遺跡が広がっていることが判明した。同時に西山１～８号墳の南側に残っていた斜面を踏査したところ、雑木林中に多数のマウンドが存在しているのを発見した。

この南側斜面部は『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅰ』257頁の「第14章　まとめ」においても、「低墳丘の古墳や土壙墓などがこれ以外に存在した可能性」が想定されていたが、宅地造成によって斜面部の一部が破壊されていたことや、未買収地のために立ち入りが制限されていたこともあって、埋蔵文化財の有無が確認されないまま当時に至っていたところである。

この発見によって、同年度後半に同古墳群の全面調査およびその他の遺跡の確認調査を実施することになった。

２．年度後半の調査

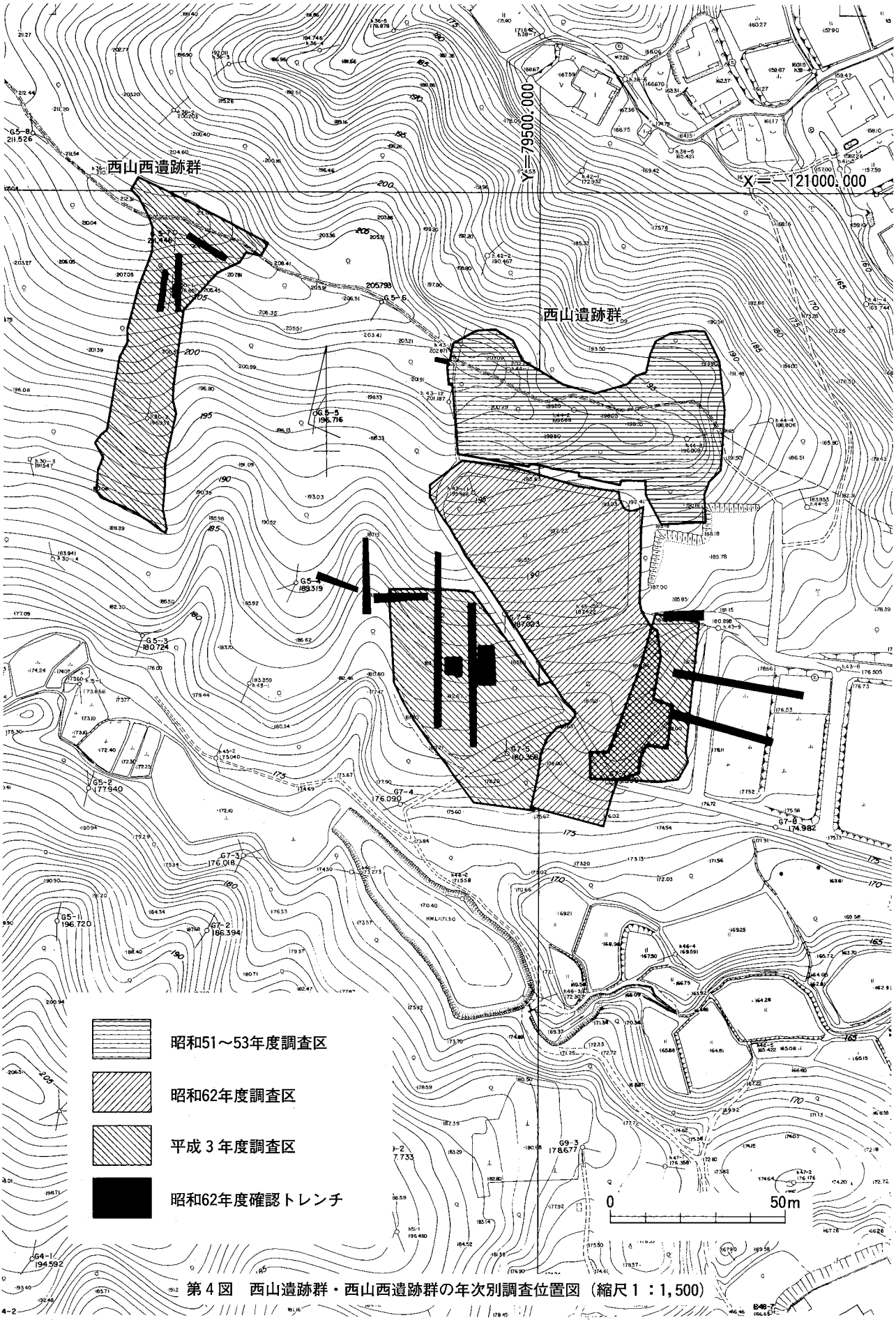
年度の後半には西山古墳群・平方遺跡・梶下ヶ谷遺跡の全面調査と、西山遺跡・梶下ヶ谷遺跡および周辺に残されていた丘陵部分の確認調査を行った。

西山遺跡群　現地踏査で発見された古墳群の範囲を中心に、約3,700㎡の全面調査を行った。その結果計13基の古墳群を調査し、中でも２・13・18号墳は横穴式木室墳という類例の少ない古墳であることが判明した。２月21日には平方遺跡と合わせて現地説明会を開催した。

その他西側に隣接する斜面部にも遺跡の存在が予想されたため確認調査したところ、奈良時代の柱穴・溝などが見つかった。また調査区の南東側でも掘立柱建物群がさらに広がることが判明した。これらは西山遺跡として次年度以降の調査に委ねられた。

西山西古墳群　周辺の丘陵部分の確認調査でもほとんどのトレンチで遺構・遺物が見つかり、新発見の遺跡についてはそれぞれ西山西古墳群・下西山遺跡・平方西遺跡と名付けた。

保存協議　この年度の調査では西山古墳群で３基の横穴式木室墳が見つかり、平方遺跡で土製の小銅鐸鋳型一対が出土するなど重要な発見が相次ぎ、調査の最終段階で遺構の断ち割りなどを残した状態で、住宅・都市整備公団と保存協議を行うことになった。そのため西山古墳群でも２・13・18号墳の墳丘・木室を残したまま、調査を一旦終了した。



第４図　西山遺跡群・西山西遺跡群の年次別調査位置図（縮尺１：1,500）

第３節　平成３年度の調査

保存協議を行っていた平方遺跡と西山古墳群については、既に周辺が造成済みで保存は工法上難しいという結論に達した。そこで平方遺跡では平成２年度に、西山古墳群では平成３年度に中断していた遺構の断ち割り調査を再開した。

平成３年度には西山古墳群の２・13・18号墳の墳丘の断ち割りに加えて、昭和62年度の確認調査で見つかった西山遺跡と西山西古墳群の範囲も併せて調査した。全面調査を行った面積は西山遺跡が約2,900㎡、西山西古墳群が約2,100㎡である。

西山遺跡では以前に調査したものも合わせて、奈良～平安時代の掘立柱建物が14棟見つかった。

西山西古墳群では７世紀代の古墳３基の他に７世紀末～８世紀初頭の掘立柱建物４棟が新たに発見された。そこで掘立柱建物群の部分については西山西遺跡とし、総称して西山西遺跡群と呼ぶことにする。

表１　西山遺跡群・西山西遺跡群関係の調査一覧

北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅰ

	種別	遺跡名	所　在　地	調　査　期　間	調査担当者
第１次調査	確認	西山遺跡 西山１号墳	三田市貴志字西山	昭和51年８月18日 ～昭和51年８月28日	藤井祐介・高島信之 永井克秀・西本雅人 深井明比古・保平雅実
第２次調査	確認	西山古墳群	三田市貴志字西山	昭和52年６月２日 ～昭和52年８月12日	藤井・潮崎　誠・高島 丹治康明・永井・西本
第３次調査	全面	西山古墳群	三田市貴志字西山	昭和52年９月20日 ～昭和53年２月18日	藤井・潮崎・高島・丹治 永井・西本・平野知典
第４次調査	全面	西山古墳群 西山遺跡	三田市貴志字西山	昭和53年４月27日～ 昭和53年６月27日	藤井・潮崎・高島 平野・森田　洋

北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅴ

遺跡調査番号	種別	遺跡名	所　在　地	調　査　期　間	調査担当者
８７００５１	全面 確認	西山古墳群 西山遺跡	三田市けやき台３丁目	昭和62年11月１日 ～昭和63年３月31日	深井明比古・岸本一宏 中川　渉・菱田淳子
８７００６２	確認	西山西古墳群	三田市けやき台３丁目	昭和62年11月１日 ～昭和63年３月31日	深井・岸本
９１００５８	全面	西山遺跡	三田市けやき台３丁目	平成３年10月13日 ～平成４年２月22日	久保弘幸・鐵　英記
９１００５９	全面	西山西古墳群 西山西遺跡	三田市けやき台３丁目	平成３年10月13日 ～平成４年２月22日	久保・鐵

第４節　整理作業

出土品の整理作業および報告書作成は、平成２年度と平成10年度の両年度で、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。

整理作業は出土遺物の①水洗→②ネーミング→③接合・補強→④実測・拓本→⑤復元→⑥写真撮影の順に実施した。さらに遺物実測図・遺構図と共に⑦トレース→⑧レイアウトを行い、原稿執筆→印刷を経て報告書刊行となる。

なお金属器については劣化を防ぎ、元の形状を復元するため保存処理を行った。保存処理作業は①形状観察・写真撮影→②脱塩処理→③Ｘ線透過試験→④錆削除→⑤真空樹脂含浸→⑥乾燥→⑦欠損部分を補填→⑧密封乾燥保管の工程で行った。

１．平成２年度

西山古墳群の土器のネーミング、接合、復元を行った。担当職員は以下のとおりである。

調査担当者　　中川　渉、菱田淳子

整理担当嘱託員　香川フジ子、早川亜紀子、木村淑子、水戸扶美子、西野淳子、杉本淳子

２．平成10年度の作業

西山遺跡・西山西遺跡群の土器の水洗、ネーミング、接合・補強、復元、西山古墳群・西山遺跡・西山西遺跡群の土器・鉄器・石器の実測・トレース・写真撮影・図面補正・レイアウトを行った。担当職員は以下のとおりである。

調査担当者　　久保弘幸、中川　渉、菱田淳子、鐵　英記

整理担当嘱託員　柏原美音、酒井喜美子、平松ゆり、高瀬敬子

（金属器担当）　栗山美奈、和田寿佐子、前川悦子、藤川紀子

日々雇用職員　　大前篤子、西岡敬子、秋枝　泉

参考文献　兵庫県教育委員会1970『北摂ニュータウン計画地域内　埋蔵文化財分布調査遺跡地図及地名表』第１集

兵庫県教育委員会1971『北摂ニュータウン計画地域内　埋蔵文化財分布調査遺跡地図及地名表』第２集

三田市教育委員会1983『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅰ』

兵庫県教育委員会1983『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅱ』

兵庫県教育委員会1993『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅲ』

第５節　遺跡をとりまく環境

１．地理的環境

兵庫県三田市は旧摂津国の西北部にあたる有馬郡と川辺郡にまたがり、播磨国や丹波国と境を接している。三田盆地は市域を北西から南東に貫流する武庫川に沿って細長く展開し、盆地の南部を中心に三田藩の城下町以来の町並みが開けている。しかし昭和40年代以降の開発により三田市域の丘陵地帯は大きく改変を受けたため、平成４年の地形図（第２図）では旧地形を窺い知ることもできなくなってしまっているところも多い。そこでまだ大規模な開発が及んでいない昭和50年頃の地形図（第５図）から、周辺の地形や遺跡の立地を眺めることにする。

三田盆地を囲む丘陵地帯の地質は武庫川の両岸で大きく異なっている。武庫川左岸の北部は火山成の流紋岩類で構成される険しい山地となっており、標高はそれほどではないものの、有馬富士に代表される円錐形のピークをもった山々が林立している。山中には山岳寺院がいくつも建立され、現代では谷地形を利用して青野ダムなどが作られている。

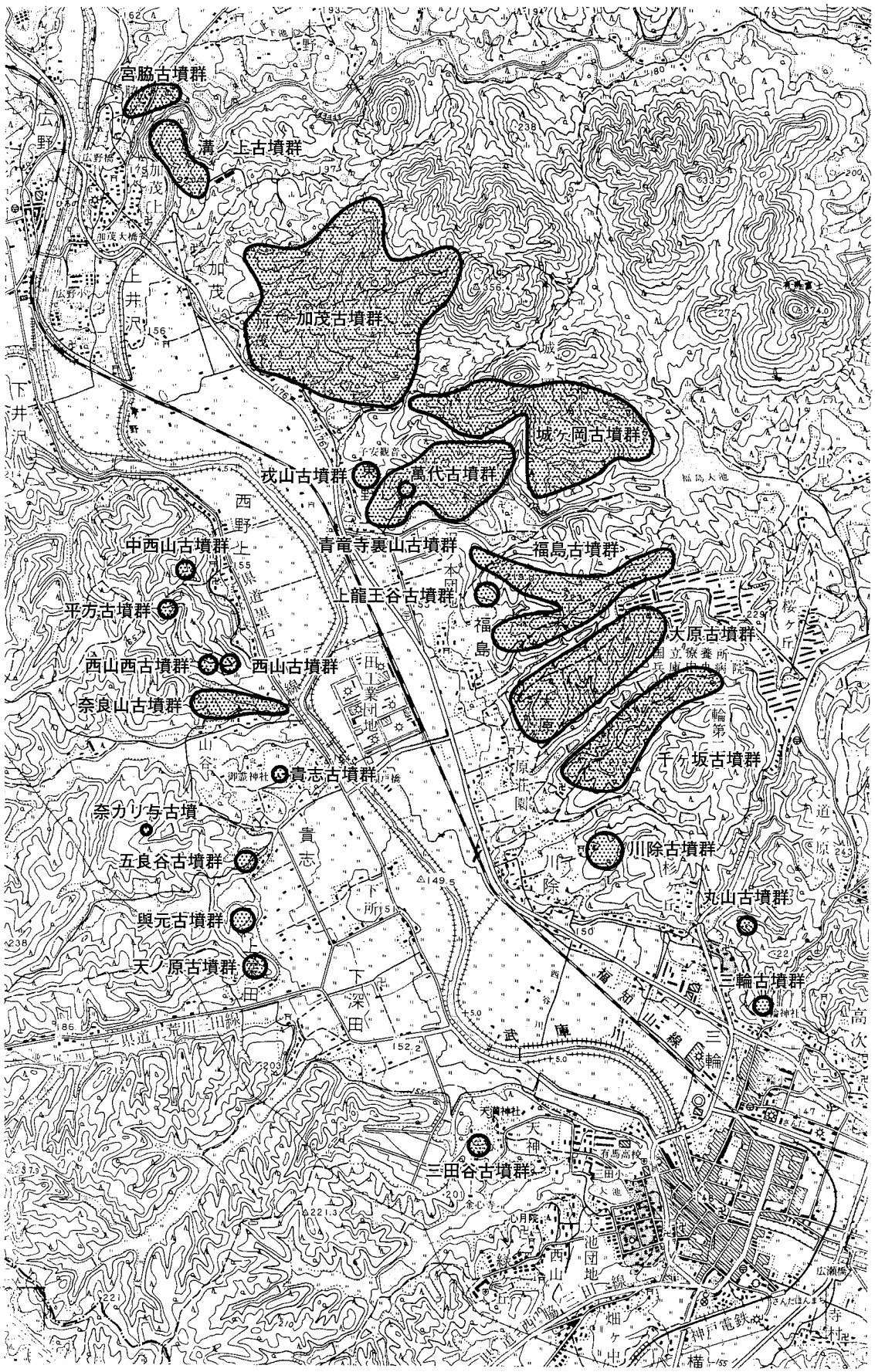
これに対し武庫川右岸は湖水成の細粒堆積物からなる神戸層群でできており、標高200～230mほどの平坦な丘陵地帯が広がっている。地質的に浸食に弱いため奥深い開析谷が無数に刻み込まれており、古墳時代や奈良時代にはその谷を利用して須恵器の窯跡や鍛冶炉が設けられていた。戦後は放牧地などに利用されることもあったが、水利が悪いため積極的に開発されることはなかった。こうした平坦な地形、造成しやすい土質、未開発地であった点が、ニュータウン事業に打って付けだったのであろう。

２．歴史的環境

三田盆地の遺跡についてはこれまでに何度も紹介されているので、ここでは古墳に絞って触れることにする。第５図に三田盆地周辺の古墳群の分布を掲げた。このうちのほとんどが５世紀後半から７世紀にかけての後期の古墳群とみられる。

古墳群の様相も武庫川をはさんで大きく異なっている。武庫川左岸には現在の国道176号にあたる街道に面して川除・大原・福島・加茂などの集落が並んでおり、その背後の丘陵に数十基単位の大きな古墳群が幾つも存在している。墓域の広がりは尾根筋のかなり奥深くまで及んでおり、長期間にわたって継続的に営まれたものとみられる。古墳群の多くは未調査だが、近年三田市教育委員会が調査した萬代２号墳では５世紀後半の木棺直葬が、兵庫県教育委員会が調査した福島古墳群では、６世紀後半の木棺直葬１基と７世紀代の横穴式石室５基が見つかっている。全体に福島古墳群を境に北側では横穴式石室が多く、南側では木棺直葬墳が主体となっているようである。この他青龍寺裏山１・２号墳は磚敷きの石室をもつ終末期古墳である。

これに対して武庫川右岸では丘陵の先端を縁取るように数基～20基の小規模な古墳群が連なっている。横穴式石室は調査された中西山３号墳の他に貴志２・３号墳が推定されているくらいで数少なく、最後まで木棺直葬墳が主体となっている。反面、宅原付近で採取できる凝灰質砂岩の板材を用いた石棺をもつ奈カリ与古墳・奈良山12号墳・西山７号墳や、横穴式木室をもつ西山２・13・18号墳・平方１・２号墳といった特異な主体部の終末期古墳を造営する地域でもある。西山古墳群はこの中でも前方後円墳で金銅製冠が出土した６号墳を筆頭に20基からなる最大規模の古墳群である。



第５図　三田盆地周辺の古墳群（縮尺１：25,000）

第　2　章

西山遺跡群の調査

第２章　西山遺跡群の調査

第１節　遺跡の位置

所在地　西山遺跡群は三田市けやき台３丁目に所在し、現在は三田市民病院の用地の一部となっている。開発以前の地名は三田市貴志字西山である。

立地　遺跡群は東南東方向に延びる尾根筋の稜線から南側の斜面に立地している。

古墳群は全部で20基からなり、昭和51～53年度に調査された１～８号墳のうち規模が一段大きい４～６号墳が稜線上の好地を占めている。尾根の先端からは武庫川を見下ろすことができるが、奈良山の丘陵に遮られて盆地中央部への眺望はきかない。北側斜面にある８号墳を除く他の16基の古墳は、日当たりの良い南側斜面に立地している。

ここから尾根伝いに北西へ向かうと、下西山遺跡・平方遺跡と連絡し、谷を隔てた南方200mの尾根上には奈良山古墳群が存在する。

第２節　これまでの調査経過

１．遺跡の発見

『北摂ニュータウン計画地域内　埋蔵文化財分布調査遺跡地図及地名表』第２集には「西山須恵窯跡(239)」として「貴志古墳群の北方丘陵の南斜面に、須恵器の窯場が近接して存する。これ(239)は植林のためか一部削りとられた斜面の断面に赤く焼けた側壁の端をのぞかせており、付近に須恵器片を散らしていて、須恵器の窯場であることにあやまりはない。いまのところ６基並列するものと推定されるが、子細は不明である。このうちとくにⅡ号窯の脇に、須恵杯、土師杯、鉄鏃等がまとまって存する地点があるが、直接窯と関係あるものかどうか明らかではない。この状況はこのまま保存して他日の正式発掘調査に託すべきものとかんがえる。」と発見の状況を詳細に述べている。

このように当初は須恵器の窯跡として発見し、他に古墳か何かの遺構がある地点と認識していたようである。しかし昭和51～53年度・昭和62年度・平成３年度の調査では須恵器窯跡についての手掛かりはまったく得られなかった。それにしては分布調査段階の所見があまりにも具体的であり、同じく須恵器窯跡とされていた平方遺跡でも３基の窯跡が意外な所から見つかっていることなどを考え合わせると、やはり周辺に窯跡が存在した公算は高い。可能性としては地点を表した地図が二万五千分の一だったために誤差が大きく、調査地点とずれていることが考えられる。

２．昭和51～53年度の調査

西山古墳群・遺跡では昭和51年８月から昭和53年６月にかけて、藤井祐介氏（故人）を団長とする調査団によって計４次にわたる発掘調査が行われた。その調査によって西山１～８号墳の存在が明らかとなり、中でも６号墳は前方後円墳、５号墳は造り出しをもつ円

墳であった。さらに６号墳の下層で弥生時代の方形周溝墓を検出し、弥生時代の遺跡があることも判明した。調査の成果は昭和58年に『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅰ』として三田市教育委員会から刊行されている。

以下報告書をもとに、第１～４次調査での西山古墳群・西山遺跡の調査経過を簡単に記す。

第１次調査（昭和51年８月18日～８月28日）

西山遺跡・西山１号墳の雑木の伐採を行い、他に古墳状隆起を認める。宅地造成による削平部分に断面観察用セクション及びトレンチを設けて確認調査を行う。１号墳で墓壙を確認する。

第２次調査（昭和52年６月２日～８月12日）

雑木の伐採後７基の古墳を確認し、１・４～８号墳の調査前地形測量を行う。各古墳のトレンチ調査を行い、主体部を検出する。

第３次調査（昭和52年９月20日～昭和53年２月18日）

西山古墳群の全面調査を行う。１・３～６・８号墳で主体部を調査する。２号墳は溝状遺構を検出したが、墳丘の大部分は宅地造成で削平されている。前方後円墳である６号墳では６基の埋葬施設を検出し、埋葬施設６からは金銅製冠などが出土する。７号墳では墓壙を検出したものの、埋葬施設は確認できていない。

第４次調査（昭和53年４月27日～６月27日）

西山７号墳及び６号墳下層の西山遺跡の全面調査を行う。７号墳の墓壙内で箱式石棺を検出し、主体部が「横穴式土壙」であると判る。６号墳の盛土の下で、弥生時代中期後半の方形周溝墓１基と埋葬施設４基を検出する。

第３節　今回の調査の経過

１．調査の概要

今回の報告書の内容は昭和62年度後半と平成３年度の２回に分けて行われた調査によるものである。

西山遺跡群は古墳時代後期の群集墳である西山古墳群と、弥生時代の墓域と奈良～平安時代の建物群を中心とする西山遺跡からなる。

西山古墳群では２・９～20号墳の13基の古墳を調査し、そのうち２・13・18号墳は横穴式木室墳で、それ以外は木棺直葬墳であることが判明した。また同時期の竪穴住居も検出しており、第４節で古墳群と併せて報告する。

西山遺跡では弥生時代と考えられる木棺墓群と、奈良～平安時代の掘立柱建物群などが見つかった。古墳時代以外の遺構・遺物をまとめて西山遺跡とし、弥生時代のものについては第５節で、奈良～平安時代以降は第６節で報告する。

２．調査区の設定

全面調査は西山１～８号墳の南側斜面、東西約70m、南北約100m、面積約3,700㎡の範囲を対象とした。

調査区内の地区割りは、斜面の最上部に設置した任意のポイント［Ｅ－１］を基準に、国土座標にのっとった10m方眼の座標を組んだ。座標の呼び方は東西ラインを東からアルファベットで、南北ラインを北から算用数字で表した。ただし当初設定したＡラインより東へ調査区が広がったため、Ａから東へはＺから逆順に付け足した。座標の基準はＥのラインがＸ＝－121,076.962、１のラインがＹ＝79,481.775である。地区の呼び方は、例えばＡラインと１ラインの交点Ａ－１を北西隅とする10m方眼をＡ－１区と表記して、遺構の位置・遺物の出土地点などを記録した。

なお第６・７図は昭和51～53年度・昭和62年度・平成３年度の平面図を合成したものだが、昭和51～53年度には国土座標を使用していなかったため、道路部分や遺構のつながりなどをもとに合わせている。また測量の際の標高は東京湾平均海水準（Ｔ．Ｐ．）を使用しているが、昭和51～53年度・昭和62年度・平成３年度の３回の調査のいずれもが異なる水準点を基準にしている。そのため等高線にズレが生じているが、調整はしていない。

３．昭和62年度後半の調査

現地での作業は11月16日より開始した。まず年度前半の踏査によって新たに発見された古墳群および遺跡の存在が予想される範囲について立木を伐採し、掘削前の地形測量・写真撮影を行った。その間に西側斜面部分の確認調査を実施し、１・２トレンチで柱穴・溝などを検出した。そこで１トレンチ中央の緩斜面部分の両側に拡張区を設けたところ、奈良時代の掘立柱建物の存在が判明した。

12月７日、各古墳に設定したトレンチから掘削を開始し、引き続き全面の表土掘削に移った。表土掘削を終えたところから随時墳丘測量・地形測量を行い、12月22日に空中写真撮影を行った。現況測量の段階では15基の古墳状マウンドを認めていたが、そのうち６基は古墳ではないと判断した。逆に当初はまったく隆起が見られなかったものの、遺構精査によって新たに主体部や周溝の残骸が見つかった古墳が３基ある。また削平されたと思われていた２号墳の主体部が造成された道路敷きの下から見つかり、計13基の古墳を調査することができた。新発見の古墳については９～20号墳と名付けた。

古墳群以外にも同時期の住居跡、弥生時代と考えられる木棺墓群、奈良・平安時代の掘立柱建物群などを検出することができた。奈良・平安時代の掘立柱建物群はさらに南東側へ広がることが判ったため、３本のトレンチを入れて拡張する範囲を確認した。

全体の遺構をほぼ掘り終えた段階で、全景写真撮影・個別写真撮影・遺構実測を行い、２月10日と３月９日に空中写真撮影を行った。また２月21日には現地説明会を開催して、約300人の見学者を集めた。

写真・図面による記録を済ませた古墳から墳丘を断ち割り、盛土を除去した。ただし２・13・18号墳については、住宅・都市整備公団と保存協議をはかるため、墳丘と横穴式木

室の断ち割りを残した状態で、３月27日に調査を終了した。

４．平成３年度の調査

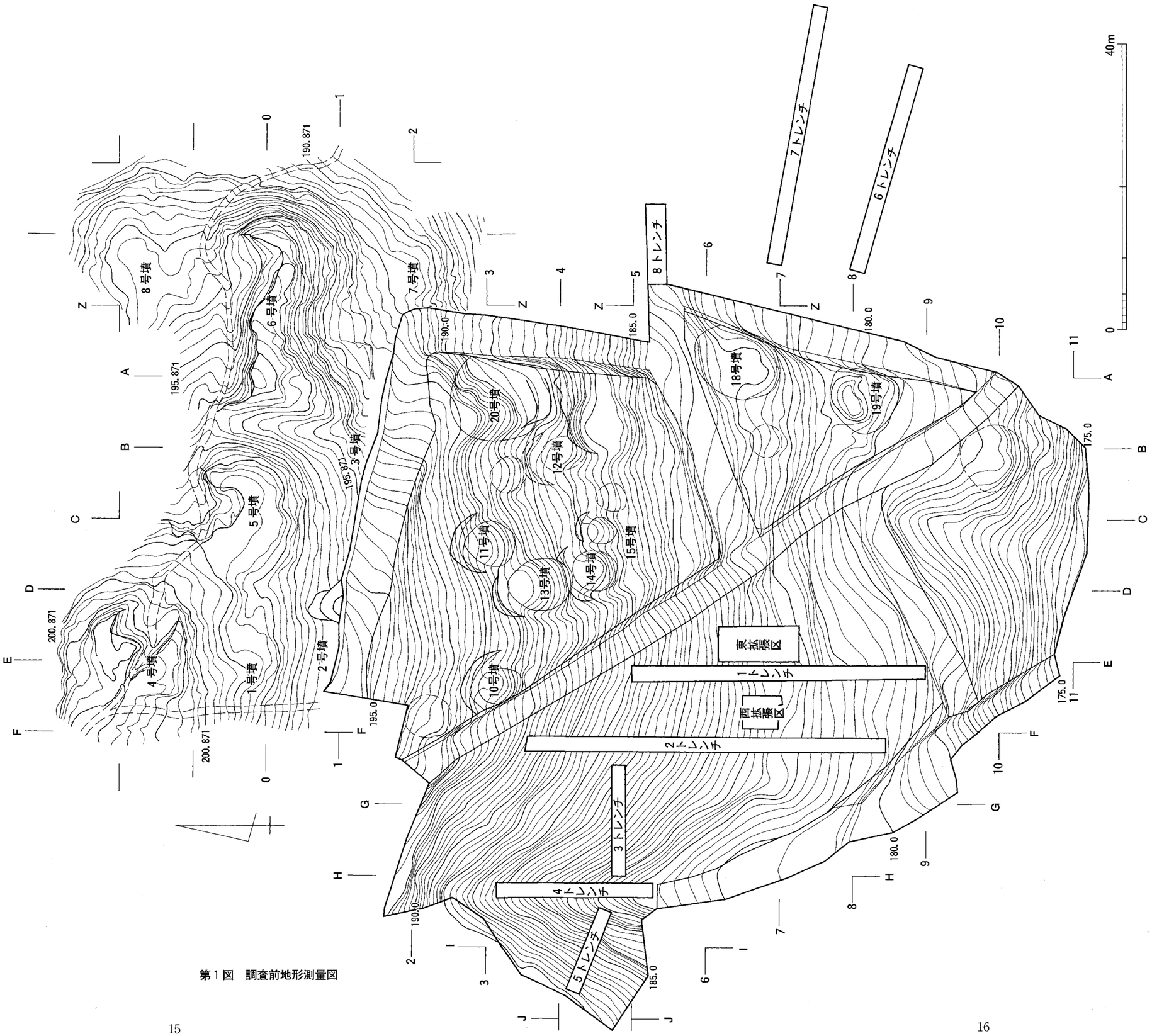
古墳の保存が見送られたため、残してあった２・13・18号墳の墳丘の断ち割りを実施し、同時に西山遺跡の調査を行った。西山遺跡の調査区は古墳群をはさんで東西に分かれている。西側のＡ地区は確認調査の１～３トレンチの範囲で、面積は約2,000㎡である。東側のＢ地区は確認調査の６～８トレンチの範囲に加えて、昭和62年度に検出した掘立柱建物跡３棟の範囲を一部重複する形で調査しており、面積は約900㎡である。

西山古墳群　調査は10月13日に開始した。２・13・18号墳の墳丘は３年以上も放置されていたため、シートも破れ、かなりの浸食を受けていた。それでも覆土を清掃し、墳丘を断ち割って断面の状況を記録した後、盛土を全て除去して築造以前の状況を記録した。また２号墳の主体部の礫床の剝ぎ取りを試みており、剝ぎ取り自体は不首尾に終わったが、その際に礫と礫の隙間から耳環が１点出土した。

西山遺跡　Ａ地区では10月16日から掘削を開始し、中央のテラス状平坦面を中心に奈良時代の掘立柱建物７棟を検出した。

Ｂ地区でも前回調査部分はかなり傷んでおり、再精査を行った。奈良～平安時代の掘立柱建物を新たに４棟検出し、合計７棟からなる建物群を調査した。

12月13日に全景写真撮影を行い、１月16日に調査を終了した。

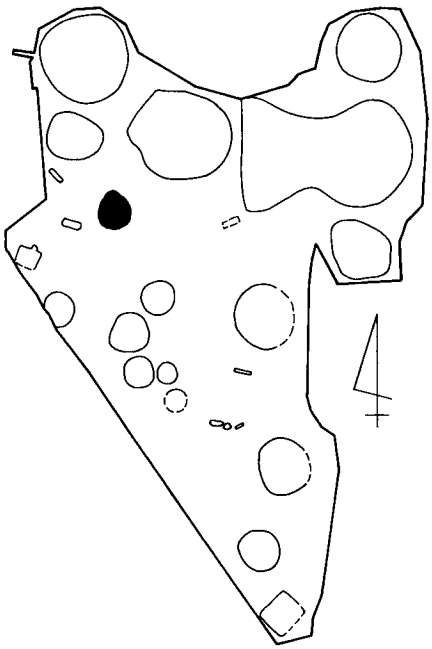


第１図　調査前地形測量図

第２図　調査後地形測量図

第４節　西山古墳群

１．西山２号墳



立地

２号墳はＥ－１区に位置する。１・５号墳の間の鞍部の南側にあたり、尾根線から標高にして４～５ｍ南へ下がった斜面に築かれている。最高点の標高は195.6ｍで、今回調査した古墳群の中では最も高い場所を占めている。

昭和52年度の第３次調査の際には北側の周溝部分のみ調査されたものの、南側の大部分は宅地造成によって削平されたものと考えられていた。しかし今回の調査で道路敷の下に主体部の最下部が辛うじて遺存しているのが見つかった。

墳丘（第３図）

『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅰ』では周溝の一部をもとに小方墳かと推定していた。今回の調査範囲内では墳丘・周溝とも全て失われており、墳形を復原する手掛かりは得られなかったが、方墳だとすると主体部が対角線に向いて不自然なため、本来は直径７ｍ前後の円墳であったと考えるのが妥当である。

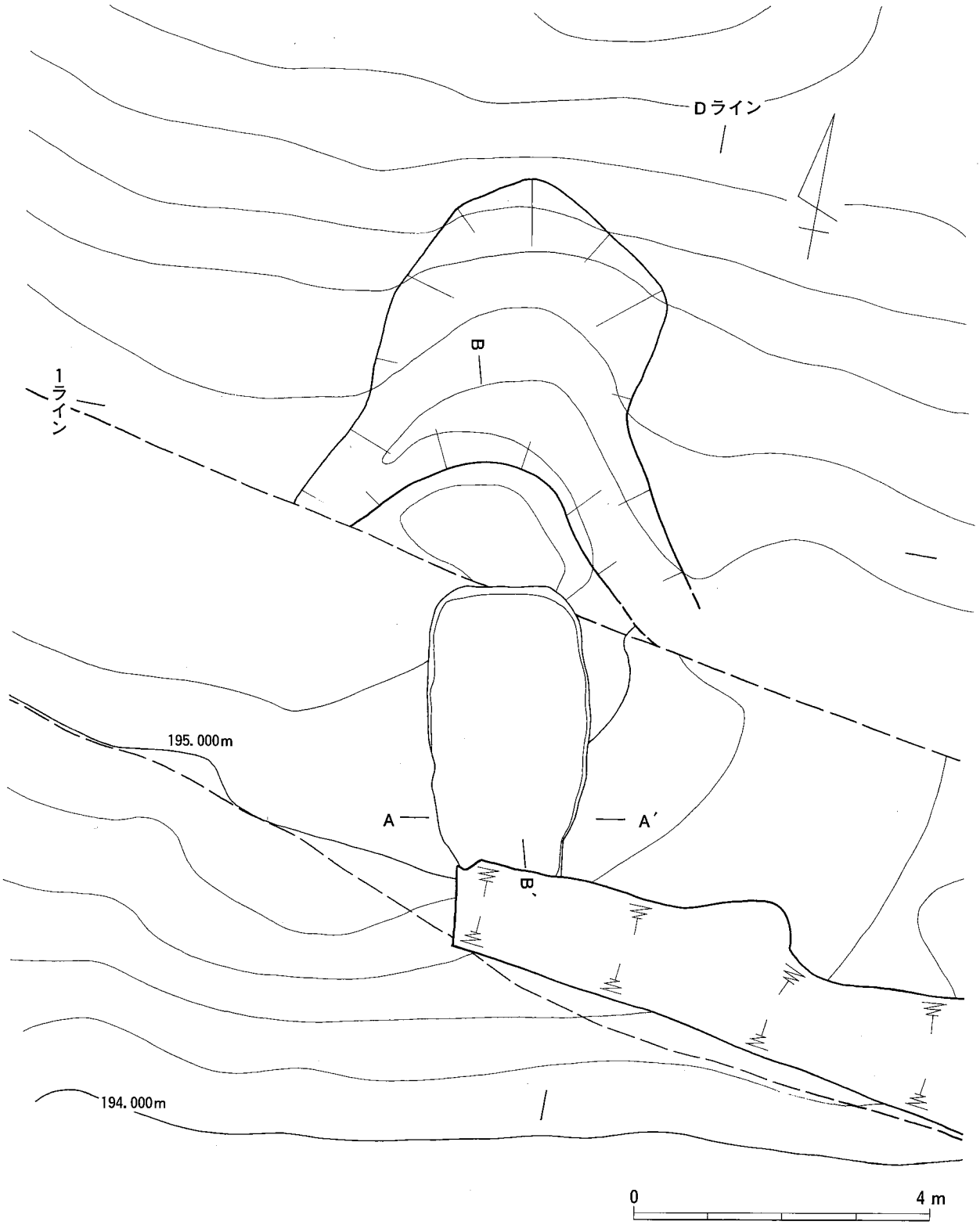
主体部（第４・５図）

横穴式木室　主体部は横穴式木室で、等高線と直交方向の南側に開口する。構造の説明には横穴式石室に準じて、「玄室」「前庭部」などといった用語を使う。玄室の平面は隅丸長方形で、それよりやや幅の狭い前庭部が直接取り付く。前庭部の南端はかつての試掘トレンチによって切られているため不明である。

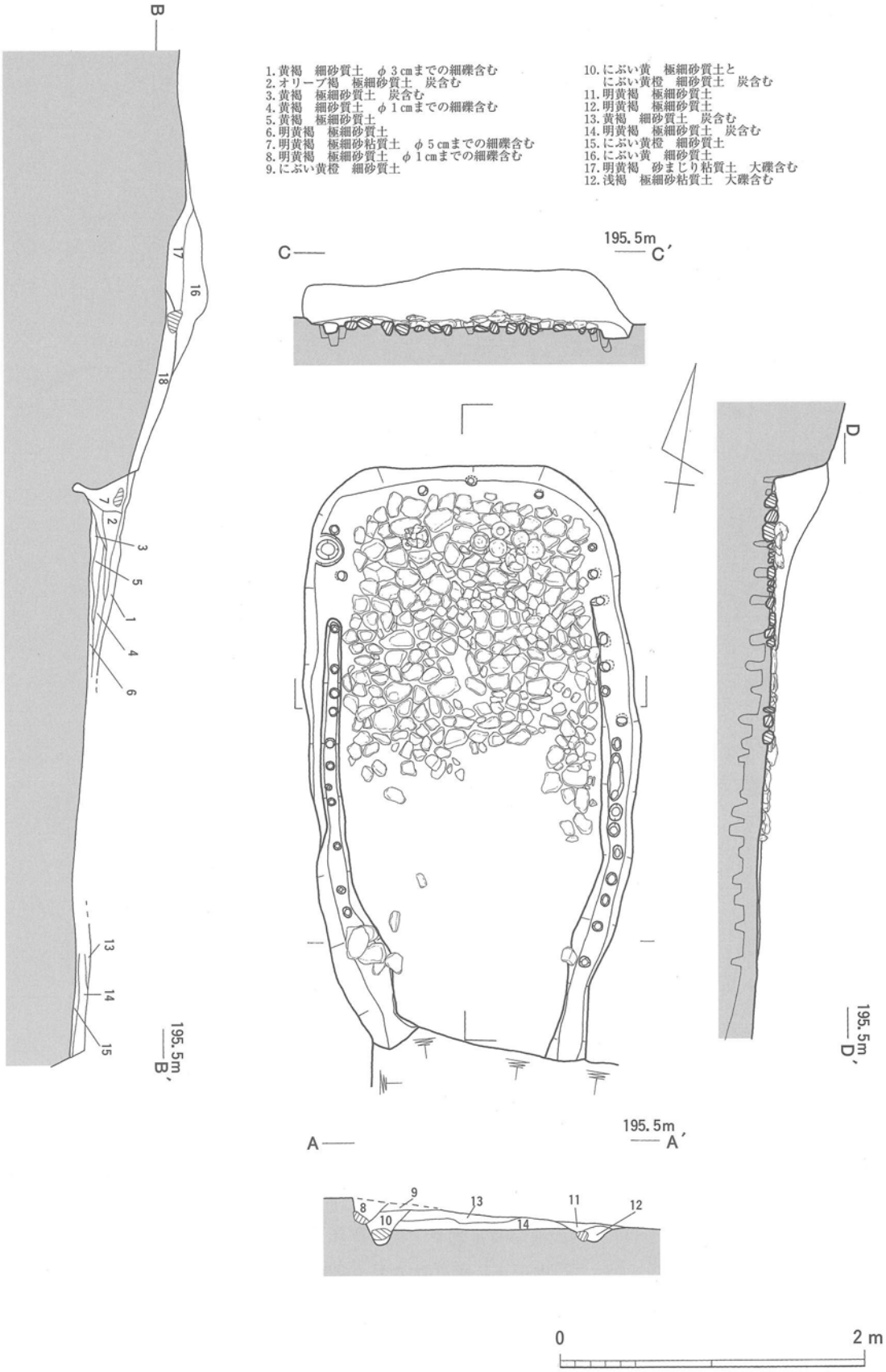
掘り方の規模は残存長3.9m、幅1.4～2.2m、奥壁の残存高0.4mである。掘り方底面の大きさは残存長3.8m、幅1.3～2.1mで、そのうち奥から3.1mまでが玄室である。

玄室　奥壁から両側壁にかけての壁際には幅10～25cmほどの溝をめぐらして掘り方とし、その中に壁体を支える小柱を立て並べ根元を粘土で埋めている。左奥壁近くの壁際にやや大きめのピットが認められたが、13・18号墳のような主柱はもたない。壁際の溝は玄門近くから緩やかに幅を狭め、玄門で屈曲して前庭部に続く。この屈曲点が玄門であろうが、特別な施設は設けていない。

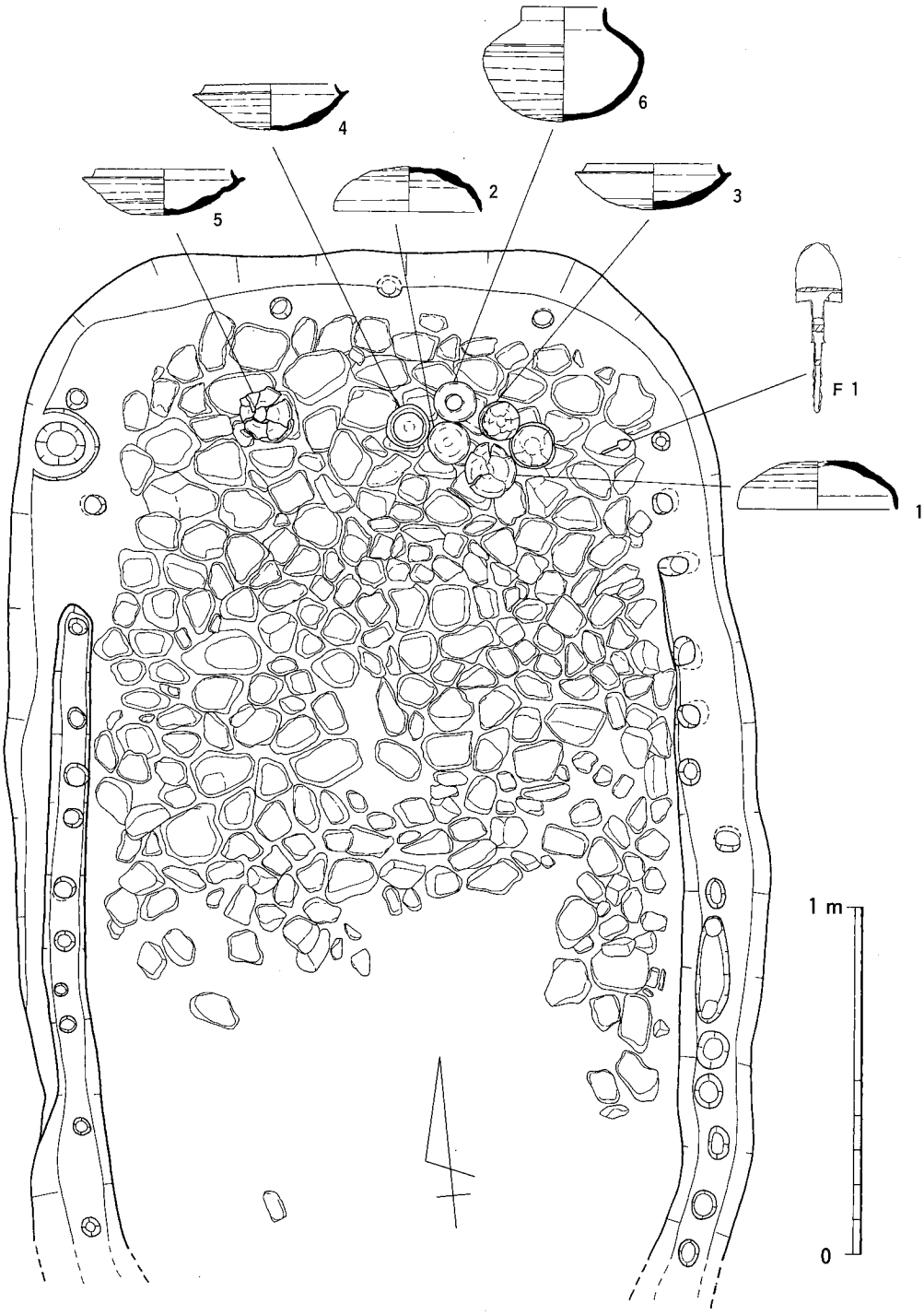
ピットの直径は５～10cmで、両側壁側では10～30cm間隔に、奥壁側では30～60cm間隔とやや疎らに並んでいる。このピット列が木室を支える構造物の骨組みとなって何らかの壁体を構築していたらしく、これより内側が木室の床面となっている。



第３図　２号墳墳丘測量図


1.黄褐　細砂質土　φ３cmまでの細礫含む
2.オリーブ褐　極細砂質土　炭含む
3.黄褐　極細砂質土　炭含む
4.黄褐　細砂質土　φ１cmまでの細礫含む
5.黄褐　極細砂質土
6.明黄褐　極細砂質土
7.明黄褐　極細砂粘質土　φ５cmまでの細礫含む
8.明黄褐　極細砂質土　φ１cmまでの細礫含む
9.にぶい黄橙　細砂質土
10.にぶい黄　極細砂質土と
にぶい黄橙　細砂質土　炭含む
11.明黄褐　極細砂質土
12.明黄褐　極細砂質土
13.黄褐　細砂質土　炭含む
14.明黄褐　極細砂質土　炭含む
15.にぶい黄橙　細砂質土
16.にぶい黄　細砂質土
17.明黄褐　砂まじり粘質土　大礫含む
12.浅褐　極細砂粘質土　大礫含む
B
B′
C
C′
195.5m
D
D′
A
A′
0
2 m

第４図　２号墳主体部



第５図　２号墳木室礫床と副葬品の出土状況

礫床　床面には５～20cm大の河原石を敷きつめて礫床としている。ただし南半部は削平によって失われている。この礫床を子細に見ると、奥壁際と奥壁から1.3mの所にやや大きめの石の並びがあって、石を敷きつめる作業の区画の名残りとみられる。また中央を境に東西で石の大きさや並びに変化が見受けられ、作業の手順が窺える。

床面の内法は全長3.0m、幅は奥壁側で1.6m、中央で1.7m、玄門側で1.2m、主軸の方位はＮ９°Ｗである。

前庭部　玄門の前面は幅1.4～1.8m、内法1.0～1.2mの前庭部となっている。13・18号墳の例や墳丘の規模からみて、羨道は設けていないと考えられる。前庭部の南端はかつての試掘トレンチによって切られているため不明である。前庭部側壁際の溝の中には柱の痕跡が認められないことから、前庭部に架構物は設けられていなかったとみられる。

副葬品　玄室奥壁近くの礫床面から須恵器・鉄鏃・耳環が出土した。

須恵器は杯蓋・杯身・短頸壺がある。奥壁東側(東群)には蓋杯３セットと短頸壺１点、西側(西群)には蓋杯１セットがあって、いずれも原位置のままとみられる。

東群　３セットの蓋杯のうち、杯身(３)の上に杯蓋(実測不能)を仰向きに乗せた状態のものが１組あり、他の２組は杯身(４、他１点は実測不能)の横に杯蓋(１・２)を仰向きに置いている。つまりこの一群の蓋杯はいずれも口を上に向けて出土している。

西群　杯蓋(実測不能)の上に杯身(５)を合わせており、蓋と身の関係が逆転している。

鉄鏃　鉄鏃(Ｆ１)は東群の土器と東側壁の間から出土した。

耳環　耳環(Ｆ２)は最後に礫床を剝ぎ取ろうとした時に礫と礫の間からこぼれ落ちたもので、正確な出土位置は不明である。

出土遺物（第６図）

玄室の礫床面から出土したもののみである。

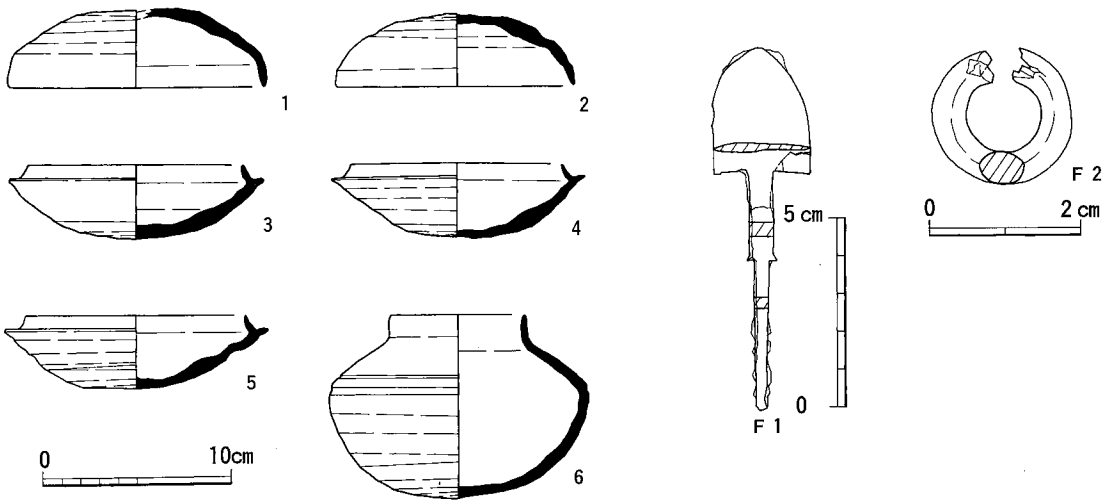
須恵器(1～6)　杯蓋２点(１・２)と杯身３点(３～５)、短頸壺(６)を図化した。

蓋杯　杯身の３と５はいずれもほぼ完形品で、やや焼成不良である。口径は杯蓋（１・２）が12.5～13.5cm、杯身(３～５)が11.5cm前後、器高はいずれも約４cmで、７世紀前半のものと思われる。いずれも内面中心部に一方向の仕上げナデがみられる。

短頸壺　短頸壺(６)は胴部最大径付近に凹線がめぐり、口縁部は直立する。

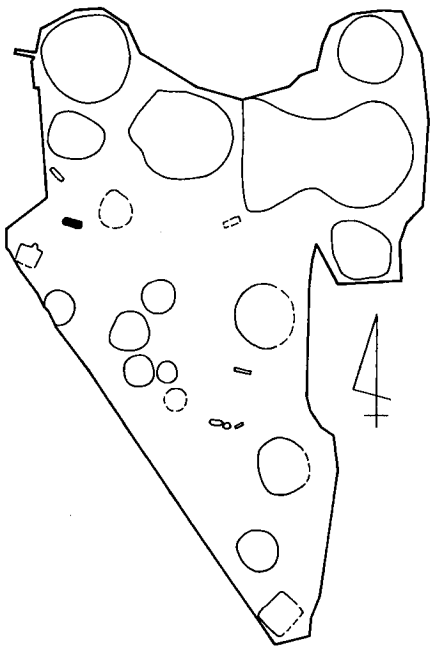
鉄鏃(Ｆ１)　短頸鏃である。鏃身は幅の広い柳葉式で、浅い逆刺をもつ。断面の厚みは薄く、平造りである。箆被の関部は若干尖り、茎部にいたる。全長9.6cm、鏃身の幅2.6cmである。

耳環(Ｆ２)　金銅製で、片面と耳挟み部端面の箔が剝がれ落ちて芯が剝き出しになっており、緑青がふいている。形状は直径1.7×1.8cmの円形で、断面は0.4×0.6cmの楕円形、現状の重さは3.0ｇである。



第６図　２号墳出土土器・鉄鏃・耳環

２．西山９号墳

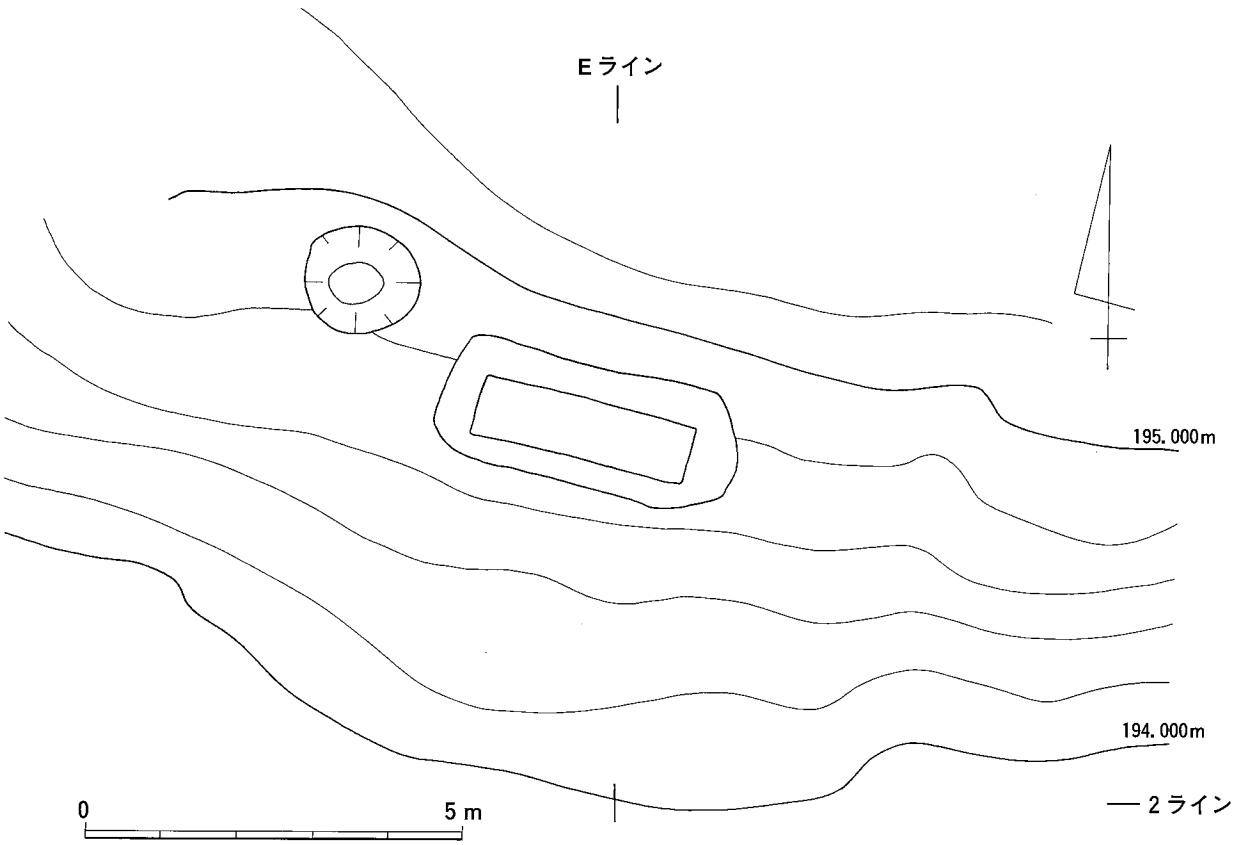


立地

９号墳はＥ・Ｆ－１区で、２号墳の約10m西に位置する。尾根線から続く緩斜面の角度が急になる変換点辺りに立地する。

墳丘（第７図）

当初からマウンド状の盛り上がりはまったく認められず、調査前の測量時にも古墳としての認識はなかった。主体部は表土直下で検出しており、周囲に周溝などはなかった。他の古墳が盛土のなかに木棺を置くのに対し、９号墳では直接地山に掘り込んでおり、１号墳の埋葬施設２と同様にもともと墳丘をもたなかったと考えられる。このような埋葬施設に「墳」という字を当ててよいか躊躇はしたが、独立した１つの墓と考えてあえて９号墳と呼ぶ。



第７図　９号墳地形測量図

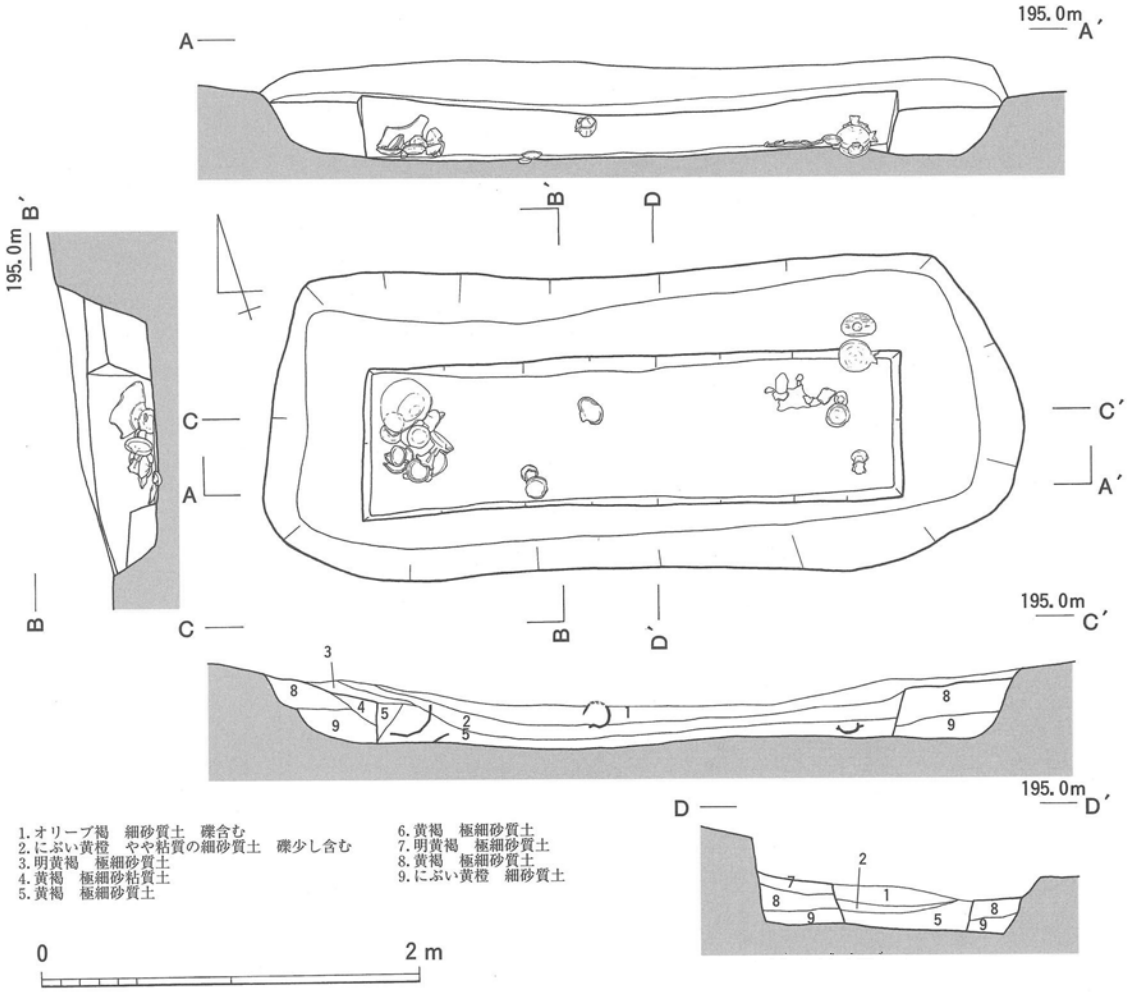
主体部（第８～10図）

主体部は木棺直葬で、主軸を等高線と平行方向にとる。掘り方の平面は不整な隅丸長方形で、特に東小口側は丸く掘り込んでいる。その内側に箱型の組合式木棺を置く。棺底は概ねフラットである。掘り方の全長4.0m、幅1.6m、深さ0.5m、木棺の全長2.9m、幅0.8m、主軸の方位はN75°W。

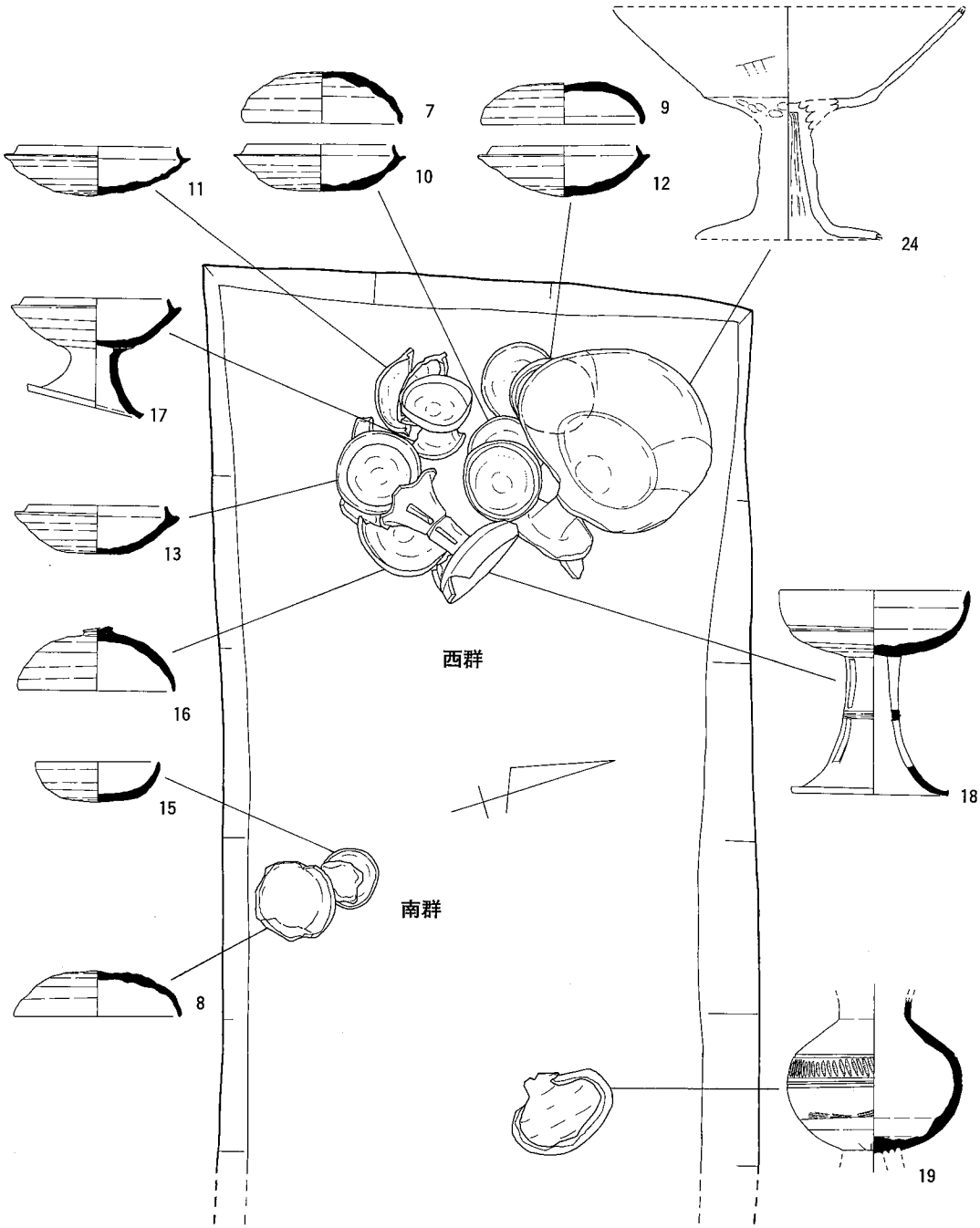
副葬品　棺内・棺上・掘り方内に須恵器・土師器を副葬している。

棺内　棺内の土器は西小口側（西群）・南側板側（南群）・東小口側（東群）の３群に分かれ、いずれも棺底に接した状態である。

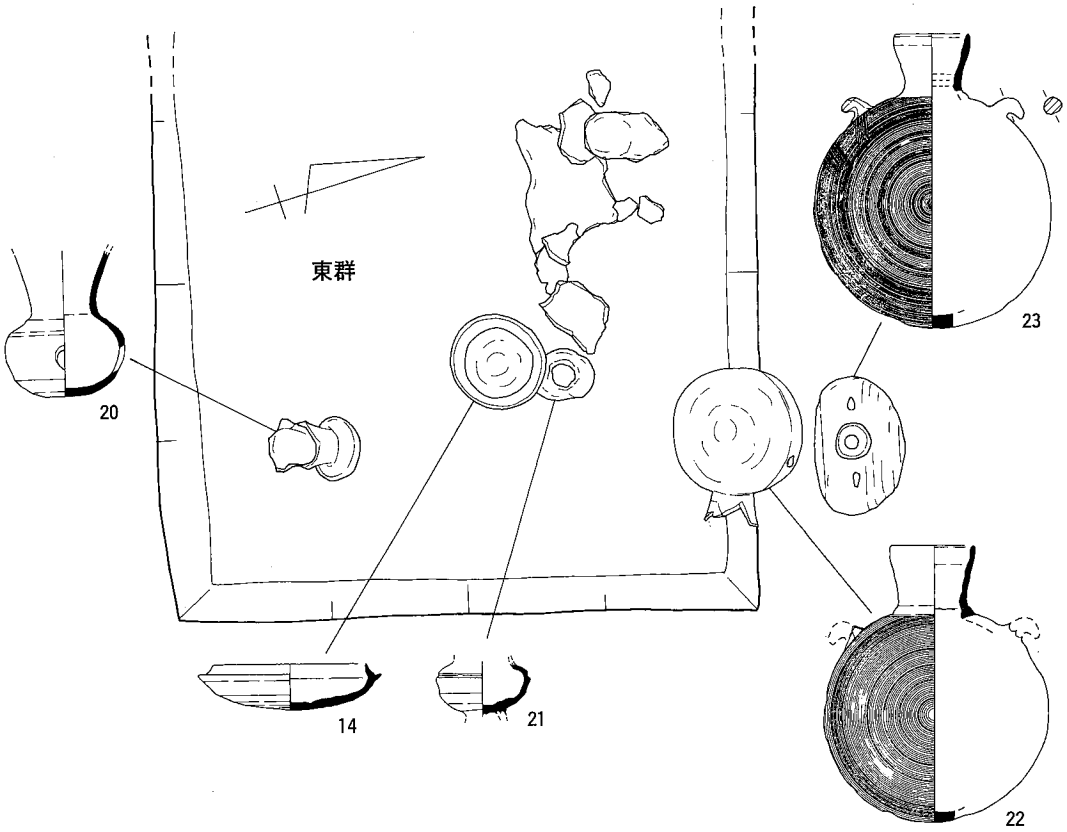
西群　西群では須恵器杯蓋（７・９）・杯身(10～13)・有蓋高杯(16・17)・無蓋高杯(18)、土師器高杯(24)をかためて置いている。このうち７と10、９と12をセットにしているが、どちらも蓋の上に身を仰向きに乗せている。有蓋高杯は蓋(16)身(17)を別々にし、蓋はやはり仰向きである。３点の高杯はいずれも横倒しになっているが、当初は立ててあったとみられる。



第８図　９号墳主体部



第９図　９号墳副葬品の出土状況（１）



第10図　９号墳副葬品の出土状況（２）

南群　南群は南側板際の中央西寄りに須恵器杯蓋（８）・杯(15)を並べて置いている。いずれも仰向きの状態で、杯(15)の上には石が乗っている。

東群　東群では須恵器杯(14)・脚付壺(21)・瑟(20)・提瓶(22)、土師器１個体を西群よりはやや散漫に置いている。杯(14)・脚付壺(21)の２点は中軸線付近に並べており、21の口縁部と脚部は当初から無かったようである。その内側に土師器の破片が押し潰れた状態で出土したが、非常に残りが悪く器種さえ判定できない。瑟(20)は南側で、提瓶(22)は北側板際でいずれも横倒しになっていたが、当初は立ててあったとみられる。

西群と東群の遺物が小口板の内側であったか外側であったかは、断面の観察では判断できなかった。

掘り方内　掘り方内では東小口側の北側板外から須恵器提瓶(23)１点が直立状態で出土している。すぐ横の棺内にも提瓶(22)があり、両者には何らかの因果関係が考えられる。

棺上　木棺のほぼ中央の埋土上層から須恵器壺(19)１点が単独で出土した。

出土遺物（第11・12図）

棺内・棺上・掘り方内に副葬された須恵器・土師器で、一括性の高い資料である。

須恵器（７～23）

杯蓋３点（７～９）と杯身５点（10～14）、杯または壺蓋（15）、有蓋高杯のセット（16・17）と無蓋高杯（18）、壺類（19・21）、瑟（20）、提瓶（22・23）がある。

蓋杯　７と10、９と12はセットである。７・８は非常に焼成が不良で器壁の磨滅が著しい。この２点の天井部内面には同心円の当て具痕がみられる。12の杯身にも当て具痕がみられる。13では不定方向の仕上げナデがみられ、それ以外の全て一方向の仕上げナデである。15・12は著しく歪んでいる。杯蓋は口径14.0～14.5cm、杯身は12.5～14cmで２号墳より若干大きめである。

高杯　有蓋高杯（17）は低脚で、透かしをもたない。口径12.6cm、器高9.4cm。高杯の蓋（16）は口径13.8cm。

無蓋高杯（18）は三方向の長方形透かしがある。口径16.3cm、器高17.6cm。

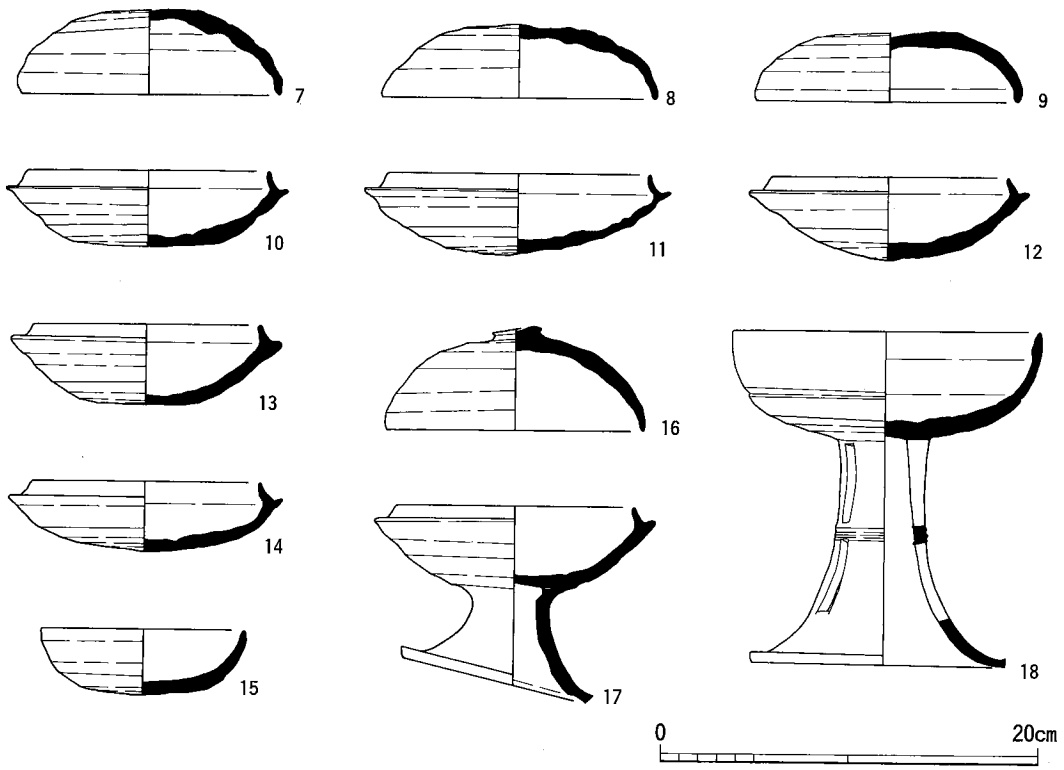
壺　脚付長頸壺（19）は口縁端部と脚部を欠く。底面には剝離した脚部の痕跡と透かし孔の切り込みがみられる。

21は小型の脚付壺で、口縁部と脚部を欠失する。

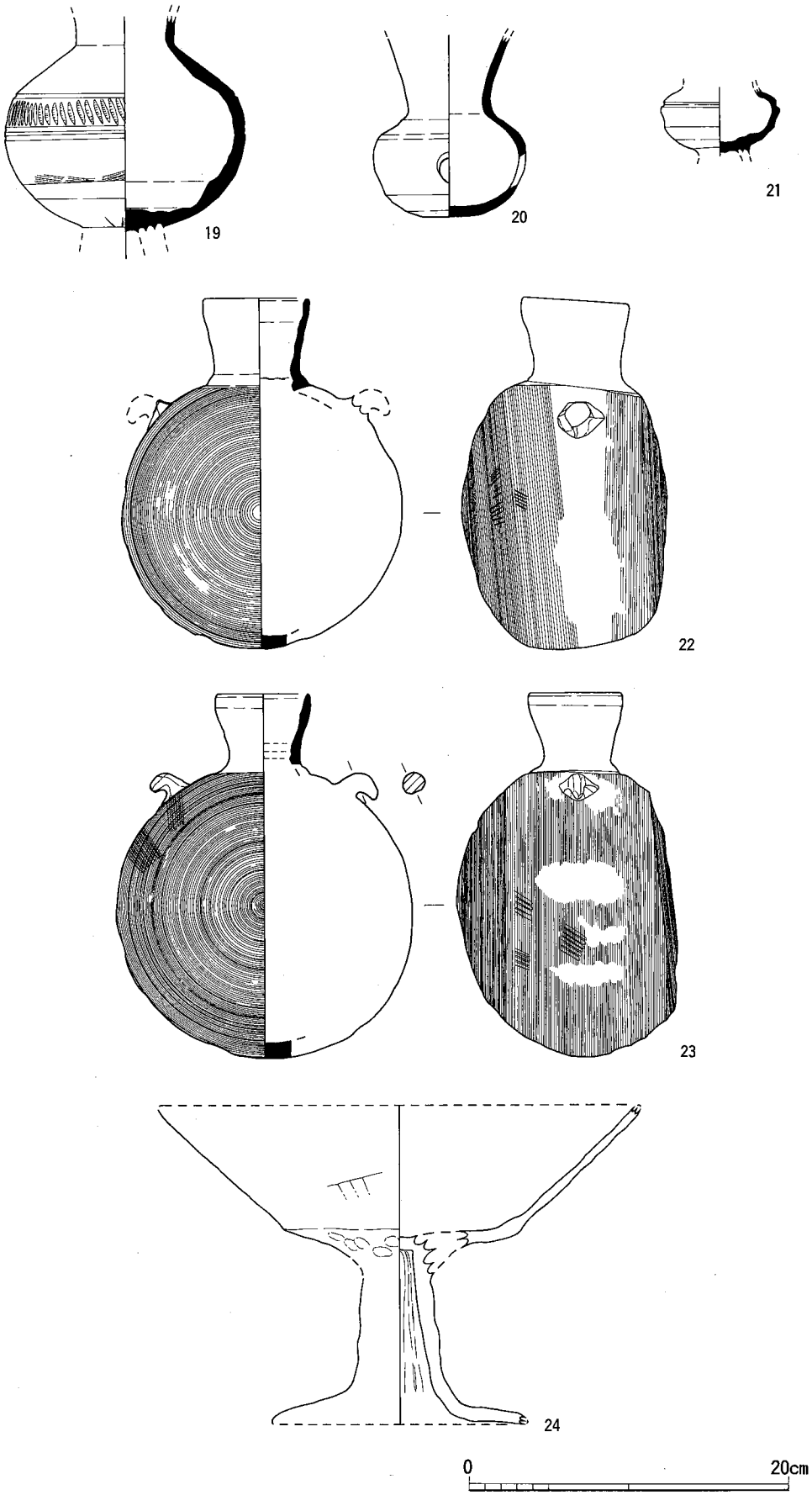
瑟　瑟（20）は焼成不良のため軟質で器壁の磨滅が著しい。

土師器（24）

高杯　大型の高杯（24）で、瑟（20）と同様に焼成不良のため軟質で器壁の磨滅が著しく、調整の観察は困難である。口径31cm、器高20cm余りに復元できる。

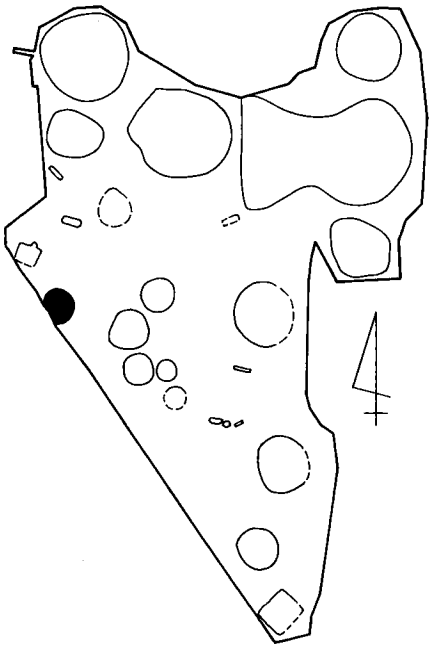


第11図　９号墳出土土器（１）



第12図　９号墳出土土器（２）

３．西山10号墳



立地

10号墳はＦ－２・３区に位置する。今回調査した古墳の中では最も西に位置し、これより西へ行くと谷地形となるため、古墳を作る限界線とも言える。そうした地形の変換点に沿って宅地造成用の道路が作られており、墳丘の南西裾部が削られている。

墳丘・周溝（第13・14図）

墳形　墳形は直径6.0mの円墳で、墳丘の最高点の標高は191.7m、南裾部からの高さは1.6mである。盛土は周辺の地山の土と同質で、しまりはあまり良くない。墳丘南側の基底面には旧表土層が残っている。

周溝　北側の約半周分は山側を大きくカットし、底部付近を溝状に掘り窪めて周溝としている。周溝底の北側には土坑、北東側には箱式石棺状の施設を設けている。

土坑　土坑ＳＫ01は平面楕円形、長軸1.15m、短軸0.6m、深さ0.4m。西側の肩部に土師器甕(25)を置いており、土壙墓の可能性がある。

箱式石棺　凝灰質砂岩の板石がほぼ１m四方の範囲にかたまって出土した。中央に大きめの平たい石材があり、その周りの小さめの石材が縦横に組んであったような痕跡が窺える。石材の下には明確な掘り込みは認められなかった。おそらく周溝の底に直接石材を組み合わせて作った箱式石棺の残骸と考えられる。遺物は出土しなかった。また石棺側の墳丘が一部削られており、石棺を作った際の削平かもしれない。

主体部（第14図）

主体部は木棺直葬で、主軸を等高線と平行方向にとる。掘り方の平面は不整な隅丸長方形で、その内側に箱形の組合式木棺を置く。掘り方の全長3.0m、幅1.8m、深さ0.5m、木棺の全長2.1m、幅1.0m、主軸の方位はＮ91°Ｗ。

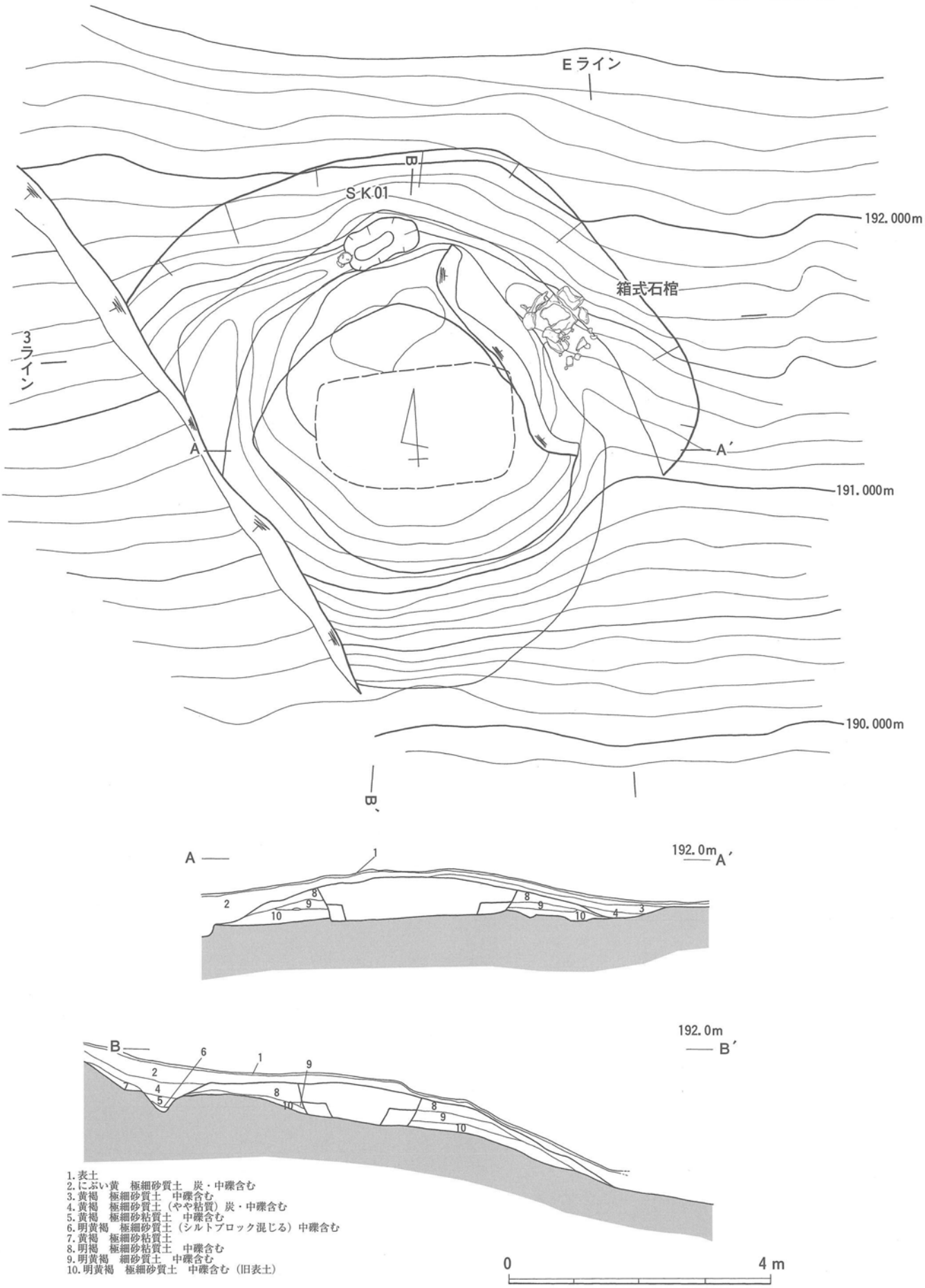
主体部から遺物は出土しなかった。

出土遺物（第14図）

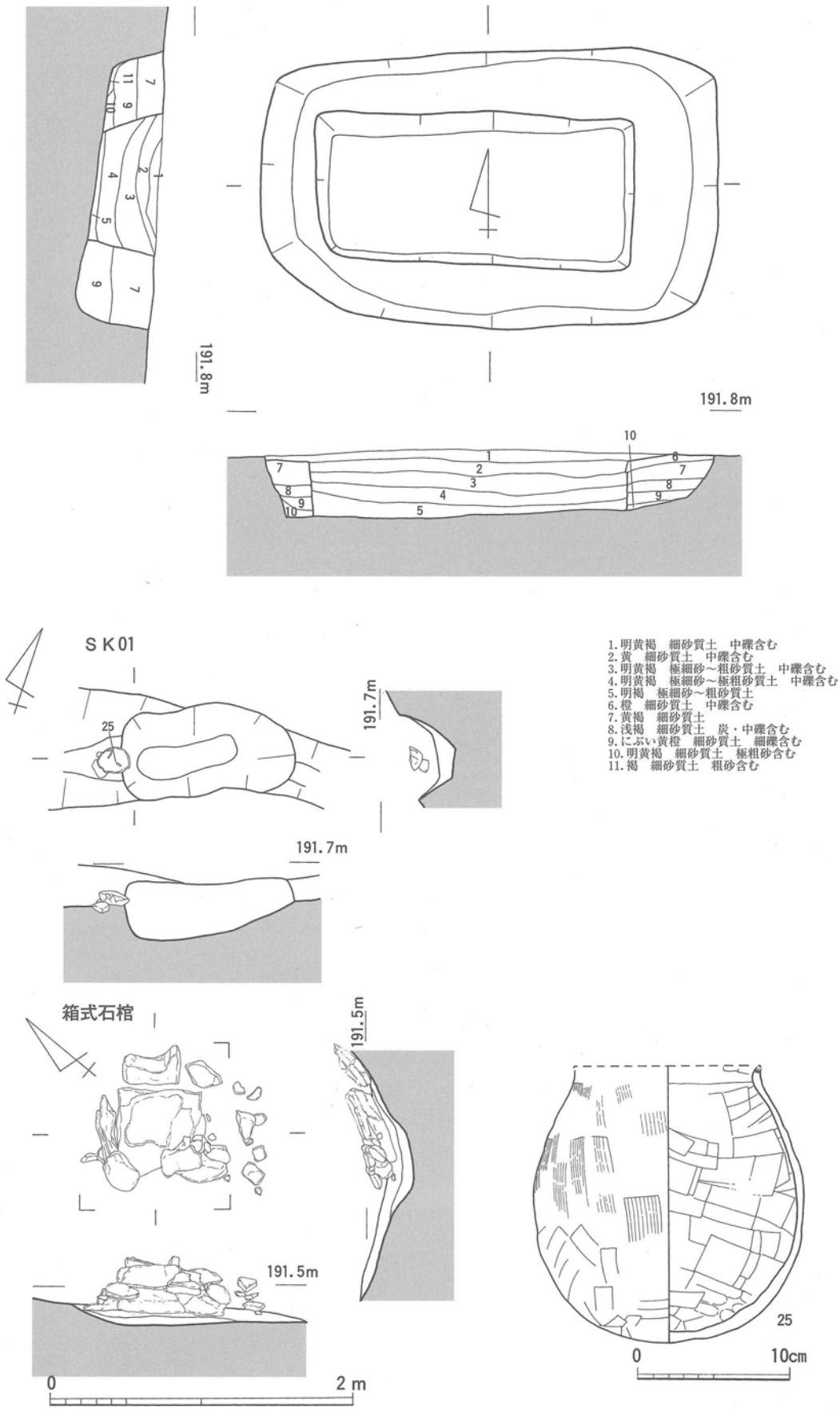
周溝内の土坑ＳＫ01の肩部から土師器が１点出土した。

土師器（25）

甕　下膨れのプロポーションで、口縁端部は欠損しているが丸くおさめていたものか。外面は上部は縦方向の粗いハケ目を下部は板ナデを施し、内面は横方向の板ナデを施している。口径13cm、器高18cm程度に復元できる。

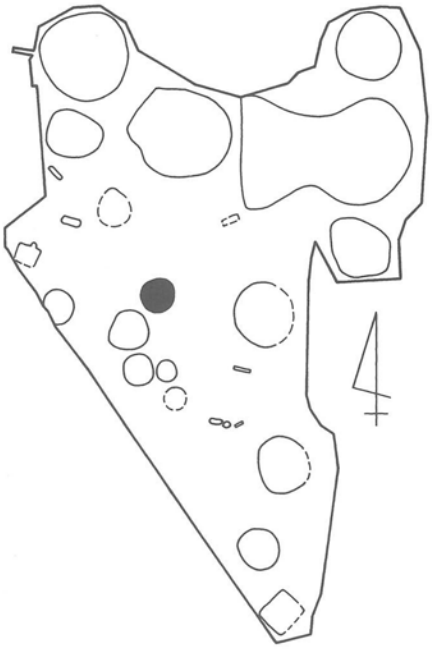


第13図　10号墳墳丘測量図



第14図　10号墳主体部と周溝内の遺構・遺物

４．西山11号墳



立地

11号墳はＤ－２・３区に位置し、13号墳の北東側に接している。11号墳の東側は子細に見ると小さな谷が入っており、20号墳との間には遺構の空白地帯がある。

墳丘・周溝（第15図）

墳形　墳形は直径6.2mの円墳で、墳丘の最高点の標高は191.7m、南裾部からの高さは1.2mである。盛土は周辺の地山の土と同質で、主体部の検出も非常に困難であった。

周溝　山側の約半周分は斜面をＶ字状にカットし、幅2.0m、深さ0.6m程度の周溝としている。

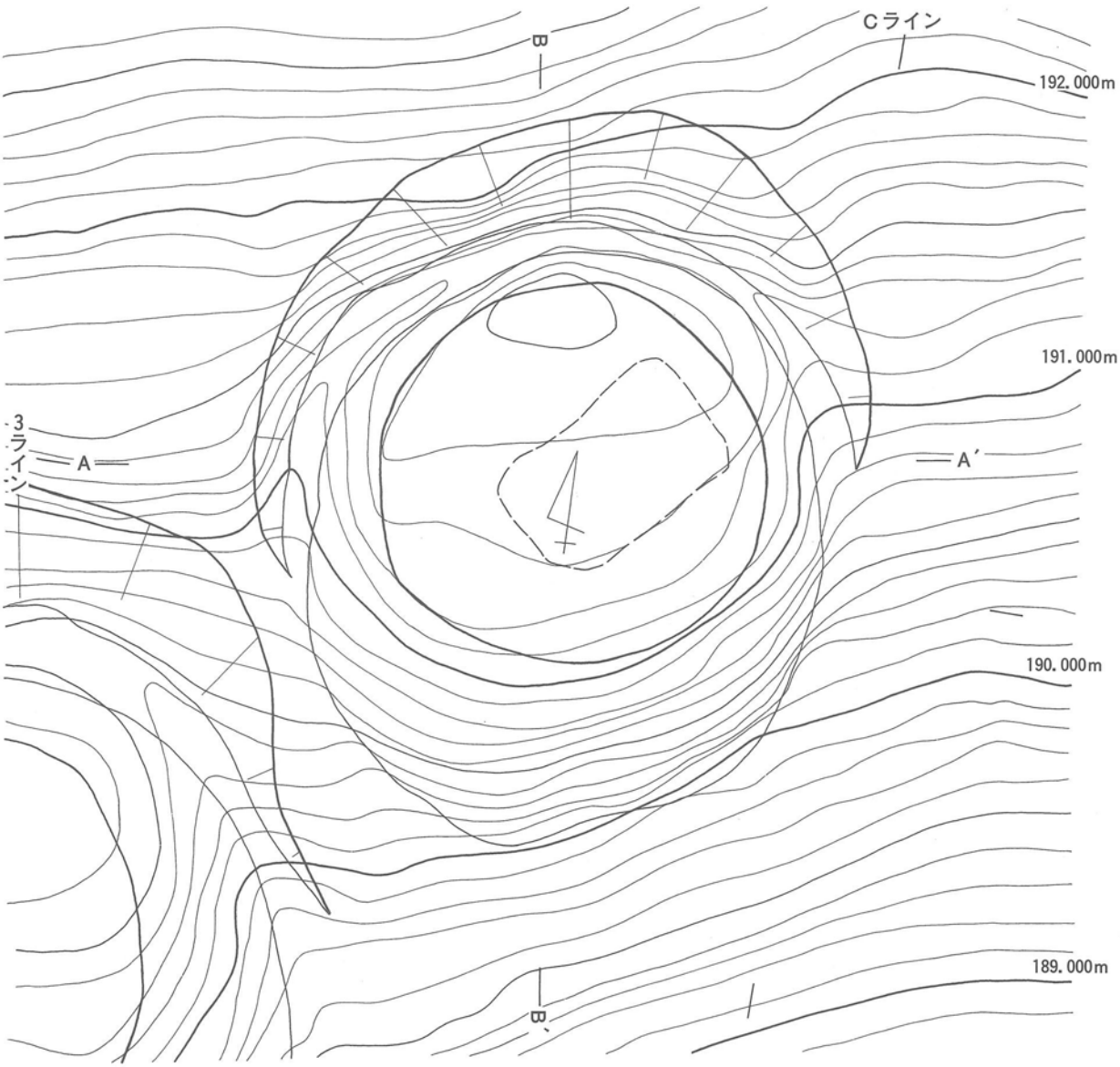
主体部（第16図）

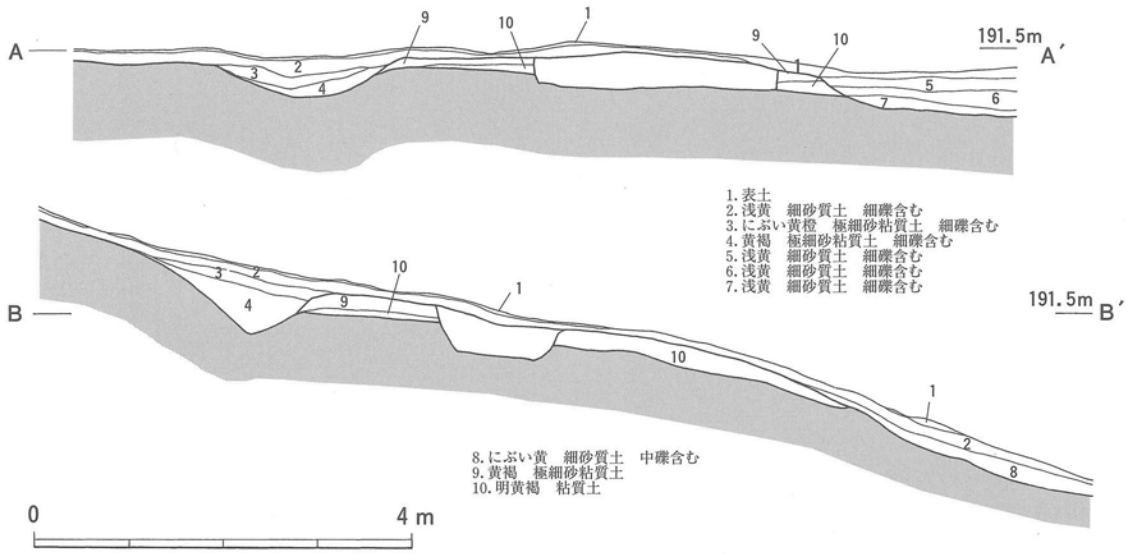
主体部は木棺直葬である。主軸を等高線と平行方向にするのは他の木棺直葬墳と同様であるが、谷地形の影響によって他の木棺とは大きく方向を異にする。

主体部の輪郭が甚だ捉えにくかったので、サブトレンチの断面をつなぎ合わせるようにして検出した。掘り方の平面は隅丸長方形で、その内側に箱形の組合式木棺を置く。掘り方の底面は地山面にまで達し、一段掘り込んでいる。掘り方の全長2.6m、幅1.6m、深さ0.3m、木棺の全長1.8m、幅0.8m、主軸の方位はN50°Ｅ。

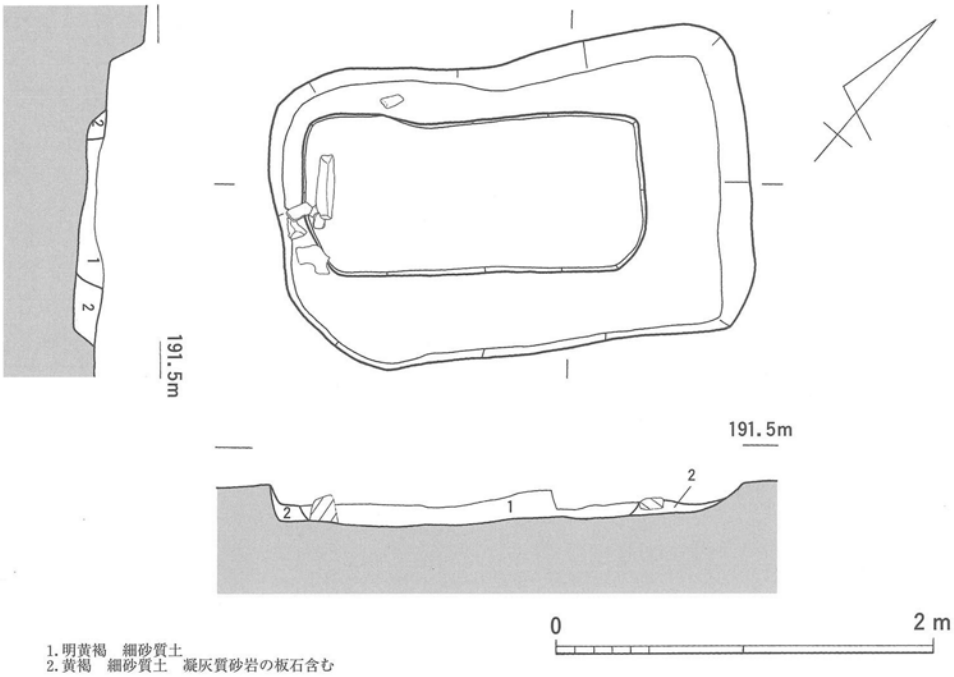
両小口側には凝灰質砂岩の石材を置いて、小口板の裏込めとしていた。

主体部から遺物は出土しなかった。





第15図　11号墳墳丘測量図



第16図　11号墳主体部

出土遺物（第17図）

周溝・墳丘などから、数点の須恵器が出土している。

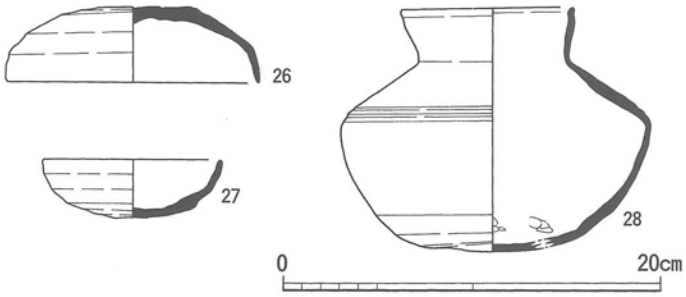
須恵器(26～28)

杯蓋(26)と杯または壺蓋(27)、短頸壺(28)を図化している。他に須恵器の甕も出土している。

杯蓋　杯蓋(26)は東周溝から出土した。内面より外面の焼けが悪く、ヘラ切り不調整でもあるため、口径は13.4cmと大きいものの逆転して杯身になる可能性も考えられる。

杯　杯(27)は墳丘内から出土した。全体にやや歪みがあり、底面には圧痕がみられる。口径9.6cmである。

壺　短頸壺(28)は覆土から出土した。肩部に凹線が２条あり、口縁部が内弯気味に直立する。口径9.0cm、器高13.0cmである。

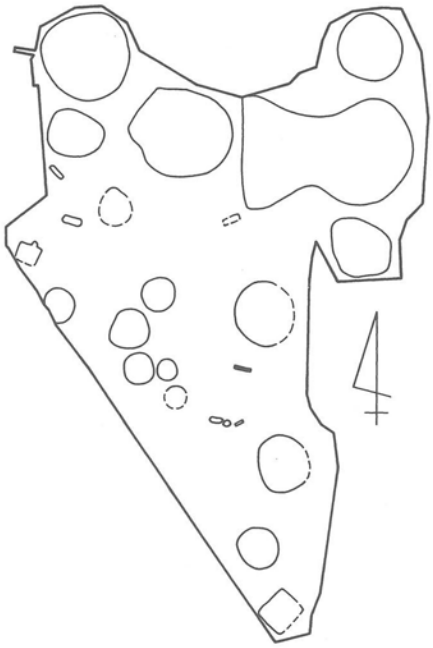


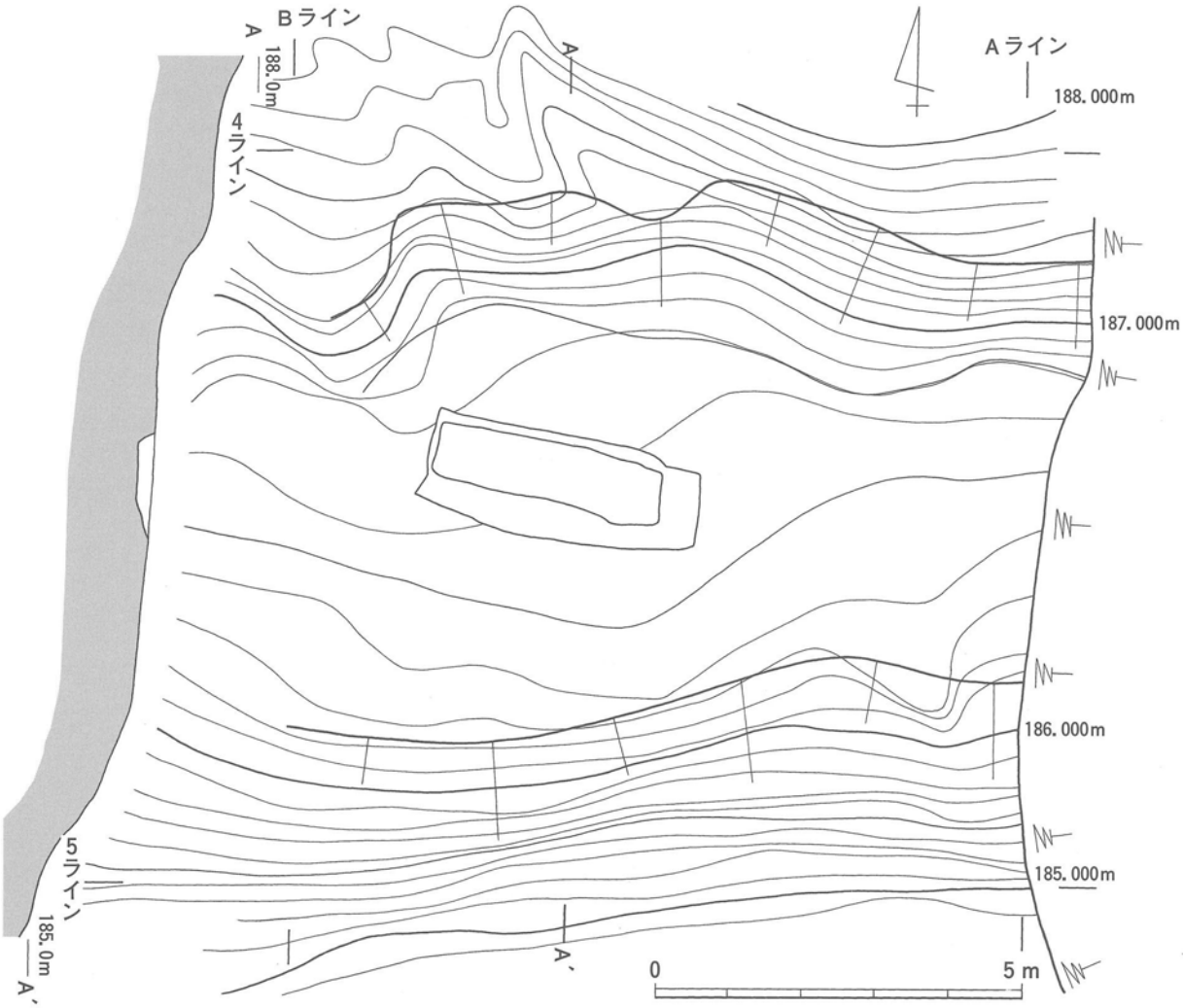
第17図　11号墳出土土器

５．西山12号墳

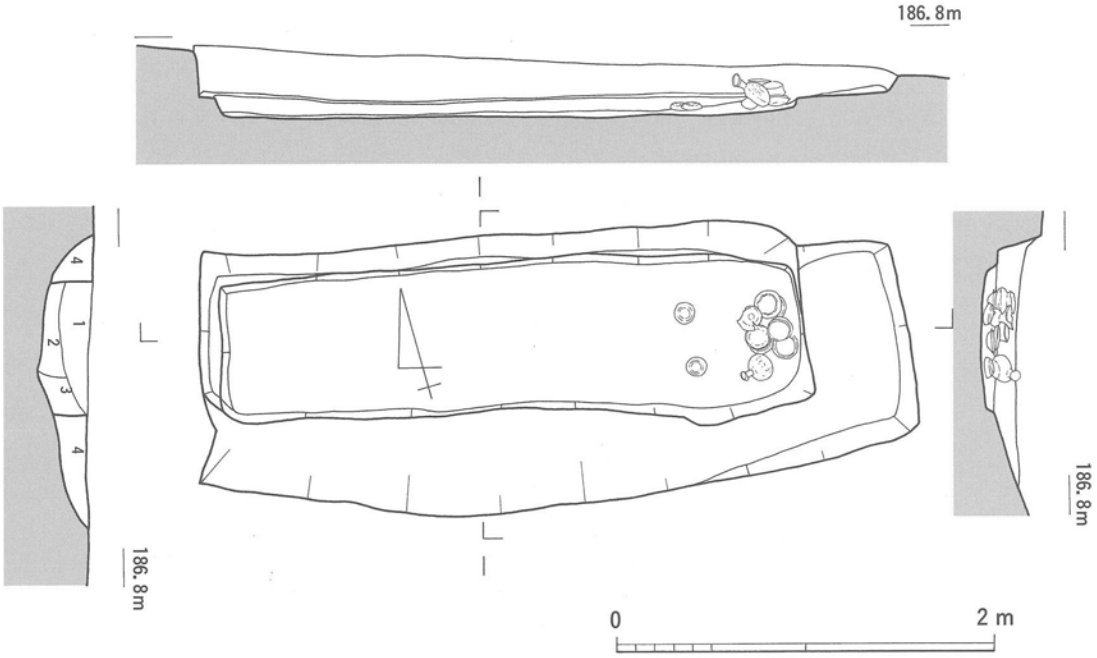
立地

12号墳はＢ－４区で、20号墳のすぐ南側に位置する。掘削前から平坦面の存在を注意していた地点で、古墳であるとの前提でトレンチを設定した。その結果、盛土が全く認められず、人工的な改変を受けているものと考えた。しかし表土掘削後、主体部を検出し、やはり古墳であったことが判明した。同一面で前代の木棺墓群も検出していることから、多少の削平は受けているとはしても、もとからあったフラットな面を利用して古墳を作ったものとみられる。



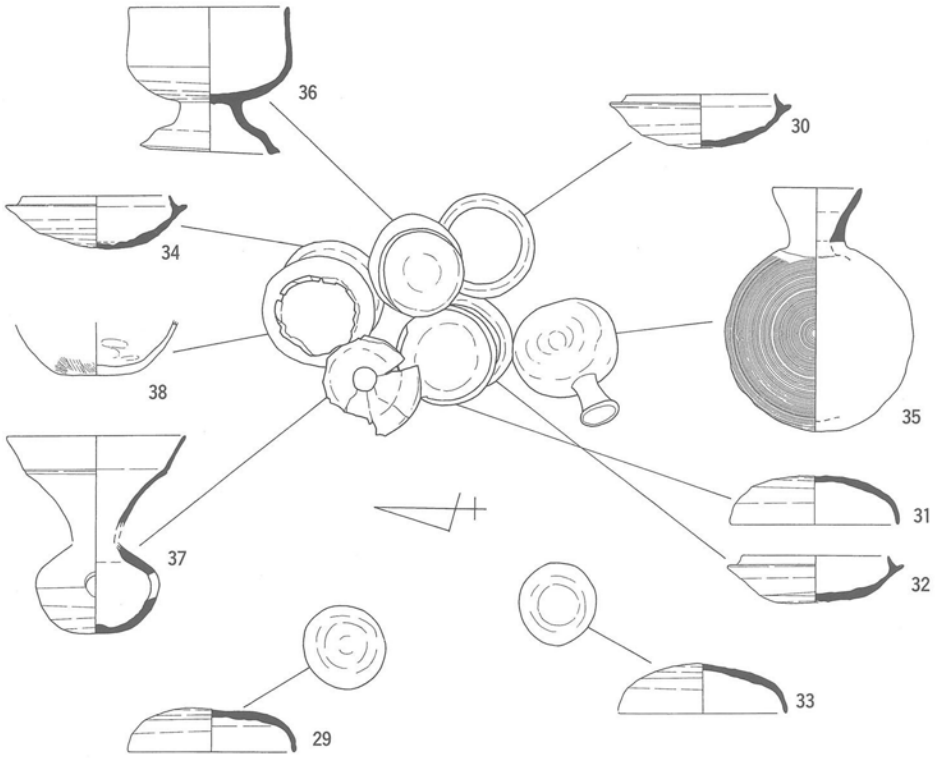


第18図　12号墳地形測量図



1.黄褐　極細砂粘質土　地山ブロック含む
2.明黄褐　極細砂粘質土　土器
3.明黄褐　極細砂粘質土　地山ブロック含む
4.にぶい黄橙　極細砂粘質土　地山ブロック多く含む

第19図　12号墳主体部



第20図　12号墳副葬品の出土状況

墳丘（第18図）

主体部の山側に直線的なカット面があって平坦面を作り出しているが、これが古墳に伴うものかどうかは不明である。他に周溝らしきものもなく、９号墳と同様に最初から墳丘はなかったとみられる。周辺には弥生時代の木棺墓群もあり、もともとあったフラットな面を利用した主体部であろう。

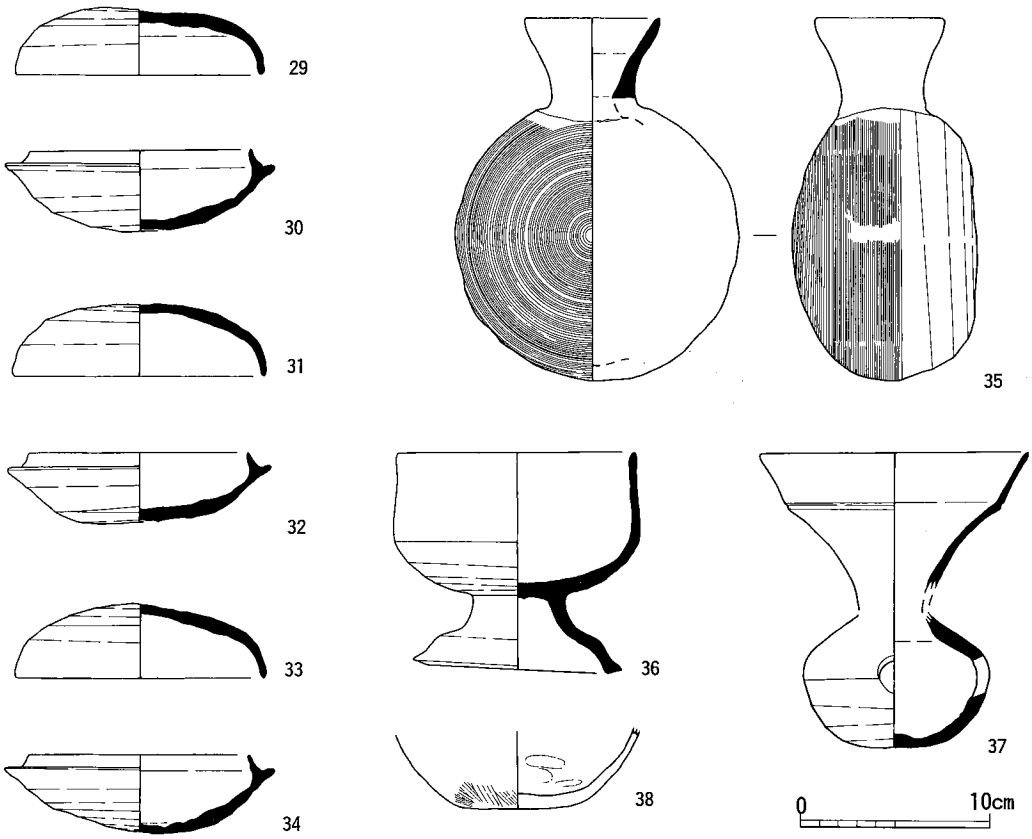
主体部（第19・20図）

主体部は木棺直葬で、主軸を等高線と平行方向にとる。掘り方の平面は不整な長方形で、東小口側は木棺に合わせて屈曲している。掘り方内側の北西側に寄せて、箱形の組合式木棺を置く。棺底は掘り方よりも一段深く掘り込んでいる。掘り方の全長3.8m、幅1.5m、深さ0.3m、木棺の全長3.1m、幅は東小口側で0.9m、西小口側で0.8m、主軸の方位はN76°W。

副葬品　東小口板のおそらく外側に須恵器・土師器８個体を副葬している。また棺内には須恵器杯蓋の２点を枕状に並べて置いており、頭部を東向きに埋葬していたことが判る。

東小口　東小口板外側の土器群は８個体の土器を３×２列に並べている。小口板側の中央には須恵器杯身(32)の上に杯蓋(31)をいずれも仰向きに置き、その両脇に提瓶(35)と瑟(37)を据える。その外側の列の中央には台付き椀(36)、その両脇に杯身（30・34)を置き、34の上には土師器壺(36)を乗せている。

土器枕　棺内の床面東端に、須恵器杯蓋２点(29・33)を18cmの間隔を空けて俯せに並べる。



第21図　12号墳出土土器

出土遺物（第21図）

東小口板外側と棺内の頭部付近に副葬された須恵器・土師器がある。

須恵器（29～37）

杯蓋３点(29・31・33)と杯身３点(30・32・34)、提瓶(35)、台付椀(36)、瑳(37)がある。

蓋杯　31と32の杯蓋と杯身はセットである。32以外は内面に一方向の仕上げナデがみられる。32は不定方向のナデである。須恵器の杯蓋は口径13cm前後、杯身は口径11.5cmと２号墳と同様やや小振りで立ち上がりも低く、７世紀以降のものと思われる。焼成は31がやや軟質である以外は良好である。

提瓶　提瓶(35)は器高19.2cmの中型品で、口縁は内弯気味に立ち上がる。耳部は消失している。

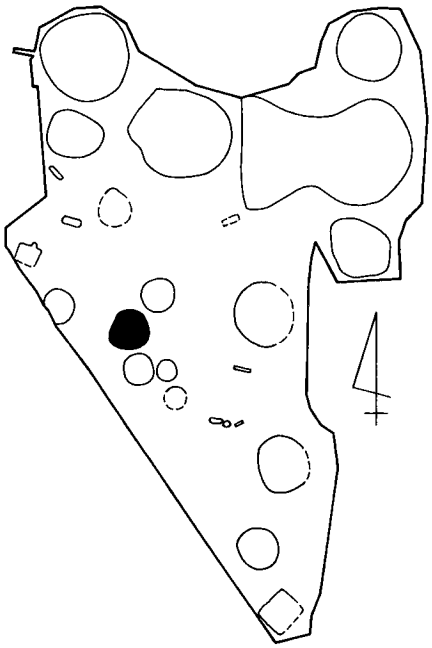
台付椀　台付椀(36)は直立する深手の体部に低い台部を取り付けるが、台部に焼け歪みがある。若干歪んでいる。口径12.4cm、器高11.7cmである。

瑳　瑳(37)は極めて焼成不良の軟質なため、口縁部と体部の接合が不可能であった。口径14.0cmである。

土師器(38)

壺　壺の底部の破片(38)がある。出土時には肩部近くまで残っていたが、非常に脆いため底の部分しか復元できなかった。外面はハケ目、内面はナデで仕上げる。

６．西山13号墳



立地

13号墳はＤ・Ｅ－３区に位置する。西側の10号墳、北東側の11号墳、南側の14・15・17号墳という約25m四方にある６基の古墳で一群を形成し、その中心を占めている。

墳丘（第22図）

墳形　墳形は直径8.3mの円墳で、少し下膨れの歪な形をしている。墳丘の遺存状況は良好で、墳丘最高点の標高は190.7mである。南裾部は14号墳の周溝に切られているが、現状の盛土の裾部からの高さは2.1mである。

地山整形　山側の斜面をゆるくカットしているが、周溝ははっきりしていない。それよりも横穴式木室の床面を作るために、斜面をコの字型に大きく削り込んでいる。そのため木室の手前側の壁は盛土からなっているが、奥壁側は地山が立ち上がっている。

盛土　墳丘には13号墳周辺にある赤褐色がかった粘質土を用い、比較的小単位の盛土が観察できる。おそらく主体部である横穴式木室の構築と併行して盛土作業を行っているものと思われる。その後全体を覆うように土を盛っている。

主体部（第23・24図）

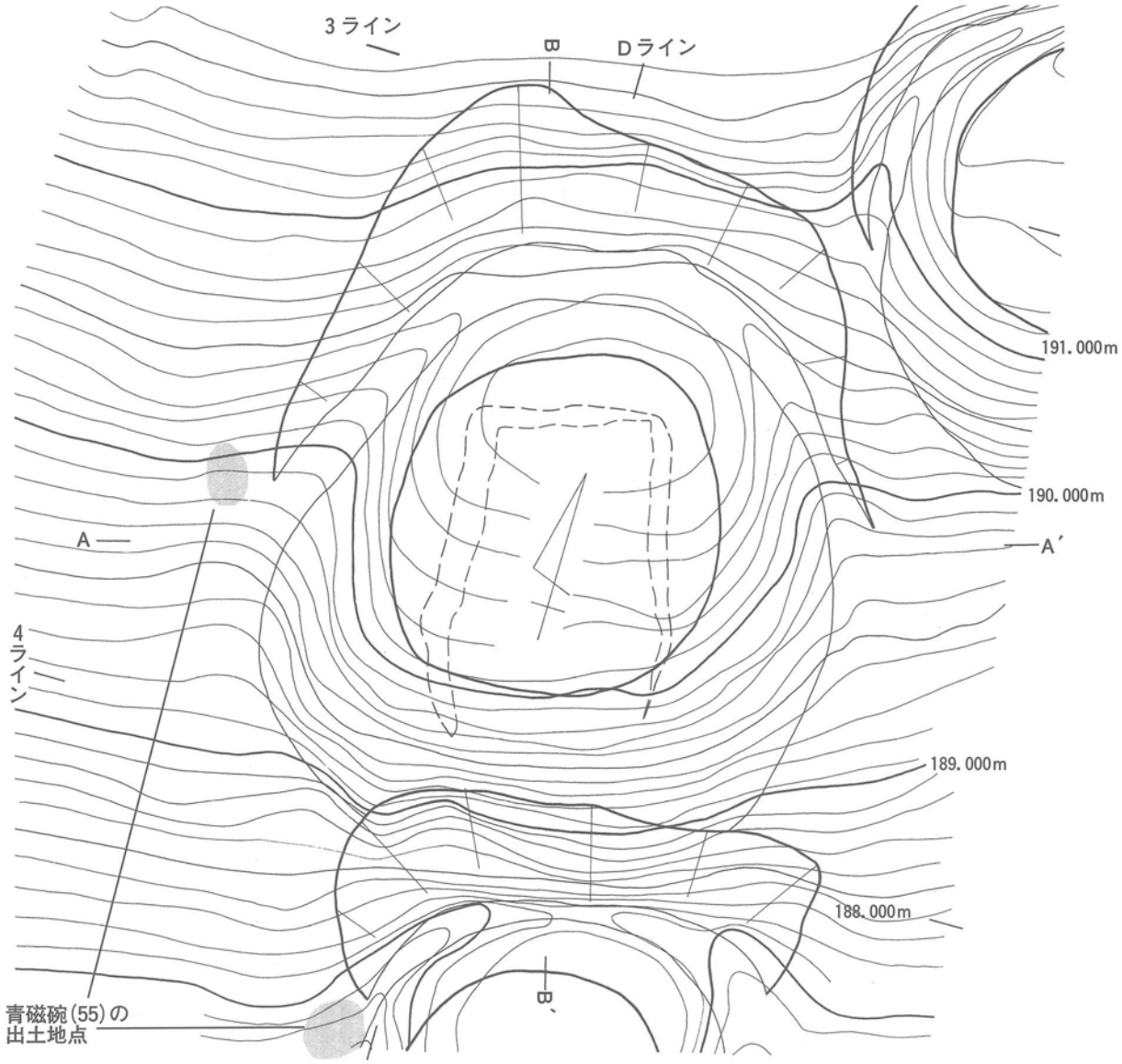
横穴式木室　主体部は横穴式木室で、等高線と直交方向の南側に開口する。平面は長方形で、掘り方の規模は全長4.7m、幅3.0～3.5m、奥壁の立ち上がりの高さ0.7mである。掘り方の底面の大きさは全長4.4m、幅2.2～2.6mで、そのうち奥から3.5mが玄室で、玄門を経て前庭部にいたる。

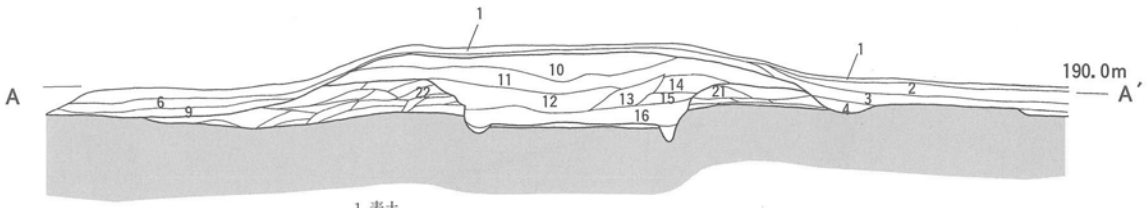
玄室　玄室の構造は４本の主柱と壁際のピット列からなる。手前の２本の主柱は内法で1.3mの間隔をおいて立てて玄門とする。奥の２本の主柱はピット列の内側に立てており、４本の柱で梁・桁を組むものであろうか。

両側壁の壁際には幅30cm前後の溝を通して掘り方とし、その中に壁体を支える小柱を約20cm前後の間隔で立て並べ根元を粘質土で固めている。柱の直径は10～15cmで、内側へ約75～85°の傾きをもつ。なおピット列は床面精査時には検出できず、断ち割りで溝を確認した後に貼床の粘土を剥がして溝の輪郭を出し、さらにその溝の底で漸く見つかっている。

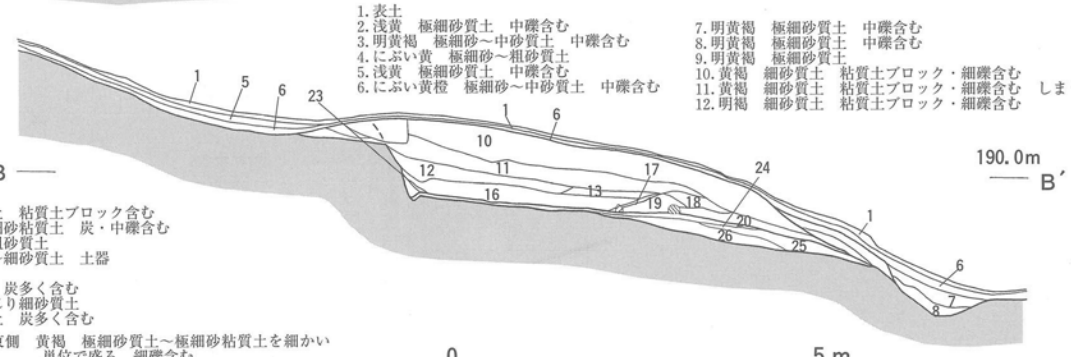
奥壁側の溝は床面上で検出できたが、両隅で一旦途切れて両側壁の溝とはつながっていない。また埋土もしまりの悪い砂質土で、柱の痕跡は検出できなかった。ここにも何らかの支持体があった筈だが、それが柱状のものか板状のものかは不明である。

両側壁の溝は玄門近くで狭まって、玄門の主柱穴にぶつかって終わる。ピット列より内





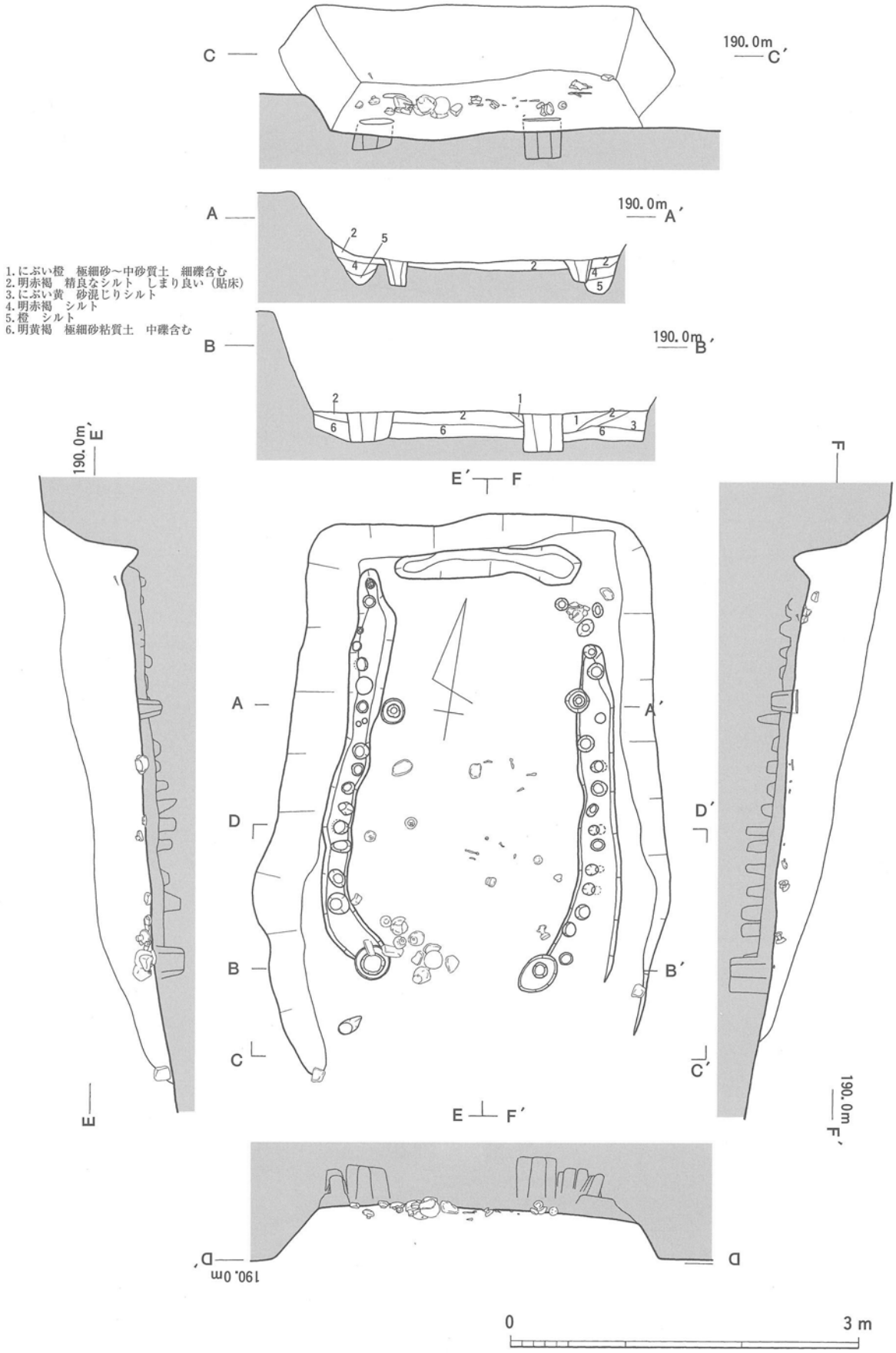
1. 表土
2. 浅黄　極細砂質土　中礫含む
3. 明黄褐　極細砂～中砂質土　中礫含む
4. にぶい黄　極細砂～粗砂質土
5. 浅黄　極細砂質土　中礫含む
6. にぶい黄橙　極細砂～中砂質土　中礫含む
7. 明黄褐　極細砂質土　中礫含む
8. 明黄褐　極細砂質土　中礫含む
9. 明黄褐　極細砂質土
10. 黄褐　細砂質土　粘質土ブロック・細礫含む
11. 黄褐　細砂質土　粘質土ブロック・細礫含む　しまり悪い
12. 明褐　細砂質土　粘質土ブロック・細礫含む



13. 明褐　細砂質土　粘質土ブロック含む
14. にぶい黄橙　細砂粘質土　炭・中礫含む
15. 橙　極細砂～粗砂質土
16. 明褐　極細砂～細砂質土　土器
17. 炭層
18. 褐　細砂質土　炭多く含む
19. 明褐　細礫混じり細砂質土
20. 黄褐　細砂質土　炭多く含む
21. 墳丘東側　黄褐　極細砂質土～極細砂粘質土を細かい単位で盛る　細礫含む
22. 墳丘西側　明黄褐　細砂質土～明褐　極細砂粘質土を細かい単位で盛る　中礫含む
23. にぶい黄　細砂質土　しまり悪い
24. 明赤褐　精良なシルト　しまり良い（貼床）
25. にぶい黄　極細砂～中砂質土　中礫含む（旧表土）
26. 明黄褐　極細砂粘質土　中礫含む（旧表土）

0　5 m

第22図　13号墳墳丘測量図

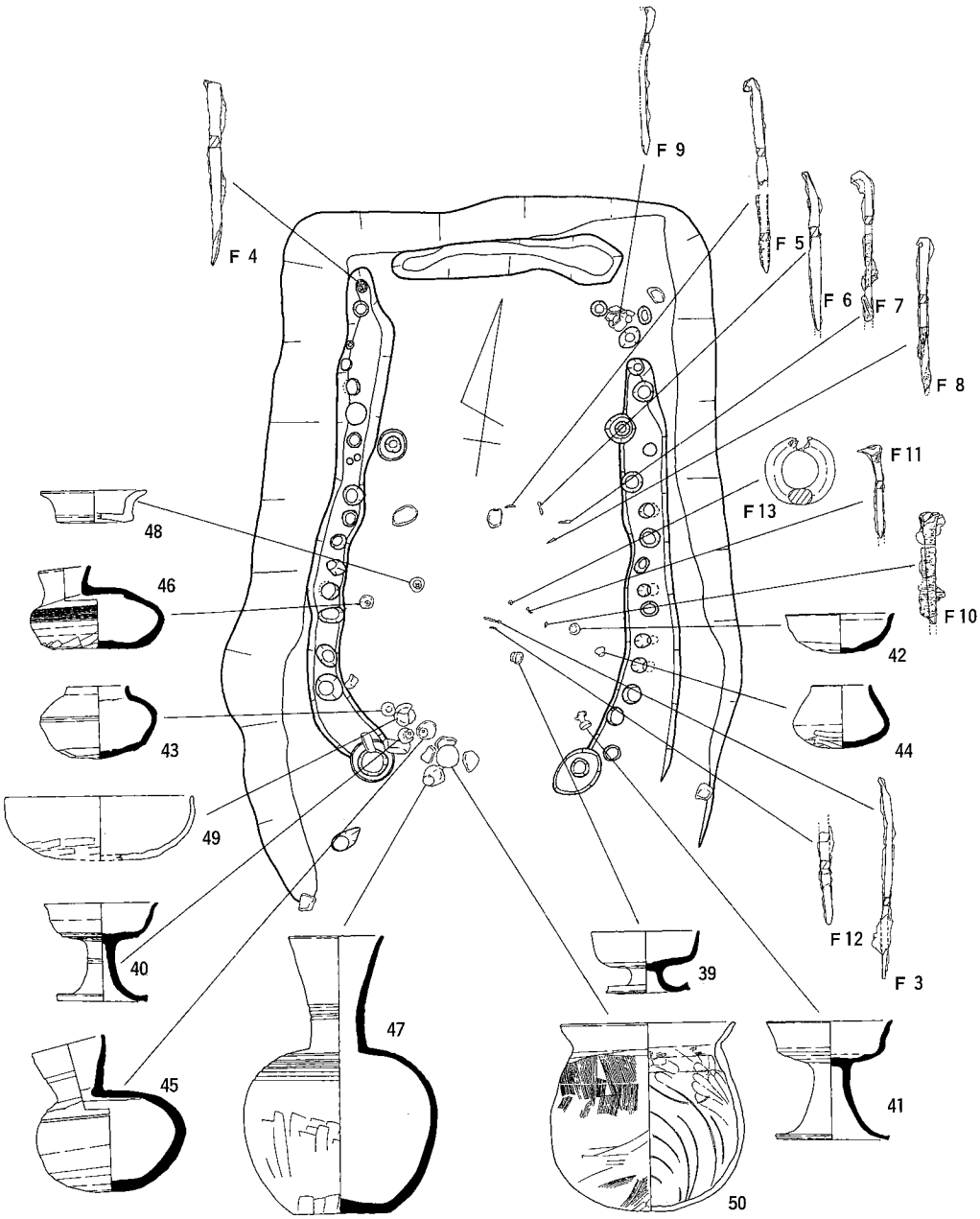


第23図　13号墳主体部

側を玄室床面とすると、床面の内法は全長3.2m、幅は奥壁側で1.6m、中央で1.9m、玄門側で1.4m、主軸の方位はN13°Wである。

貼床　床面には精良な粘土で厚み５～10cmの貼床を施している。玄室の南半部では貼床の下に旧表土層が残っている。床面のレベルは奥壁から玄門に向かって緩やかに下がっており、約25cmの比高差をもつ。玄門から前庭部にかけては傾斜が急になり、その先は14号墳の周溝に切られているため段差が付いてしまっている。前庭部には特に施設を設けておらず、掘り方の側壁が剝き出しになっていたようである。

埋土　埋土の層位は、短軸側では天井部の落ち込みに伴う土層のたわみ込みが観察できる。長軸側では玄門付近に礫や炭を含む土層の高まりがあり、閉塞の痕跡とみられる。



第24図　13号墳副葬品の出土状況

副葬品　玄室の床面から須恵器・土師器・鉄釘・耳環が出土した。土器は玄門西側にまとまりがあり、その他は玄室南半部と奥壁東隅から出土している。鉄釘・耳環は玄室南半部東寄りと、奥壁両隅から出土している。

玄門　玄門の西側には須恵器高杯(40)・短頸壺(43)・平瓶(45)・長頸壺(47)と土師器椀(49)・甕(50)がかためてある。いずれもほとんど完形品で、現位置を保っているとみられる。

玄室南半　玄室南半部の東寄りには鉄釘・耳環が散らばっており、木棺のあった場所を示している。その周囲からは須恵器杯(42)・高杯(39・41)・坩(44)・平瓶(46)、土師器小杯(48)といった供献用の小型器種が出土している。これらもほとんど完形品で、副葬時の状態に近いと考えられる。

奥壁　奥壁両隅のピット列上からも鉄釘と土器が出土している。土器は実測できなかった。

出土遺物（第25～27図）

玄室床面出土の須恵器・土師器・鉄釘・耳環と、墳丘盛土出土の須恵器がある。

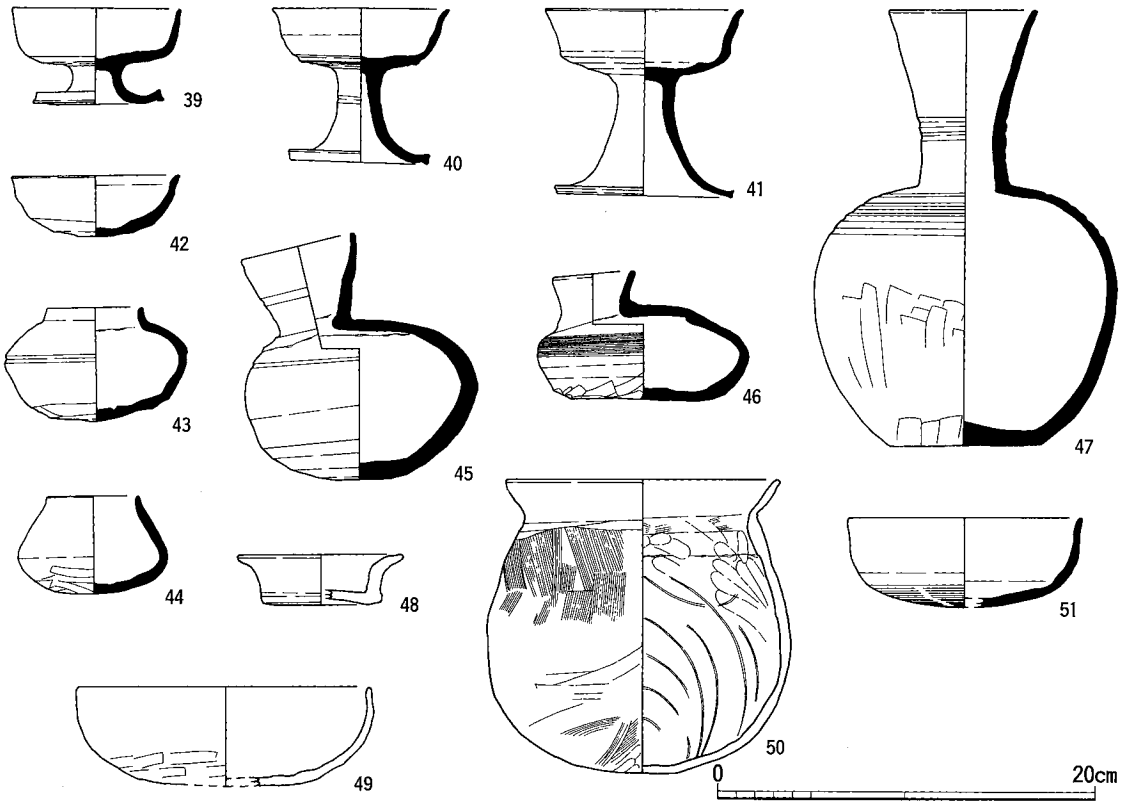
須恵器(39～47・51)

玄室内からは高杯(39～41)、杯または蓋(42)、短頸壺(43)、坩(44)、平瓶(45・46)、長頸壺(47)が、墳丘からは椀(51)・蓋杯・甕・壺・提瓶などが出土している。

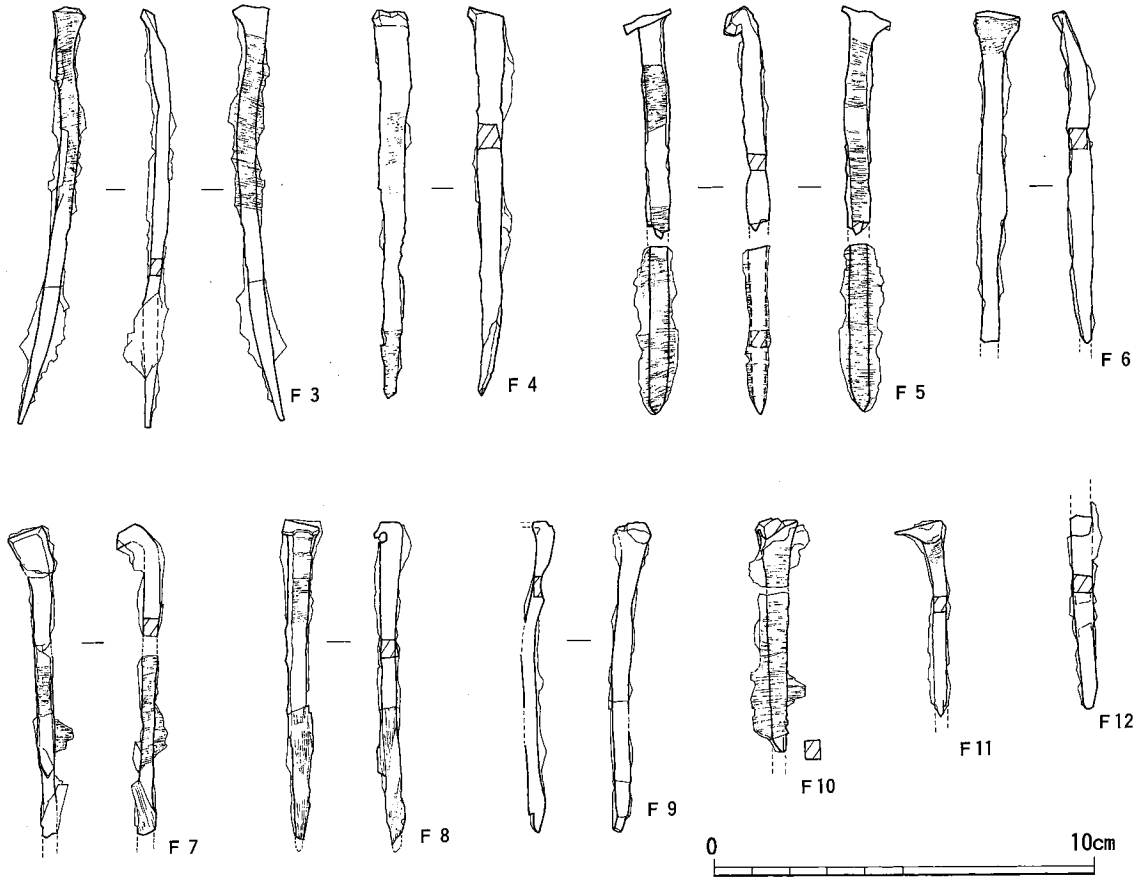
高杯　杯部は杯Ａに近い形態になり、底面をヘラ削りで調整する。39は低脚のタイプである。

ミニチュア　47以外の須恵器(39～46)はいずれも小振りでミニチュアに近く、丁寧に作られた葬送用品であろう。時期は７世紀後半と考えられる。

椀　椀(51)の底面にはヘラ削りまたはカキメのような痕跡がみられる。



第25図　13号墳出土土器



第26図　13号墳出土鉄釘

土師器(48～50)

小杯(48)、椀(49)、甕(50)がある。

小杯　小杯(48)は中世の托と同形態であるが、床面からの出土で他に混入品もないため、古墳に伴う遺物と考えて差し支えない。

椀　椀(49)は器壁の剥離が著しいが、底面には板ナデらしきものがみられる。

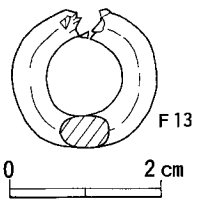
甕　甕(50)は外面はハケ目を施し、内面の上部には粘土紐の接合痕とハケ目がみとめられ、その下はヘラ削りまたは板ナデで仕上げている。

鉄釘(Ｆ３～Ｆ12)

鉄釘は10本あり、頭部が真っ直ぐなもの(Ｆ３・Ｆ４・Ｆ６・Ｆ９)と折れ曲がっているもの(Ｆ５・Ｆ７・Ｆ８・Ｆ10・Ｆ11)がある。全長が判るもののうちＦ３～Ｆ５は10～11cm、Ｆ８・Ｆ９は8.5cmほどの長さである。Ｆ９とＦ12以外には木質が付着している。木質の繊維はほとんどが横方向であるが、Ｆ８のみは頭部付近が横方向で先端側が縦方向になっており、繊維の向きが異なる部材を接いでいたことが判る。

耳環(Ｆ13)

金銅製で、耳挟み部端面の箔が剥がれ落ちて芯が見えている。形状は直径1.8×1.9cmの円形、断面は0.4×0.6cmの楕円形、現状の重さは4.7ｇで、２号墳のものとほぼ同大である。

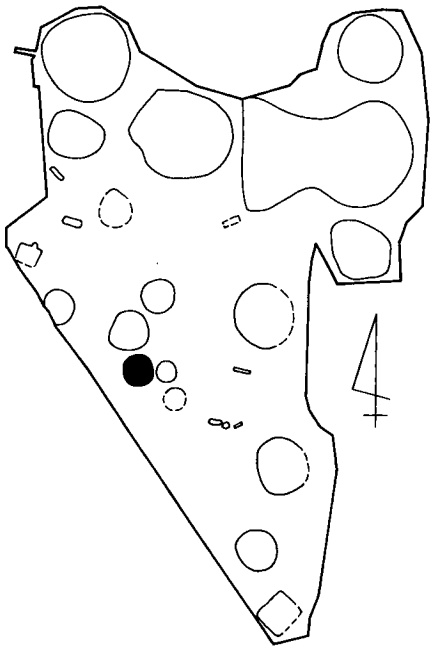


第27図　13号墳出土耳環

７．西山14号墳

立地

14号墳はＤ－４区に位置し、北側で13号墳を切っており、東側では15号墳と接する。



墳丘・周溝（第28図）

墳形　墳形は直径5.8mの円墳で、墳丘最高点の標高は188.4m、南裾部からの高さは1.6mである。盛土は周辺の地山の土と同質で、しまりはあまり良くない。墳丘の南側から西側にかけては、旧表土層の上に土を盛っている。

周溝　北側の13号墳の裾部を削り込んで、幅1.3m、深さ0.7mの周溝としている。また15号墳との間にも幅1.0m、深さ0.4mの周溝がある。そちら側の墳丘が多少抉れているのは、15号墳築造の際に削り取られたものかもしれない。

なお13号墳から14号墳にかけての墳丘の西裾部の表土から、青磁碗１個体の破片が散らばって出土した。全形を復元できるだけの破片があり、ここで破砕されたものである。

主体部（第29図）

主体部は木棺直葬で、主軸を等高線と平行方向にとる。掘り方は盛土の上から掘り込まれ、地山にまで達している。掘り方の平面は不整な長方形で、その内側に箱形の組合式木棺を置く。掘り方の全長2.3m、幅1.5m、深さ0.3m、木棺の全長1.8m、幅は西小口側で0.8m、東小口側で0.7m、主軸の方位はN85°W。

主体部から遺物は出土しなかった。

出土遺物（第30図）

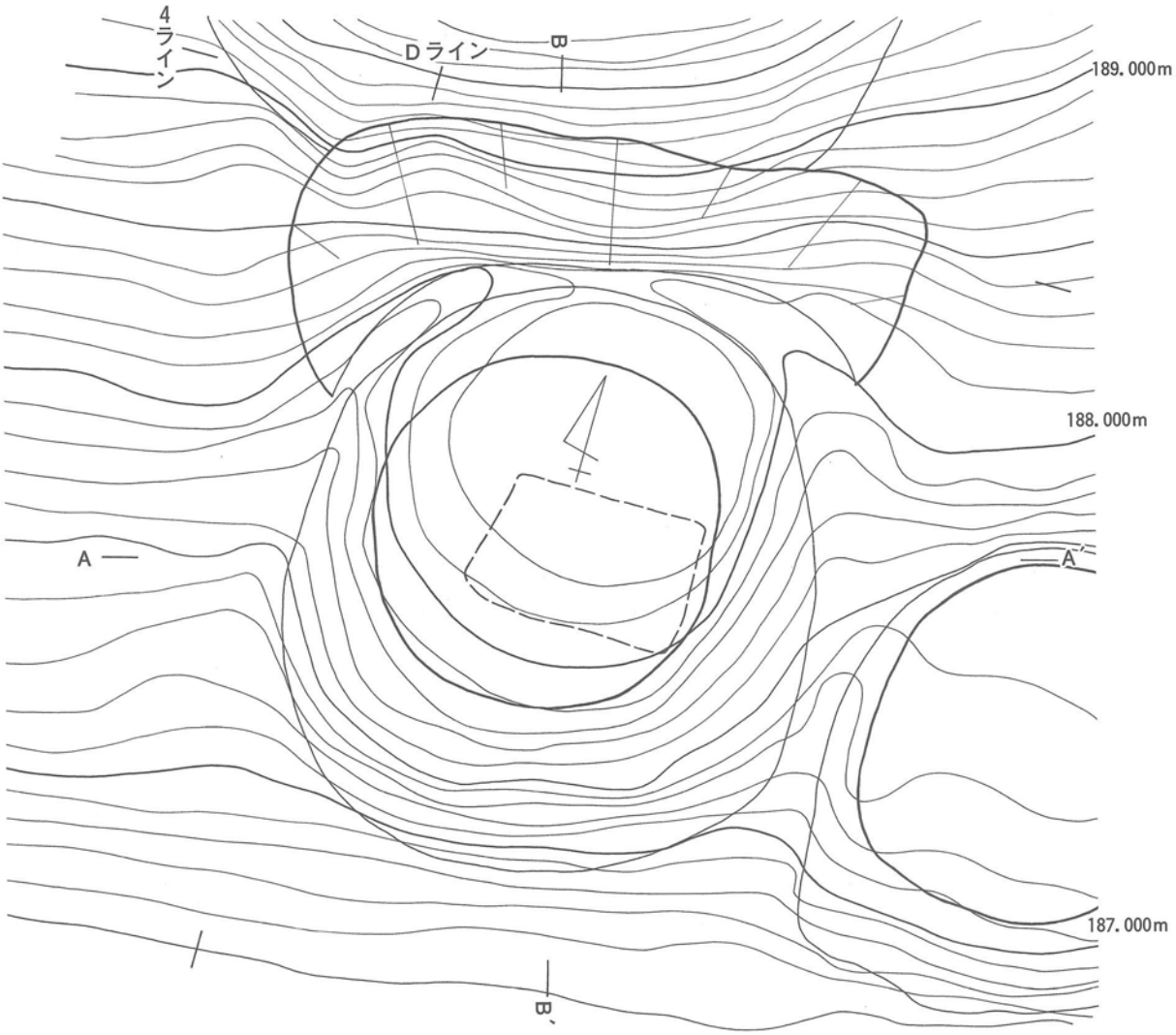
周溝内から須恵器・土師器が、西裾部の表土から青磁が出土している。土師器は図化していない。

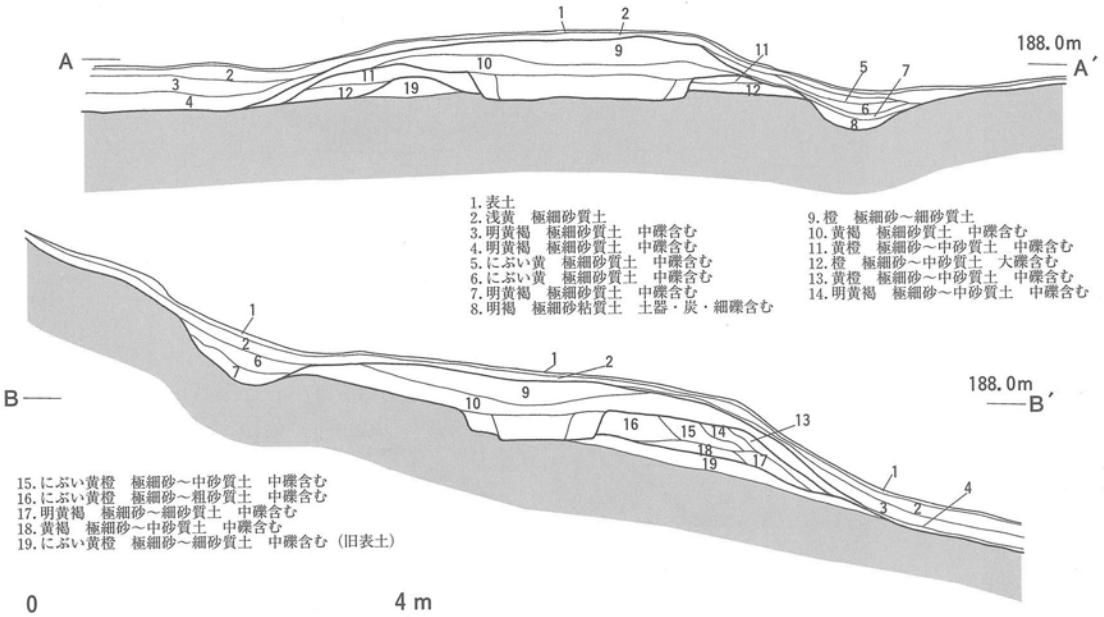
須恵器（52～54）

杯蓋(52)と杯身(53)、中世の杯(54)を図化した他、甕・甑・短頸壺などが出土している。

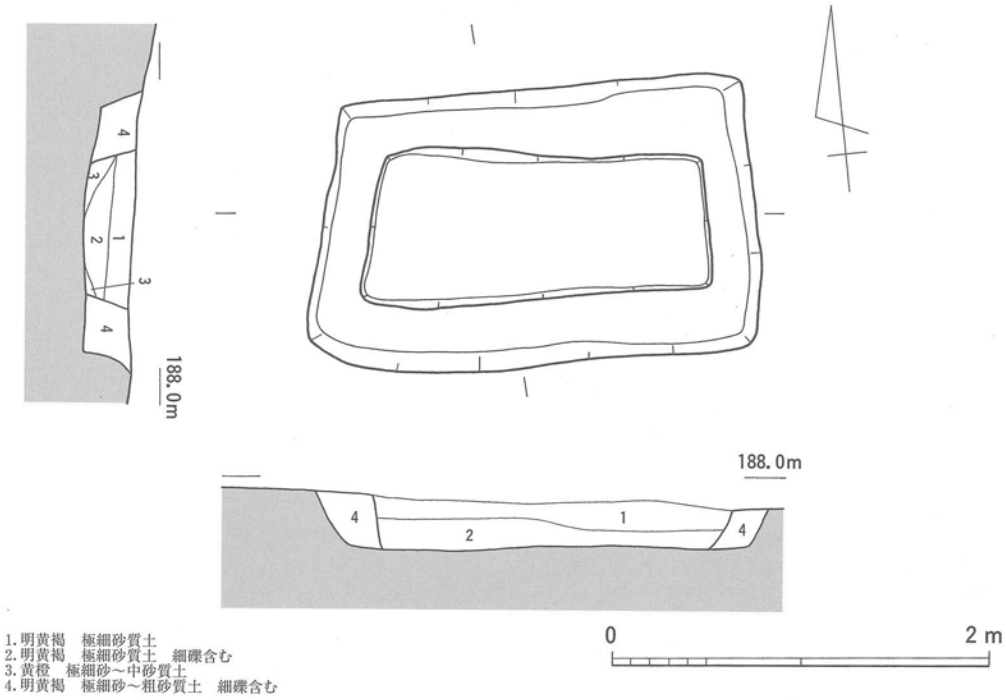
蓋杯　杯蓋(52)には頂部に「十」字形のヘラ記号がある。口径7.0cm。杯身(53)は口縁が多少歪んでいるものの、口径9.4cmである。52・53とも天地が逆転する可能性もある。

杯　杯(54)は平安時代のもので、底部の切り離しは回転ヘラ切りによって行う。口縁端部に重ね焼きの痕跡が残る。口径14.8cm。





第28図　14号墳墳丘測量図

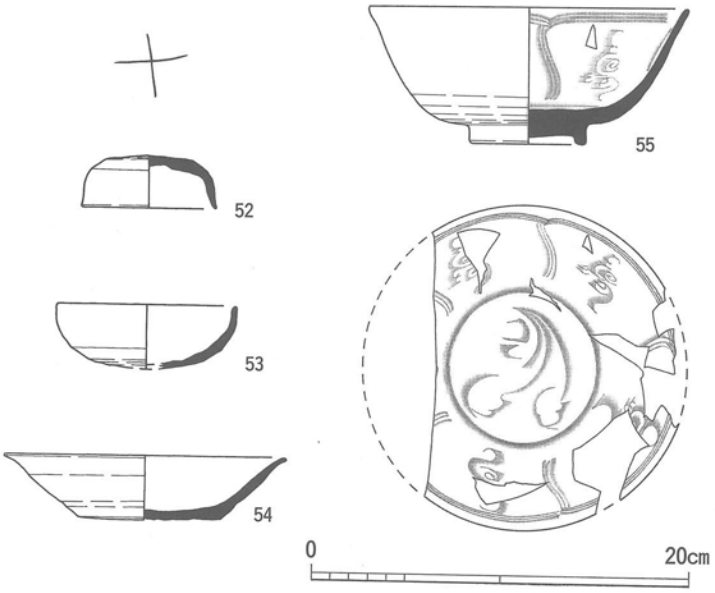


第29図　14号墳主体部

青磁(55)

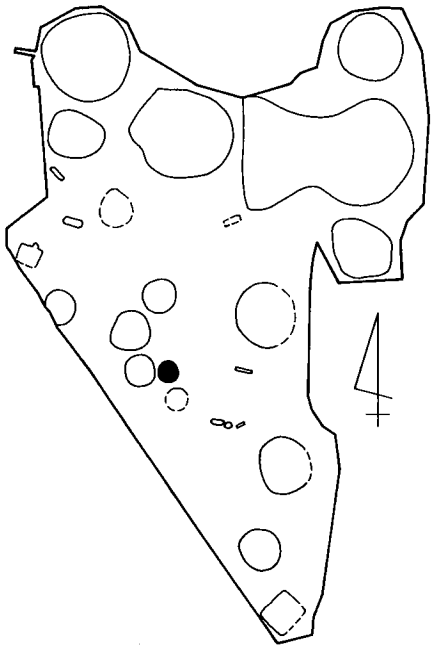
碗　　龍泉窯系の劃花文碗(55)で、外面は無文である。内面の文様は櫛状の原体で体部を５分割し、その中に飛雲文を、見込みにキノコ状の文様３個を片切り彫りする。口縁部に輪花は無い。横田・森田分類（註）のＩ－４類にあたり、13世紀代の遺物である。

(註) 横田賢次郎・森田　勉1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－形式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』４



第30図　14号墳出土土器

８．西山15号墳



立地

15号墳はＤ－４区に位置し、西側に14号墳と接する。また墳丘裾の南側で、17号墳の周溝の残骸が見つかっている。なお当初は東側にもう１基の古墳状隆起を認めていたが、掘削したところ土器は出土するものの意図的な盛土はなく、古墳ではないと判断した。

墳丘・周溝（第31図）

墳形　直径は東西4.5m、南北5.2mの円墳で、墳丘最高点の標高は187.8m、南裾部からの高さは0.9mである。盛土は周辺の地山の土と同質でしまりは悪く、主体部の検出もきわめて困難であった。

周溝　山側の斜面はほとんどカットしておらず、全体の土量も小規模なものにとどまる。14号墳との間に掘った周溝の他に、北側から北東側にかけても幅0.7m、深さ0.4mほどの細い周溝がある。

主体部（第32図）

主体部の輪郭は不明瞭で、平面的にも断面的にも検出できなかった。結局最後に断面観察用の畦を除去したところ、畔の中から須恵器蓋杯のセット(56・57)が２点とも内面を上に向けて並んで出土した。南側に杯蓋(56)、北側に杯身(57)を２cmの間隔を空けて並べており、これが土器枕であったとすると、主体部は木棺直葬で、14号墳などと同様に主軸を等高線と平行にとるものである。土器のレベルは墳頂からの深さ15cm、基底面からは40cm浮いた状態にあり、木棺が盛土の非常に浅い所に埋めてあったために土壌化作用を受けて、掘り方の輪郭が判らなかったものであろう。

墳丘の基底面でも地山の整形を行っているようだが、その行為と主体部との関係までは把めなかった。

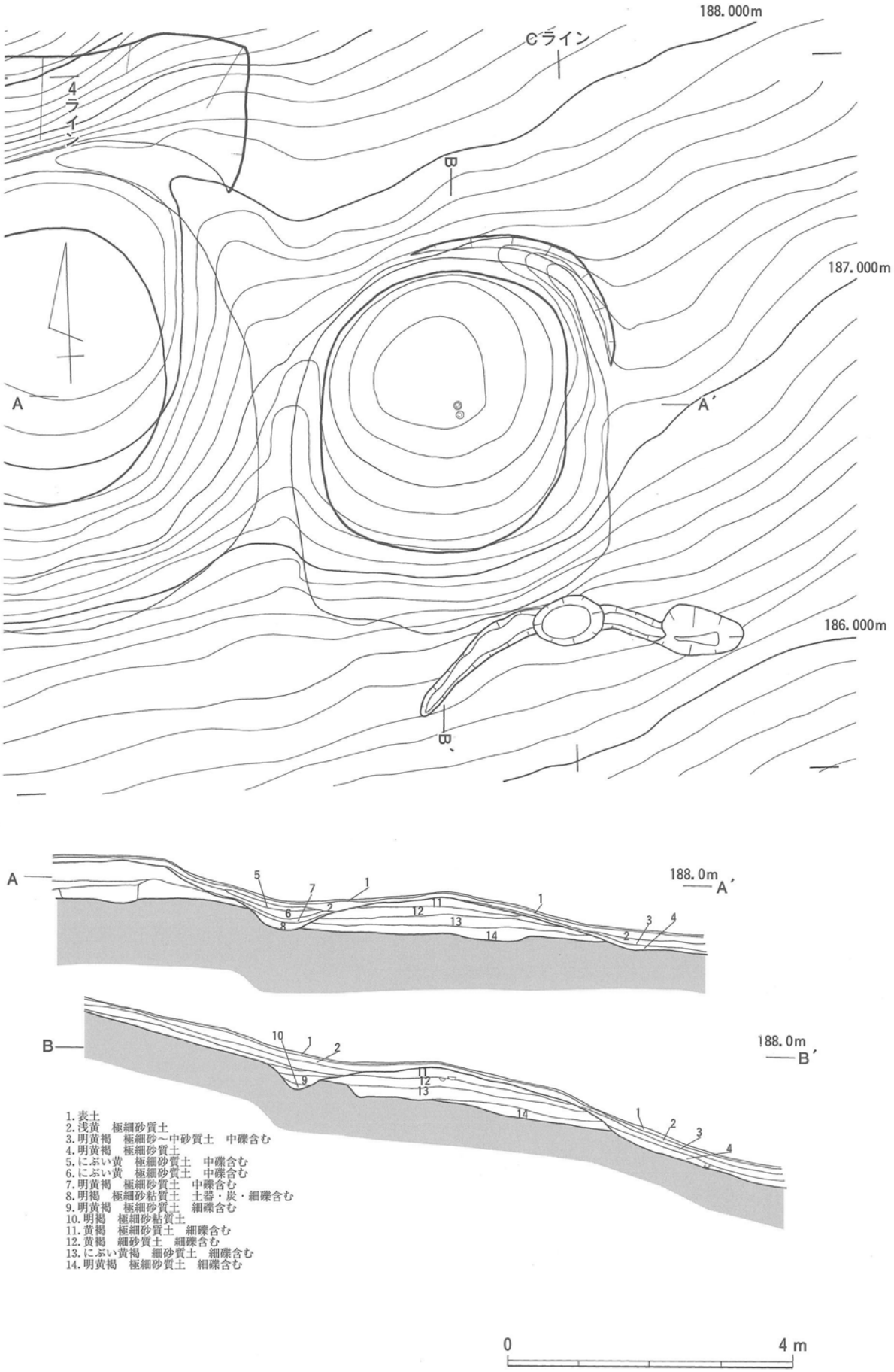
出土遺物（第33図）

棺内の土器枕らしき須恵器蓋杯のセットの他に、周溝・墳丘から須恵器・土師器が出土している。

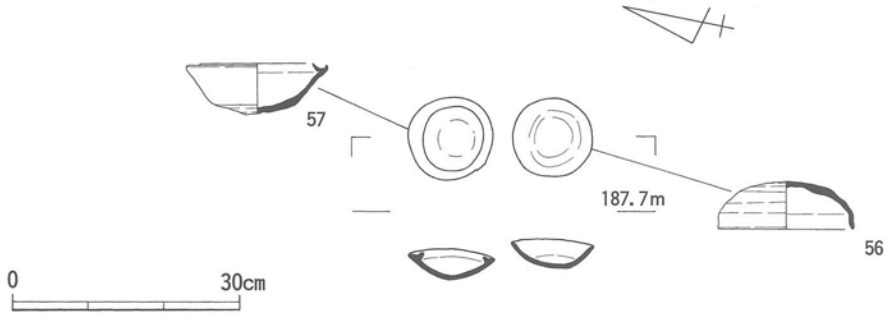
須恵器(56～60)

蓋杯のセット(56・57)、無蓋高杯の杯部(58)、坩(59・60)を図化している。他にも高杯・甕・壺などが出土している。

蓋杯　棺内の土器枕であったとみられる杯蓋(56)と杯身(57)は、口径がそれぞれ10.5cm、8.9cmで、立ち上がりが低く、調整もヘラ削りというよりはヘラ切り不調整に近い。



第31図　15号墳墳丘測量図



第32図　15号墳副葬品の出土状況

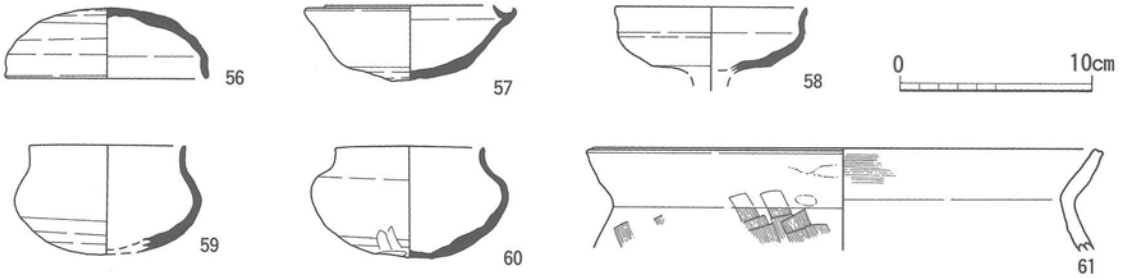
高杯　高杯(58)は周溝から出土した。口縁端部に重ね焼きの痕跡がみられる。口径は10.2cmほどである。

坩　墳丘から出土した坩(59・60)も棺内の遺物であった可能性がある。59は口径8.1cm、底面はヘラ削りで仕上げる。内外面に自然釉が付着している。60は口径7.7cm、底面はヘラ削りの後に不定方向の雑な削りを施している。さらに何かの圧痕が数箇所認められる（図版99参照)。

56・57の年代は７世紀後半頃のものと思われる。58～60はいずれも小型の器形で、56・57と同様の時期と考えられる。

土師器(61)

甕　甕の口縁部(61)を図化している。口縁端部はカットして、面をもたしている。外面はハケメで仕上げる。



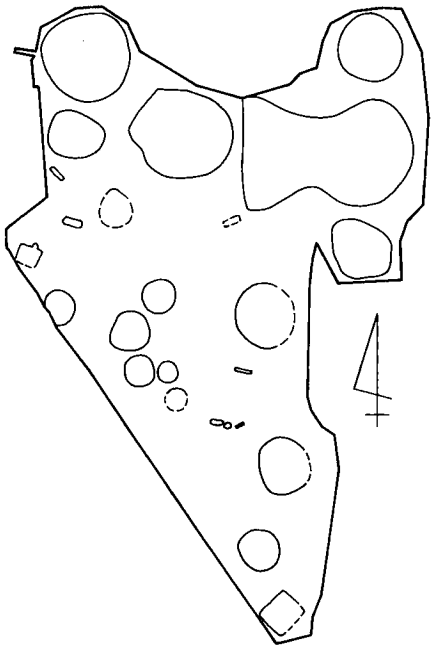
第33図　15号墳出土土器

９．西山16号墳

立地

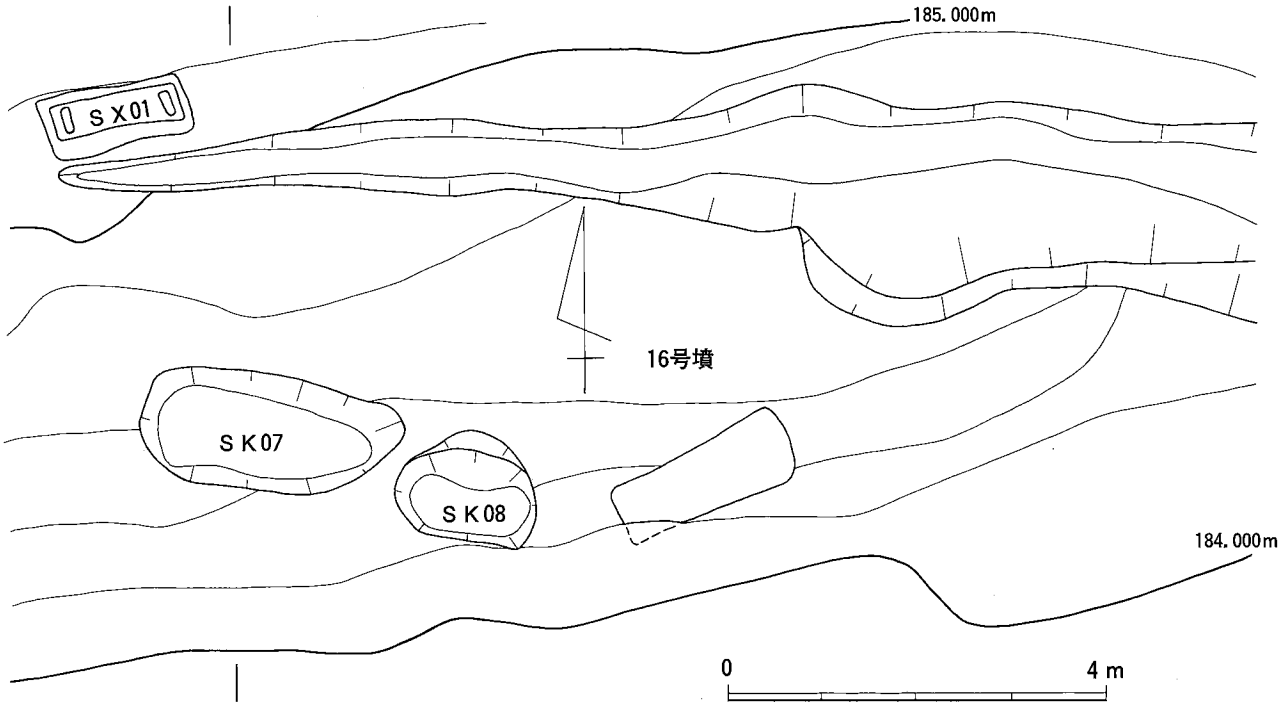
16号墳はＢ－５区に位置し、西隣に土坑３・４（ＳＫ03・04)が、北西側７ｍに木棺墓１（ＳＸ01）がある。山側には12号墳南側のカット面があり、その裾部に溝状遺構が東西に走っている。

この辺りは宅地造成の際に道路が作られていて、かなり削平を被っている。道路から下は斜面の角度が一旦緩やかとなっており、その傾斜変換点の裾部を狙って道路を通したと理解できる。この緩斜面に18・19号墳や西山遺跡の建物群が築かれており、16号墳の位置も若干の平坦面を選んだ結果だろう。

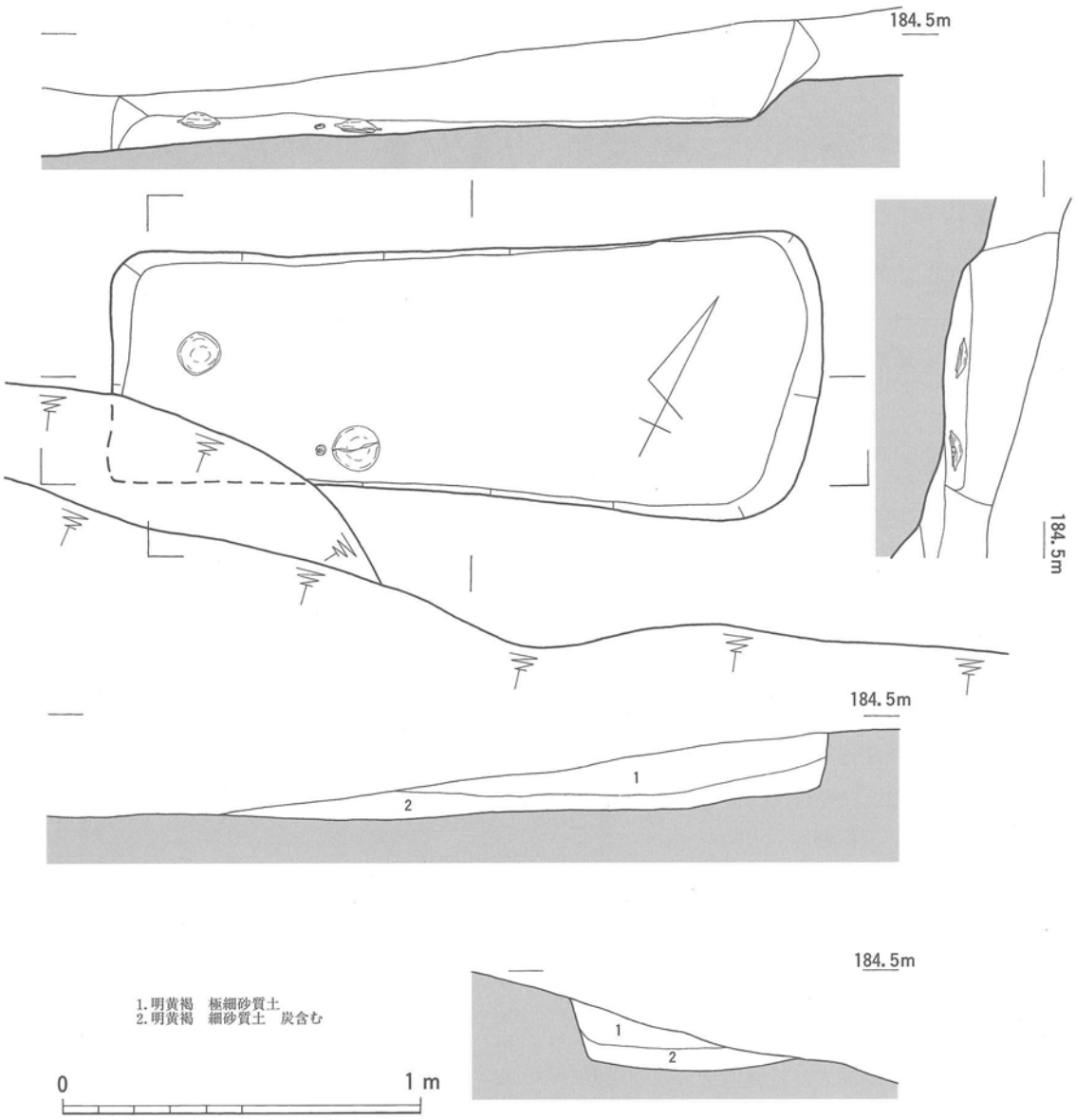


墳丘（第34図）

表土除去後の精査で主体部を検出した。周囲にマウンド状の盛り上がりや周溝といった要素は全く認められず、９・12号墳と同様に、もともと墳丘をもたなかったものであろう。主体部検出面の標高は184.5ｍである。



第34図　16号墳地形測量図



第35図　16号墳主体部

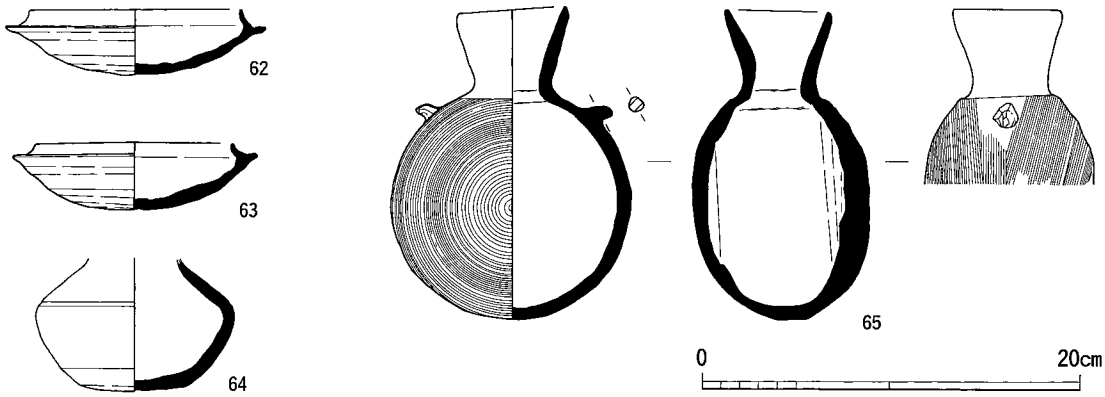
主体部（第35図）

主体部は木棺直葬で、主軸を等高線と平行方向にとる。残存状況が悪く掘り方と木棺の関係は捉えられなかった。南西隅は削平によって失われている。掘り方の平面は長方形で、東小口側がやや幅広くなる。棺底のレベルは西側に向かって10cmほど低くなる。掘り方の全長2.0m、幅は東小口側で0.8m、西小口側で0.65m、深さ0.2m、主軸の方位はN64°W。

副葬品　棺内西半部の底面から須恵器・耳環が出土した。

完形の須恵器杯身２点(62・63)はいずれも底面を上にしており、耳環(F14)も杯身(63)の脇から出土した。63とF14は南側板の中央西寄り、62は西小口付近にあり、土器や耳環の位置からすると頭位は西になるが、東小口側の方が幅広くレベルも高いこともあって即断できない。

他に棺内埋土の水洗選別で、ガラス小玉１点を採集している。



第36図　16号墳出土土器

出土遺物（第36・37図）

棺内に副葬された須恵器・耳環と、周辺から出土した須恵器がある。短頸壺の胴部(64)と完形の提瓶(65)は主体部から北西に数m離れた地点から出土したもので、16号墳に伴うものかどうかは断定できない。しかしいずれも小型の器種で、墓に供献していたものには違いない。

須恵器（62～65）

杯身(62・63)と短頸壺(64)、提瓶(65)がある。

杯身　62は口径11.3cm、器高3.4cm。63はやや小さく口径10.4cm、3.6cmで、62に比べて立ち上がりが低い。

短頸壺　短頸壺(64)は口縁部を欠失している。肩部に１条の凹線がめぐる。

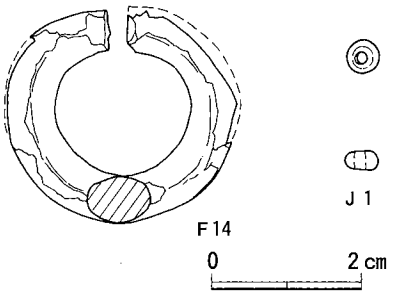
提瓶　提瓶(65)は完形品で、口縁部は内弯気味に立ち上がり、角状の耳部をもつ。体部は両面ともカキ目で仕上げる。

耳環（Ｆ14）

金銅製で、外側の箔がほとんど剝がれ落ちて芯が剝き出しになっており、緑青をふいている。箔が残っている部分は銀色に発色している。形状は直径2.8×3.0cmの円形に復元でき、断面は0.5×0.8cmの楕円形、現状の重さは13.6ｇである。

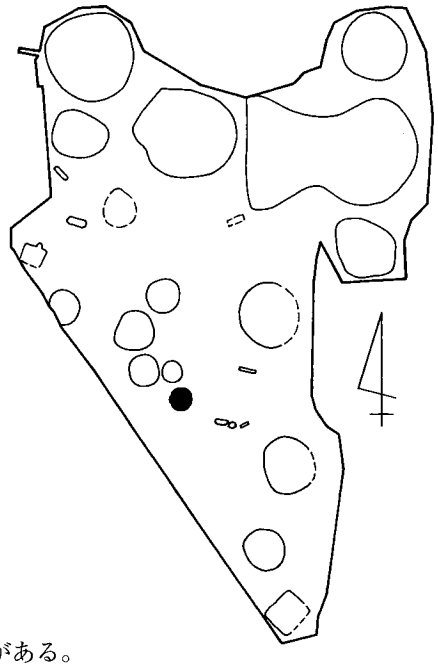
ガラス小玉（Ｊ１）

大きさは直径4.4mm、厚さ2.6mm、孔の直径1.5mm。色は透明感のある水色で、若干気泡が観察できる。



第37図　16号墳出土耳環・ガラス小玉

10. 西山17号墳



立地

17号墳はＤ・Ｃ－４区に位置し、15号墳の南裾部に接する。

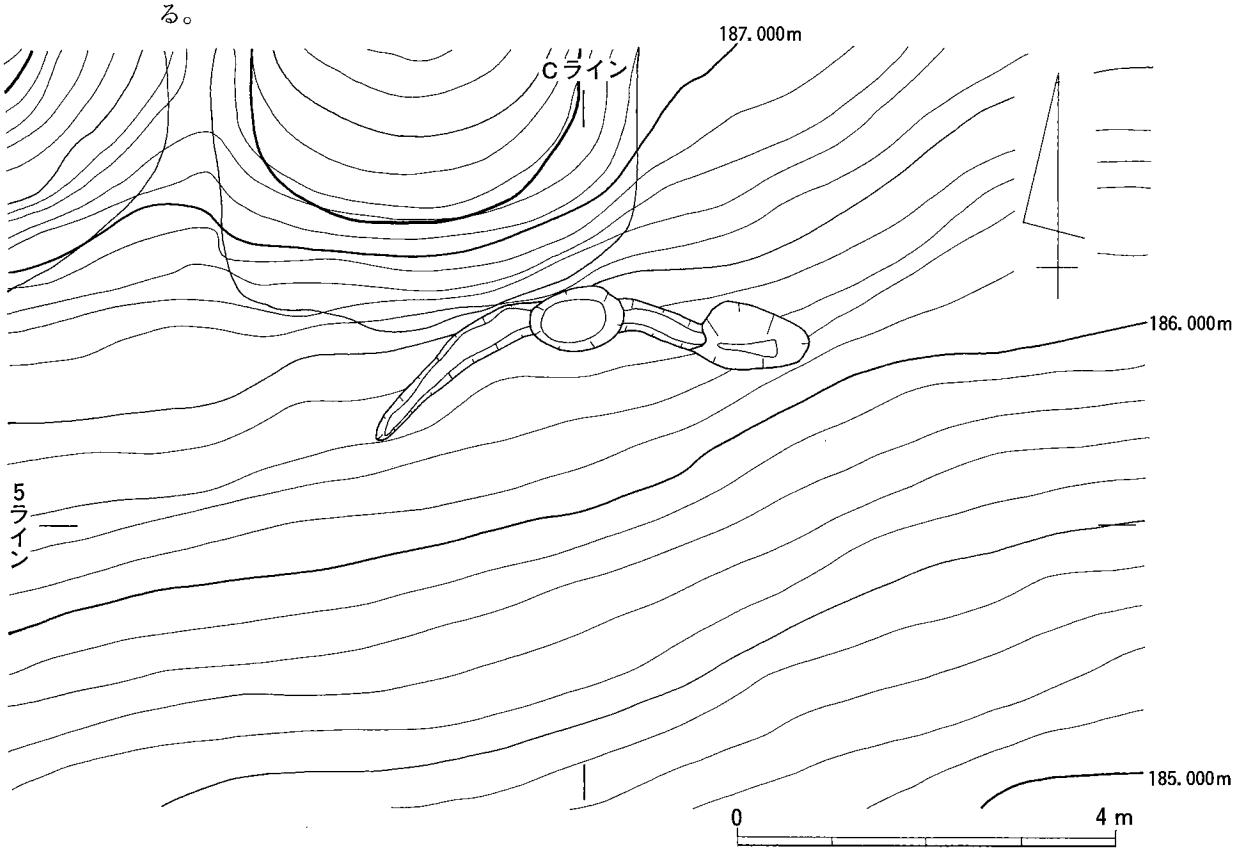
墳丘・周溝（第38・39図）

周溝　15号墳の南裾部では最初に須恵器長頸壺(66)の出土した土坑だけが見つかっていたが、その後の精査で弧状の溝を検出した。幅0.8m、深さ0.15mほどの溝で、形態からみて古墳の周溝の残骸と考えられる。墳丘・主体部は完全に削平されてしまっているが、周溝の円弧からみて直径５m前後の円墳であったとみられる。

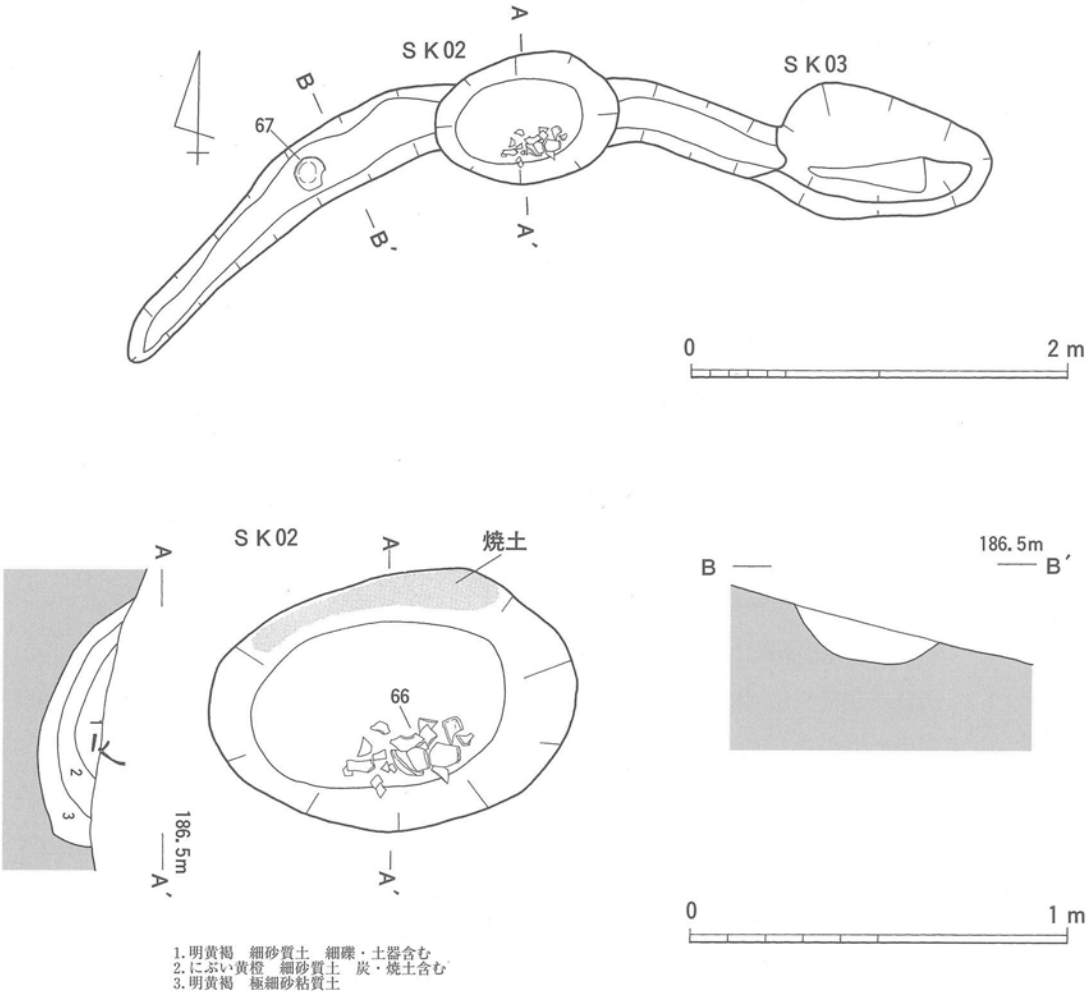
土坑　周溝内には２基の土抗があり、土壙墓の可能性がある。

西側の土坑ＳＫ02は平面楕円形、長軸1.0m、短軸0.7m、深さ0.25m程度で、北側の肩部が焼けて赤化している。坑内の南寄りから長頸壺(66)が破砕された状況でまとまって出土した。

東側の土坑ＳＫ03は平面が不整な楕円形、長軸1.1m、短軸0.7m、深さ0.3mほどである。



第38図　17号墳地形測量図



第39図　17号墳周溝内の遺構

出土遺物（第40図）

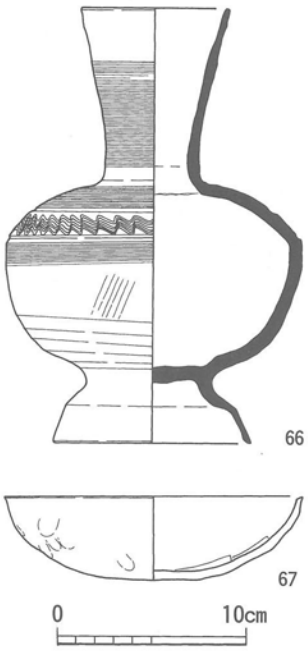
ＳＫ02の須恵器と、周溝から出土した土師器を図化した。他に須恵器の蓋杯・瑕・提瓶・短頸壺、土師器の甕などが出土している。

須恵器(66)

長頸壺　長頸壺(66)は頸部から体部上半にカキ目を施し、肩部を２条の凹線で区切ってその間に波状文を描く。底部には段をもつ高い脚部を付けており、６世紀後半頃のものと思われる。

土師器(67)

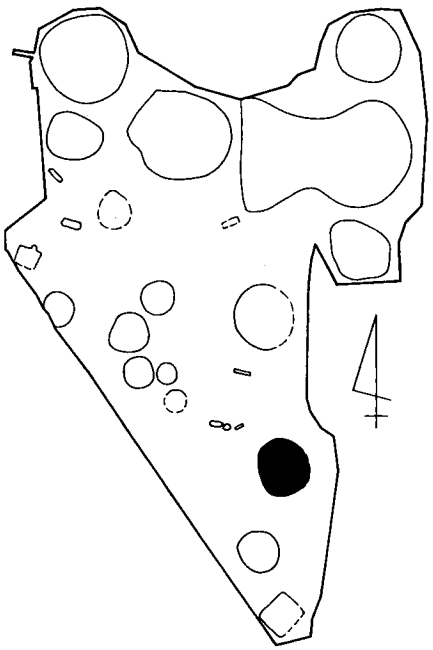
椀　椀(67)は内外面とも器壁の亀裂が著しく、調整は部分的に縦方向のハケ目または板ナデらしきものがわずかに観察できるのみである。13号墳出土の杯(48)に比べ浅い器形である。



第40図　17号墳出土土器

11. 西山18号墳

立地



18号墳はＡ・Ｂ－５・６区に位置する。中腹に作られた道路より下の緩斜面に立地し、このなだらかな面の延長線上に19号墳がある。また西側10ｍほどの所にも当初は古墳状隆起を認めていたが、掘削の結果古墳ではないことが分かった。

宅地造成に伴う道路によって山側のカットの上端と墳丘の東裾部が削られている。ただし墳丘東裾部の削平はもともと奈良～平安時代の溝ＳＤ03によるもので、溝から東側を平坦に均して建物群を建築している。現代の宅地造成はそのカット面を利用したものである。

墳丘（第41図）

墳形　墳丘は東側が削られている上、頂部も削平されて平らになってしまっている。そのため規模が少々不確かになってしまっているが、おおよそ直径11ｍの円墳である。現状での墳丘最高点の標高は182.8ｍ、南裾部からの高さは1.6ｍである。

地山整形　墳丘山側のカット面は残存しているが、周溝らしき掘り込みは残っていない。おそらく13号墳と同様、山側には木室の奥壁を立ち上がらせるため、それほど深い周溝を必要としないのであろう。

山側のカットから続いて斜面をコの字型に大きく削り込み、水平な床面を作っている。そのため主体部の奥壁側は地山が直接壁になっているが、手前側の壁は盛土で作ることになる。奥壁山側の平坦面は後世の削平によるものであろう。

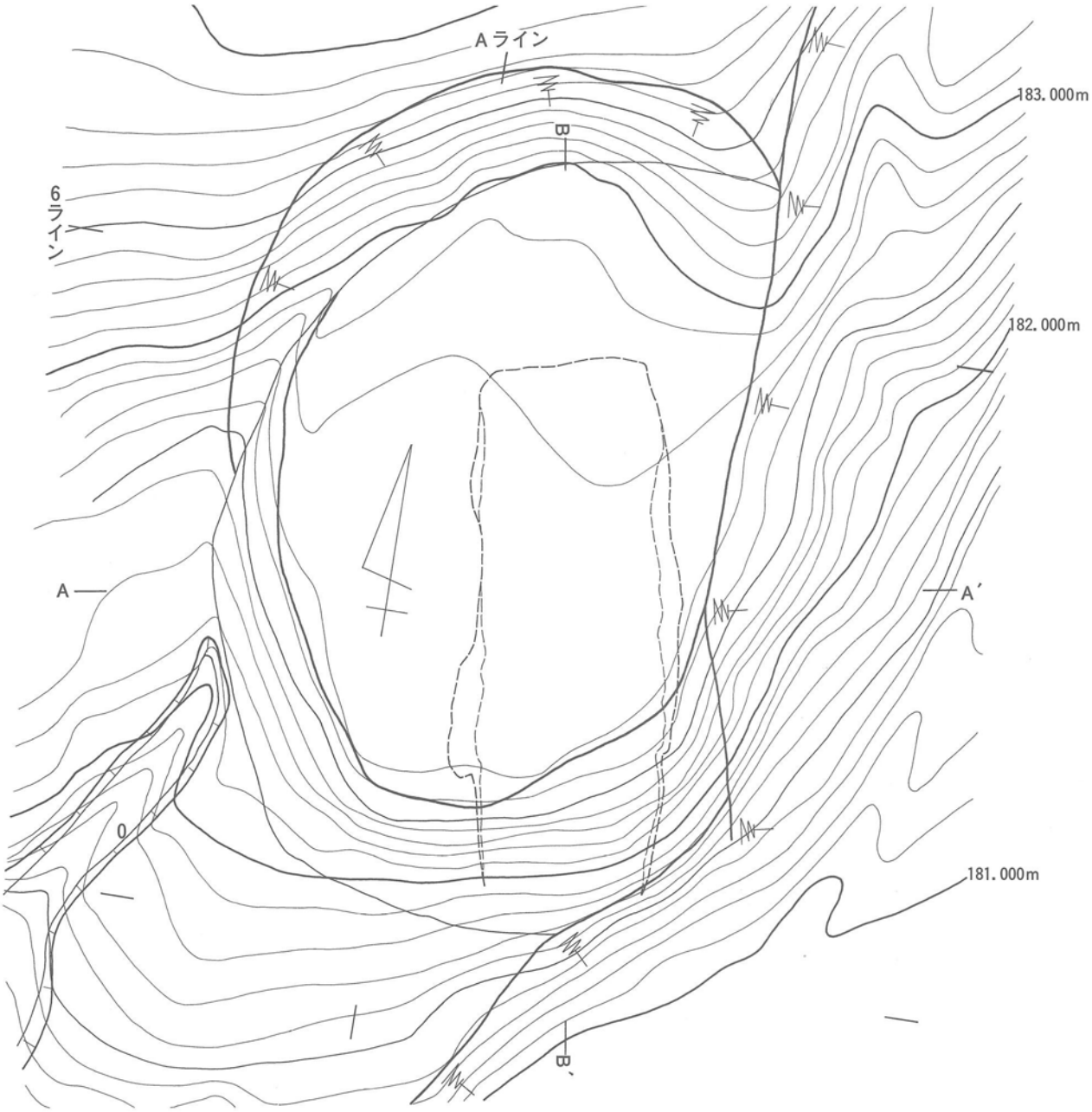
周溝は東・北側には残っておらず、西裾部にのみ痕跡を留めている。

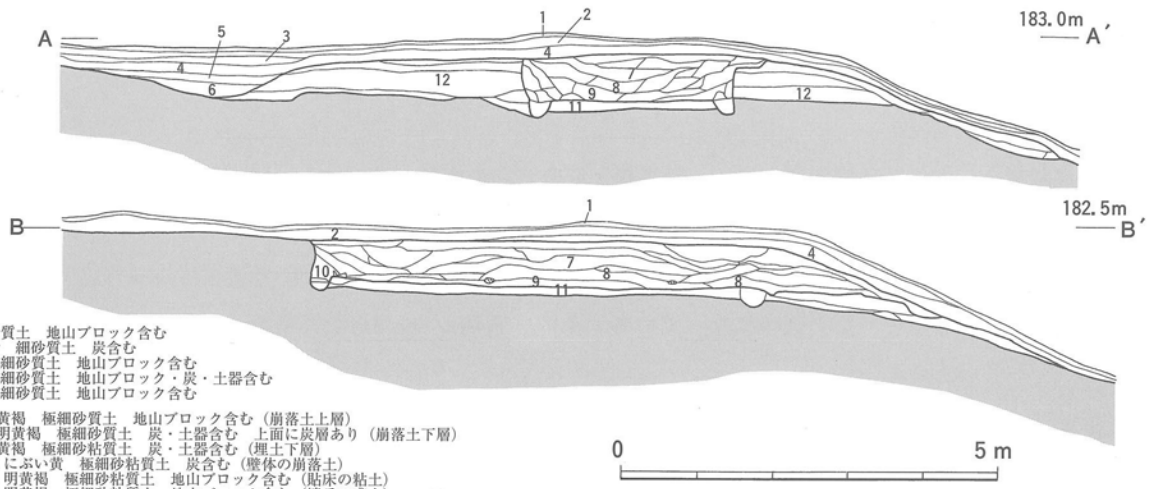
盛土　墳丘には周辺の地山と同質の黄褐色粘質土ブロックの入った水平な盛土が観察され、周りの軟質岩盤を削りながら盛り上げていった作業の結果と理解できる。作業は主体部の構築と併行して行ったであろうが、石室のように一石ごとに土を盛る工程は必要ないだろう。

主体部（第42・43図）

横穴式木室　主体部は横穴式木室で、等高線と直交方向の南側に開口する。平面は長方形で、掘り方の規模は全長8.2ｍ、幅2.6～3.4ｍ、奥壁の立ち上がりの高さ0.45ｍである。掘り方の床面の大きさは全長8.2ｍ、幅2.6～2.9ｍで、地山を掘り込んでいる奥壁付近は垂直かややオーバーハング気味になっている。そのうち奥から5.8ｍが玄室で、玄門を経て前庭部にいたる。

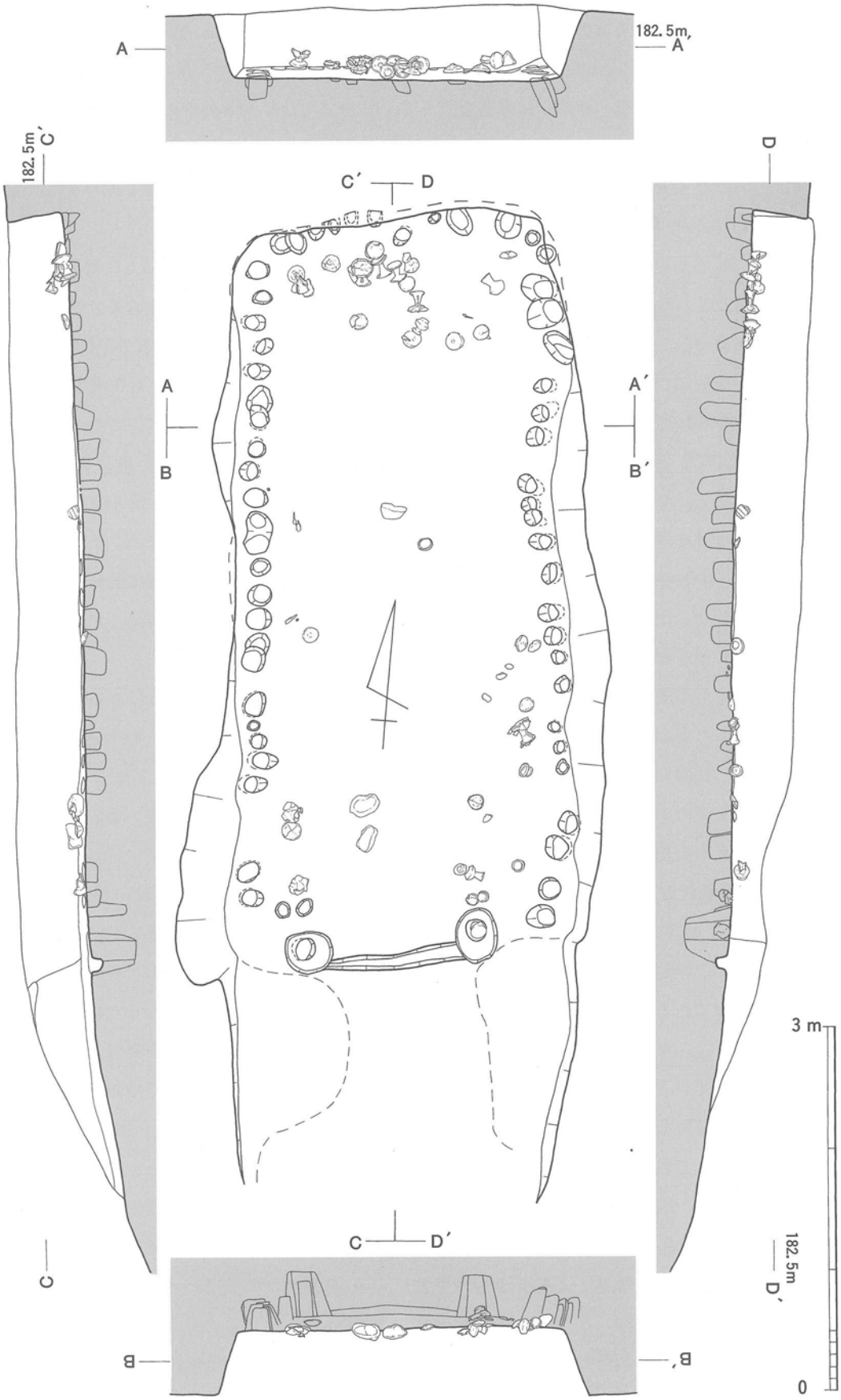
玄室　玄室の構造は２本の主柱と壁際のピット列からなる。２本の主柱は柱根間の内法で1.3ｍの間隔をおいて立てて玄門とする。この間隔は13号墳とほぼ同じで、２号墳ともあまり





1. 表土
2. 浅黄　細砂質土　地山ブロック含む
3. にぶい黄橙　細砂質土　炭含む
4. 明黄褐　極細砂質土　地山ブロック含む
5. 明黄褐　極細砂質土　地山ブロック・炭・土器含む
6. 明黄褐　極細砂質土　地山ブロック含む
7. 黄褐　極細砂質土　地山ブロック含む（崩落土上層）
8. 明黄褐　極細砂質土　炭・土器含む　上面に炭層あり（崩落土下層）
9. 黄褐　極細砂粘質土　炭・土器含む（埋土下層）
10. にぶい黄　極細砂粘質土　炭含む（壁体の崩落土）
11. 明黄褐　極細砂粘質土　地山ブロック含む（貼床の粘土）
12. 明黄褐　極細砂粘質土　地山ブロック含む（墳丘の盛土）

第41図　18号墳墳丘測量図



第42図　18号墳主体部

変わらない。玄門の大きさは入口という性格上、主体部の規模の大小に関わらずある程度のサイズに収まるのであろう。主柱は掘り方の直径30～40cm、柱根の直径15～20cm、床面からの深さ40cmである。

奥壁と両側壁の壁際には壁体を支える小柱を立てたピット列がめぐる。柱の直径は10～20cmで、内側へ70～80°の傾きをもつ。床面精査では溝状の掘り方は認められず、柱の輪郭が直接見つかった。断ち割り時の断面観察でも特に掘り方となる溝を掘らずに、全体に約15cmの厚みで粘土を貼っているように見受けられる。

ピット列は玄門手前で直角に折れ、両袖式の様を呈する。ピット列上に遺物が乗ることはなく、小柱を骨組みとした壁体より内側が実際の玄室のスペースとなる。玄室床面の内法は全長5.4m、幅は奥壁側で2.1m、玄門側で2.3m、主軸の方位はＮ６°Ｗである。

床面はフラットで、奥壁と玄門で15cmの比高差しかない。玄門から前庭部にかけては緩やかに傾斜がつき、裾部にいたる。

玄門　主柱とそれに取りつくピット列までを玄門とするならば、幅1.3m、奥行き0.5mの規模となる。２本の主柱は幅10cm、深さ10cmの溝で結ばれている。この溝が玄室プランの割り付けを意味するのか、板で閉塞をするためのものなのかは不明である。

前庭部　主体部の掘り方は玄門を境に一段狭まり、前庭部にいたる。前庭部に明らかな施設はみられないが、両側壁側の床面にわずかな土質の変化（破線部分）が認められるため、掘り方の側壁が剝き出しになっていたとは限らない。

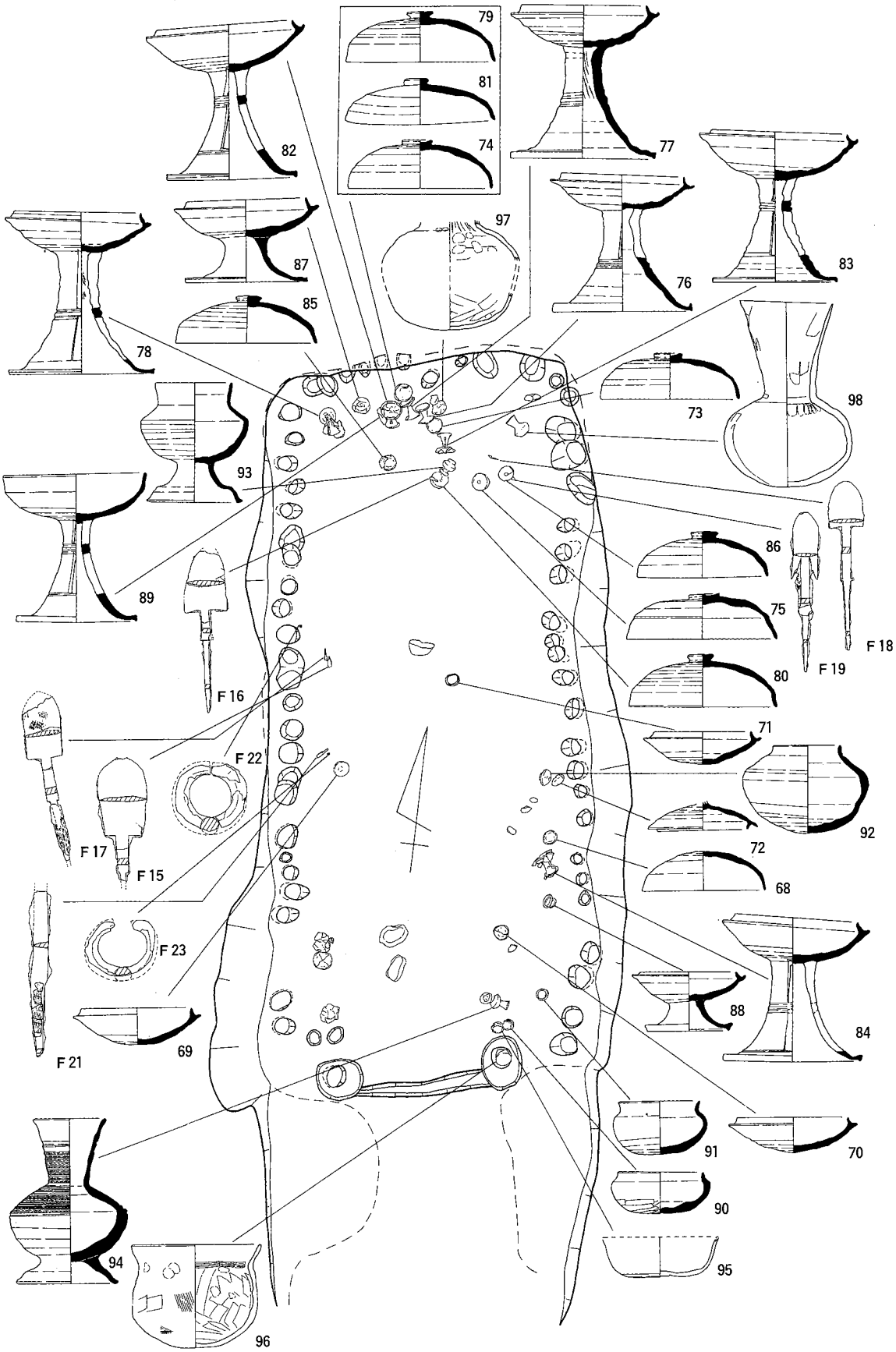
埋土　埋土は盛土と同じようなブロック混じりの粘質土で、天井部の崩落によって封土が落ち込んだものであろう。短軸側の断面ではその落ち込みに伴う土層のたわみ込みが観察できる。長軸側でも全体に波打つような土層の重なりがみられる。

副葬品　玄室の床面から須恵器・土師器・鉄鏃・刀子・耳環が出土している。遺物は奥壁付近と玄室中央部、東主柱付近のまとまりに大きく分かれる。

奥壁　奥壁付近の土器は須恵器の有蓋高杯(73～83・85～87)・無蓋高杯(89)・台付き短頸壺(93)、土師器の壺(97)・長頸壺(98)があり、背の高い器種を意識的に選んでいるように見える。この他、玄室南半部から出土した高杯(84)も土器としては奥壁のグループに入るべきものである。有蓋高杯は７セット以上の個体があるが、蓋と身を合わせた状態のものはなかった。ただ73と76、80と83はセットの可能性がある。また奥壁の中央付近で仰向けに重なっている高杯の蓋３個体(79・81・74)も77・82・87とセットの可能性がある。18号墳出土土器の中では最も古い時期を示している。土器の他には鉄鏃３点(Ｆ16・Ｆ18・Ｆ19)が出土している。

玄室中央　玄室中央部の土器は須恵器の蓋杯(68～72)・有蓋高杯(86)・短頸壺(92)がある。このうち杯身(69)は西側壁寄り、杯身(71)はほぼ中央にあり、それ以外は東側壁寄りから出土している。69の周辺には鉄鏃(Ｆ15・Ｆ17)、刀子(Ｆ21)、耳環(Ｆ22・Ｆ23)もあり、遺体の存在を窺わせる。

東主柱　東主柱付近の土器は須恵器坩(90・91)・長頸壺(94)、土師器杯(95)・甕(96)がある。このうち甕(96)は柱穴に落ち込んでおり、柱にもたれさせていたのかもしれない。土器群の中に須恵器の杯類はなく、18号墳の中では最も新しい時期のグループである。



第43図　18号墳副葬品の出土状況

出土遺物（第44～48図）

玄室の床面から出土した須恵器・土師器・鉄鏃・刀子・耳環と、主体部埋土・周溝から出土した須恵器がある。

須恵器（68～94・99～104）

玄室内から出土した蓋杯(68～72)・有蓋高杯(73～88)・無蓋高杯(89)・坩(90･91)・短頸壺(92)・台付き短頸壺(93)・長頸壺(94)と、玄室内の埋土最上層から出土した甕の口縁部(99)、周溝から出土した杯(100)・椀(101)・高杯脚部(102)・壺脚部(103)・長頸壺(104)がある。

蓋杯　杯蓋(68)は口径12.3cm、杯身(69～71)は口径10～11.5cmで、２・９号墳と同様の大きさである。69・71がやや軟質である。72は宝珠ツマミをもつ蓋で、口径9.1cmである。これらは比較的近接して出土している。72については７世紀前半ないし第２四半期と考えられる。

高杯　有蓋高杯(73～88)と無蓋高杯(89)のうち84と88以外は奥壁付近からの出土である。76は上段に透かしの痕跡が二方向にあり、77は透かしのないタイプである。78は残存状況がよくないが、杯部底面の刻み目より二段の三方向の長方形透かしをもっていたと復元できる。82～84は二段の二方向の長方形透かしである。蓋は口径14～15.5cm、高杯は口径12.5～14cm、器高14～16.5cmと大型であるが透かしなどから考えて古くとも７世紀初めの時期と考えられる。87と88は短脚のタイプであり、器高・立ち上がりの高さなどからみて88は時期的に下るものである。口径は87が11.9cm、88が9.6cmである。無蓋高杯は89の１点のみで、二段の二方向の長方形透かしがある。口径14.3cm、器高15.2cmで、９号墳出土の三方向の長方形透かしをもつ18よりやや口径が小さい。焼成は74・76・79・84・85・88・89がやや不良で、77・78・81・87は不良である。

壺　坩(90・91)のうち、90は底面に手持ちヘラ削りを施している。91の底面の調整は回転ヘラ削りである。

92は短く直立する口縁部をもつ短頸壺で、底面を回転ヘラ削りで仕上げる。台付き短頸壺(93)は口縁部がやや長く立ち上がり、段をもつ脚部が取り付く。体部下半の調整は回転ヘラ削りである。

長頸壺(94)は頸部と肩部に２条ずつの沈線をめぐらし、その間にカキ目を施す。脚部は低く、段も退化している。透かしはもたない。口径7.0cm、器高16.8cmである。

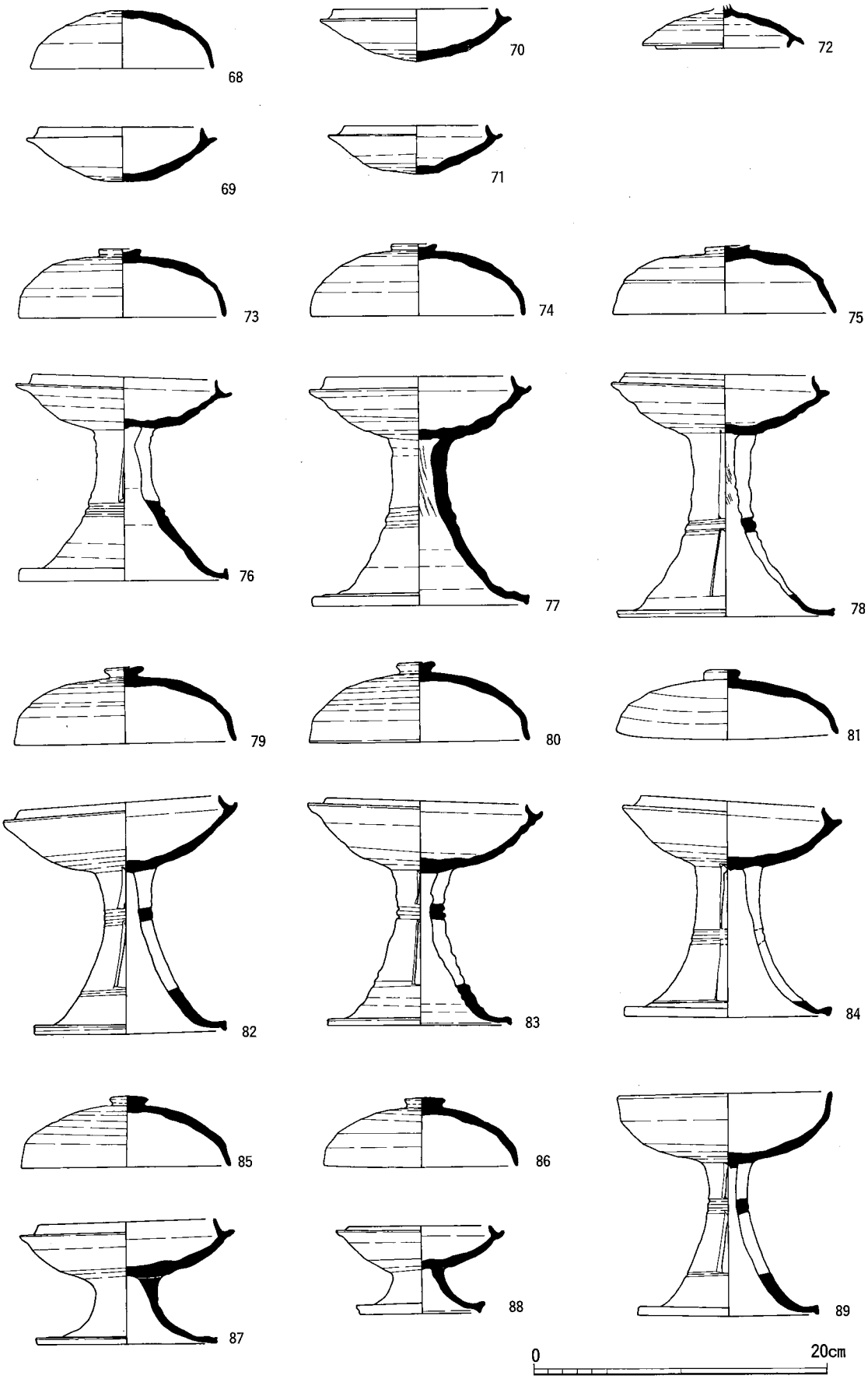
周溝　周溝から出土した須恵器のうち、杯(100)は７世紀中葉に下るものである。椀(101)の底部は雑なヘラ削りもしくはヘラ切り不調整である。壺脚部(103)には円形透かしが６箇所ある。

土師器（95～98）

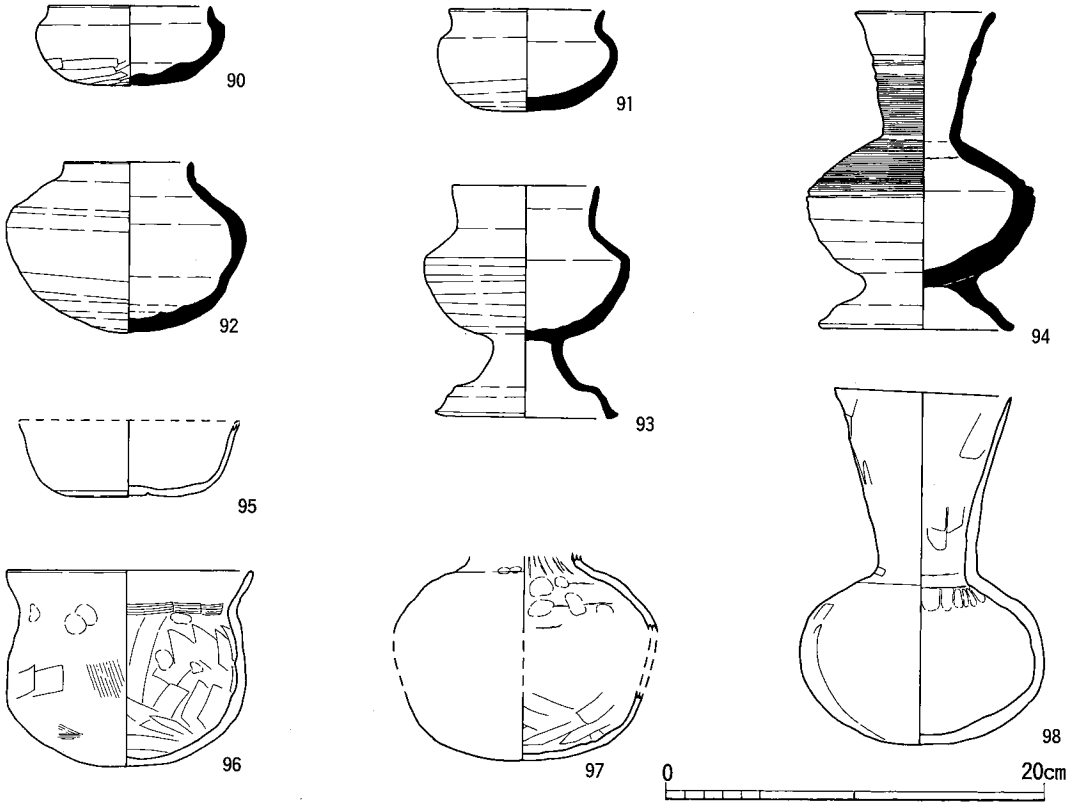
玄室内から出土した杯(95)、甕(96)、壺胴部(97)、長頸壺(98)がある。

杯　杯(95)は器壁の磨滅が著しく調整は不明である。極めて焼成不良な須恵器の可能性もある。

甕　甕(96)の器壁も磨滅が著しく、外面は部分的に縦方向のハケ目がみられ、内面はヘラ削りまたは板ナデで一部に指痕がみられ、頸部には横方向のハケ目がみられる。

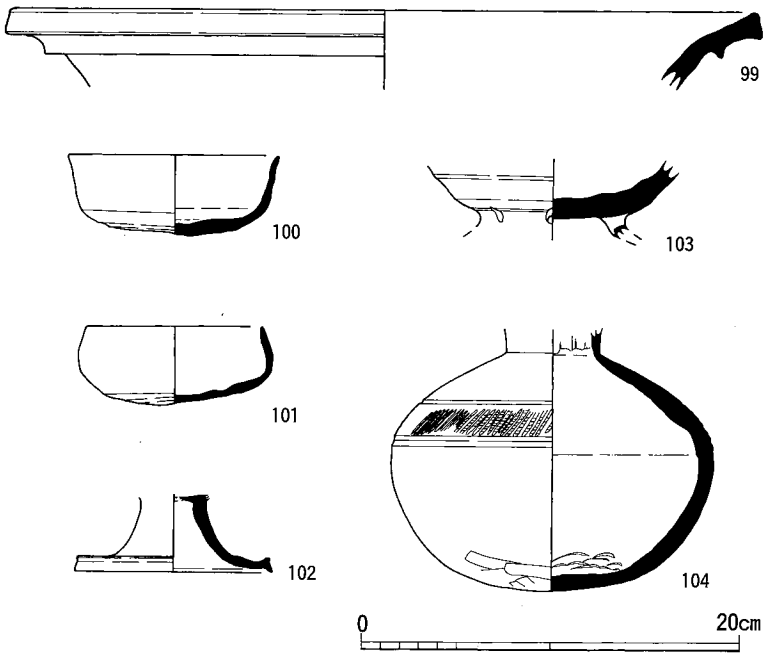


第44図　18号墳出土土器（１）

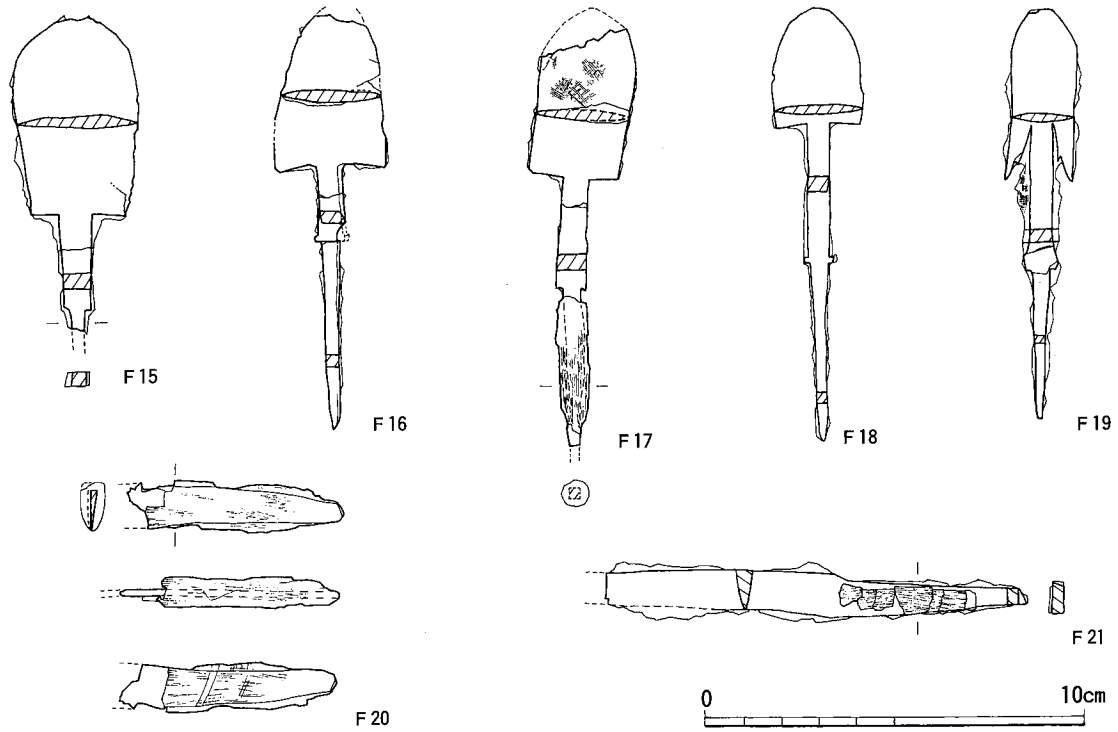


第45図　18号墳出土土器（２）

壺　　壺胴部(97)、長頸壺(98)もやはり器壁の残りが非常に悪い。97の内面の下半は指ナデか板ナデ、上半には粘土紐の継ぎ目に指痕がみられる。98は直線的な長い頸部に扁球形の体部をもつ。口径9.4cm、器高18.7cmである。



第46図　18号墳出土土器（３）



第47図　18号墳出土鉄鏃・刀子

鉄鏃（Ｆ15～Ｆ19）

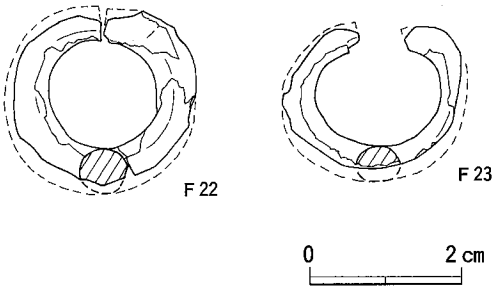
５点は全て短頸鏃である。Ｆ15～Ｆ18は鏃身が幅の広い柳葉式で、Ｆ18以外は浅い逆刺をもつ。断面の厚みは薄く、平造りである。Ｆ15は特に切先が幅広く、丸みを帯びている。また茎部の先端が欠けている。Ｆ16は切先が欠けている。箆被が比較的短く、関部の端が棘状に尖る。Ｆ17は切先と茎部の先端が欠けている。また鏃身と頸部が歪んでしまっている。鏃身には布の断片が、茎部には矢柄の木質が付着している。Ｆ18は完形で、全長11.5cmである。頸部には棘箆被をもつ。Ｆ19も完形で、全長10.9cmである。鏃身は深い逆刺をもつ柳葉式で、重抉をもつ。断面は両丸造りである。箆被付近に布の断片が付着している。

刀子（Ｆ20・Ｆ21）

Ｆ20は茎部から刀身にかけての破片で、刀身の大半が欠けている。明瞭な関は認められず、茎部と刃部の境ははっきりしない。茎部には柄の木質が残っており、柄木の一部は刃部にまで及ぶ。Ｆ21も茎部から刀身にかけての破片で、切先が欠けている。背部側のみの片関造りで、関は斜めにつく。刃部側は内側に弯曲している。茎部には柄の木質が残っている。

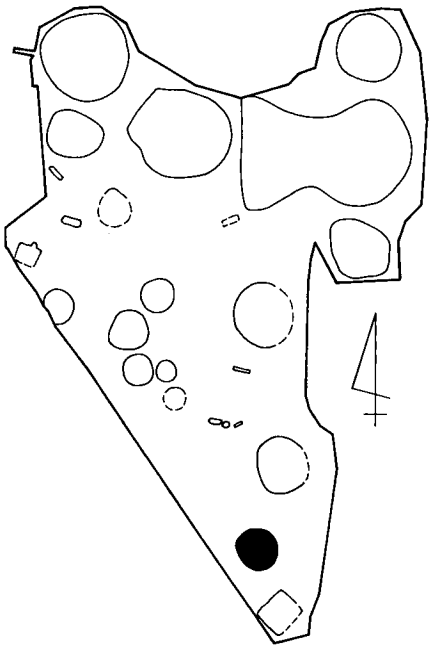
耳環（Ｆ22・Ｆ23）

２点とも外側の箔を完全に失い、芯の大半も腐って内側の箔だけが残っている。Ｆ22は直径2.6cm前後の円形に復元でき、Ｆ23も同程度の大きさとみられる。



第48図　18号墳出土耳環

12. 西山19号墳



立地

19号墳はＢ－７・８区に位置する。中腹の緩斜面に立地し、北側15mに18号墳、南側10mに竪穴住居（ＳＨ02）がある。また当初は道路をはさんだ南西15mに古墳状隆起を認めていたが、掘削の結果自然地形であると分かった。その付近から南側は再び急斜面となり、遺跡の南限を示す。

18号墳と同じく奈良～平安時代の溝ＳＤ03と宅地造成に伴う道路によって墳丘の東裾部が削られている。

墳丘・周溝（第49図）

墳形　墳丘は東側が削られている上に南半部も大きく削平されて、段がついたようになっている。また南西裾部も改変を受けている。そのため墳頂部が北へ片寄ったようになってしまっているが、本来のものではない。現状でおおよそ直径８ｍの円墳であるが、主体部の位置からしてさらに大きかった可能性もある。現状での墳丘最高点の標高は181.4m、西周溝底からの高さはおよそ1.3mである。

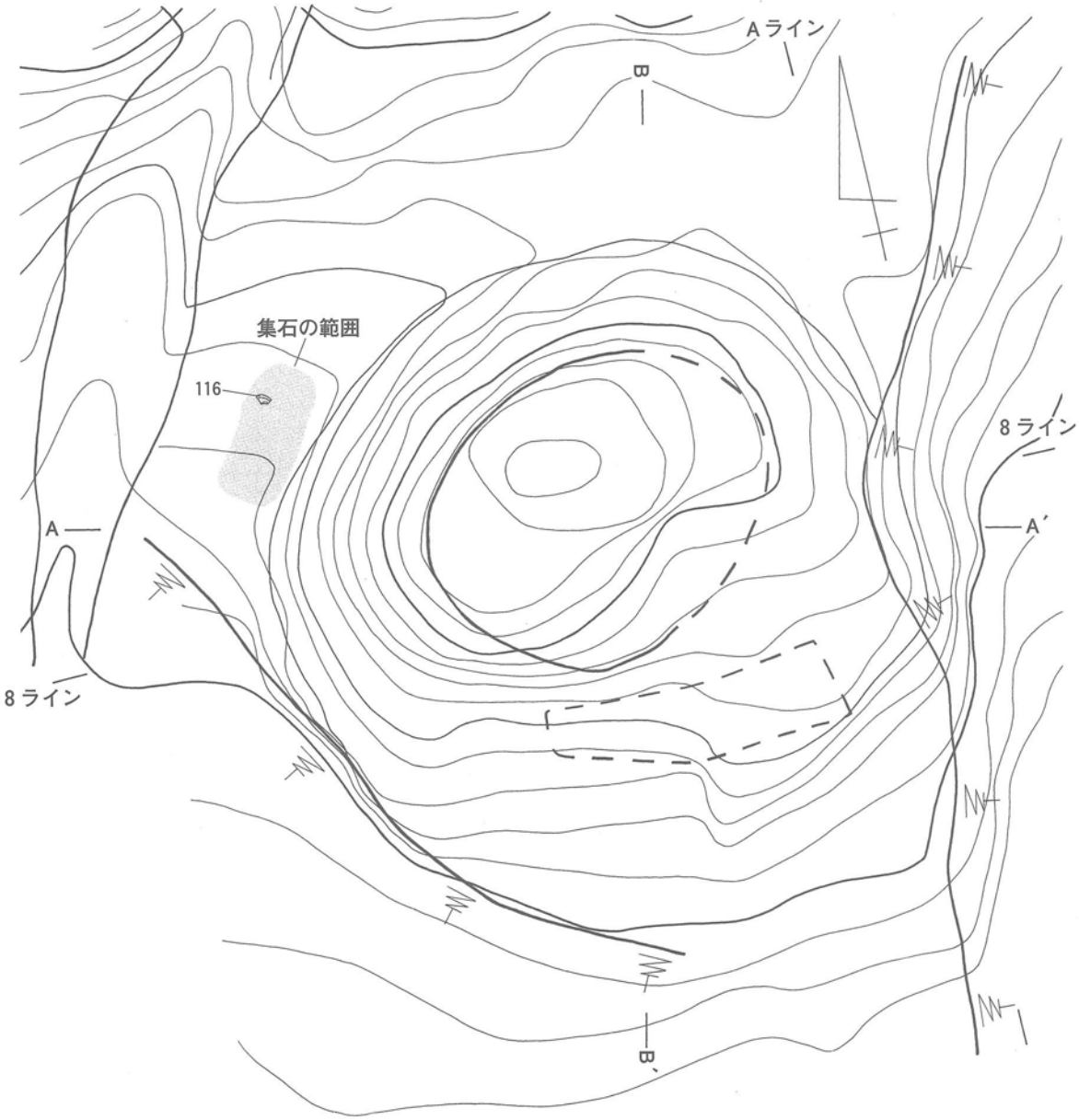
周溝　北側から西側にかけて周溝の痕跡が残っている。西側には拳大の礫の集積があり、須恵器甕(116)も混じって出土した。墳丘との関係は不明である。さらに西外側には18号墳の裾部から続く溝状遺構があり、当初はこれも別の周溝になるかと考えたが、古墳に伴うものではなかった。

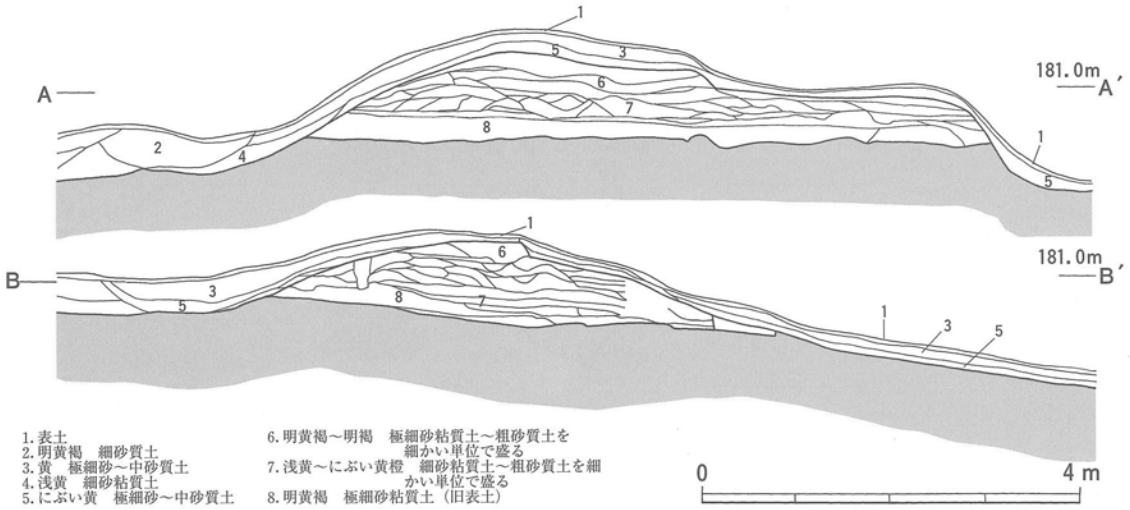
盛土　墳丘は北から南へ緩く傾斜する比較的平坦な面上にあり、基底面に旧表土層を残したまま周囲を削り込んで相対的に高くし、その上に粘質土と砂質土が混在した細かい単位の盛土で築いている。主体部は盛土の削平された部分で見つかったため、盛土と主体部の関係は不明である。

主体部（第50～52図）

大きな削平を受けた墳丘の南寄りに、主体部の下部が辛うじて残存していた。見つかったのはこの１基のみだが、本来は複数だった可能性もある。

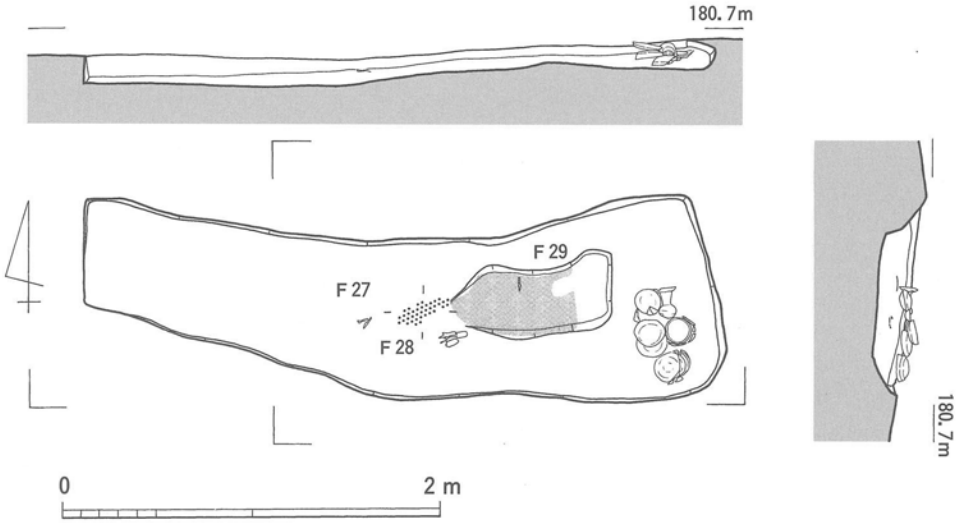
主体部は木棺直葬で、主軸を等高線と平行方向にとる。掘り方は削平のために歪な形になってしまっているが、本来は長方形で現状での全長3.4m、幅1.1m、検出面からの深さ10cmである。全体に東側の残りがよく、掘り方の東端から約50cm内側に棺底の落ち込みがある。棺底が残っているのは長さ1.2m、幅0.4mの範囲で、それより西側ははっきりしていない。残存する棺底の中央には赤色顔料が広がっており、頭位は東であったとみられる。残りが悪いために主軸が不明確だが、おおよそ東西方向に向いていて、方位はおよそＮ85°Ｅである。



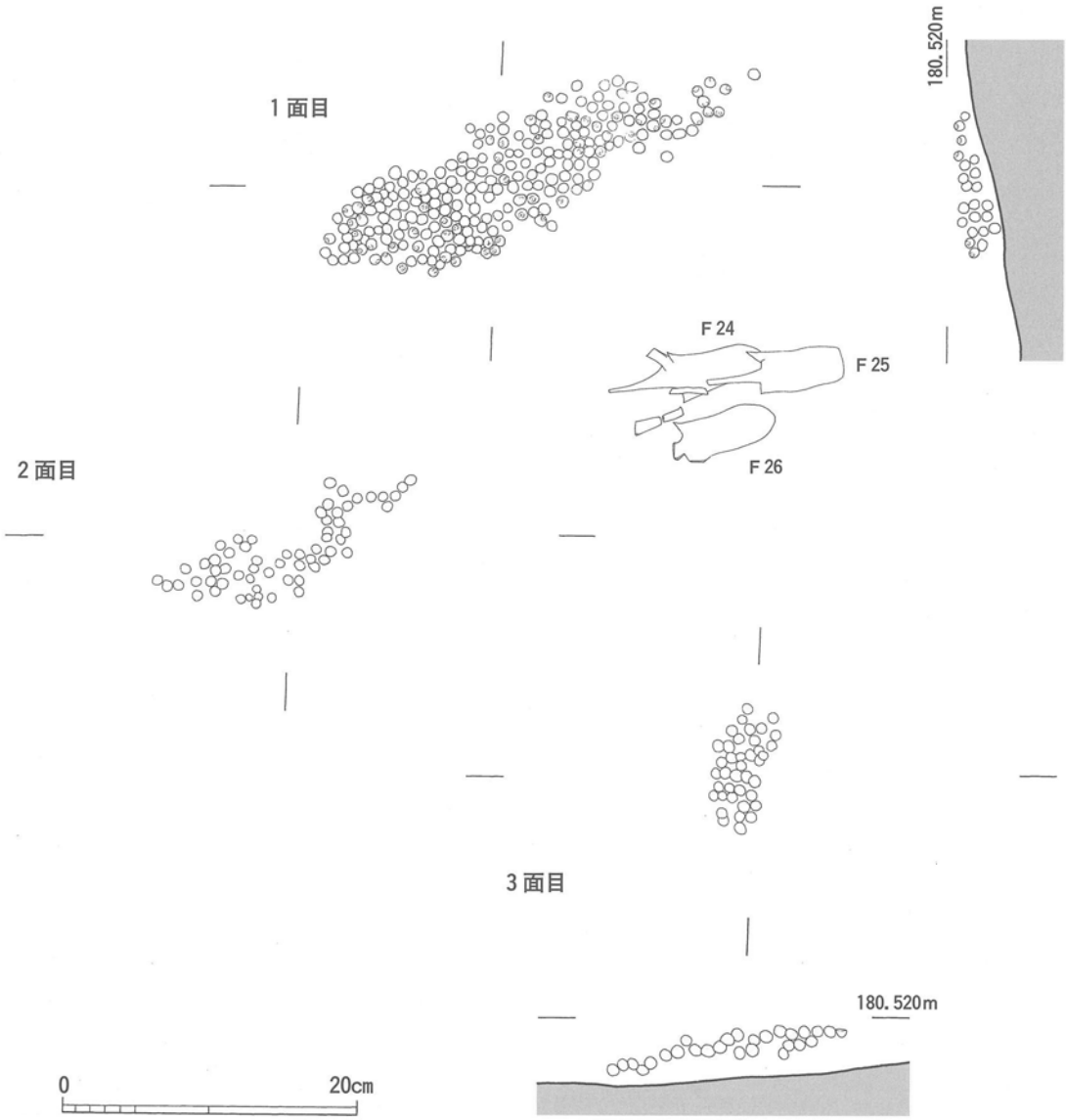


1. 表土
2. 明黄褐　細砂質土
3. 黄　極細砂～中砂質土
4. 浅黄　細砂粘質土
5. にぶい黄　極細砂～中砂質土
6. 明黄褐～明褐　極細砂粘質土～粗砂質土を細かい単位で盛る
7. 浅黄～にぶい黄橙　細砂粘質土～粗砂質土を細かい単位で盛る
8. 明黄褐　極細砂粘質土（旧表土）

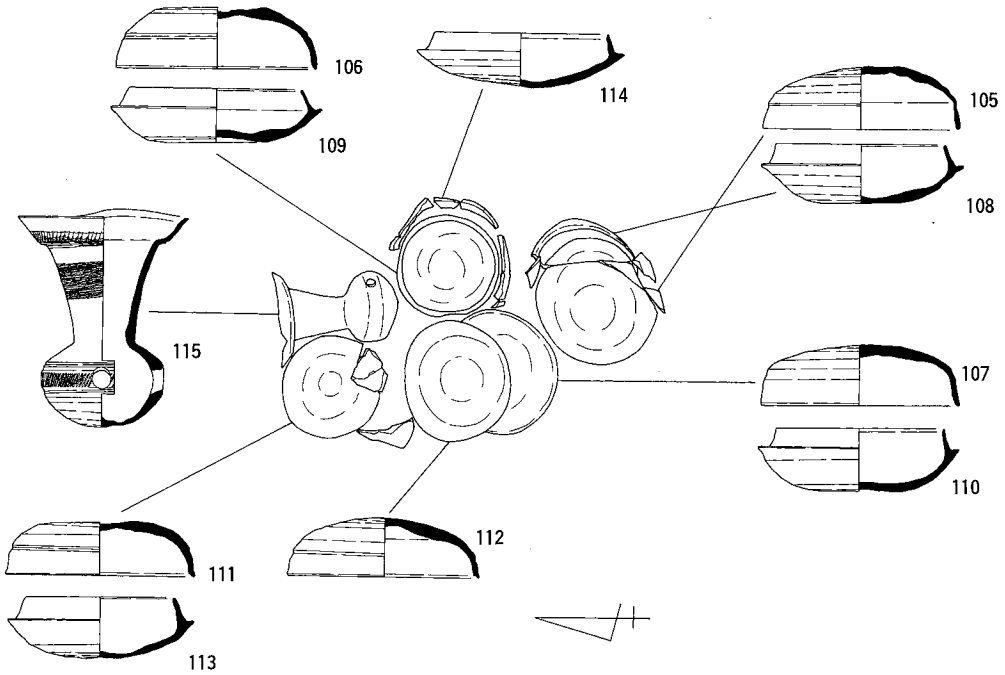
第49図　19号墳墳丘測量図



第50図　19号墳主体部



第51図　19号墳副葬品の出土状況（鉄鏃・土玉）



第52図　19号墳副葬品の出土状況（土器）

副葬品　棺内に土玉と鉄鏃・刀子、東小口側の棺外に須恵器・土師器を副葬していた。

棺内　土玉（Ｊ２～Ｊ78）は赤色顔料の西隣にあり、この辺りを被葬者の胸部とすると、鉄鏃（Ｆ24～Ｆ26）は左腕付近に置かれていたことになる。また刀子（Ｆ27・Ｆ28）が土玉のさらに西側の腹部付近から、刀子（Ｆ29）が赤色顔料の中の頭部近辺から出土した。

土玉（Ｊ２～Ｊ78）は１箇所にうず高くかたまっており、出土状況の図も３層に分けて描いている。取り上げ時の観察では土玉の孔が連なっている部分もあり、当初は糸で一連につないであったものだろう。

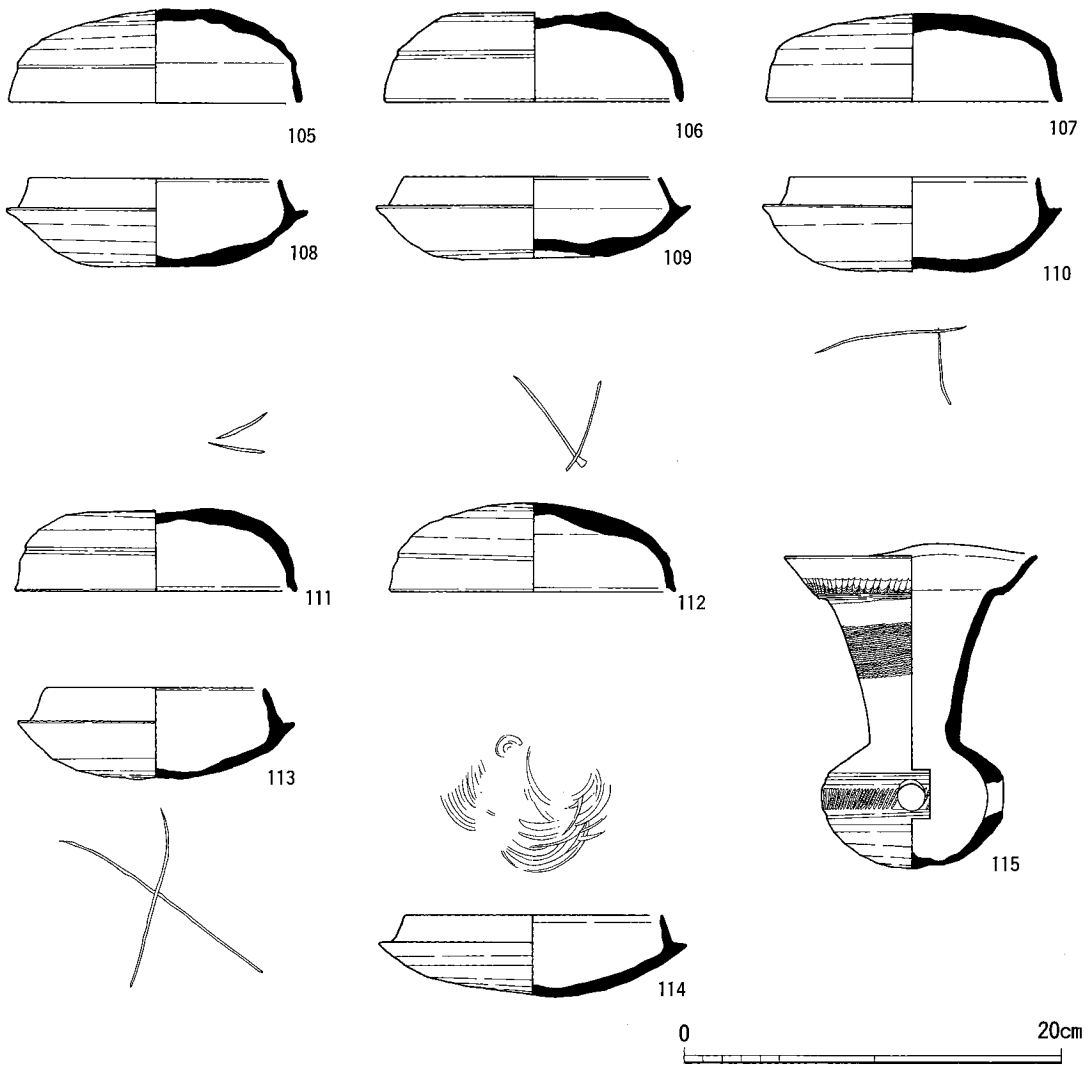
鉄鏃（Ｆ24～Ｆ26）は３点が切先を東に向けて束ねられた状態であった。柄の部分は残っていなかった。

刀子はＦ27・Ｆ28が切先を東に向け、Ｆ29が切先を南に向けた状態で出土した。Ｆ30の破片はＦ24～Ｆ26とＦ27・Ｆ28の周辺から分かれて出土しており、削平の際に動いたものとみられる。

棺外　東小口板の外側に須恵器11点と土師器１点を供献していた。土器は掘り方の東南隅に片寄せてあり、被葬者から向かって左奥に須恵器瑟（115）を横倒しに置く。その右に蓋杯を上から109・106・114の順でいずれも口を上向きに重ね、さらにその右に蓋杯の105と108を組み合わせる。瑟の手前左には蓋杯の111と113、右には107と110のセットを据え、107の上に112を仰向けに載せる。この２組のセットの間に土師器杯があるが、取り上げ後復元できなかった。

出土遺物（第53～58図）

主体部の棺外に供献していた須恵器・土師器、周溝から出土した須恵器、棺内の副葬品である鉄鏃・刀子・土玉がある。ただし棺外の土師器の杯は実測不可能であった。



第53図　19号墳出土土器（１）

須恵器（105～116）

主体部の掘り方に供献されていた蓋杯(105～114)・瑯(115)および周溝から出土した甕の口縁部(116)がある。周溝からは他に杯・長頸壺などが出土した。

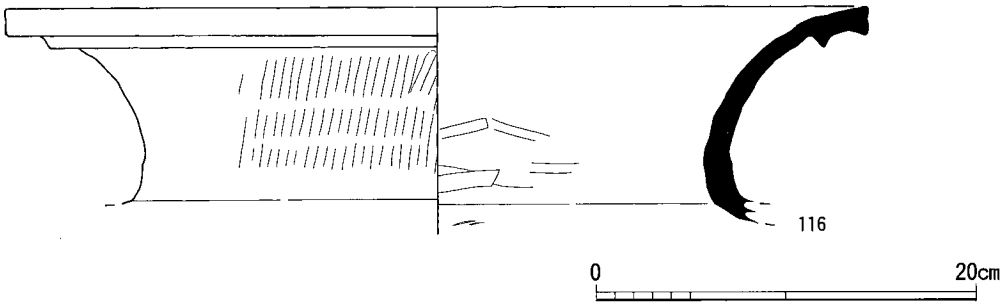
蓋杯　蓋杯(105～114)は蓋の口径15.5cm前後、身の口径13.5cm前後と大ぶりで、立ち上がりも高く、ヘラ削りの範囲も広い。したがって、６世紀中葉のものと思われる。いずれも内面に一方向の仕上げナデを施している。114には同心円の当て具痕が残る。また、109･111～113はいずれも外面にヘラ記号が施されている。

瑯　瑯(115)は口径13.3cm、器高16.6cmで、灰をかぶっており焼成は良好である。口縁部から頸部にかけては櫛描波状文、体部には２条の沈線の間に刻み目を施す。

甕　116は甕の口縁部の破片で、口縁端部の直下に断面三角形の突帯がつく。頸部外面にはタタキ目がなで消されずに残っている。口径45.8cmである。

鉄鏃（Ｆ24～Ｆ26）

３点とも同型式の短頸鏃である。鏃身は深い逆刺をもつ柳葉式で、断面は平造りと両丸造りの中間形態である。Ｆ24は茎部の先端が欠けているが、矢柄の木質が残っている。残



第54図　19号墳出土土器（２）

存長10.5cm、逆刺まで含めた鏃身の長さ6.4cmである。Ｆ25も茎部の先端が欠けているが、矢柄の下に巻いた糸の痕跡が観察できる。Ｆ26は切先と片方の逆刺と箆被の途中から茎部全体を失っている。

刀子（Ｆ27～Ｆ30）

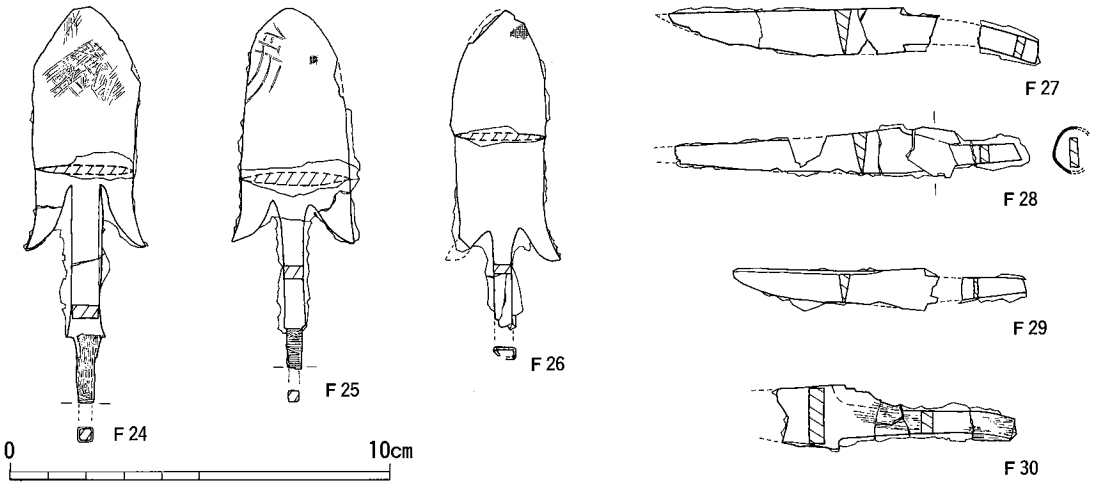
Ｆ27はほぼ全形が判るが、切先と茎部の一部が欠けている。両関造りで、刀身の残存長は6.2cmである。Ｆ28は切先と刀身の一部が欠けている。背部側のみの片関造りで、柄縁金具を装着している。刀身の残存長は6.0cmである。Ｆ29は茎部の一部が欠けている。両関造りで、刀身の残存長は5.2cmである。Ｆ30は茎部から刀身にかけての破片である。両関造りで、茎部には柄の木質が残っている。残存部分の刀身には刃部が認められない。

土玉（Ｊ２～Ｊ78）

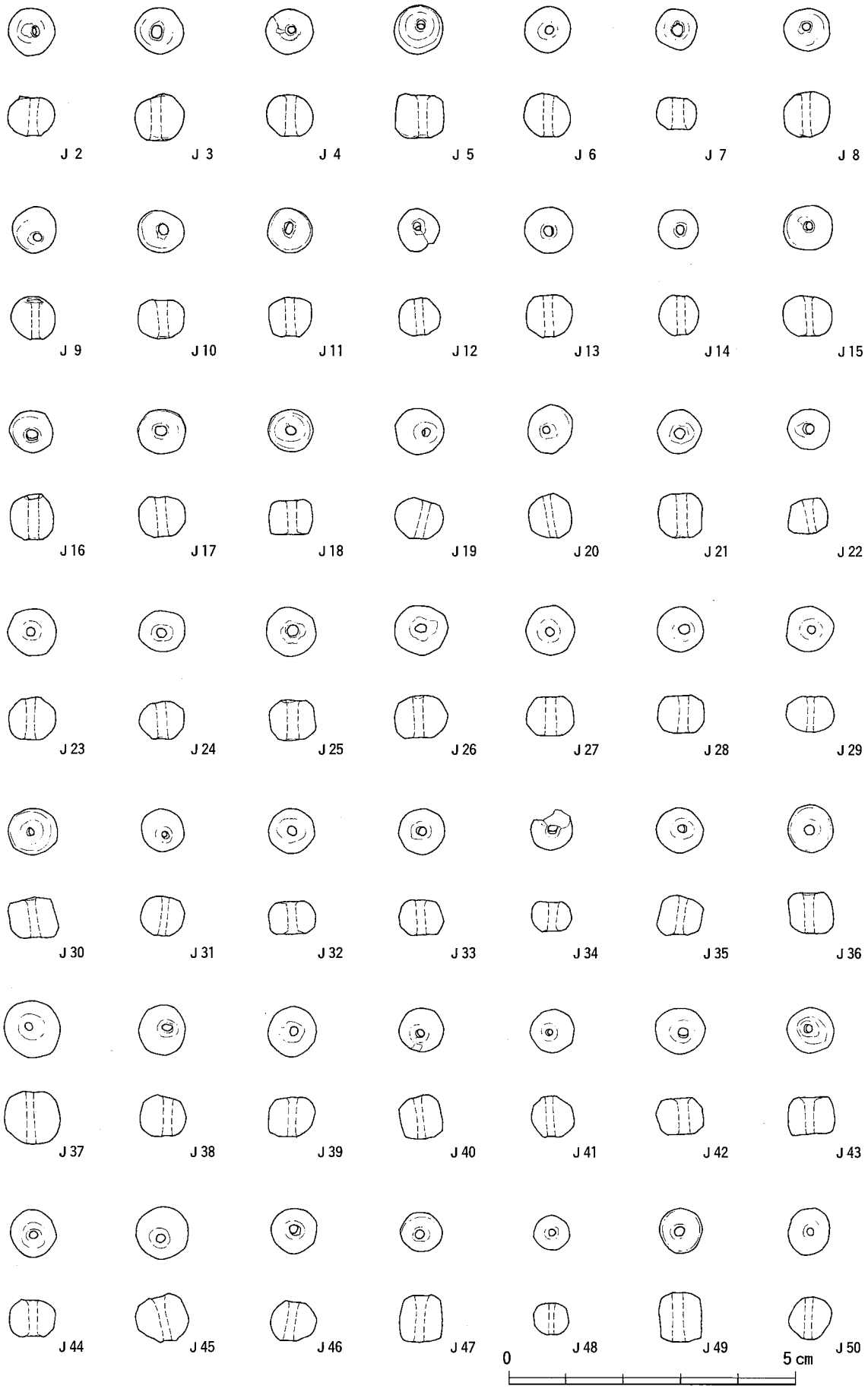
土玉は総数で358点出土しており、そのうちの77点を図化した。

形状　形態は球形に近いもの（写真１）、円筒形のもの（写真２）、その中間的なもの（写真３）などのバリエーションがあり、作業時の癖によって複数の工人が関わっていることが窺える。大きさは最小のＪ48の直径6.1mm、高さ5.5mm、重さ0.2ｇ（写真４）から最大のＪ37の直径10.0mm、高さ9.1mm、重さ0.9ｇ（写真５）までの幅があり、標準サイズは直径75～85mm、高さ60～80mm、重さ0.4～0.6ｇである。

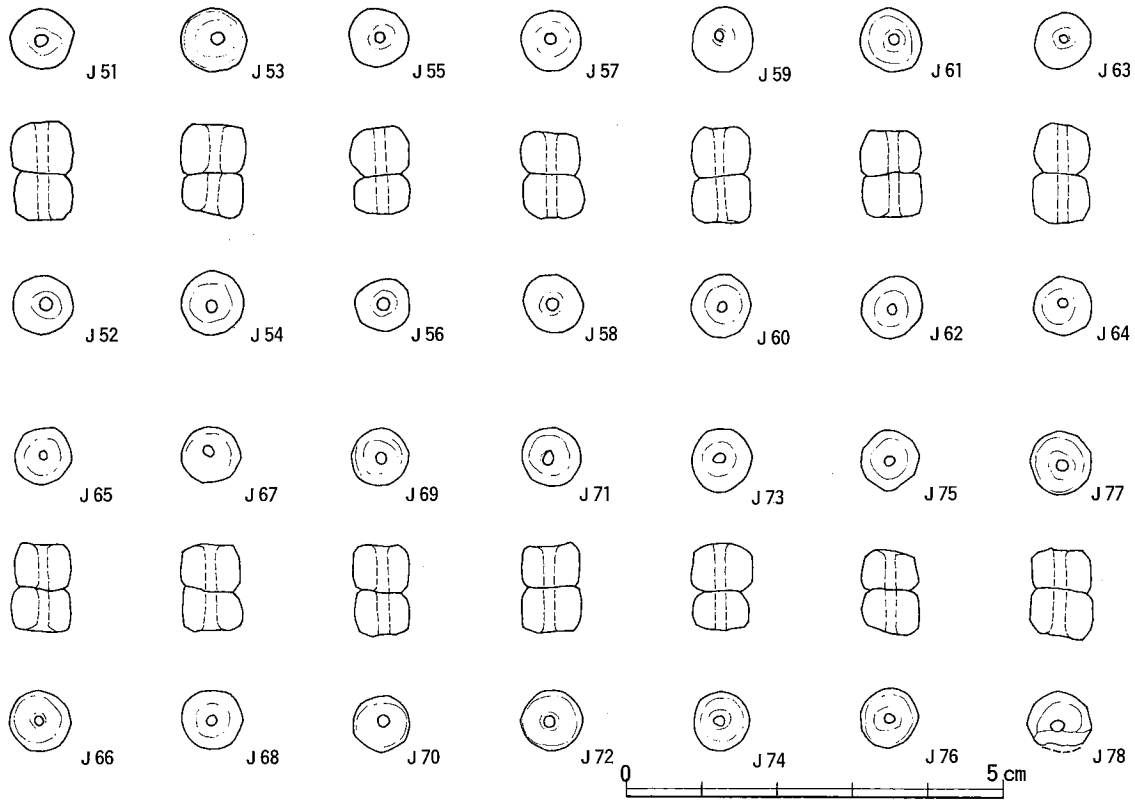
色調　色調は艶のある黒色を呈するものから、ややくすんだ黒灰色までの幅がある。破損品の割れ口を観察すると青灰～紫灰色の精良な胎土が観察できるが、外殻のみ黒色～黒灰色を



第55図　19号墳出土鉄鏃・刀子



第56図　19号墳出土土玉（１）



第57図　19号墳出土土玉（２）

発している。おそらく比較的低温で焼成した後、表面に炭素を吸着させたのであろう。

製作技法　孔の縁がクレーター状に盛り上がっているものがあり(写真６)、玉の成形後に穿孔したのは明らかである。さらに外殻の黒化の範囲が孔の入口付近の内面にまで及んでおり、穿孔後に焼成していることが判る。

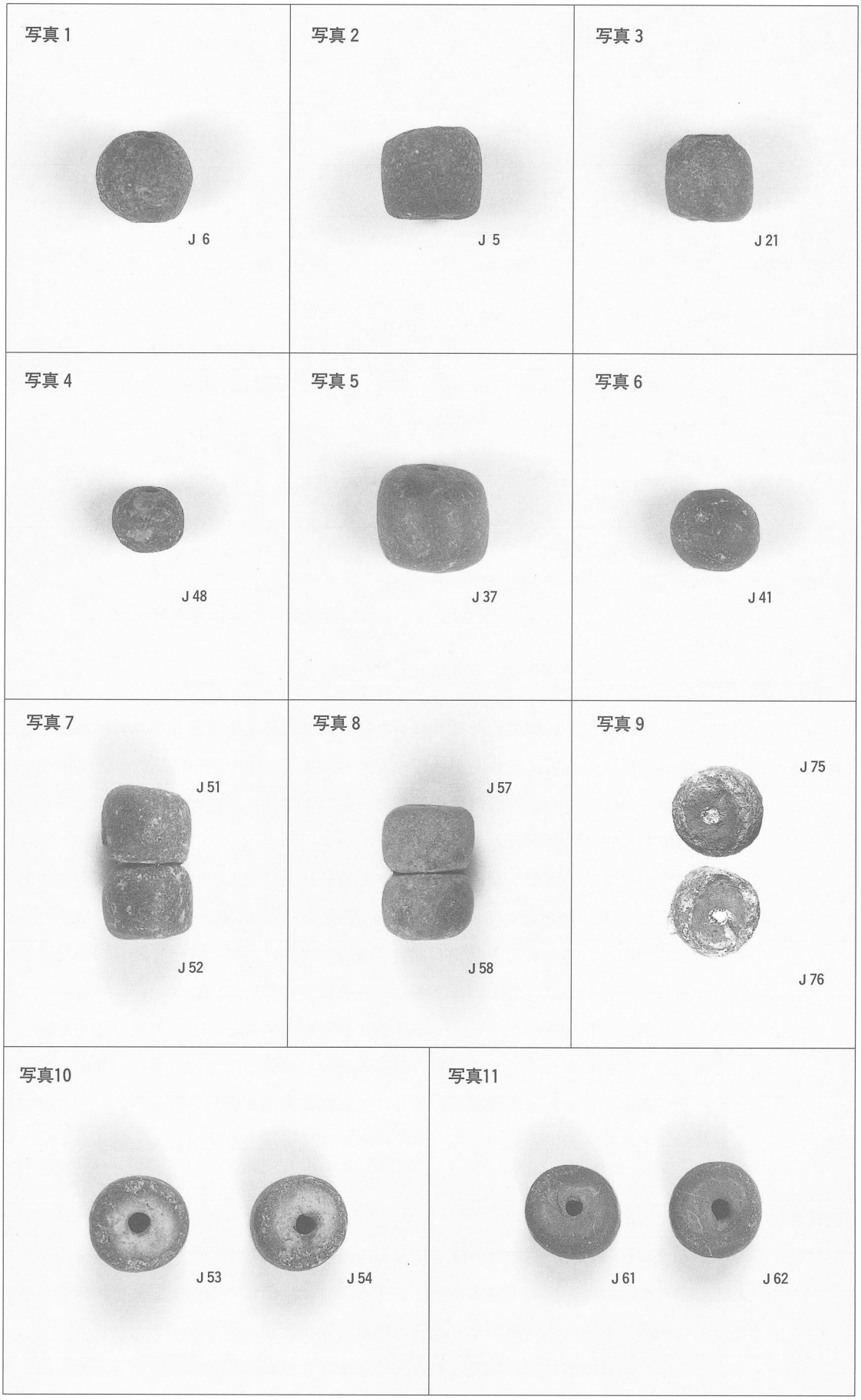
出土品の中に２個の玉がつながっている、あるいは元はひっついていたのが今は外れている痕跡を示すものが14組(Ｊ51～Ｊ78)ある(写真７・８)。このうち完全につながっているものを無理に外してみると接合面は胎土のままで黒化していない(写真９)。また既に外れているものも接合面は色が淡いまま残っている場合が多い(写真10・11)。

以上の事例や観察を手掛かりに土玉の製作工程を復元すると、１）精良な胎土を練って玉を作る。２）孔を穿つ。その時複数の玉を連続的に穿孔したため、偶然つながってしまうものができる。３）低温で焼成し、仕上げに表面に炭素を吸着させる。といった作業内容が想定できる。

分析鑑定

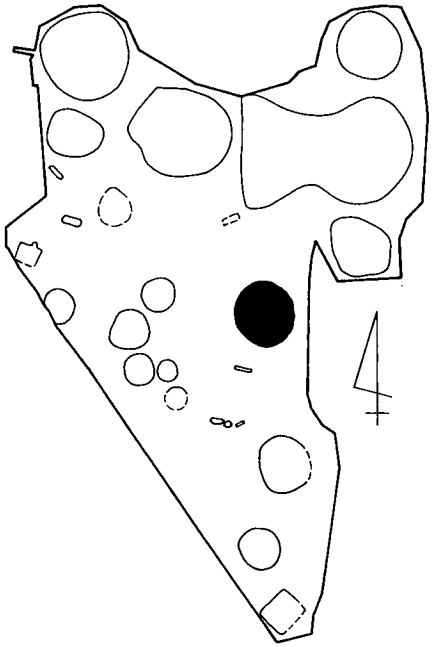
なお３点の鉄鏃(Ｆ24～Ｆ26)の鏃身には布の断片が付着していた。さらに土玉についても孔の中に糸の繊維が残っている可能性が考えられた。そこで奈良国立文化財研究所遺物処理室の佐藤昌憲先生のご協力で、顕微鏡観察・蛍光Ｘ線分析を行った。

その結果、鉄鏃の布には有機成分が残っておらず、繊維の種類は特定できなかった。また土玉の孔に詰まっていた土の中にも、糸の繊維は残っていないことが確かめられた。



第58図　19号墳土玉の細部写真（約２倍）

13. 西山20号墳



立地

20号墳はＡ・Ｂ－２・３区に位置する。斜面の最上部に立地し、北側30mに６号墳、北東側20mに７号墳、南側10mに12号墳がある。

墳丘の東裾部は宅地造成に伴う道路によって削られている。

墳丘・周溝（第59・60図）

墳形　墳丘は全体が大きく改変されてしまっていて、盛土のみならず、墳丘の中央部付近では旧地表面にまで削平が及んでいるようである。ただし南東側では土坑や弥生時代の木棺墓群が遺存していることから、ある程度旧地形を保っているものとみられる。

墳形は不明確ながらも、残存する周溝から直径10m程度の円墳に復原できる。

周溝　北側から西側にかけて周溝の痕跡がわずかに残っており、西側での現状の規模は幅２m、深さ0.5mである。

土坑　墳丘の北西側には鉤形の攪乱坑があり、周溝の続きを辛うじて追うことができる。昭和51年度の確認調査の際に攪乱坑を精査し、周溝の底で炭の詰まった土坑ＳＫ04を検出している。また墳丘の南東側にはＳＫ05、南側にはＳＫ06があり、これらもＳＫ04と同様、周溝の底に掘り込まれたものであったのかもしれない。

ＳＫ04は平面隅丸長方形で、規模は1.05×0.62m、深さ0.15mである。壁面の立ち上がりは短軸方向では垂直に近いが、長軸方向では緩やかである。埋土は炭混じりのシルト層で、下層に真っ黒な炭層が堆積している。底面は熱を受けて赤褐色～黄褐色に固く焼け締まっており、ここで火を焚いた状況を示している。遺物は出土していない。

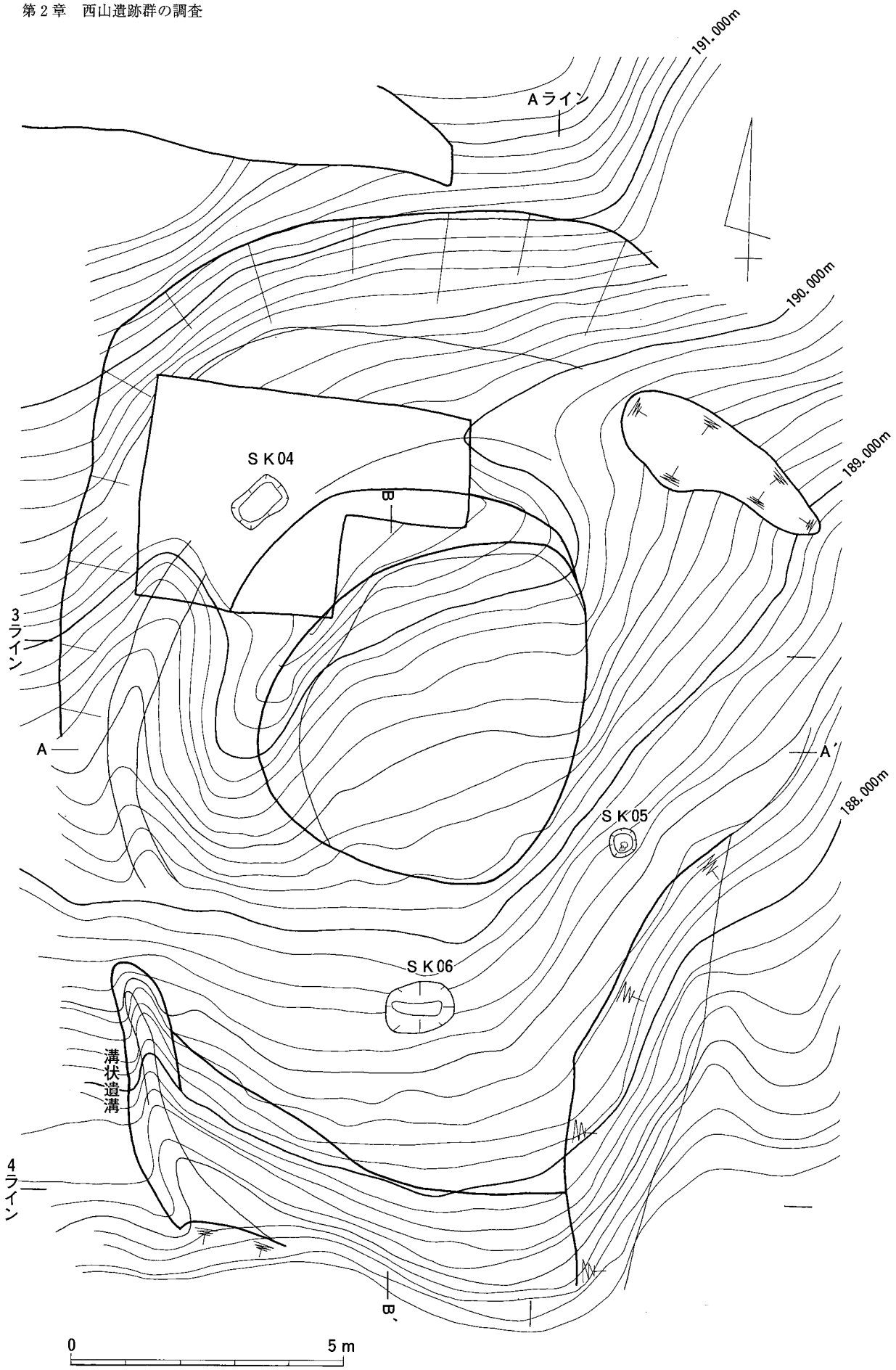
ＳＫ05は平面円形で、規模は直径0.55m、深さ0.22mである。底には須恵器壺（131）を横倒しに置いて、口を土師器の底部（130）で塞ぎ、何かを埋納したもののようである。

ＳＫ06は平面楕円形で、規模は1.25×0.9m、深さ0.25mである。壁面の立ち上がりは緩やかで、肩や底の輪郭ははっきりしない。遺物は出土していない。

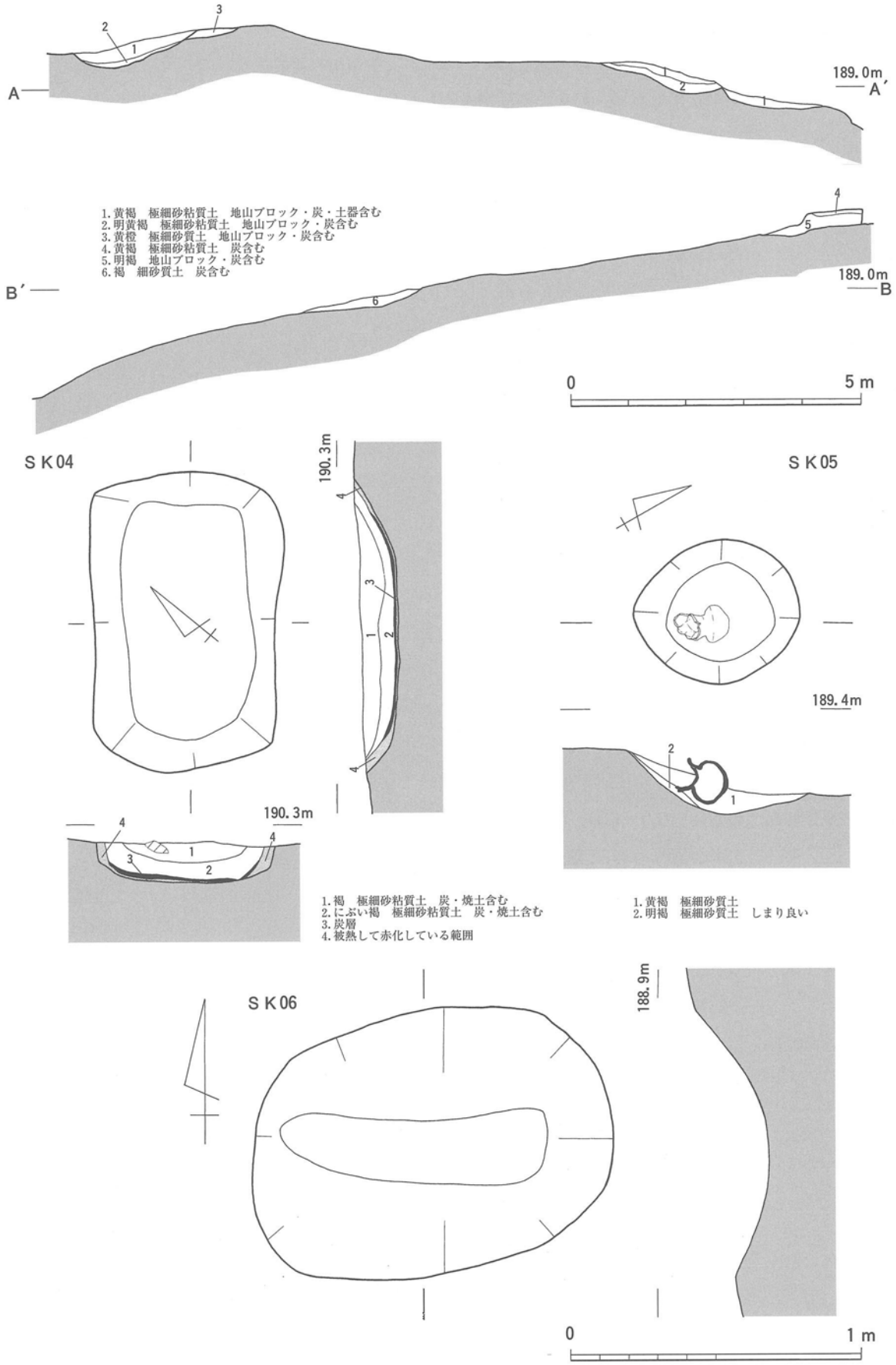
ＳＫ04・06は20号墳に伴うものかどうか不明だが、古墳の周溝を利用して掘り込んだものには違いないだろう。

溝　墳丘の南側に12号墳に向かって落ちるカット面があり、その西端に幅１m弱の南北方向の溝状遺構が掘り込まれている。20号墳との関係は不明だが土器が多数出土しており、実測図を20号墳出土土器（第61図）の中に掲載した。

溝状遺構の西側に当初古墳状隆起を認めていたが、掘削の結果古墳ではないと判断した地点がある。ここから完形品を含む遺物が多数出土しており、周辺の壊された古墳からの流入土が堆積した場所だったとみられる。溝状遺構西側出土土器として第63図に掲載した。



第59図　20号墳墳丘測量図



第60図　20号墳墳丘断面図・周溝内の遺構

主体部

墳丘の盛土がほとんど削られているため、主体部の遺構はまったく残っていない。覆土や周溝からは鉄鏃・刀子の破片が出土しており、壊された主体部の副葬品の一部とみられる。

出土遺物（第61～63図）

確実に遺構に伴う遺物はＳＫ04出土の土器２点だけである。その他に墳丘の覆土、周溝、溝状遺構およびその西側から出土した須恵器・鉄鏃・刀子などがある。

墳丘・周溝出土の遺物（第61・62図）

須恵器（117～129）

蓋杯(117～123)、無蓋高杯の口縁部(124・125)、短頸壺(126)、提瓶の口縁部(127)、壺(128・129)などを図化している。

蓋杯　杯蓋(117)の内面には同心円の当て具痕が残る。119は極めて軟質で脆い。杯身(121・122)の焼成も不良である。

高杯　無蓋高杯(124)は二段の三方向の透かしがあり、125はおそらく透かしを持たないタイプである。

壺　短頸壺(126)は体部上半部にカキ目を施す。

128は台付き長頸壺で、頸部を欠失している。底部には段をもつ脚台が付き、円形の透かしを穿つ。肩部に２条の沈線を施し、下半部にカキ目を施す。129は底部を欠失している。頸部と肩部にカキ目を施し、底面を回転ヘラ削りで仕上げる。

提瓶　127は提瓶の口縁部の破片で、内弯気味に立ち上がる。

土坑ＳＫ04出土の土器（130～131）

土師器底部(130)と須恵器壺(131)が土坑内で組み合わさって出土している。

130は土師器の壺か何かの底部で、131の蓋に転用していた。外面は指ナデ、内面は板ナデで仕上げている。

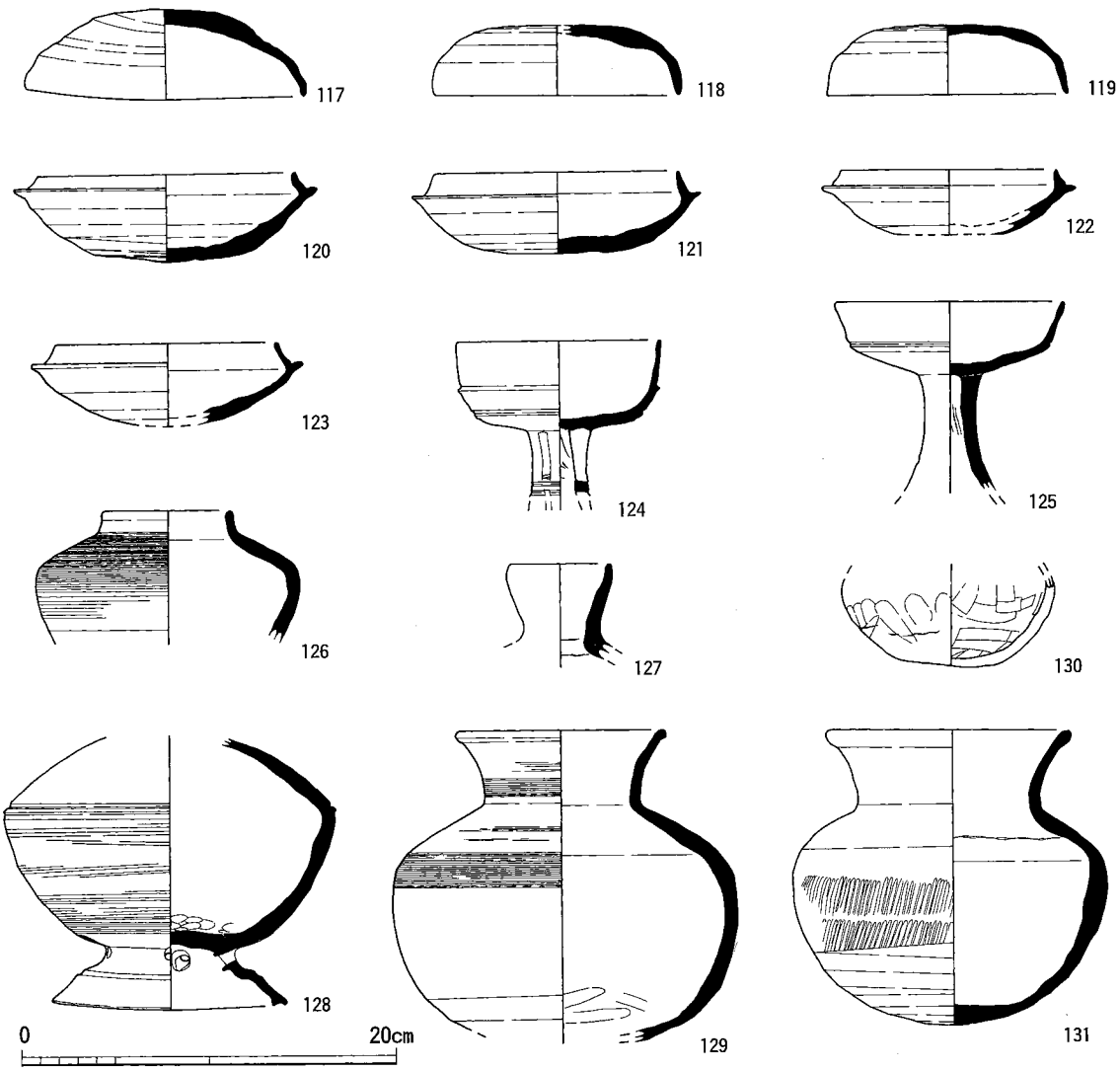
須恵器壺(131)は完形品である。体部外面には平行タタキが残り、口縁端部は丸く収める。口径12.6cm、器高15.9cmである。

鉄鏃（Ｆ31）

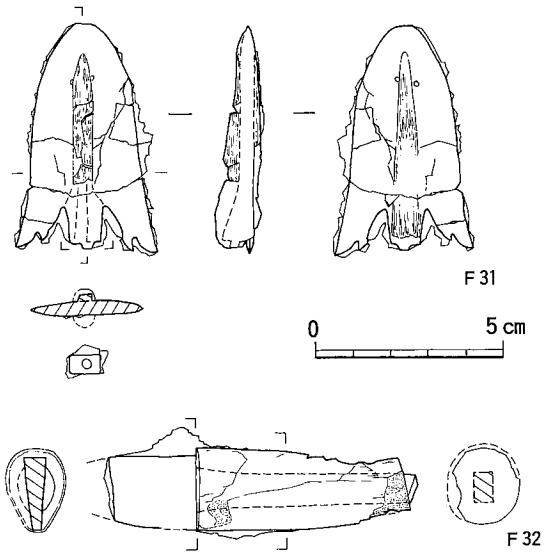
茎部の短い短頸鏃で、茎尻に丸い突起がつく。鏃身は深い逆刺をもつ柳葉式で、重抉をもつ。断面は両丸造りである。全長6.0cmである。両側から挟み込む矢柄に装着するタイプで、鏃身の両面に付着した木質の先端部分に矢柄を固定する孔が２箇所開いている。西山５号墳の埋葬施設２からも同型式の鉄鏃が出土しており、Ｘ線写真で撮影すれば同じような孔が観察できるかもしれない。

刀子（Ｆ32）

茎部から刀身にかけての破片で、刀身の大半は失われている。両関造りで、茎部には鹿角製の柄を装着している。柄は断面扁円形で、髄の部分を刳り抜いて茎を挿入している。刀身の残存部分には刃は付けられていない。



第61図　20号墳出土土器



第62図　20号墳出土鉄鏃・刀子

溝状遺構西側出土の遺物（第63図）

須恵器（132～140）

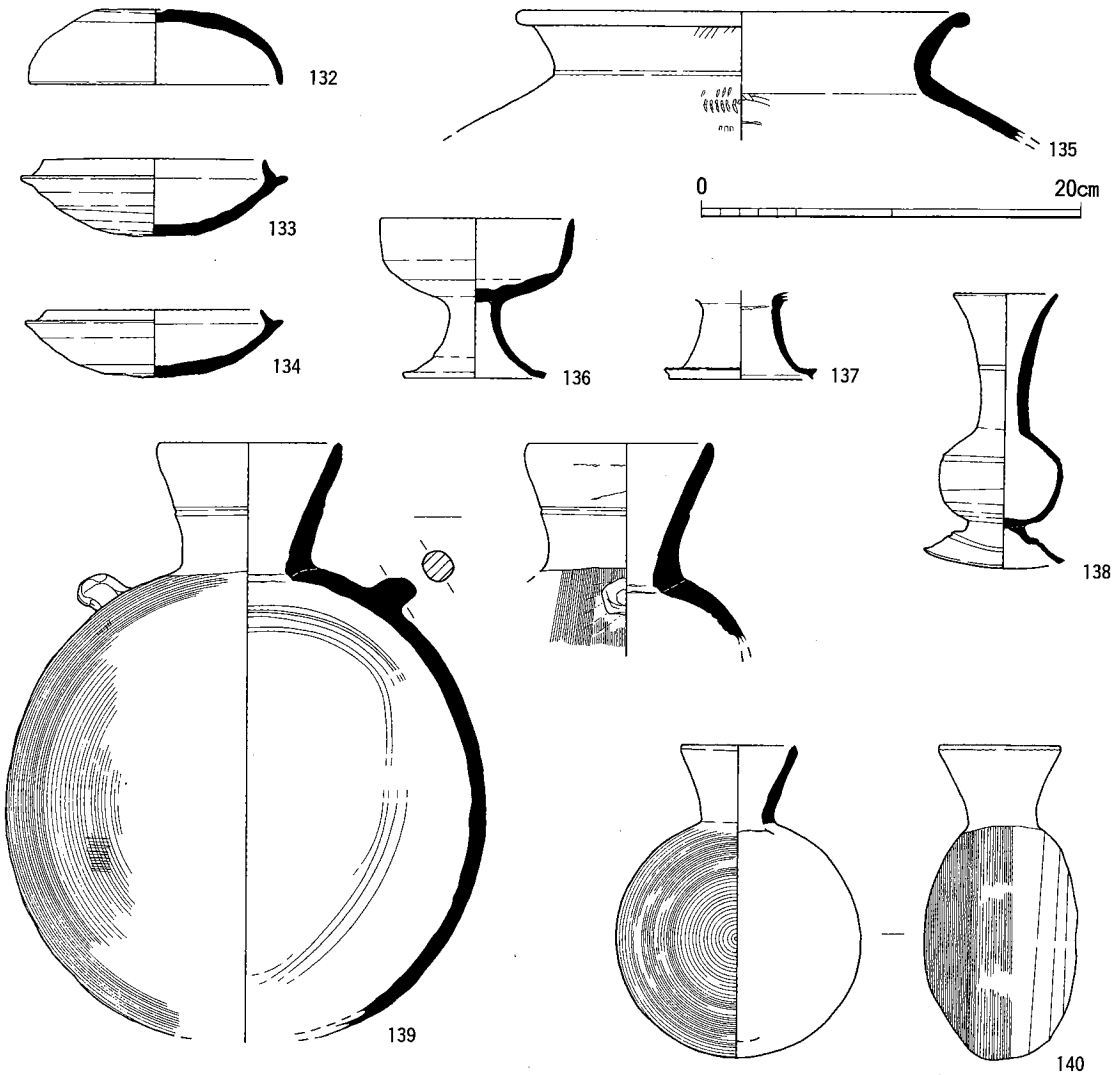
蓋杯(132～134)、甕の口縁部(135)、無蓋高杯(136)、高杯脚部ないし壺の口縁部(137)、台付き長頸壺(138)、提瓶(139・140)などが出土している。136・138・140は近接した場所からほぼ完形で出土した副葬用の小型品である。同じ主体部から流出したものかもしれない。

高杯　無蓋高杯(136)は器高8.5cmの小型品で、杯部が一部欠損している。

壺　台付き長頸壺(138)は器高6.5cmの小型品で、脚部は焼け歪んでいる。脚部は一部欠損している。

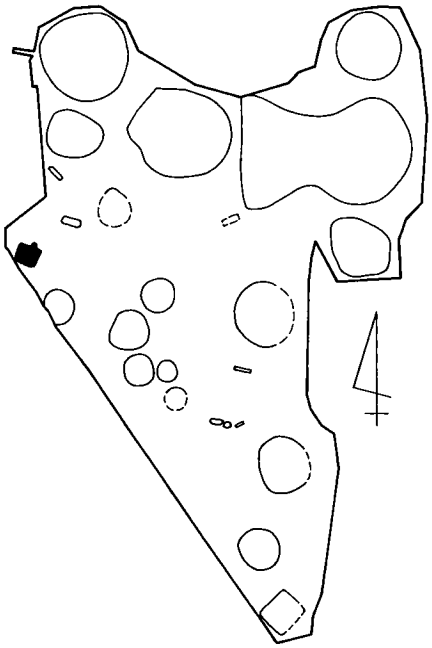
提瓶　139は体部の直径が25cmを超えており、極めて大型品である。

140は体部の直径が約13cmの小型品で、耳部は消失している。大きさはやや異なるが、12号墳の提瓶(35)と同形態である。



第63図　溝状遺構西側出土の土器

14. 竪穴住居１（ＳＨ01）



位置

調査区の北西隅にあたるＦ・Ｇ－２区に位置する。10号墳の北西10ｍにあり、南西隅を宅地造成に伴う道路で切られている。これより西側は谷地形となるので、遺構は立地しない。ＳＨ01は尾根線から６ｍほど下った斜面の肩部近くに立地し、ここからは10～20号墳を見渡すことができる。

形態・規模・構造（第64図）

平面プランの基本は正方形であるが、山側がやや幅広くなっているのと、南辺を流失しているため台形を呈している。規模は東西が4.1～4.4m、南北が現状で3.5m、山側の壁面の立ち上がり0.3mである。

構造は２本柱で、等高線と平行方向に２本の柱穴がある。柱穴は南北間のほぼ中心線に位置し、柱間の距離は3.35m、主軸の方位はＮ26°Ｅである。

カマド　山側の壁面の中央やや東寄りにカマドがある。カマドは粘土を馬蹄形に盛って造り付けたもので、熱を受けて赤化している。カマド部分壁面はなだらかな傾斜となっており（Ｃ－Ｃ’断面)、煙出しの痕跡とみられる。

焚き口の向かって右側からは排水口のような小溝がＹ字形に延びており、途中で屈曲して柱穴に突き当たっている。特に袖部の下には土師器の甕の口縁部～体部の破片（144)を埋め込んで、暗渠状にしている。一方左側の壁際には周壁溝があるが、これはカマドから北西隅までの部分的なものである。

土器の出土状況

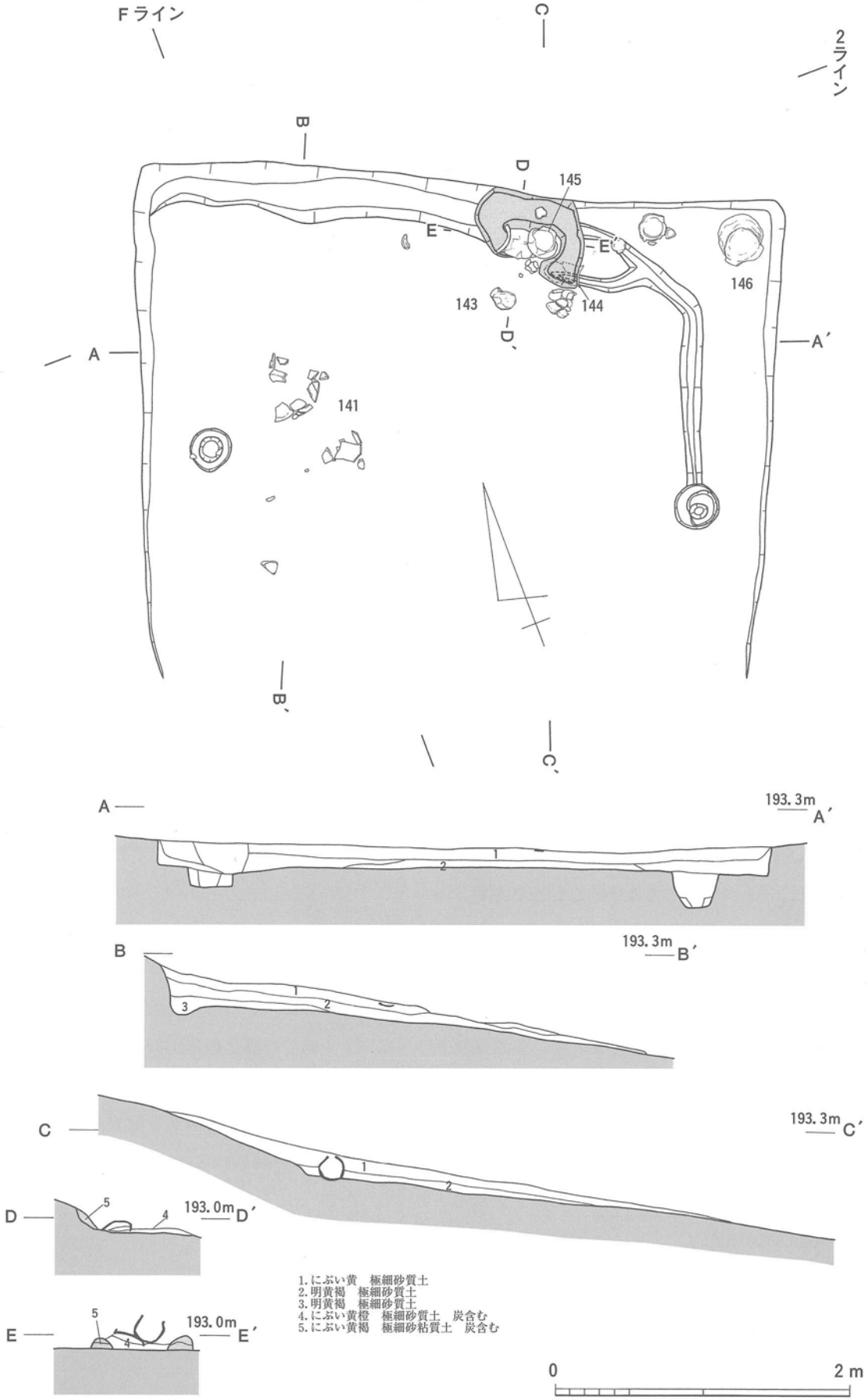
カマドの中には土師器の甕(145)が据えたままの状態であった。甕(145)の下には別の甕の口縁部～体部の破片が置いてあり、安定を図っている（Ｅ－Ｅ’断面)。この甕は状態が悪く、図化できなかった。またカマドの右脇にも土師器の甕２個体が置いたままの状態であった。北東隅にあった甕(146)は口径・器高とも約27cmの大型品である。その左側の小型の甕は状態が悪く、図化できなかった。この他にもカマドの周辺から数個体の土師器が出土しており、甕(143)を図化した。また床面西側の広い範囲から須恵器甕(141)の破片が出土した。

出土遺物（第65図）

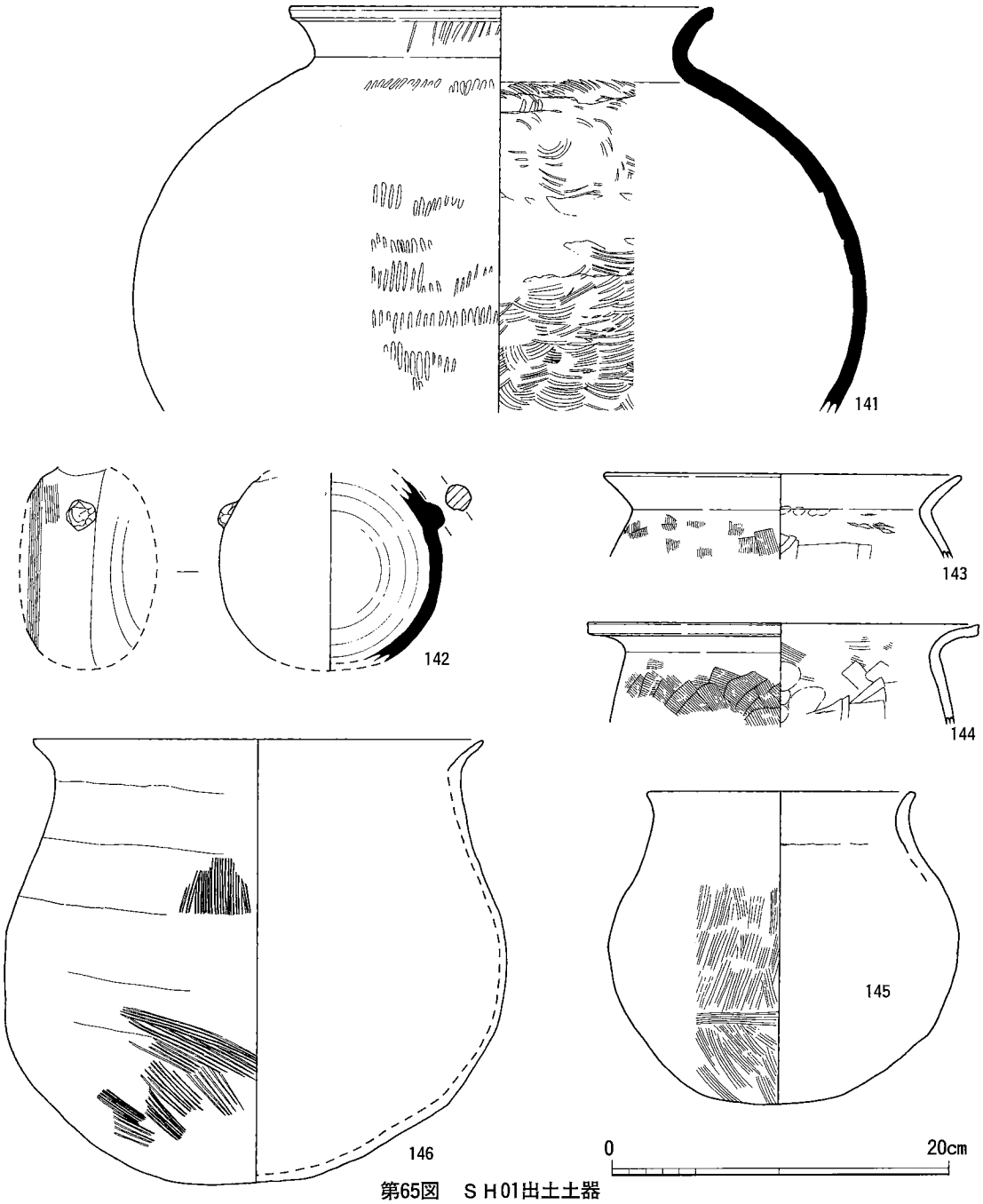
須恵器（141～142）

甕　甕(141)は床面から出土した。口径25cm、胴部最大径44cmの中型品である。頸部は丸く折り曲げ、口縁端部は外側に面をもつ。口縁部外面にタタキの痕跡が残る。

提瓶　提瓶（142)は検出時に採集した。口縁部と体部の大半を失っているが、体部の直径13cm程に復元できる小型品である。耳部は粘土円板の貼り付けになっている。



第64図　竪穴住居跡ＳＨ01



第65図　ＳＨ01出土土器

土師器（143～146）

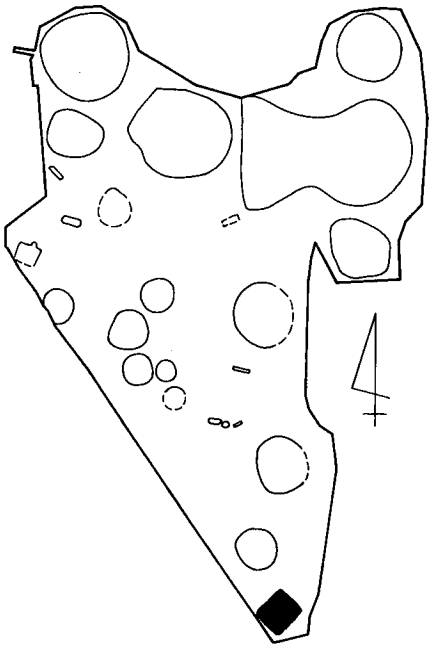
カマド内と床面から出土した甕(143～146)を図化したが、土師器の胎土は非常に脆くなっており図化できなかったものが数点ある。

甕　甕(143・144)は口径21～23cmで、復元できなかったがやや長胴気味の体部をもつ。外面の調整はハケ目で、内面は板ナデである。

甕(145・146)は寸胴型の体部をもち、145は口径15cm、器高19cm、146は口径・器高とも約27cmの大型品である。どちらも土と一体化するほど風化しており、土ごと取り上げるよりなかった。そのため内面の調整は一切不明で、口縁端部についても残りが悪く元の形状は判らない。

15. 竪穴住居２（ＳＨ02）

位置



調査区の南端にあたるＺ・Ａ－９区に位置する。19号墳の南10mにあり、東側を宅地造成で切られている。これより南側は急斜面となるので、遺構は立地しない。ＳＨ02は古墳群全体の裾部にあたるような位置を占めており、ＳＨ01と対照的である。

形態・規模・構造（第66図）

平面プランは正方形だが、南東辺を流失しているためやや寸詰まりに見えている。規模は北東－南西が7.3m、北西－南東が現状で6.7m、北西側の壁面の立ち上がりが0.2mである。

構造は４本柱で、東隅の１本は失われている。また西山遺跡の掘立柱建物ＳＢ09と重複しており、西隅の柱が一部切られている。柱間の距離は4.1m、主軸の方位はN46°Wである。

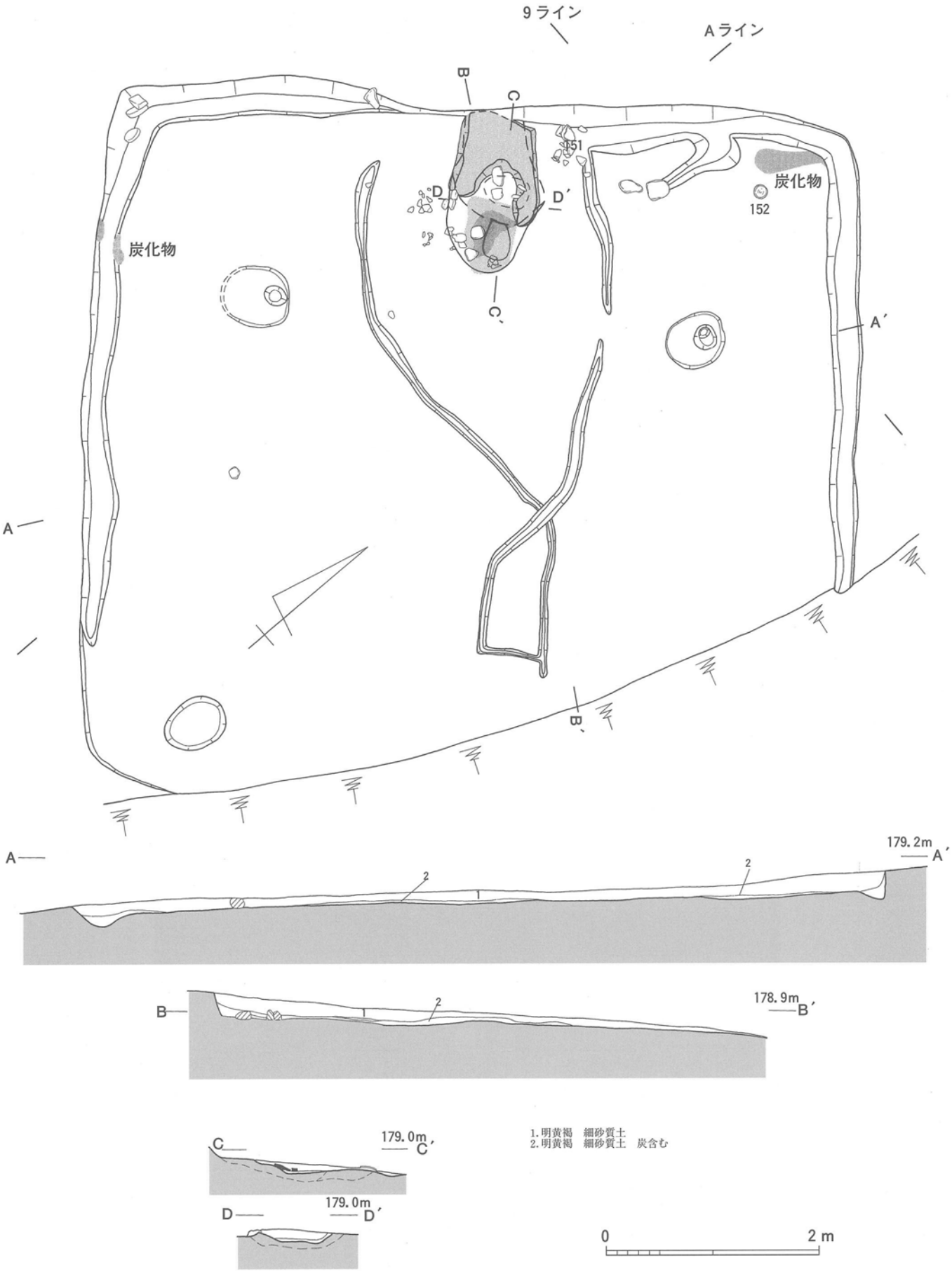
カマド　北西側の壁面の中央にカマドがある。カマドは粘土を馬蹄形に盛って本体を造り、さらに凝灰質砂岩の板石を立てて袖部としていたようである。板石の大部分は割れてカマド周辺に散乱しており本来の状況はよく判らないが、石の片面には被熱による変色が認められる。カマド本体と焚き口は熱を受けて赤化しており、焚き口には炭層が堆積している。カマドの下部は浅い掘り込みとなっている。

カマドの両脇から床面の中央に向かって２本の小溝が交差しながら延びている。検出時の観察では両者に切り合い関係が認められたため、同時に併存していたのではなく逐次掘り込まれたもののようである。ＳＨ01にもカマドから延びる床面の溝があり、どちらも同様な性格のものとみられる。

周壁溝　壁際の周壁溝は残りが悪いものの、本来は全周していたものであろう。南西辺の一角と北隅で、周壁溝に一部かかる形で炭化物の固まりを検出した。

土器の出土状況

土器はカマド周辺を中心に須恵器が出土している。杯蓋（151）はカマドの向かって右肩付近から、他の土器とともにやや浮いた状態で出土した。杯身（152）は北隅の床面で単独に出土した。



第66図　竪穴住居跡ＳＨ02

出土遺物（第67図）

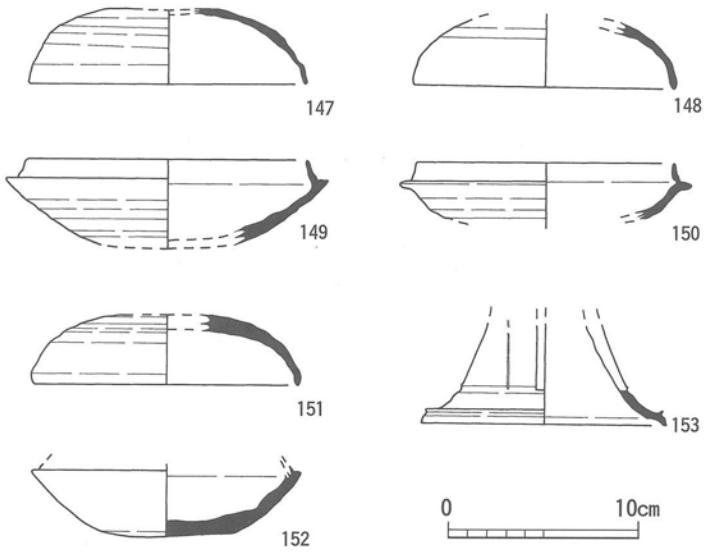
カマド周辺および埋土から須恵器が出土した。

須恵器（147～153）

蓋杯(147～152)と高杯の脚部(153)がある。

蓋杯　杯蓋(147・148・151)の口径は14cm前後に収まる。杯身は149が蓋よりやや大きく14.8cm、150が13.5cmである。受け部の立ち上がりが直立気味で、19号墳に次ぐ時期のものとみられる。

高杯　153は長脚の高杯の脚部で長方形の透かしを二～三方向に穿つ。裾部には稜をもたせており、18号墳の長脚の高杯よりも古い特徴をもつ。



第67図　ＳＨ02出土土器

16. その他の遺構

土坑ＳＫ07・08（第68図）

Ｂ・Ｃ－５区に位置し、16号墳のすぐ西隣の平坦面に２基の土坑が東西に並んでいる。西がＳＫ07で東がＳＫ08である。

ＳＫ07　2.8×1.2mの細長い土坑である。山側からの深さは0.6mで、底面はフラットである。

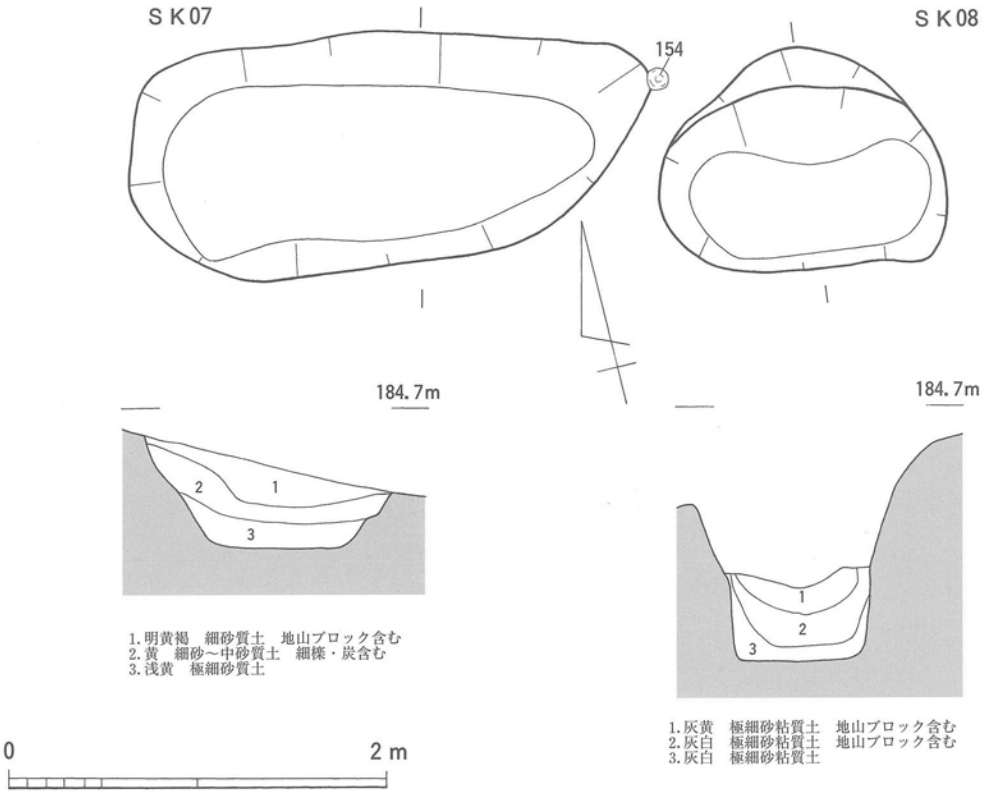
ＳＫ08　1.5×1.2mの長円形の土坑である。山側からの深さは1.2mで垂直に近い角度で掘り込み、底面はフラットである。

出土遺物（第69図）

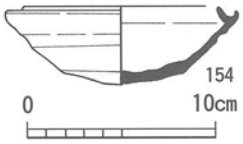
どちらの土坑からも遺物は出土しなかったが、両者の間の肩部から須恵器杯身（154）１点が出土した。これが土坑に伴うものとは限らないが、ここでは土坑の遺物として古墳時代の中で報告する。

須恵器（154）

杯身　154は口径11.1cmで、立ち上がりの先端が口縁端部よりもわずかに高い。おそらく15号墳と同様の時期のものであろう。



第68図　土坑ＳＫ07・08



第69図　ＳＫ07・08出土土器

17. 包含層の遺物

出土遺物（第70図）

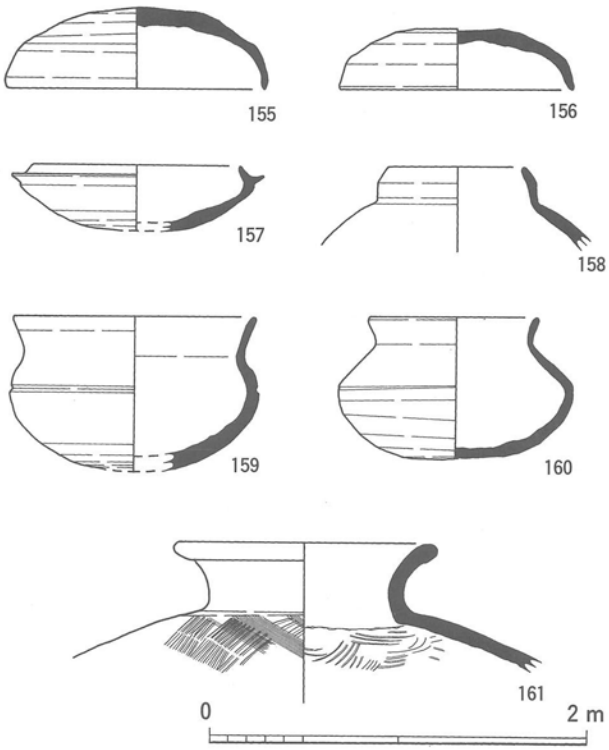
遺構に伴わなかった遺物のうち７点の須恵器（155～161）を図化した。

須恵器（155～161）

杯蓋(155)は11号墳の周辺から出土した。口径13.6cmで、11号墳出土の杯蓋(26)と大差ない。内面には同心円の当て具痕がみられる。

杯蓋(156)は18号墳の周辺から出土した。口径12.2cmで、18号墳出土の杯蓋(68)と共通している。

杯身(157)・直口壺の口縁部(158)・短頸壺(159・160)・甕の口縁部(161)は18・19号墳の西側から南側にかけての一帯から出土した。



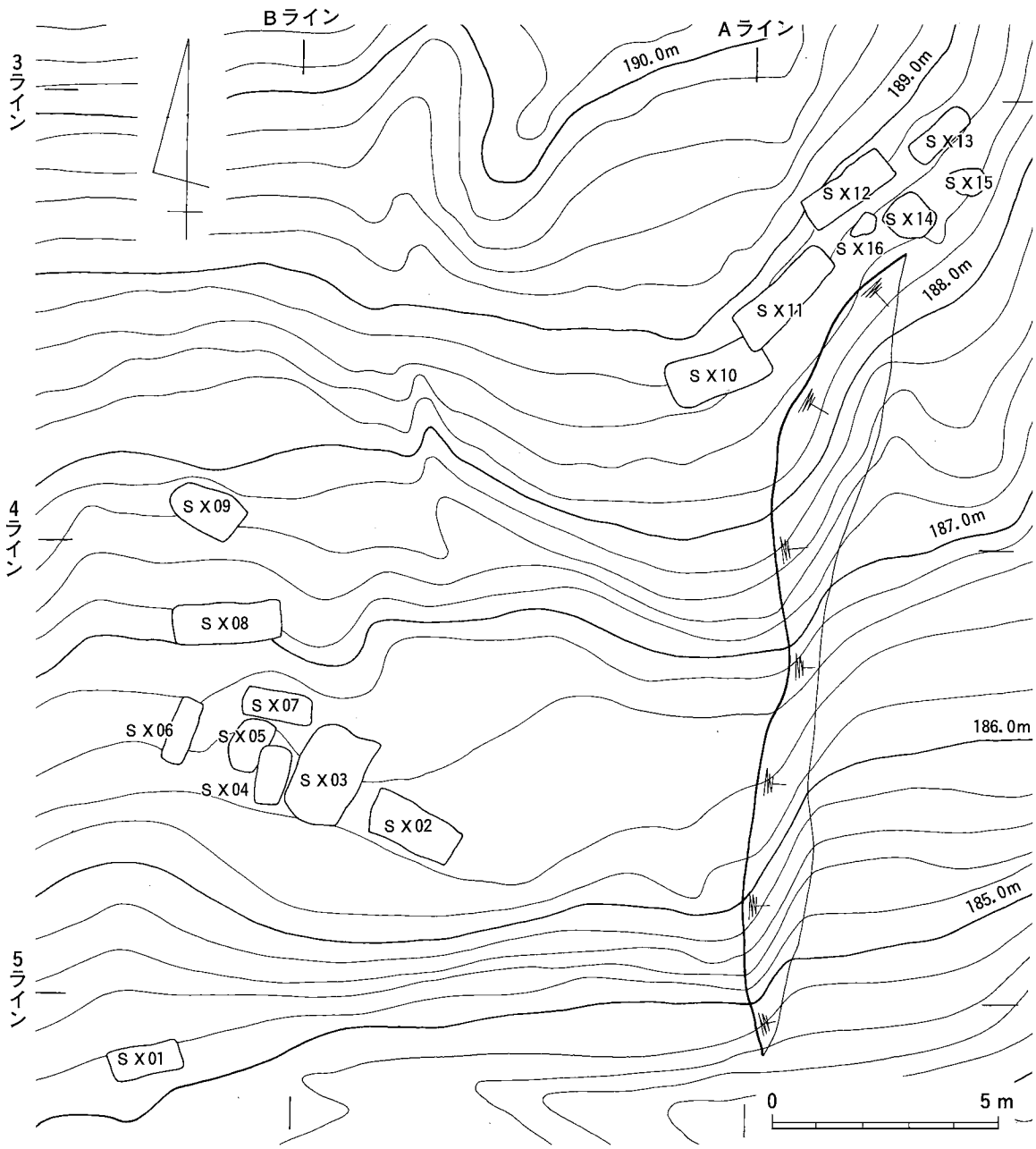
第70図　包含層出土の土器

第５節　西山遺跡（弥生時代）

１．木棺墓群

内容

ここで木棺墓（ＳＸ）としているのは長方形の掘り方をもった土坑で、平面・断面の観察で木棺の痕跡を認めたものと認めなかったものを含んでいる。また木棺墓群の中に不定形の土坑もあり、一群のものとしてＳＸ番号をつけてまとめて報告している。



第71図　木棺墓群

位置（第71図）

木棺墓は全部で13基あり東西２群に分かれている。

西群　西群は９基の木棺墓（ＳＸ01～09）で、12号墳西側の平坦面付近に位置する。このうちＳＸ01のみは少し南へ外れた所にある。他は密集しており、主軸が東西方向のもの（ＳＸ02・07～09）と南北方向のもの（ＳＸ03～06）がある。

東群　東群は４基の木棺墓（ＳＸ10～13）と、３基の土坑（ＳＸ14～16）からなる。20号墳南西側のやや急な斜面に立地し、木棺墓群はほぼ188.8mの等高線に沿って直線的に並んでいる。

木棺墓ＳＸ01（第72図）

西群の集団から南へ６ｍほど離れた地点にある。掘り方は長方形で、全長1.5m、幅は西側で0.7m、東側で0.55m、検出面からの深さ0.15mである。木棺の規模は全長1.35m、幅0.35mで底面の両端に小口穴があり、小口穴間の長さは0.95～1.0mである。主軸は等高線に対して平行で、方位はN78°Ｅである。

木棺墓ＳＸ02（第72図）

12号墳の主体部と並んで検出した。掘り方は長方形で、全長2.0m、幅は西側が1.0m、東側が0.85m、検出面からの深さ0.45mである。木棺の規模は抑えられなかったが底面の両端に小口穴があり、小口穴間の長さは1.15mである。主軸は等高線に対して平行で、方位はN61°Ｗである。

木棺墓ＳＸ03（第72図）

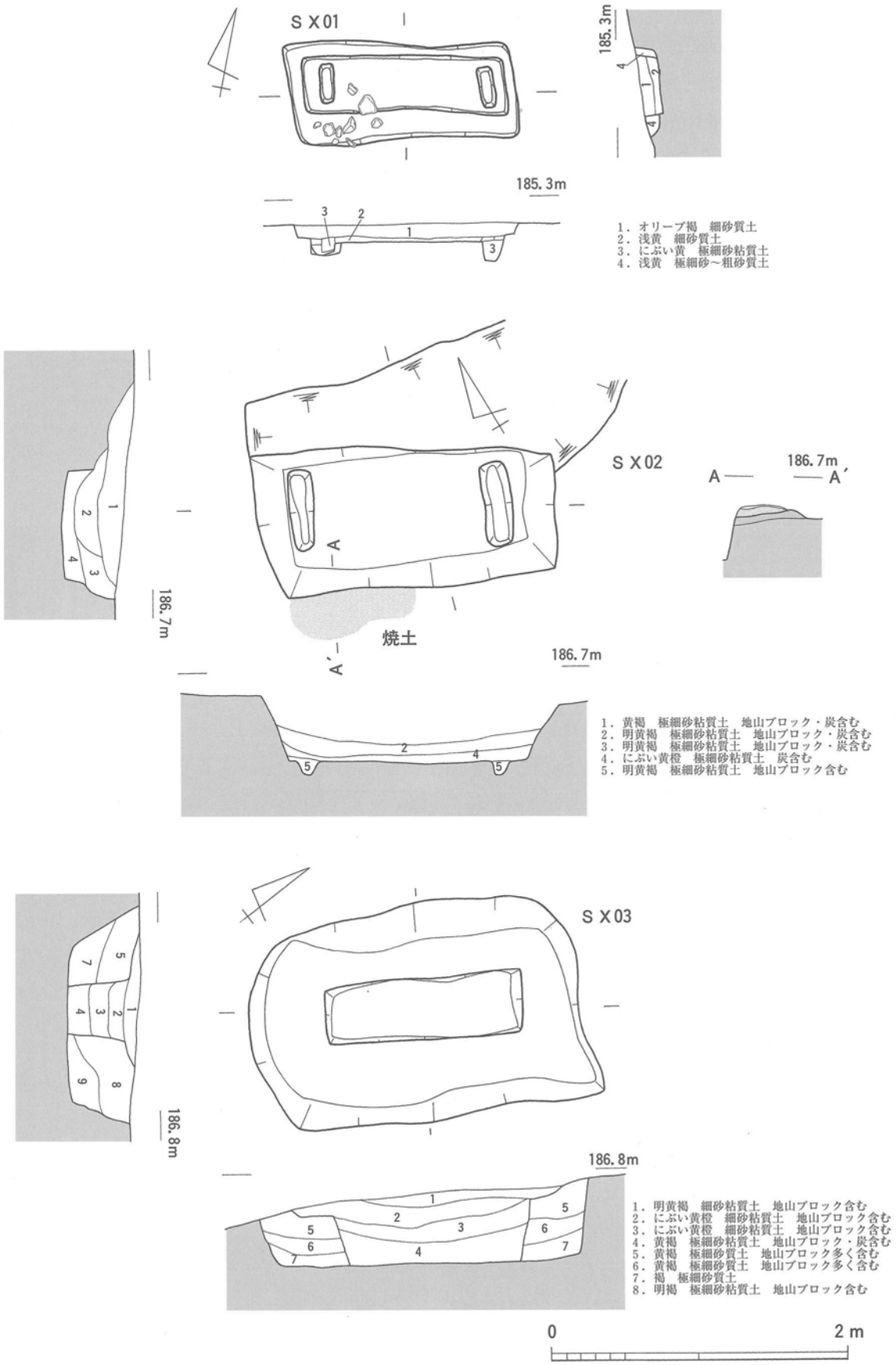
ＳＸ02の西隣にあり、主軸は直交している。掘り方は不整な長方形で、全長2.25m、幅1.5m、検出面からの深さ0.55mである。木棺の規模は全長1.3m、幅0.4m、主軸を等高線に対して直交させ、方位はN35°Ｅである。

木棺墓ＳＸ04（第73図）

ＳＸ03の西隣に平行しており、掘り方の一部が切られている。掘り方は長方形で、全長1.25m、幅0.7m、検出面からの深さ0.4mである。木棺の規模は抑えられなかったが底面の両端に小口穴があり、小口穴間の長さは0.85mである。主軸は等高線に対して直交で、方位はＮ６°Ｅである。

木棺墓ＳＸ05（第73図）

ＳＸ04の西隣に平行しており、掘り方の一部が切られている。掘り方は不整な長方形で、全長1.2m、幅0.8m、検出面からの深さ0.25mである。木棺の痕跡は抑えられなかった。主軸は等高線に対して直交で、方位はN27°Ｅである。



第72図　木棺墓ＳＸ01～03

木棺墓ＳＸ06（第73図）

ＳＸ05の西側に１ｍほど離れて平行している。掘り方は長方形で、全長1.45ｍ、幅0.55ｍ、検出面からの深さ0.25ｍである。木棺の規模は全長1.2ｍ、幅0.4ｍ、主軸を等高線に対して直交させ、方位はＮ20°Ｅである。

木棺墓ＳＸ07（第74図）

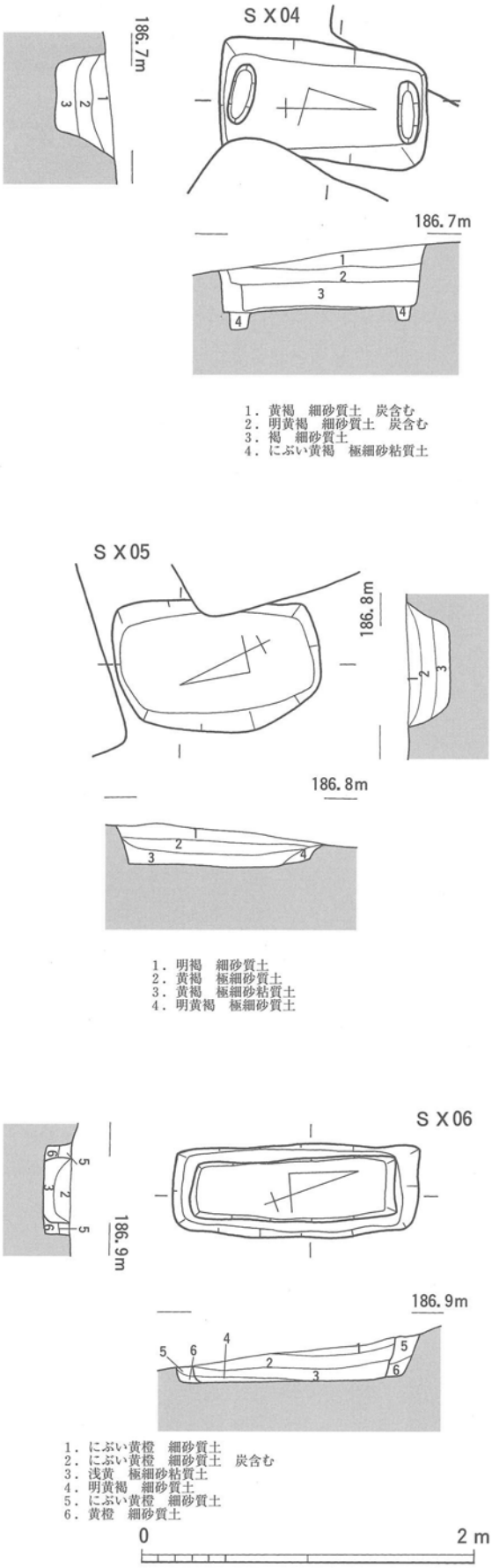
ＳＸ05の北隣にあり、主軸は直交している。掘り方は長方形で、全長1.5ｍ、幅0.6ｍ、検出面からの深さ0.4ｍである。木棺の規模は全長1.25ｍ、幅0.45ｍ。断面で小口板の痕跡を抑えており、小口板間の長さは0.95ｍである。主軸は等高線に対して平行で、方位はＮ78°Ｗである。

木棺墓ＳＸ08（第74図）

ＳＸ07の北側に１ｍほど離れて平行している。掘り方は長方形で、全長2.35ｍ、幅は西側が0.9ｍ、東側が0.8ｍ、検出面からの深さ0.45ｍである。木棺の規模は全長1.9ｍ、幅0.65ｍ、主軸を等高線に対して平行にとり、方位はＮ86°Ｅである。

木棺墓ＳＸ09（第74図）

ＳＸ08の北側に１ｍほど離れて斜行している。他の木棺墓に比べて傾斜の急な所にあり、残りは良くない。掘り方は不整な長方形で、全長1.6ｍ、幅1.0ｍ、検出面からの深さ0.2ｍである。木棺の痕跡は抑えられなかった。主軸は等高線に対して平行で、方位はＮ62°Ｗである。



第73図　木棺墓ＳＸ04～06

木棺墓ＳＸ10（第75図）

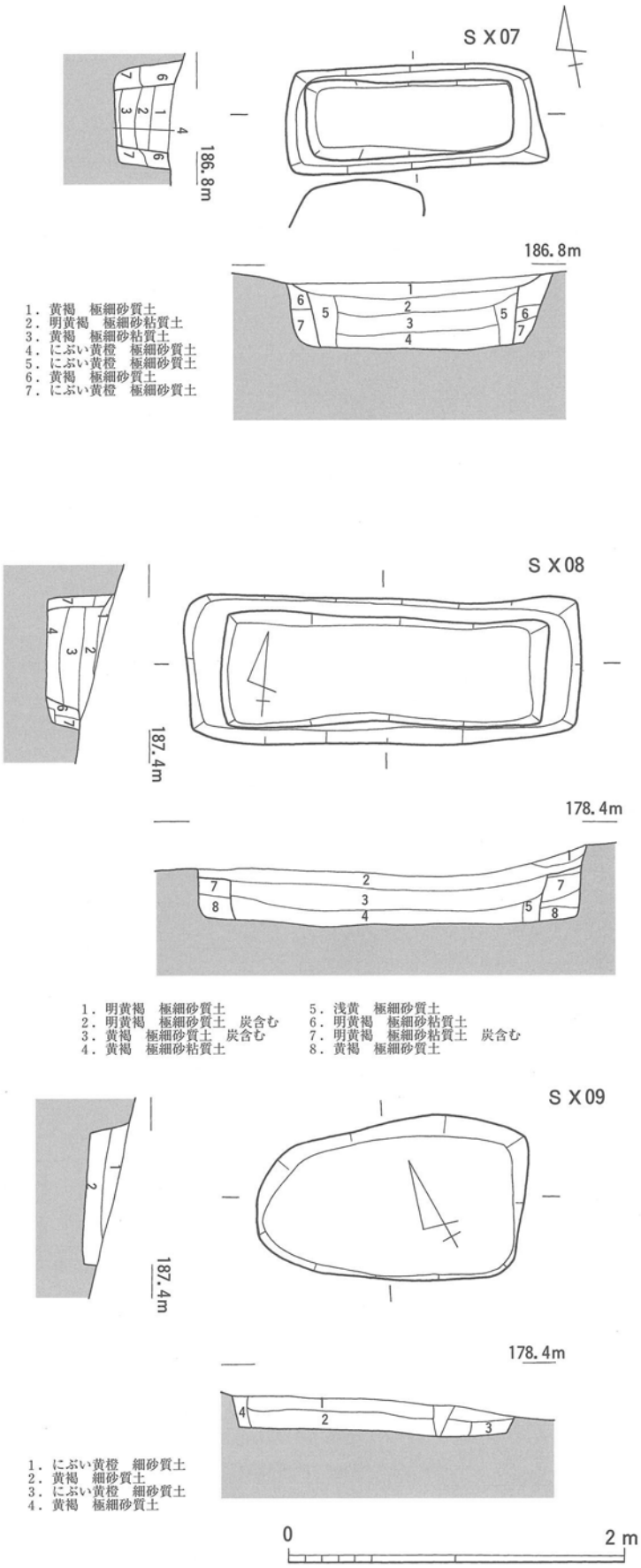
東群の中では最も南西側に位置する。掘り方は長方形で、全長2.25m、幅1.0m、検出面からの深さ0.4mである。木棺の規模は全長1.95m、幅0.7mで底面の両端に小口穴があり、小口穴間の長さは1.55mである。主軸は等高線に対して平行で、方位はN69°Eである。

木棺墓ＳＸ11（第75図）

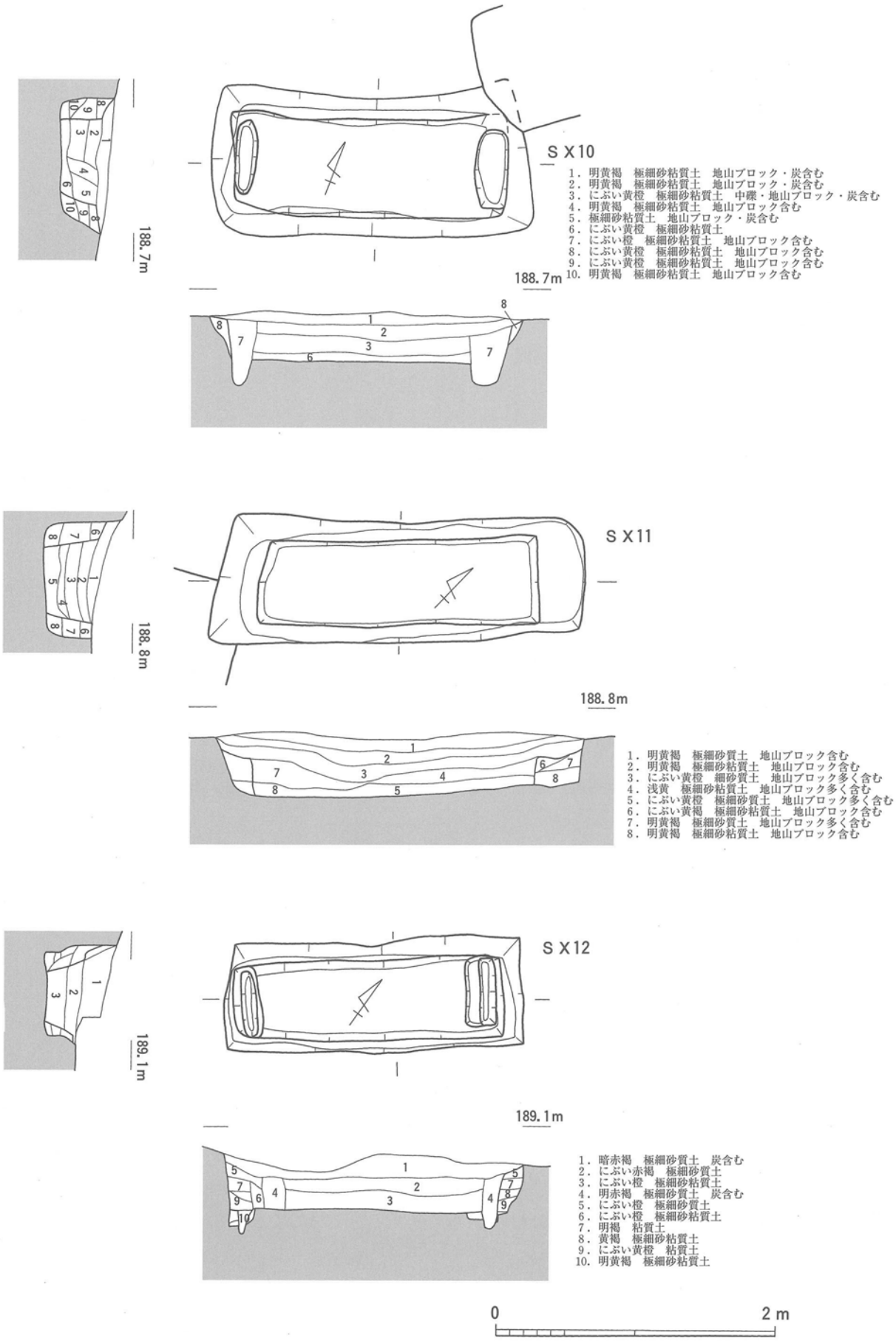
ＳＸ10の北東側に連なり、掘り方の一部を切っている。掘り方は長方形で、全長2.6m、幅0.85m、検出面からの深さ0.55mである。木棺の規模は全長2.0m、幅0.6m、主軸を等高線に対して平行にとり、方位はN46°Eである。

木棺墓ＳＸ12（第75図）

ＳＸ11の北東側に連なる。掘り方は長方形で、全長2.15m、幅0.8m、検出面からの深さ0.5mである。木棺の規模は全長1.95m、幅0.6mで底面の両端に小口穴があり、小口穴間の長さは1.65mである。主軸は等高線に対して平行で、方位はN54°Eである。



第74図　木棺墓ＳＸ07～09



第75図　木棺墓ＳＸ10～12

木棺墓ＳＸ13（第76図）

ＳＸ12の北東側に連なる。掘り方は長方形で、全長1.5m、幅0.5m、検出面からの深さ0.3mである。木棺の規模は全長1.25m、幅0.35m、主軸を等高線に対して平行にとり、方位はN48°Ｅである。

土坑ＳＸ14（第76図）

ＳＸ12の南東側にある。上面の輪郭は不整な方形だが、底面は長方形である。上端の規模は一辺1.0m、底面は0.75m×0.45m、検出面からの深さ0.75mである。主軸は等高線に対して平行で、方位はN46°Ｅである。木棺墓と比べて極端に深く、土壙墓の可能性もある。

土坑ＳＸ15（第76図）

ＳＸ14の北東側にある。不整な楕円形で、規模は0.8m×0.6m、検出面からの深さ0.3mである。

土坑ＳＸ16（第76図）

ＳＸ14の西隣にある。不整な長方形で、規模は0.65m×0.4m、検出面からの深さ0.15mである。

所属時期について

木棺墓・土坑からは遺物が一切出土していないため時期が確定できないが、逆にそのことが古墳群よりも古い時期に属することを暗示している。層位的には西群では12号墳の主体部と同一面だが、東群ではＳＸ12などが20号墳の土坑ＳＫ05の下層に位置する。

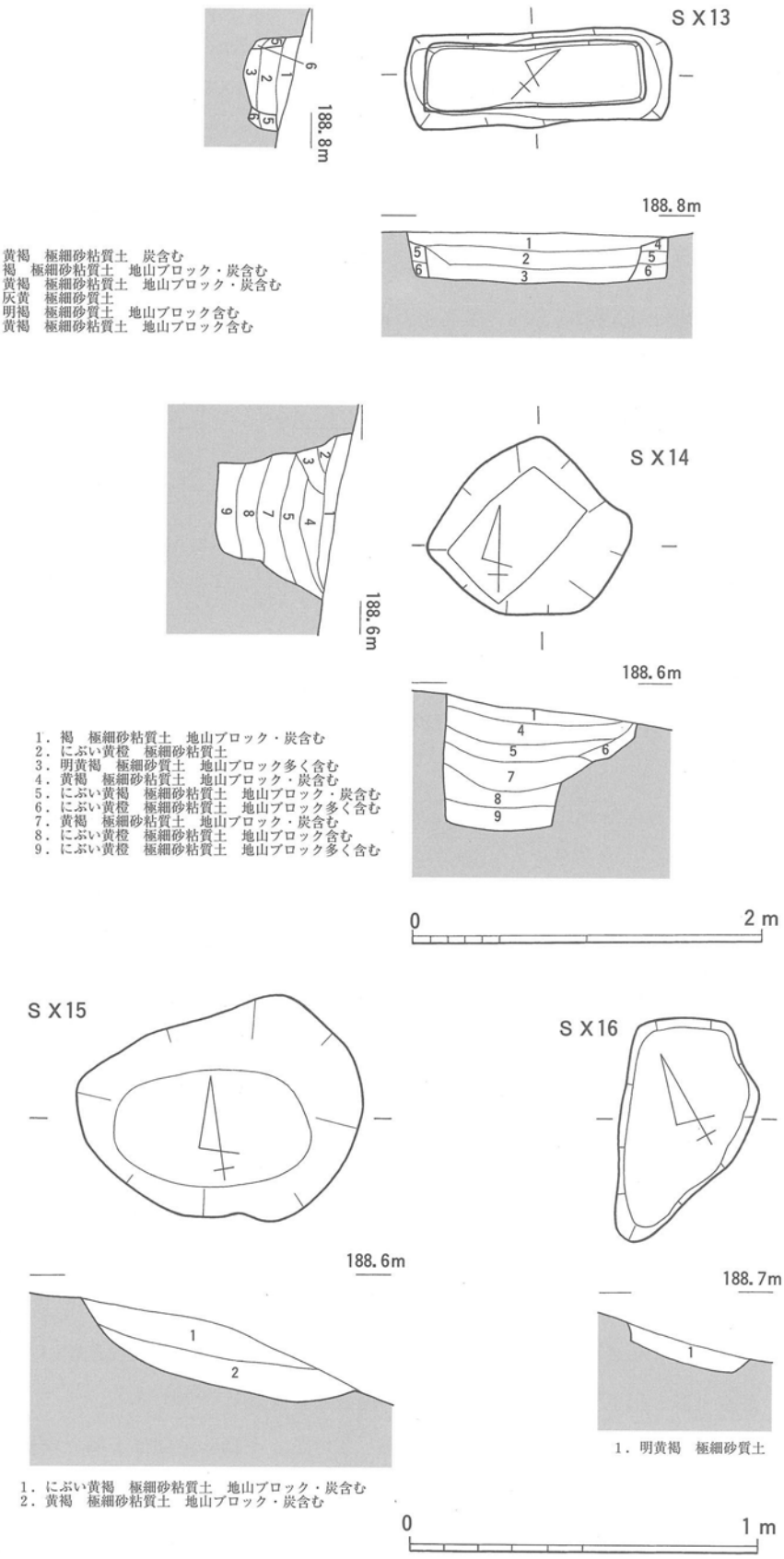
木棺構造はＳＸ01・02・04・10・12が小口穴をもち、古墳群の中に認められないタイプである。木棺の規模は最大がＳＸ11の2.0m（小口板の位置は不明）で11・14号墳の主体部の全長を凌ぐが、副葬品を豊富にもっている９・12号墳にははるかに及ばない。他の木棺墓の棺内の内法は1.6m以下で、全体に古い年代を指向している。

群構造はＳＸ01を除いて３つのグループに分けられ、それぞれのグループに棺の大小、小口穴の有無が混在する。このような現象は弥生時代以来の木棺墓群の一般的な有り方と共通する。

尾根線上の６号墳の下層には弥生時代中期後半の方形周溝墓と木棺墓群があり、周溝内から供献土器が出土しているものの、埋葬施設には遺物は皆無である。

平方西遺跡でも６基の木棺墓群が見つかっている。やはり時期は不明だが隣接している古墳時代後期の住居と同時期とは考えられない。

以上のような状況証拠からみて、木棺墓群は弥生時代中期後半（Ⅳ様式）に属する蓋然性が高い。おそらく西山遺跡は平方遺跡の墓域の一部をなしていたのだろう。なお７号墳の埋葬施設２は東群の延長に位置しており、報告書で述べられているように同時期の所産である可能性が高い。



第76図　木棺墓ＳＸ13、土坑ＳＸ14～16

２．包含層出土の遺物

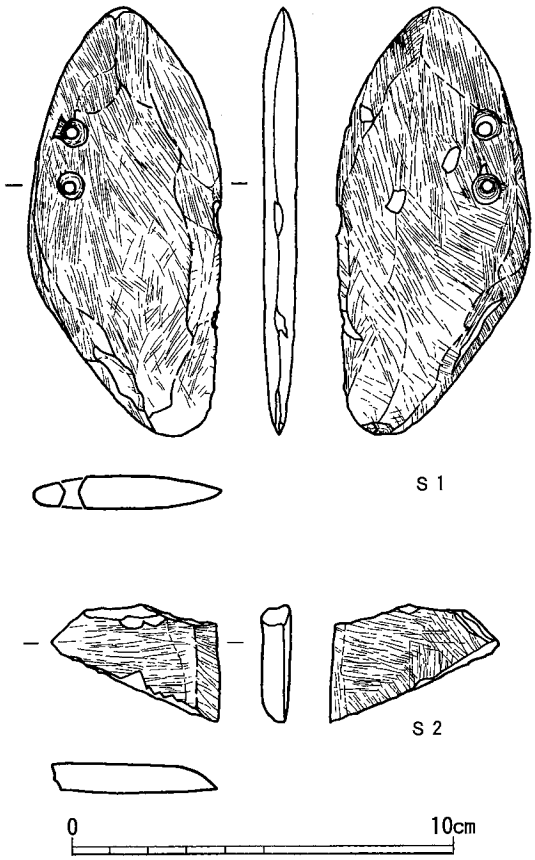
包含層や古墳の盛土などから弥生時代の石器が出土している。

磨製石器（第77図）

石庖丁（Ｓ１・２）

Ｓ１は完形で不整な平行四辺形を呈し、２箇所の孔をもつ。石材は黒灰色をした粘板岩系のもので、全面に擦痕が観察できる。刃部は直線的で、両面から刃をつける。全長11.3cm、幅5.1cm、厚み0.9cmである。

Ｓ２は刃部の破片である。石材は道場付近で採取できる「塩田石」で、表面は風化して灰白色を呈するが、割れ口は濃い灰色である。素材の節理面を利用して片面から刃をつけるが、裏面にも研ぎは入っている。厚み0.8cmである。



第77図　弥生時代の石器（１）

打製石器（第78図）

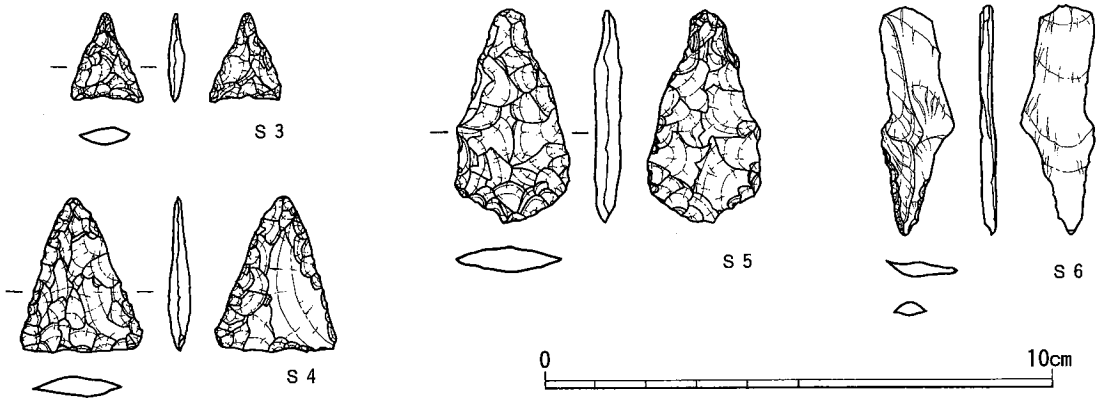
打製石器は全てサヌカイト製で、石鏃３点・石錐１点を図化した。

石鏃（Ｓ３～Ｓ５）

Ｓ３・Ｓ４は平基式で、Ｓ３が長さ17.5mm、幅14.1mm、厚み3.5mm、重さ0.5ｇ、Ｓ４が長さ30.5mm、幅24.2mm、厚み4.0mm、重さ2.4ｇである。

Ｓ５は凸基式で長さ41.6mm、幅22.5mm、厚み5.0mm、重さ4.5ｇである。

石錐（Ｓ６）　剥片の一端に両側縁から調整剥離を行って錐部を作り出しており、先端に磨耗痕が認められる。それ以外の部分はほとんど調整を施していない。長さ45.0mm、幅24.6mm、厚み3.0mm、重さ1.6ｇである。



第78図　弥生時代の石器（２）

第６節　西山遺跡（飛鳥～平安時代）

１．概要

西山遺跡は平坦な丘陵から南西に延びる尾根の南斜面に位置する。同一斜面に存在する西山古墳群を避けるように、大きく２箇所に分かれて遺構群が存在している。西側をＡ地区、東側をＢ地区として記述する。Ａ地区は、調査区の中央部が緩斜面になっており、遺構のほとんどはそこで検出されている。Ｂ地区では、調査区南半に平坦面があるが、遺構は調査区全体に広がっている。これらの遺構は飛鳥・奈良時代から平安時代に属するのものと考えられる。

２．Ａ地区の遺構（第79図）

掘立柱建物・柱穴・溝・土坑・焼土面等を検出した。包含層からは一定量の遺物が出土したが、掘立柱建物の柱穴から出土した遺物はほとんどないため、遺構の時期決定が困難である。

掘立柱建物跡

ＳＢ01（第80図）

２×２間の建物である。棟軸線は南北方向でほぼ座標北を向く。桁行が3.2～3.3m、梁行が3～3.2mのほぼ正方形を呈する。柱間は南北方向で約1.6～1.8m、東西方向で約1.5～1.6mを測る。

柱穴は掘り方の直径が約40～60cm、深さが検出面から最大で約40cm、柱痕の直径が約20cmである。

ＳＢ01とＳＢ02の間には直径が90cmのやや歪んだ円形を呈する焼土面がある。

ＳＢ02（第79・80図）

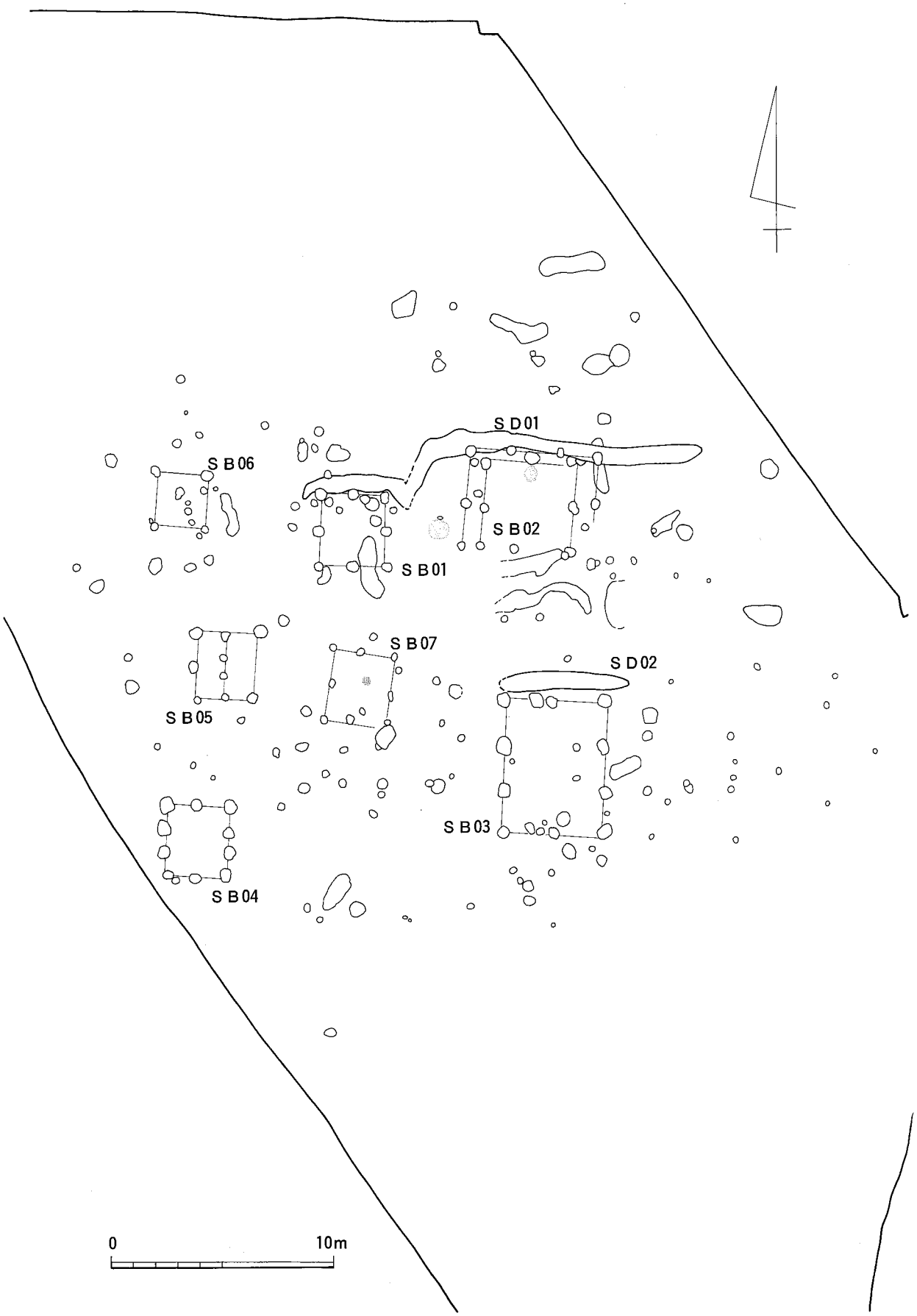
２×２間の建物である。棟軸線は南北方向でほぼ座標北を向く。桁行が4.3～4.4m、梁行が4.6～4.8mの東西に長い方形を呈する。柱間は南北方向で約2.1～2.2m、東西方向で約2.3～2.5mを測る。南では真ん中の柱穴が失われている。ＳＢ02を構成する柱穴に平行して、複数の柱穴がほぼ同一地点に並ぶことから、建て替えあるいは拡張された可能性を持つ。

北辺中央に焼土面がある。80cm×50cmの南北に長軸を持つ楕円形を呈する。

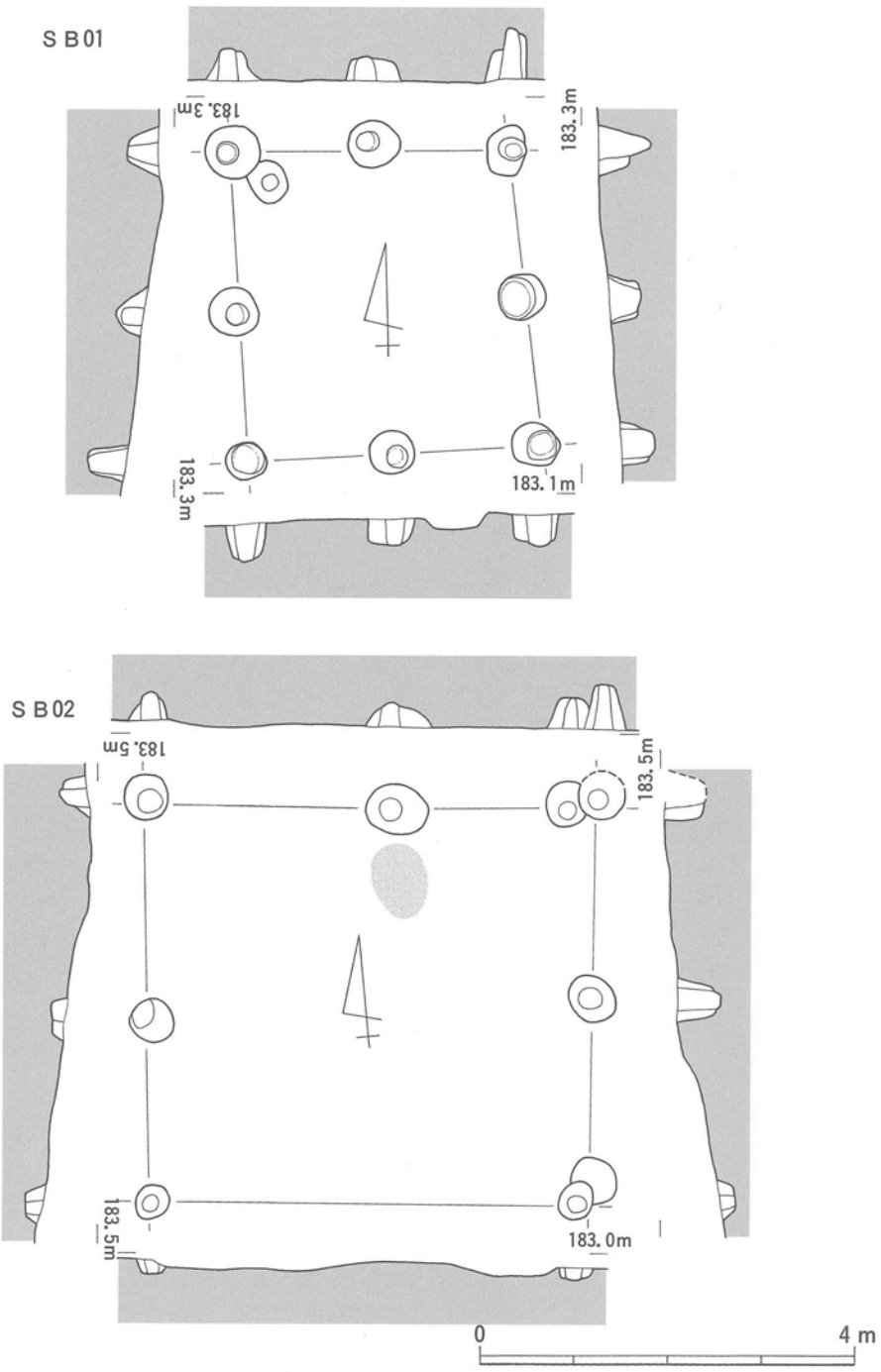
柱穴は掘り方の直径が約40～50cm、深さが検出面から最大で約40cm、柱痕の直径が約20cmである。

ＳＢ03（第81図）

２×３間の建物である。棟軸線は南北方向でほぼ座標北を向く。桁行が4.5～4.6m、梁行が5.8～6.0mの南北に長い方形を呈する。柱間は南北方向で約2.0m、東西方向で2.3mである。



第79図　Ａ地区全体図



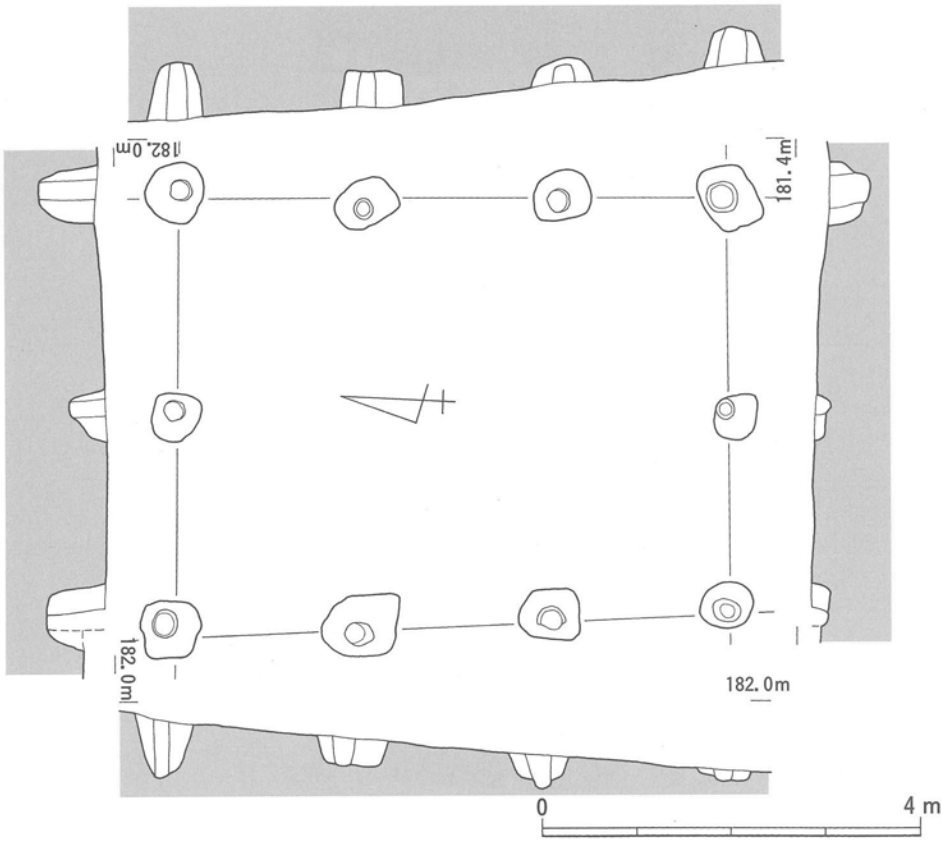
第80図　掘立柱建物跡ＳＢ01・02

柱穴は掘り方の直径が約50～60cm、深さが検出面から最大で約60cm、柱痕の直径が約25～30cmである。なお、柱穴掘り方の中には形状が隅丸方形を呈するものがある。

ＳＢ04（第82図）

２×３間の建物である。棟軸線は南北方向でほぼ座標北を向く。桁行が2.6～2.8m、梁行が3.0～3.1mの南北に長い方形を呈する。柱間は南北方向で約1.0m、東西方向で約1.3mである。他の建物に比べ、梁方向の柱間が極めて短いという特徴を持つ。

柱穴は掘り方の直径が約45～60cm、深さが検出面から最大で約40cm、柱痕の直径が約20cmである。西辺の北から２番目の柱穴から須恵器の杯が出土している。



第81図　掘立柱建物跡ＳＢ03

ＳＢ05（第82図）

２×２間の建物である。棟軸線は南北方向でほぼ座標北を向く。桁行が2.65～2.90m、梁行が3.0～3.1mの方形を呈する。柱間は南北方向で1.4～1.6mで、東西方向で1.3～1.6mである。東辺中央の柱穴は失われている。棟持ち柱が認められ、その柱間は約0.9mである。

柱穴は掘り方の直径が35～60cm、深さが検出面から最大で30cm、柱痕の直径が20cmである。棟持ち柱の柱穴は、掘り方の直径が30cm、深さが検出面から最大で20cm、柱痕の直径が15cmである。

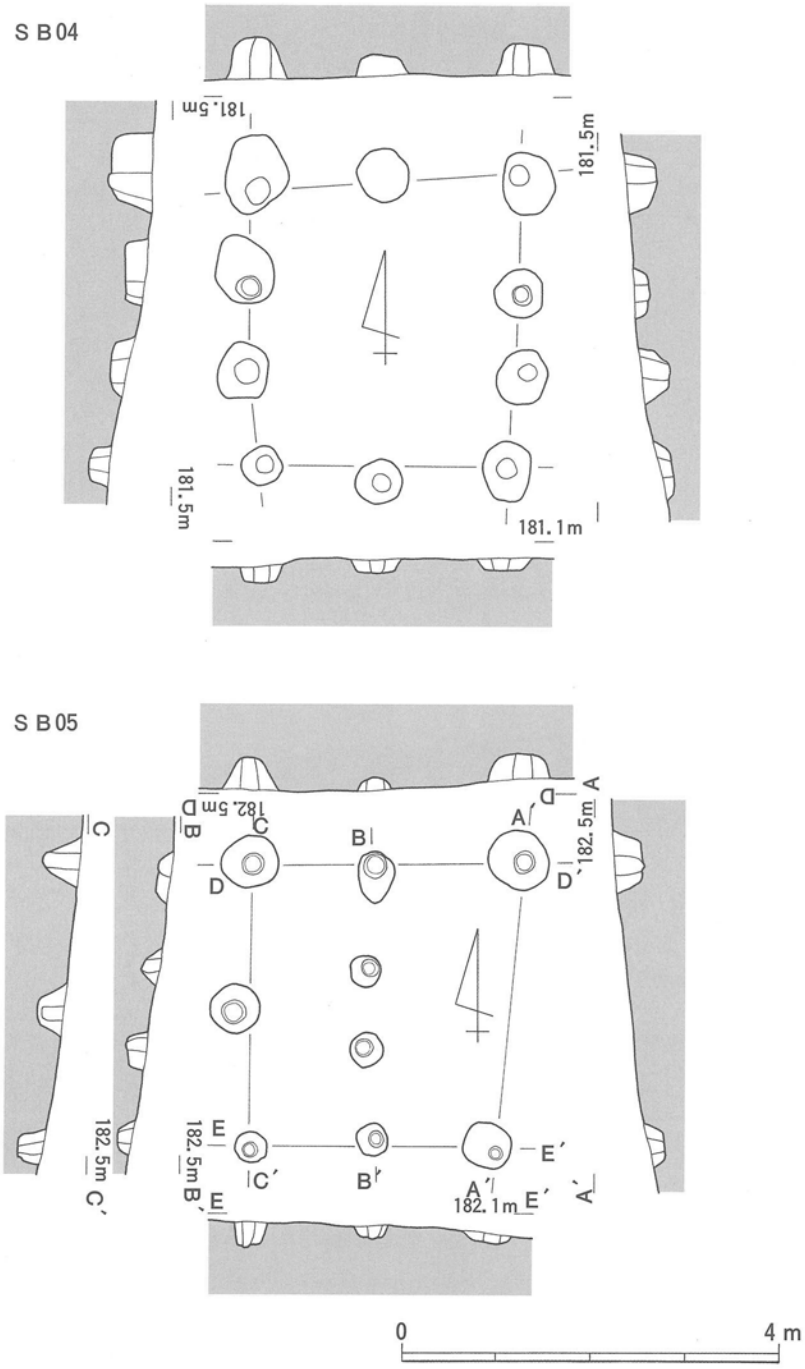
ＳＢ06（第83図）

１×１間の建物である。棟軸線は南北方向でほぼ座標北を向く。桁行が2.3～2.4m、梁行が2.5～2.6mの方形を呈する。

柱穴は掘り方の直径が30～50cm、深さが検出面から最大で40cm、柱痕の直径が15～20cmである。

ＳＢ07（第83図）

２×２間分を検出した。軸線はほぼ南北方向でほぼ座標北を向く。桁行が2.9m、梁行が3.3m以上である。柱間は南北方向で1.6～1.7mで、東西方向で1.3～1.6mである。

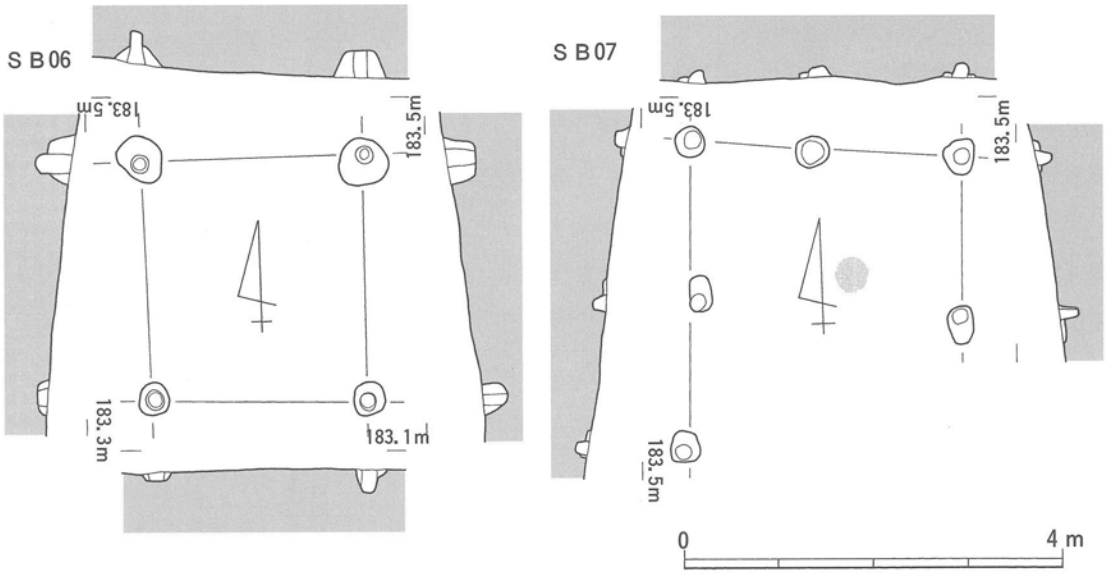


第82図　掘立柱建物跡ＳＢ04・05

柱穴は掘り方の直径が30cm、深さが検出面から最大で20cm、柱痕の直径が15cmである。また、SB02と同様に40cm×30cmの楕円形を呈する焼土面が認められた。

柱穴

掘立柱建物と認識した以外にも、多数の柱穴がある。規模は建物を構成する柱穴とほぼ同じで、直径30～50cmの円形を呈する。検出面からの深さも20cm程度で、柱痕の直径15～20cmである。ほとんどの柱穴で遺物が検出されていないが、３基の柱穴から須恵器の蓋・壺が出土している。



第83図　掘立柱建物跡ＳＢ06・07

溝

ＳＤ01（第84図）

ＳＢ01からＳＢ02の北側にかけて等高線に平行して開削されている。ＳＢ02を切っており、ＳＢ01に切られている。検出長は19mで、幅60cm、検出面からの深さは最大で10cmを測る。断面形は中央がやや盛り上がった浅い皿状を呈する。埋土は１層で粘質シルトである。ＳＢ02の西側で屈曲してＳＢ01に向かう部分は確認トレンチによって削平されている。

出土遺物には須恵器の杯蓋と土師器の甕がある。

ＳＤ02（第85図）

ＳＢ04の北側で建物に平行して検出した。検出長は5.5m、幅0.9m、検出面からの深さは最大で28cmを測る。断面は浅い皿状を呈し、埋土は下層が極細砂からシルト、上層が粘質シルトである。ＳＢ04の雨落ち溝とも考えられる。

出土遺物には須恵器の杯身・杯蓋・甕、鉄鏃・鎌状鉄器がある。

この２条以外にも規模・形状がはっきりしない溝状の遺構が認められる。

集石土坑

ＳＫ09（第86図）

調査区の中央東端付近にある。直径1.1mのやや歪んだ円形を呈する。内部には拳大から人頭大の礫が集積されていた。検出面からの深さは最大で40cmを測る。礫以外の出土遺物がないため、時期・性格とも不明である。

３．Ｂ地区の遺構（第87図）

Ｂ地区では掘立柱建物と溝を検出した。ただし、Ａ地区と比較して包含層の遺物も少なく、遺構から

出土した遺物がほとんどないため、遺構の詳細な時期を知ることは困難である。

また、掘立柱建物とした以外にも、柱穴は存在するが、遺物の出土もほとんどなく、その性格を知ることはできなかった。

掘立柱建物

ＳＢ08（第88図）

３×４間の建物である。棟軸線は南北方向で、座標北より約14度東に振る。桁行が7.7～8.0m、梁行が9.9～10.0mである。柱間は梁方向で2.4～2.6m、桁方向で2.3～2.6mである。遺構の残存状況が悪いため、総柱建物あるいは２×４間の廂付き建物である可能性も否定できない。

柱穴は掘り方の直径が25～30cm、深さが検出面から最大で約15cm、柱痕の直径が15cmである。遺物は出土していない。

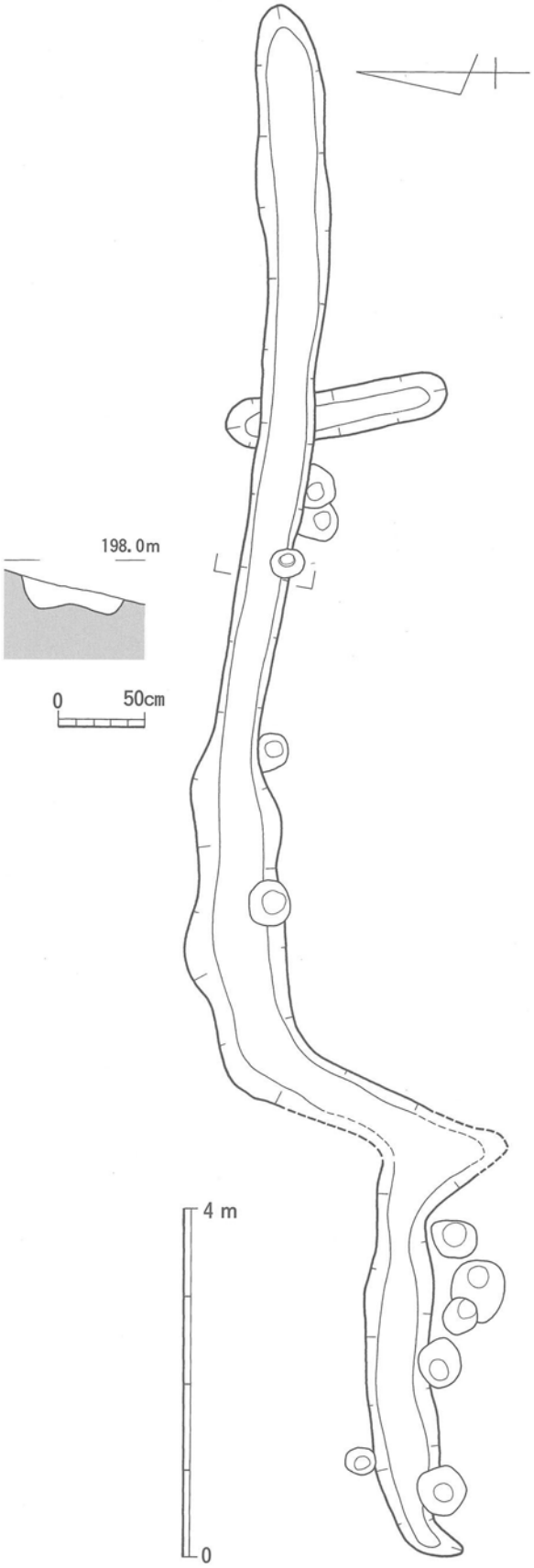
ＳＢ09（第89図）

この建物は３×２間分を検出した。竪穴住居（ＳＨ01）を切っている。棟軸線は南北方向で、座標北より約12度30分東へ振る。桁行は6.8mで、梁行は4.8m分残存している。柱間は梁方向で2.4m、桁方向で2.0～2.4mである。

柱穴は掘り方の一辺が40～50cmの隅丸方形を呈するものが多い。深さが検出面から最大で約20cm、柱痕の直径が15～20cmである。

ＳＢ10（第90図）

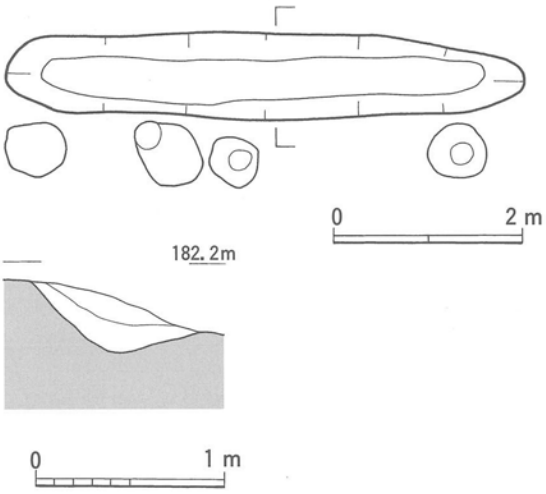
２×３間の建物である。棟軸線は南北方向で、おおむね座標北を



第84図　溝ＳＤ01

向く。梁行7.1mで、桁行は4.9mである。柱間は南北方向が2.2～2.4mで、東西方向で2.3～2.6mである。東辺の柱穴は失われている。

柱穴は掘り方の直径が30～40cm、深さが検出面から最大で約30cm、柱痕の直径が20cmである。



第85図　溝ＳＤ02

ＳＢ11（第91図）

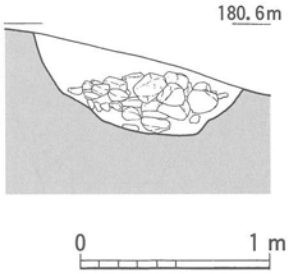
２×２間の総柱建物である。東隅の柱穴は失われている。軸線は約46度と大きく西に振る。一辺が2.6m、柱間が1.3mである。

柱穴は掘り方の直径が20～30cm、深さが検出面から最大で約10cm、柱痕の直径が15cmであり、他の建物に比べやや小規模である。

ＳＢ12（第90図）

２×２間の建物である。棟軸線は南北方向で、約12度東に振る。桁行が5.1～5.2m、梁行が5.1mと、正方形を呈する。柱間は南北方向が2.4～2.7mで、東西方向が2.5～2.6mである。

柱穴は掘り方の直径が30～40cm、深さが検出面から最大で約20cm、柱痕の直径が15～20cmである。



第86図　集石土坑ＳＫ09

ＳＢ13（第92図）

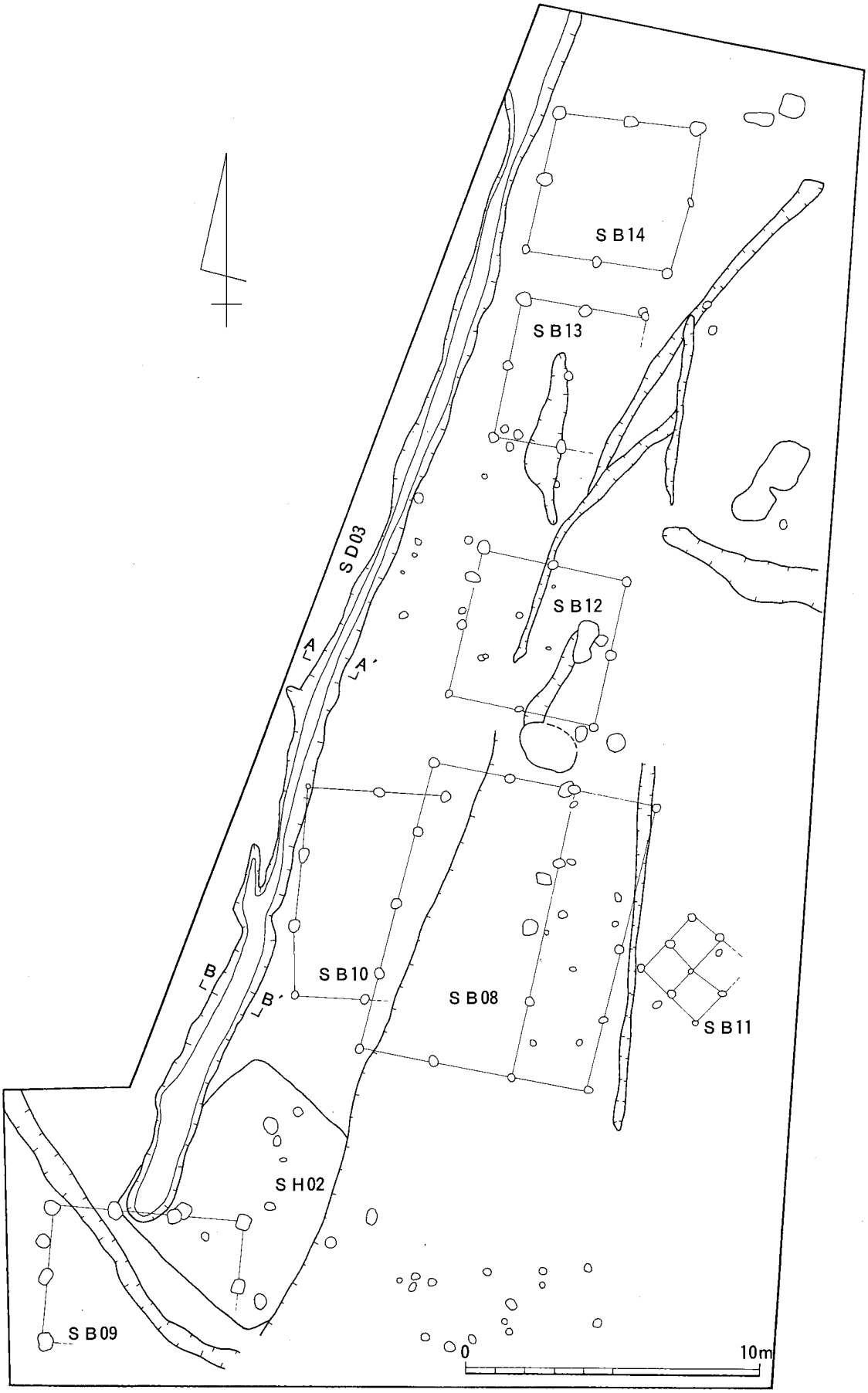
２×２間の建物である。棟軸線は南北方向で、約10度東へ振る。桁行が4.3m、梁行が4.8mである。柱間は南北方向が2.3～2.5mで、東西方向が2.0～2.3mである。

柱穴は掘り方の直径が30～40cm、深さが検出面から最大で約40cm、柱痕の直径が15cmである。

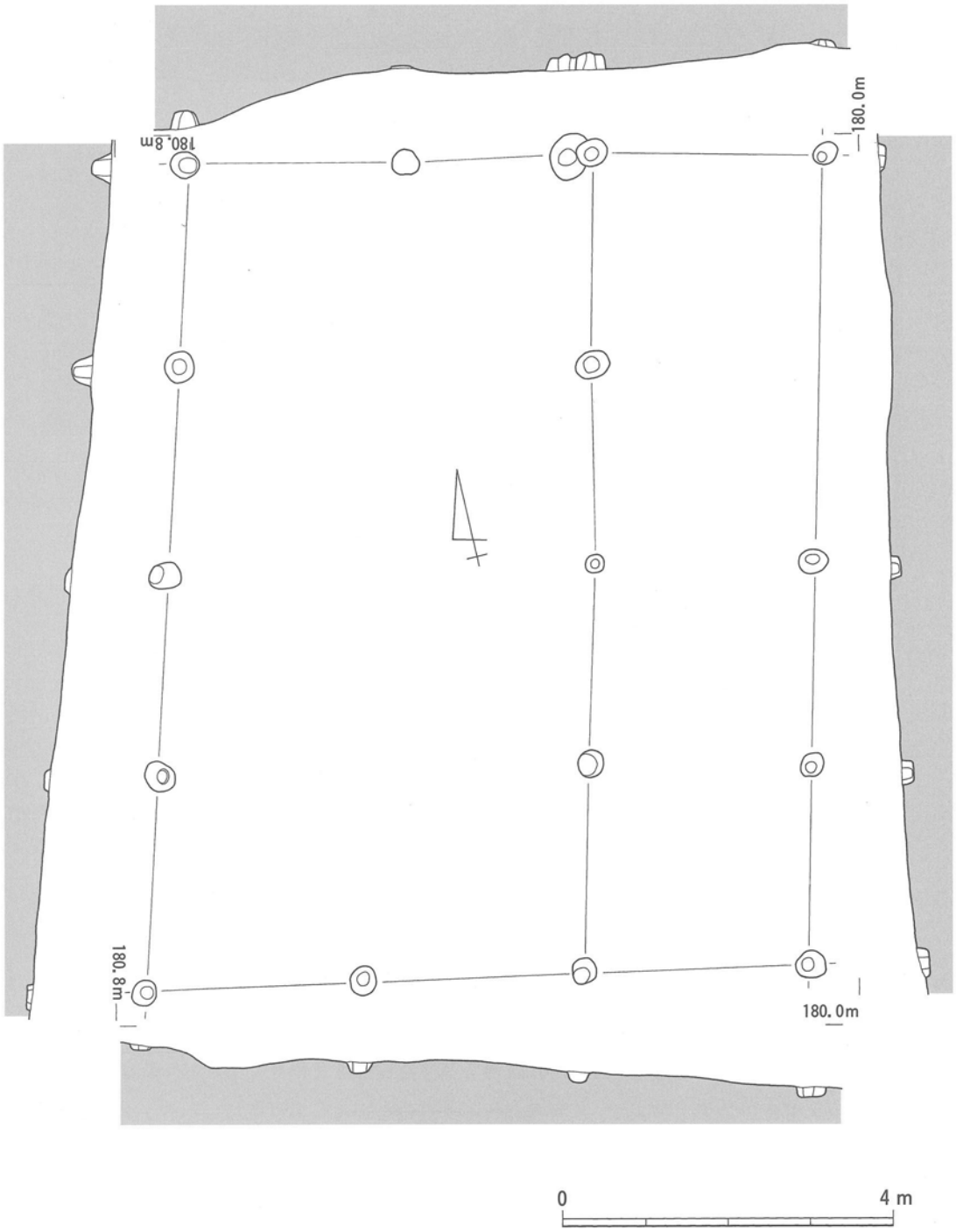
ＳＢ14（第92図）

２×２間の建物である。棟軸線は南北方向で、約11度東へ振る。桁行が4.7～4.9m、梁行が4.8～5.0mである。柱間は南北方向が2.4～2.6m、東西方向が2.3～2.5mである。

柱穴は掘り方の直径が40～50cm、深さが検出面から最大で約40cm、柱痕の直径が15～20cmである。



第87図　Ｂ地区全体図



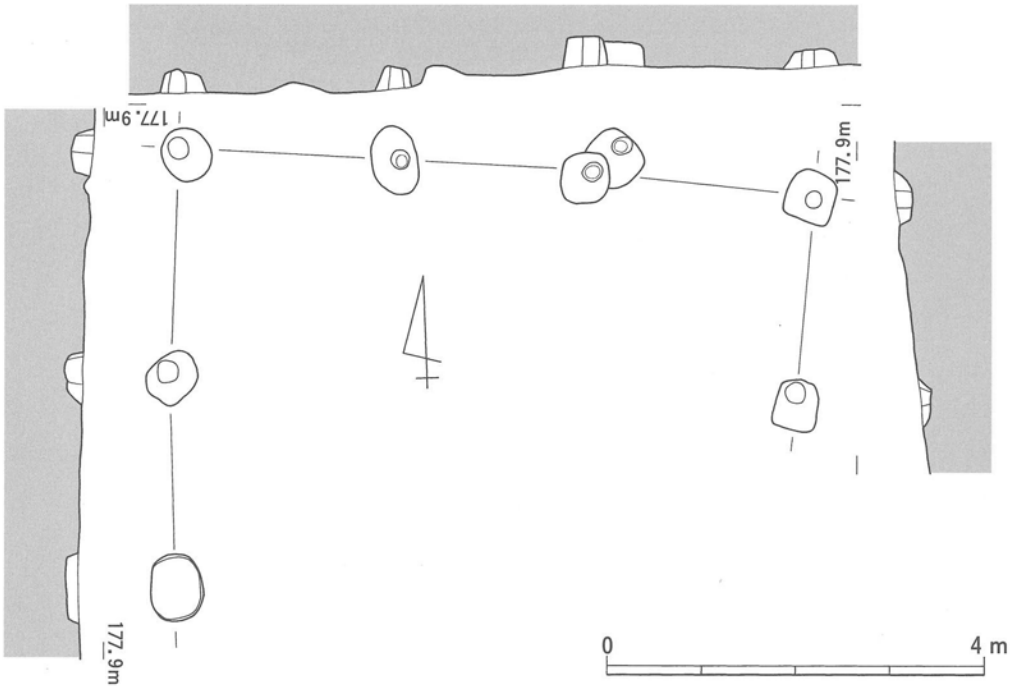
第88図　掘立柱建物跡ＳＢ08

溝

ＳＤ03（第87・93図）

調査区の西端を掘立柱建物群と古墳群との境界を画すように南流する。起点が調査区外であるため、総延長は不明である。検出長は約44m、幅1.0～1.3m、検出面からの深さ15～28cmを測る。断面形は上流では浅い皿状で、下方に行くと「U」字状になる。埋土は極細砂と細砂からなる。

また、これ以外にも規模・形状がはっきりしない溝状の遺構が認められる。



第89図　掘立柱建物跡ＳＢ09

４．出土遺物

出土した遺物には須恵器を中心として、土師器、金属器、銭貨がある。量的に見て、Ａ地区から出土したものが多数を占め、Ｂ地区出土の遺物はほとんどない。また、遺構から出土した遺物は少なく、特にＢ地区の遺構からは図示できる遺物が出土しなかった。

Ａ地区出土遺物

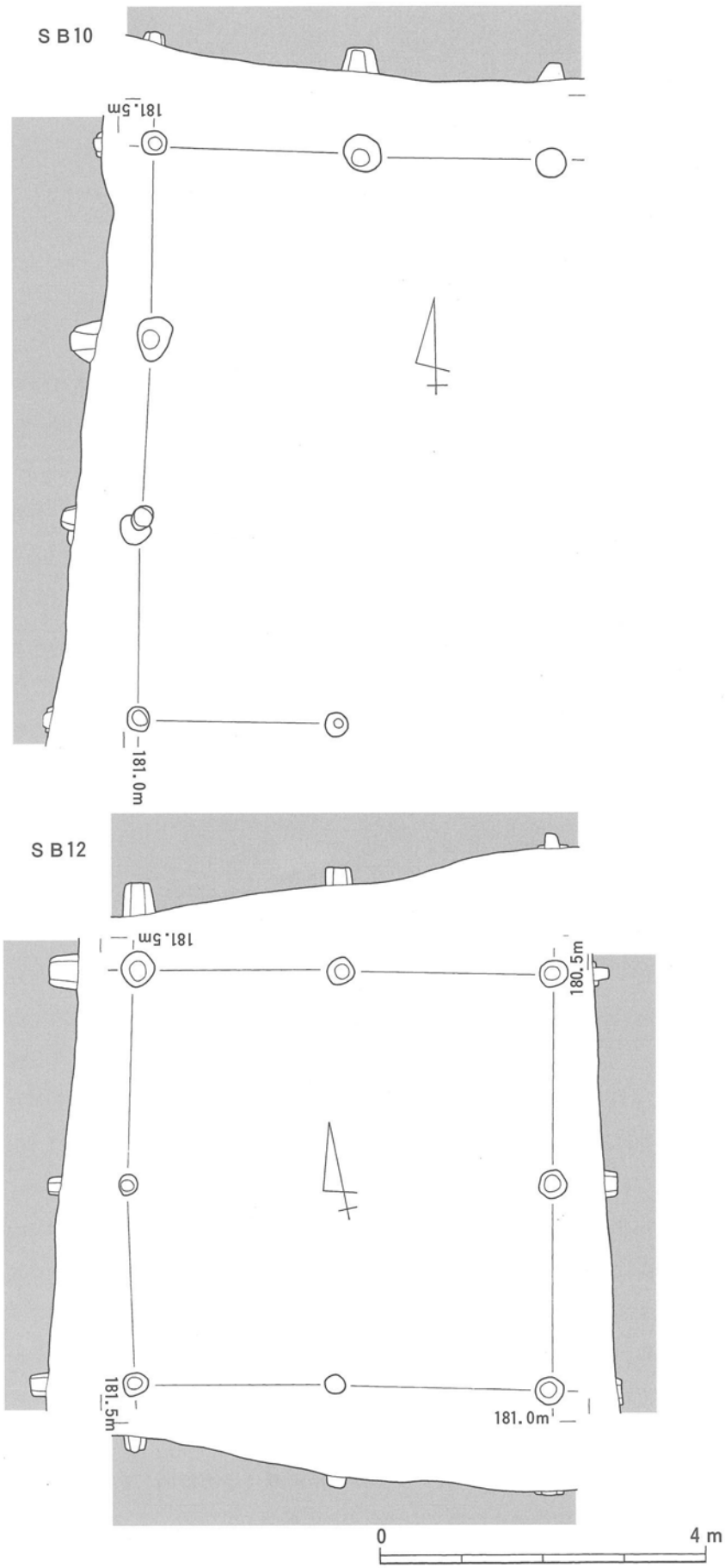
包含層出土遺物（第94・96図）

杯　162・163、164～166は古墳時代に遡る須恵器の杯蓋と杯身である。杯蓋は立ち上がり部と天井部の境界が曖昧で、天井部は丸みを帯びている。天井部にはヘラケズリを施している。162は口径13.1cm、器高4.2cmを測る。163は口径15.2cm、器高3.7cmを測る。

杯身は立ち上がり部が明確で底部に丸みを持つ165と、立ち上がり部が短く内傾化し、底部が平坦化した164・166がある。すべて底部外面はヘラケズリを施している。164の口径は11.9cm、165の口径は11.4cm、166は口径11.4cm、器高3.4cmを測る。

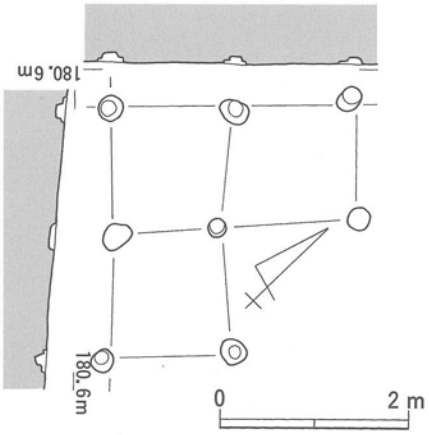
Ｂ地区の竪穴住居以外には古墳時代に属する遺構はないことから、本来は西山古墳群に伴うものであった可能性が高い。

167～169も須恵器の杯身である。おそらくカエリの付く蓋を伴うタイプであると思われる。164は丸みを帯びた底部を持ち、底部外面にヘラケズリを施さない。口径が11.9cm、器高が3.2cmである。168は平底化がすすみ、口縁部の立ち上がりも鋭くなっている。底部外面にはヘラケズリを施す。口径が11.5cm、器高が3.9cmである。169は平底で直立気味に立ち上がる口縁部を持つ。底部外面にはヘラケズリを施す。口径が11.6cm、器高が3.



第90図　掘立柱建物跡ＳＢ10・12

9cmである。



第91図　掘立柱建物跡ＳＢ11

杯Ａ　170は高台を持たず、蓋を伴わないと考えられる平底の杯身である。口径が13.6cm、器高は3.3cmを測る。

杯蓋　171・172は杯蓋である。平坦な天井部を持ち、いずれもつまみを持たない。171は口縁端部の折り返しが残るが、172ではほとんど認められない。天井部はヘラ切りのあと、ナデを施す。171は口径16.6cm、器高2.5cm、172は口径17.6cm、器高1.5cmを測る。

杯Ｂ　173～177は高台が付く杯身である。深さの点からみて２種類ある。体部の調整は回転ナデ、底部はヘラケズリである。173は口径12.4cm、器高4.0cmを測る。174は口径16.4cm、器高4.2cmを測る。175は口径13.9cm、器高5.9cmを測る。176は口径15.8cm、器高5.4cmを測る。177は口径15.5cm、器高6.8cmを測る。177・178は高台が底部と体部の境界より内側に付く。

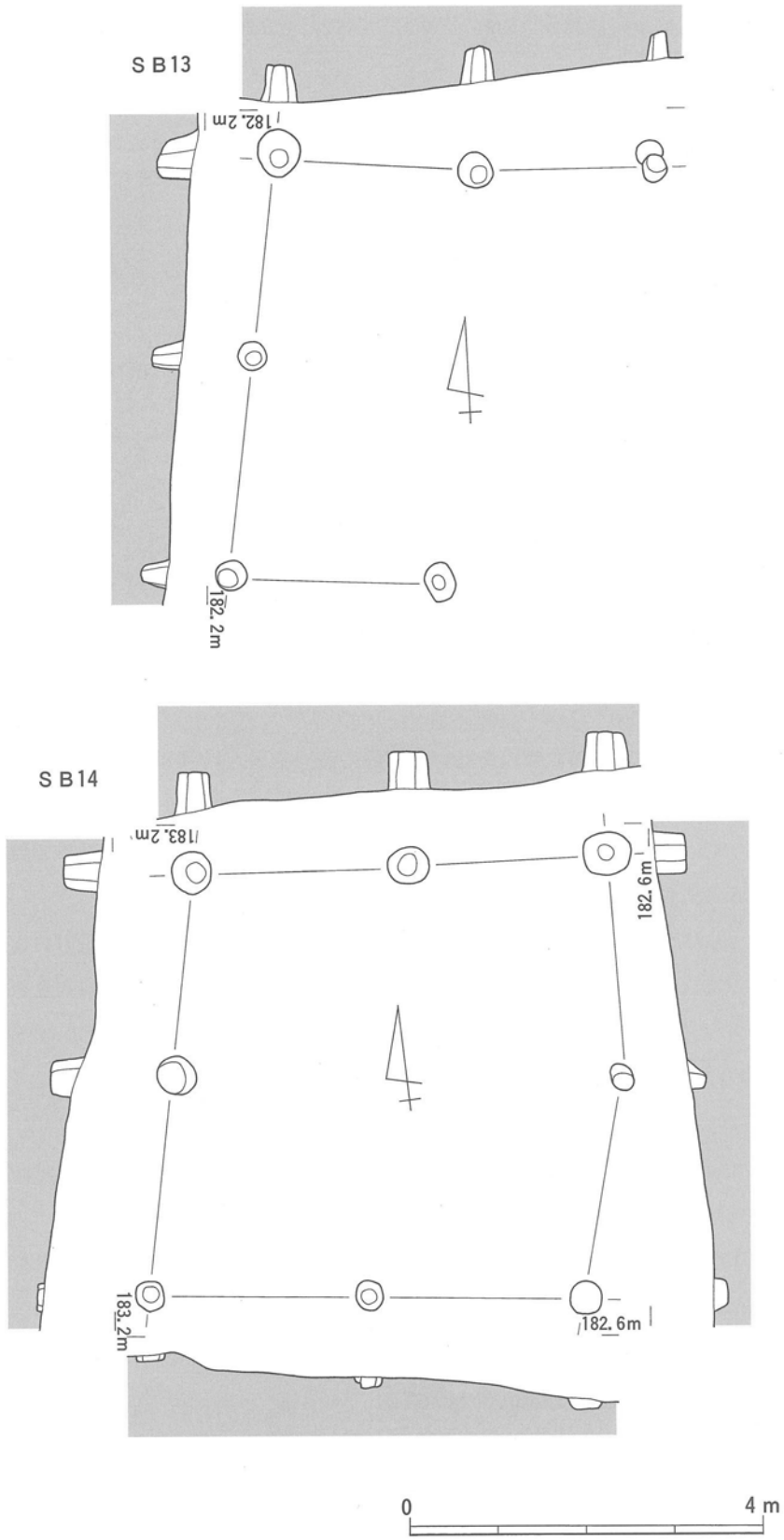
突帯椀　178は斜め上方に立ち上がる口縁部を持ち、体部中央に断面三角形の突帯を巡らせる突帯椀である。体部と底部の境界に外側に大きく踏ん張る長めの高台が付く。口径が16.8cm、器高が7.6cmを測る。

皿　平坦な底部から斜めに立ち上がる口縁部を持つ。底部にはヘラケズリを施すが、180はヘラ切りのあとナデを施す。179は口径15.2cm、器高2.3cmを測る。180は口径15.7cm、器高2.7cmを測る。181は大きく歪んでいるが口径約28.4cm、器高約2.8cmを測る。

高台付き皿　182は短く直立した高台の付く皿である。口縁部は緩やかに立ち上がり、端部を外側に折り曲げる。調整は回転ナデを施している。口径は13.7cm、器高は2.8cmを測る。

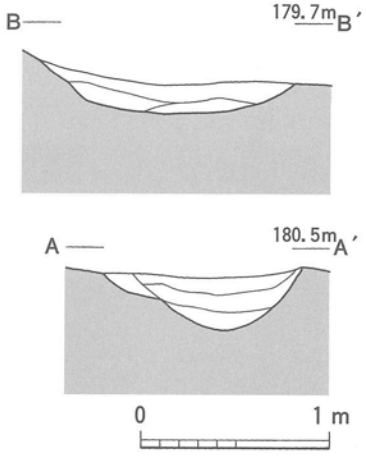
壺　183～186は壺である。残りが悪く、全体のプロポーションが明瞭ではない。183は口縁部内面にヘラ描きが施されている。口径は12.5cmである。184は大きく開く口縁部を持ち、口縁端部を短く直立させる長頸壺である。口径は11.0cmを測る。185は丸みを帯びた体部に高台が付く。底部径は7.1cmを測る。186は直立した筒状の体部にやや外側に開く高台が付く。底部径は16.0cmである。

平瓶　187は残りが極めて悪いため、口径・器高等は不明であるが、丸みを帯びた体部を持つ平瓶である。古墳時代に遡るものと考えられる。



第92図　掘立柱建物跡ＳＢ13・14

甕　　口縁端部の形状が異なるが、体部の調整はいずれもタタキを施している。189は体部外面にカキ目を施す。188の口径は25.8cm、189の口径は24.4cmを測る。



第93図　溝ＳＤ03断面図

鉄製品　　F40は残存状況が悪く、形態を特定できないが、鋲を留めたと考えられる孔が２個所あることから、馬具の一部である可能性を持つ。

F41は椀型鉄滓である。直径4.4cm、厚さは最大で1.6cmを測る。

銭貨　　F42は寛永通宝である。表面の腐食が進み、字体がやや不鮮明である。

ＳＢ04出土遺物（第95図）

杯　　190は平底から内彎して立ち上がる口縁部を持つ。底部外面はヘラ切りのあとナデを施す。口径は12.0cm、器高3.4cmを測る。

柱穴出土遺物（第95・96図）

191は口縁端部外面に段を持つ須恵器の蓋である。口径は17.4cmを測る。ＳＰ03から出土した。

192は大きく肩が張り、短く直立する口縁部を持つ平底の須恵器の短頸壺である。口径は8.8cm、器高は10.5cmを測る。ＳＰ01から出土した。

193は直立気味で筒状の体部を持つ須恵器の壺の底部である。底径は10.6cmを測る。

F38は細根式の鉄鏃の基部であると思われる。残存長4.2cmを測る。ＳＰ02から出土した。

ＳＤ01出土遺物（第95図）

194と195が出土した。

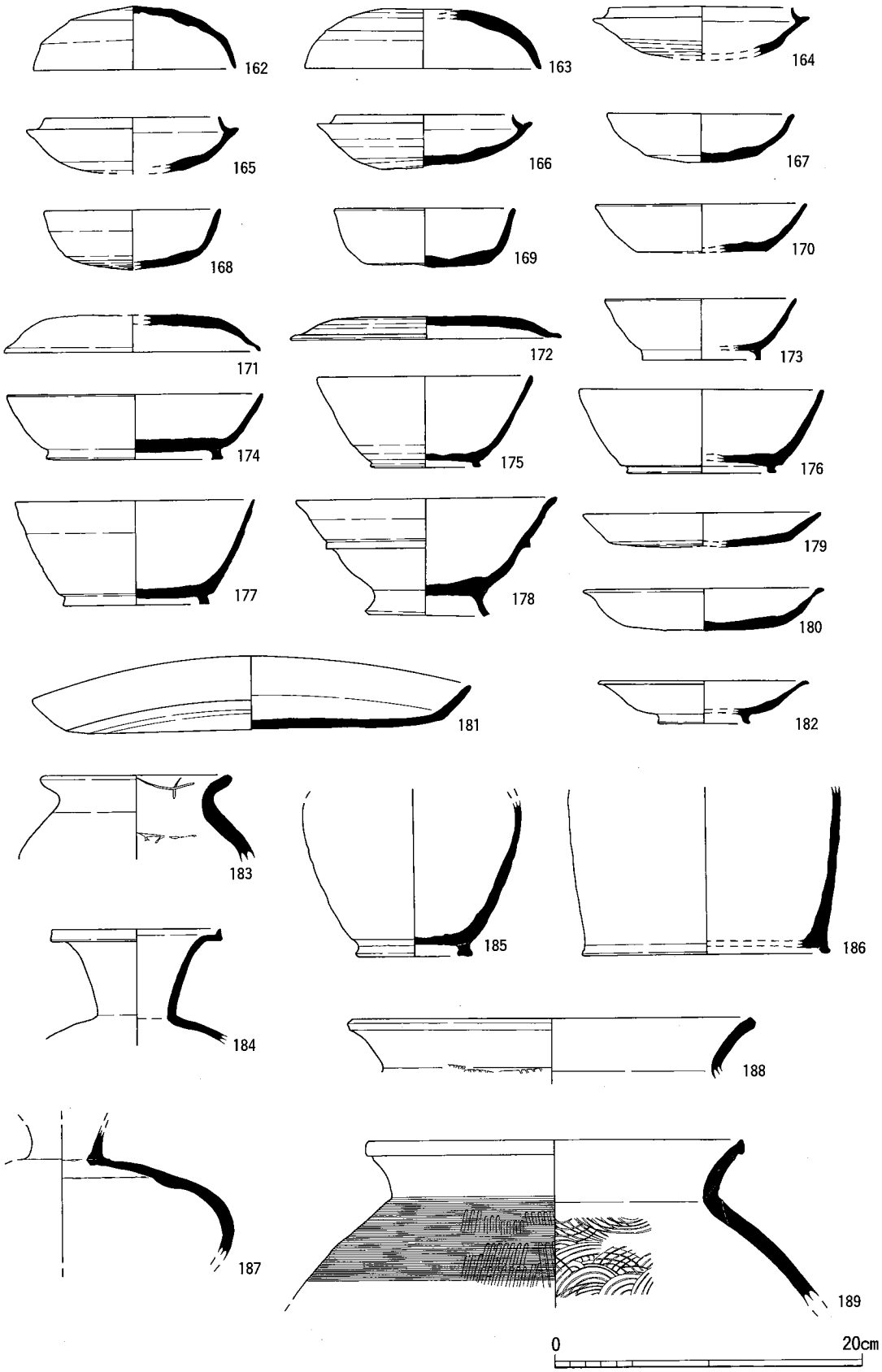
杯蓋　　194は平坦な天井部を持ち、口縁端部が短く直立する須恵器の杯蓋である。つまみは持たず、天井部中央はわずかに凹む。口径14.6cm、器高2.4cmを測る。

甕　　195は大きく開く口縁部を持つ、長胴の土師器の甕である。体部はタタキ成形を行い、内面に当て具の痕跡が明瞭に残る。須恵器的な調整技法が使われており、焼成の極めて悪い須恵器であることも考えられる。全体に大きく歪んでいるが、口径は20.6cm、胴部最大径は22.3cm、器高は32.5cmを測る。

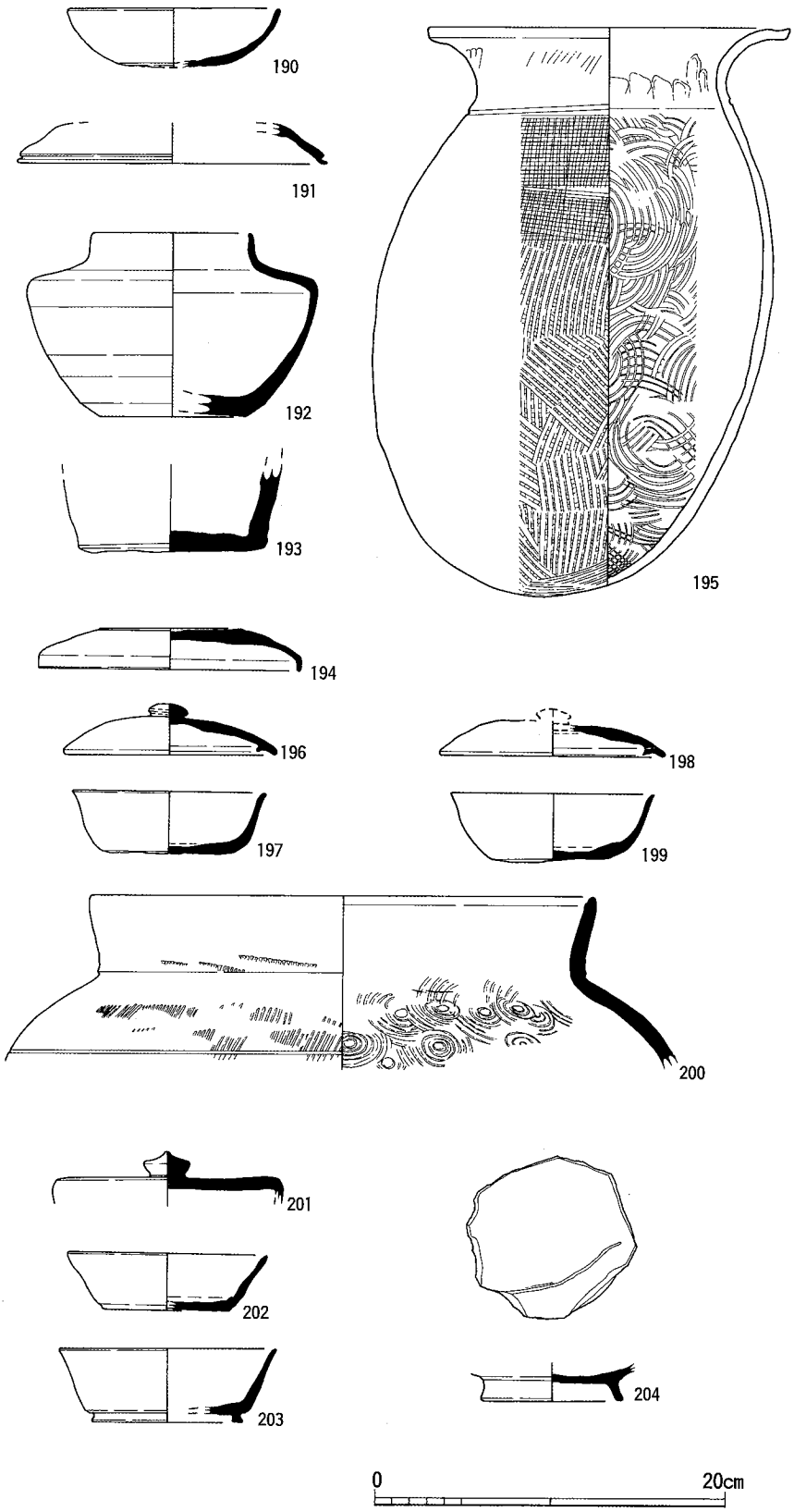
ＳＤ02出土遺物（第95・96図）

196～200とF33～F37・F39が出土した。

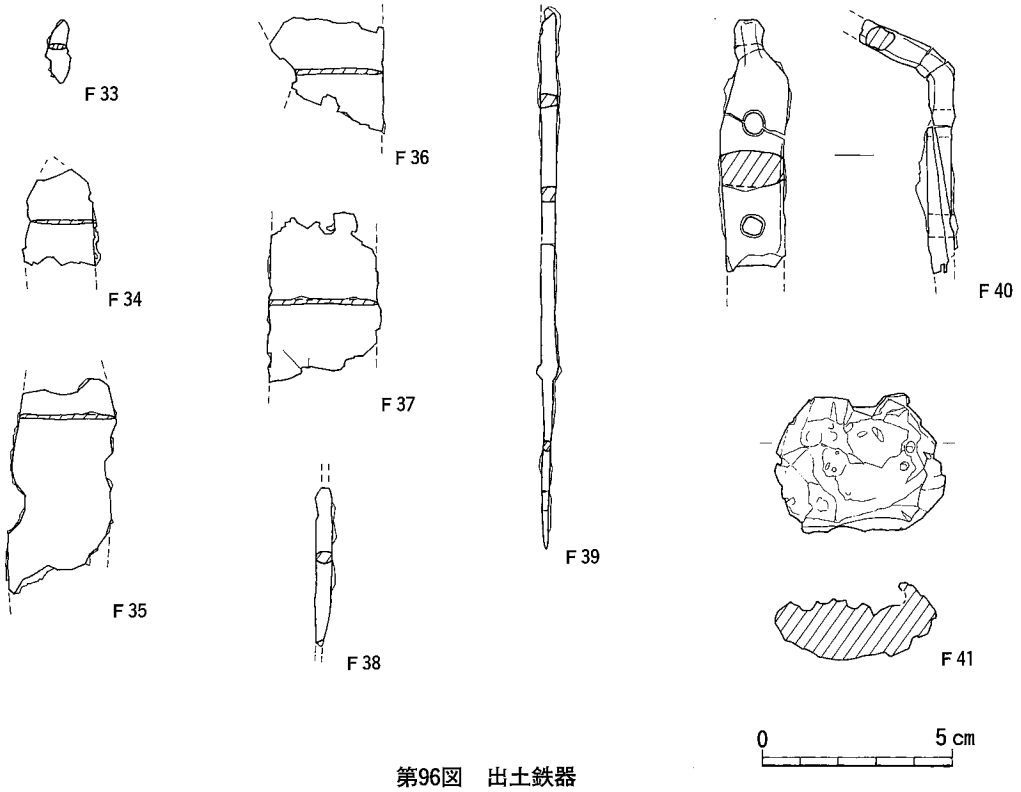
杯Ｇ　　196・198は丸い天井部につまみを持ち、内面にカエリがある杯蓋である。198はつまみの部分が欠損している。196は口径が11.9cm、器高が2.95cmを測る。198は口径が12.4cm


162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
0
20cm

第94図　出土土器（１）


190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
0
20cm

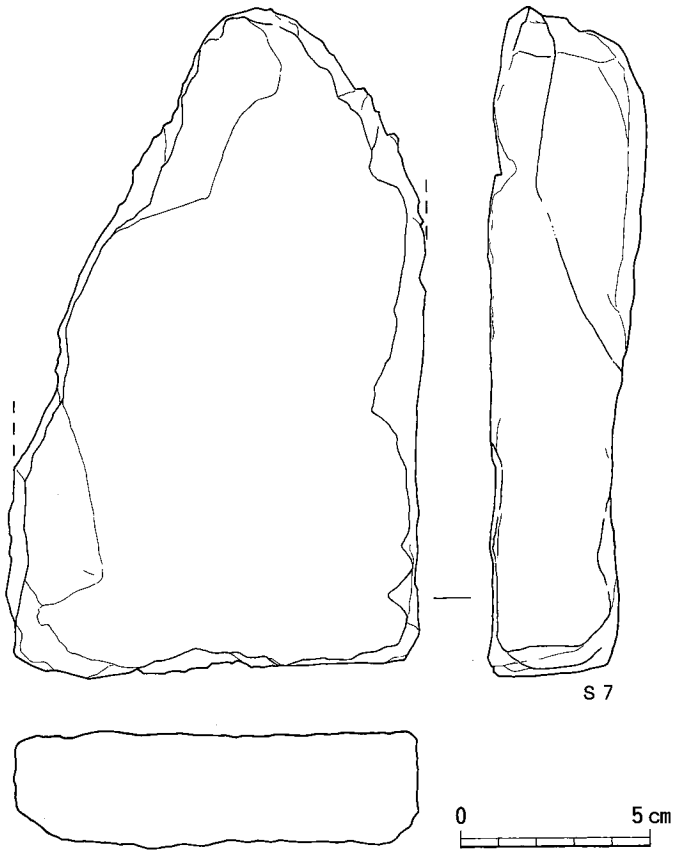
第95図　出土土器（２）



第96図　出土鉄器

を測る。197・199は平底から直立気味に立ち上がる口縁部を持つ杯身である。底部はヘラ切りのあとナデを施している。197は口径が10.8cm、器高が7.6cmを測る。199は口径が11.3cm、器高が3.9cmを測る。196と197はいずれも完形品で、東西に並んで出土した。

甕　200は直立気味に立ち上がる口縁部を持つ須恵器の甕である。口縁端部は内側に肥厚する。体部の成形はタタキを行い、内面に当て具の痕跡が明瞭に残る。口径は28.6cmを測る。

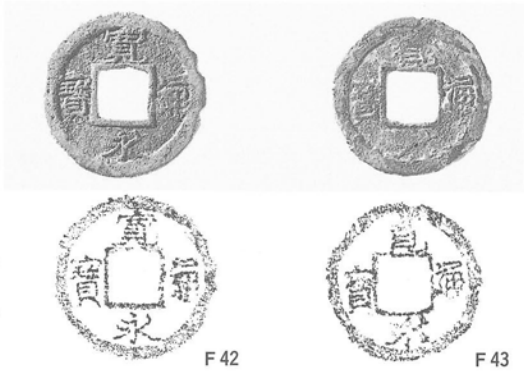


第97図　出土石器

鉄鎌　F33～F37は細片と化しているが、本来、同一個体であったと思われる。形状からみて鉄鎌と考えた。刃部の最大幅は約3cm、厚さは約2mmである。

鉄鏃　F39は細根式の鉄鏃である。先端が失われているため、片刃、両刃の判別は困難である。最大残存長14.3cmを測る。

砥石　S7は砂岩製の砥石である。風化が進み、一部欠損しているが本来は10.8×17.5cmの長方形であったと思われ、厚さは3.0cmを測る。使用痕は上面で認められた。



第98図　出土銭貨

Ｂ地区出土遺物（第95図）

蓋　201は平坦な天井部に幅広の宝珠形つまみが付き、口縁部が直立する須恵器の蓋である。壺に伴うものと思われる。

杯Ａ　202は平底から斜めに立ち上がる口縁を持つ、須恵器の杯である。口径は11.2cm、器高は3.3cmを測る。

杯Ｂ　203は高台を持つ須恵器の杯である。高台は底部と体部の境界より内側に付く。口径は12.2cm、器高は4.2cmを測る。

椀　204は外側に踏ん張る高台が付く須恵器の椀である。内面にヘラ描きが認められる。底径は7.8cmを測る。

５．まとめ

西山遺跡では掘立柱建物を14棟検出した。また、出土遺物としてはＳＤ02の杯Ｇといった飛鳥時代のものや、包含層出土の杯Ａ・Ｂ・皿と言った奈良時代のもの、突帯椀・高台付き皿と言った平安時代のものまでの長期間にわたっている。したがって、これらの掘立柱建物群は複数の時期にわたって営まれたものといえる。建物の方位や遺物を参考に、飛鳥・奈良・平安の３時期に大別する。

ＳＤ02の出土遺物は飛鳥時代のものであり、ＳＢ04出土の杯身も古い様相を示している。ＳＤ02がＳＢ03と関連するものであれば、ＳＢＢ02・ＳＢ04がこの遺跡の最初の時期に当たる。

続く時期のものは、前述の２棟とＳＢ07を除いた、棟軸がほぼ座標北を向くＡ地区の掘立柱建物やＢ地区のＳＢ09・ＳＢ10といったところが該当すると思われる。しかし、奈良時代の遺物にも時期差が認められるため、さらに細分できる可能性がある。

そして、平安時代のものとしては、Ａ地区のＳＢ07とＳＢ09・ＳＢ10を除くＢ地区の建物が該当するものと思われる。ただし、これらの掘立柱建物の中には、ＳＢ11のように規模・方位が全く異なるものもあり、検討の余地を残している。

最後に、西山遺跡の性格について考えてみたい。Ａ地区では掘立柱建物に２箇所と屋外に１箇所の計３箇所で焼土面が確認されている。また、出土遺物の中には須恵器的な技法を用いた土師器や鉄滓といった特徴的な遺物が含まれている。周辺には須恵器の生産拠点や奈良時代の鍛冶遺跡も知られていることから、西山遺跡もそれらと関連する工房的な性格を持った集落であると思われる。

第　3　章

西山西遺跡群の調査

第３章　西山西遺跡群

第１節　地形と遺跡の立地

西山西遺跡群は、北方の平方遺跡、下西山遺跡から続く丘陵の一支尾根に立地する。これらの遺跡は、本来同一の丘陵上に立地していたのであるが、北摂ニュータウン建設の初期に主要部が開発されてしまったため、一見隔絶しているような景観を見せている。両者とも北摂ニュータウン建設に伴う一連の埋蔵文化財調査によって見いだされた遺跡である。

遺跡が立地する支尾根は最高所で標高211.6m、最低所で190.0mを測る。比高差は21.6m、この間の平均斜度は約15°で、遺跡立地の条件としてはかなりの急斜面といえよう。

尾根は概ね東－西方向に延びるが、その両側は調査開始時点で既に開削されていたため幅は不明である。南北に延びる主尾根にとりつく最高所は平坦面となっている。主尾根から急斜面を下った206～208m付近で西山西古墳群が造営されており、傾斜はやや緩やかとなる。202m付近から支尾根の張り出しが明瞭となり、この付近で掘立柱建物跡が検出されている。さらに197m付近で南北２本の小尾根に分かれ、その間がわずかながら谷地形を呈するようになる。主要遺構は北側小尾根の194～197m付近で検出されている。これより下方はさらに急斜面となり190m付近に至るが、以下は既に埋め立てられていたため、微地形の状況、遺構の有無は不明である。

第２節　調査の方法と経過

調査にあたっては、まずトレンチによる確認調査を実施した。トレンチは主尾根中央部、支尾根上部・下部に設定し、人力による調査をおこなった。その結果、西山西古墳群が検出されたため、さらにトレンチを追加して、古墳群の範囲・規模を確認した。

確認調査の成果を受けて、支尾根全域の全面調査を実施した。全面調査にあたっては、重機による表土の除去を行った後、人力による調査を実施した。図化記録は国土座標を基準としておこない、空中写真の撮影をあわせて実施した。各年度の調査体制は、下記のとおりである。

確認調査（昭和62年度）

調査担当者

兵庫県教育委員会社会教育・文化財課

埋蔵文化財調査係

主　　任　　深井明比古

技術職員　　岸本一宏

全面調査（平成３年度）

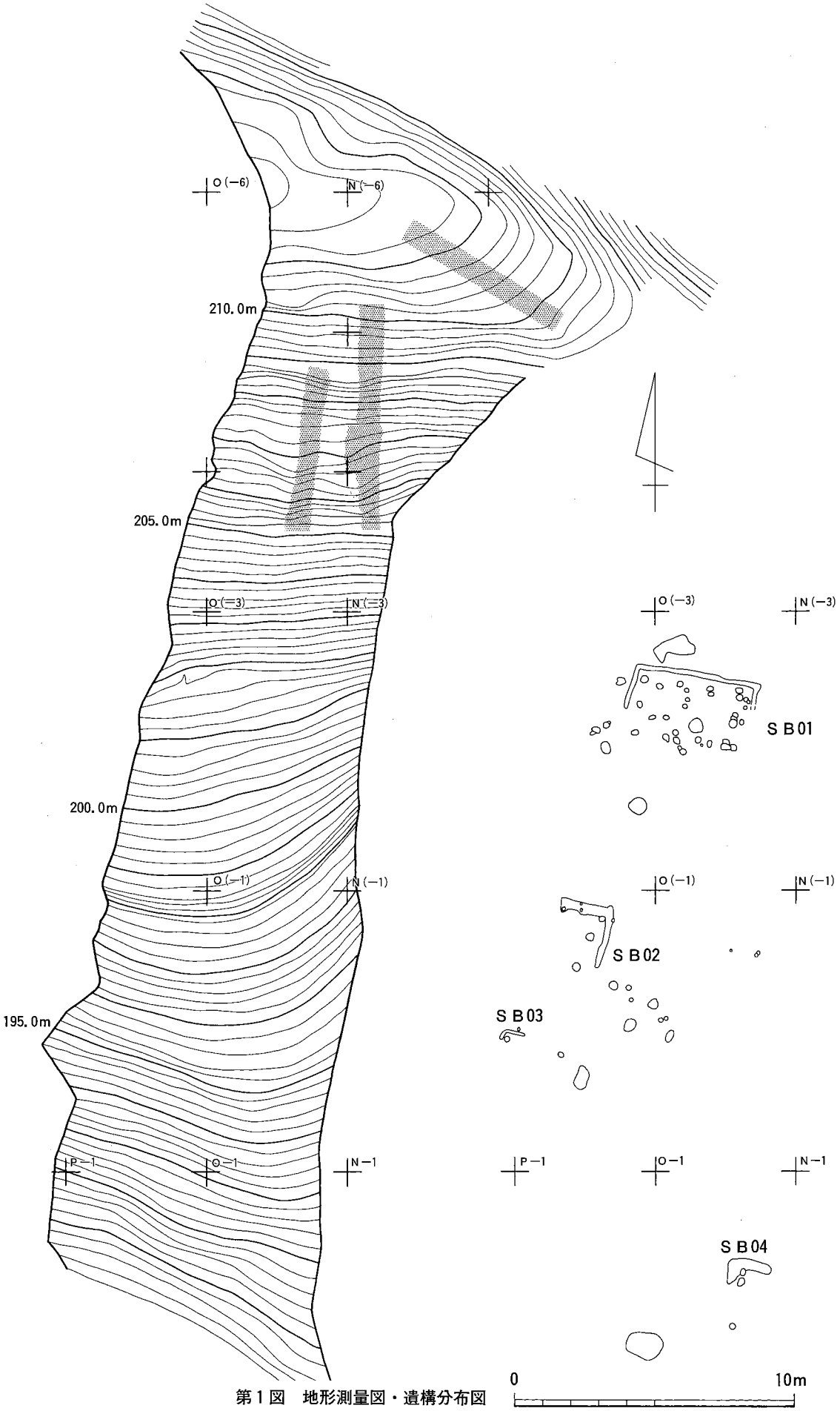
調査担当者

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査第１課

技術職員　　久保弘幸

技術職員　　鐵　英記



第１図　地形測量図・遺構分布図

第３節　西山西古墳群

概要

西山西古墳群は、標高205.8m～207.0mにかけて造営されている。３基が検出されたが、同一等高線上にあって、溝を共有するほぼ同規模の方墳であることから、比較的短期間に造営されたものと推測される。１号墳以南には墳丘は認められず、３号墳はその北半が開削により消滅していた。このため古墳群全体の規模は不明で、３号墳の北側に、さらに墳丘が存在していた可能性が残る。

墳丘の規模と築造方法（第２～４図）

１～３号墳は、いずれも一辺４～５ｍの方墳である。斜面上方側を深く掘り込んで、直線的な溝を設け、これに直交する溝を斜面下方に向けて設けることによって墳丘を区画しており、弥生時代の方形周溝墓に見られるような溝の共有形態を見せている。主体部はすべて地山を掘りこんで設けられており、その状況から墳丘盛土は小規模であったものと思われる。墳丘・主体部の規模は、一覧表に示したとおりである。

１号墳

１号墳は西山西古墳群のうち、最も東側に位置する。確認調査で、墳丘中央に１基の土坑が検出されており、これが主体部である。概ね長方形を呈する土坑内には、厚い炭の堆積が認められた。

２号墳

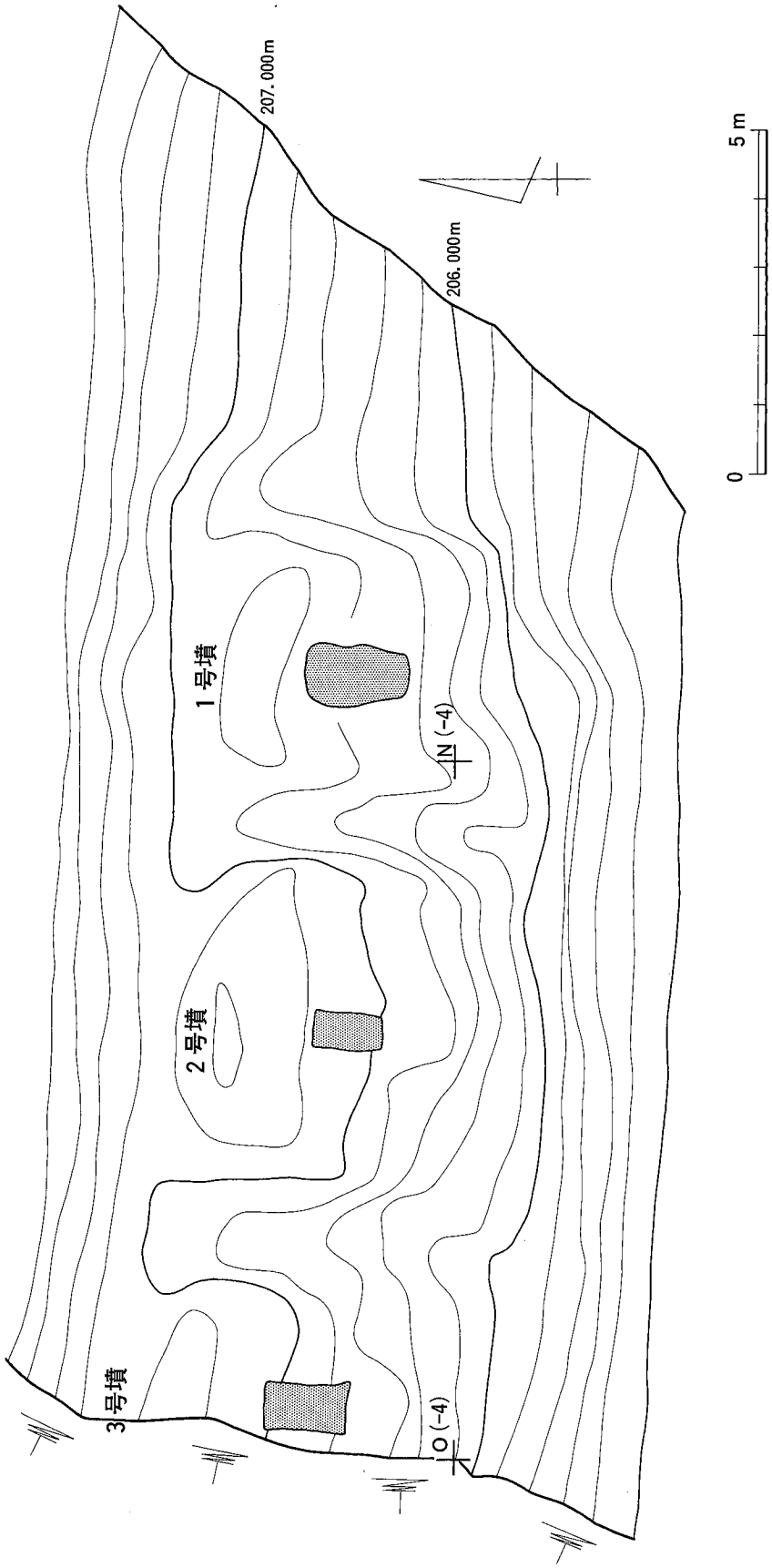
２号墳は西山西古墳群の、中央に位置する。墳丘中央に１基の土坑が検出されており、これが主体部である。長方形を呈する土坑内には、厚い炭の堆積が認められた。また土坑の掘り方内には神戸層群産出の凝灰岩の板石が立てられていた。特に一方の小口側には、土坑底を若干掘り下げて板石が立てられており、あたかも組み合わせ式の石棺にも似た状況を見せている。調査時に確認したところでは、石材の内側には木棺を埋設したと思われる鮮明な痕跡が認められた。

３号墳

３号墳は最も西側に位置し、墳丘中央に１基の長方形の主体部を設ける。主体部の構造は２号墳とほとんど同一で、規模も近似している。やはり内部に厚い炭の堆積が見られ、木棺を埋設した痕跡が認められた。

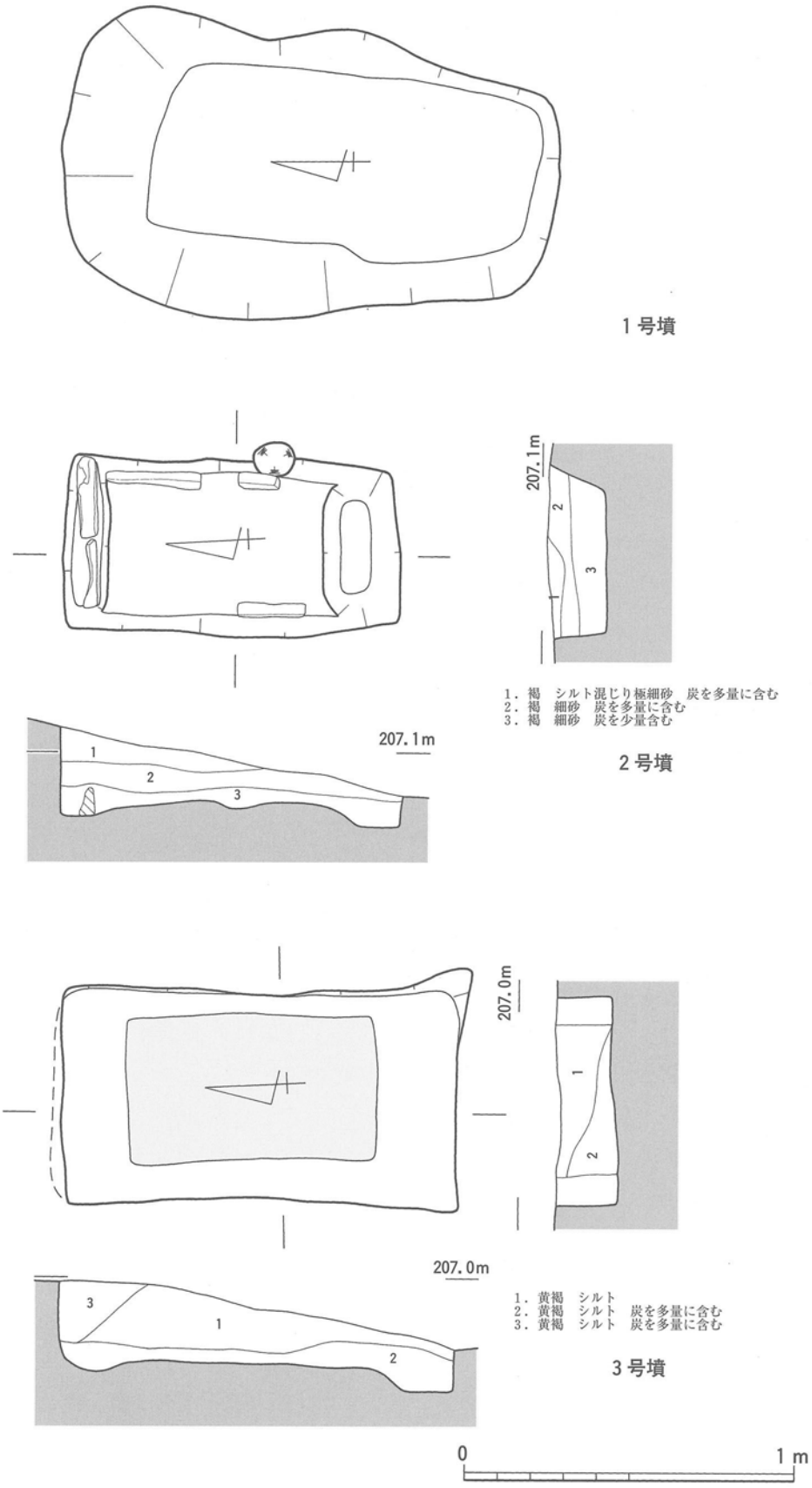
西山西古墳群の墳丘・主体部規模一覧表

号　墳	墳　丘　規　模	主　体　部　規　模	備　　考
1	3.7m　×　4.8m	0.96m　×　1.50m	
2	5.0m　×　5.4m	0.55m　×　1.02m	凝灰岩板石を埋置
3	(2.4)m　×　5.0m	0.67m　×　1.17m	凝灰岩板石を埋置



第２図　１～３号墳墳丘測量図

第３図　１～３号墳墳丘断面


1号墳
207.1m
2
3
1
2
3
207.1m
1．褐　シルト混じり極細砂　炭を多量に含む
2．褐　細砂　炭を多量に含む
3．褐　細砂　炭を少量含む
2号墳
207.0m
1
2
207.0m
3
1
2
1．黄褐　シルト
2．黄褐　シルト　炭を多量に含む
3．黄褐　シルト　炭を多量に含む
3号墳
0
1 m

第４図　１～３号墳主体部

出土遺物（第５図１・２）

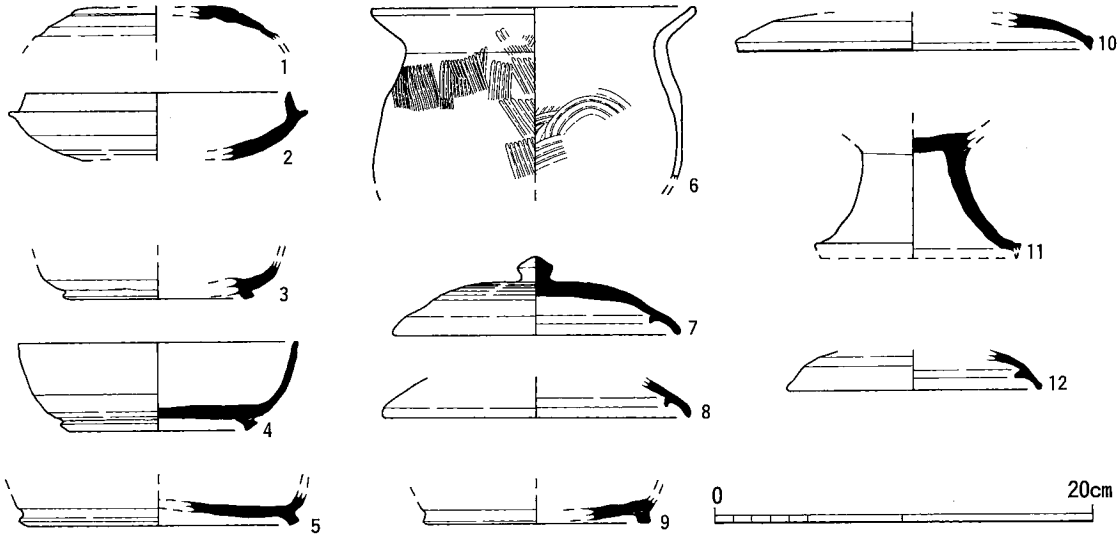
西山西古墳群における出土遺物は、極めて僅少である。主体部からの出土遺物は皆無で、わずかに２号墳および３号墳の周溝から須恵器の小片が出土したにすぎない。

蓋杯　１は須恵器蓋杯の蓋天井部である。２は杯身である。底部を欠くが、わずかにヘラ削りが施された部位をとどめる。口縁部の立ち上がりは内傾して短く、ＴＫ－209型式に属すると考えてよかろう。

小結

確認調査の際に検出された１号墳の主体部も含め各古墳の主体部は、構造・規模・内部に炭の堆積が認められることなど共通点が多い。主体部の規模からは、成人の直接的な埋葬がおこなわれたとは考えがたい。ここで考慮される可能性は、（１）すべて小児の埋葬である、（２）火葬墓である、（３）ある種の改葬である、の３点であろう。人骨の出土がなかったため断定には至らないが、炭の大量検出から勘案するならば、（２）の可能性が最も高いものと考えて大過ないのではなかろうか。

西山西古墳群の時期は、わずか２点の須恵器資料のみに頼らざるをえない。仮に今、これを７世紀前半に考えるならば、当該期の社会的条件からは、（２）の可能性はさほど無理なく受容できる。



第５図　出土遺物（１）

第４節　西山西遺跡

概要

西山西遺跡は、標高190m～202mの間で検出された遺構群で構成される。遺構には、掘立柱建物跡とこれに伴う溝、土坑等がみられるが、急斜面に立地するため、いずれの遺構も遺存状況が悪く、全体像の把握は困難である。また出土遺物も僅少で、図示できるものは１点にすぎない。

掘立柱建物跡（第６・７図）

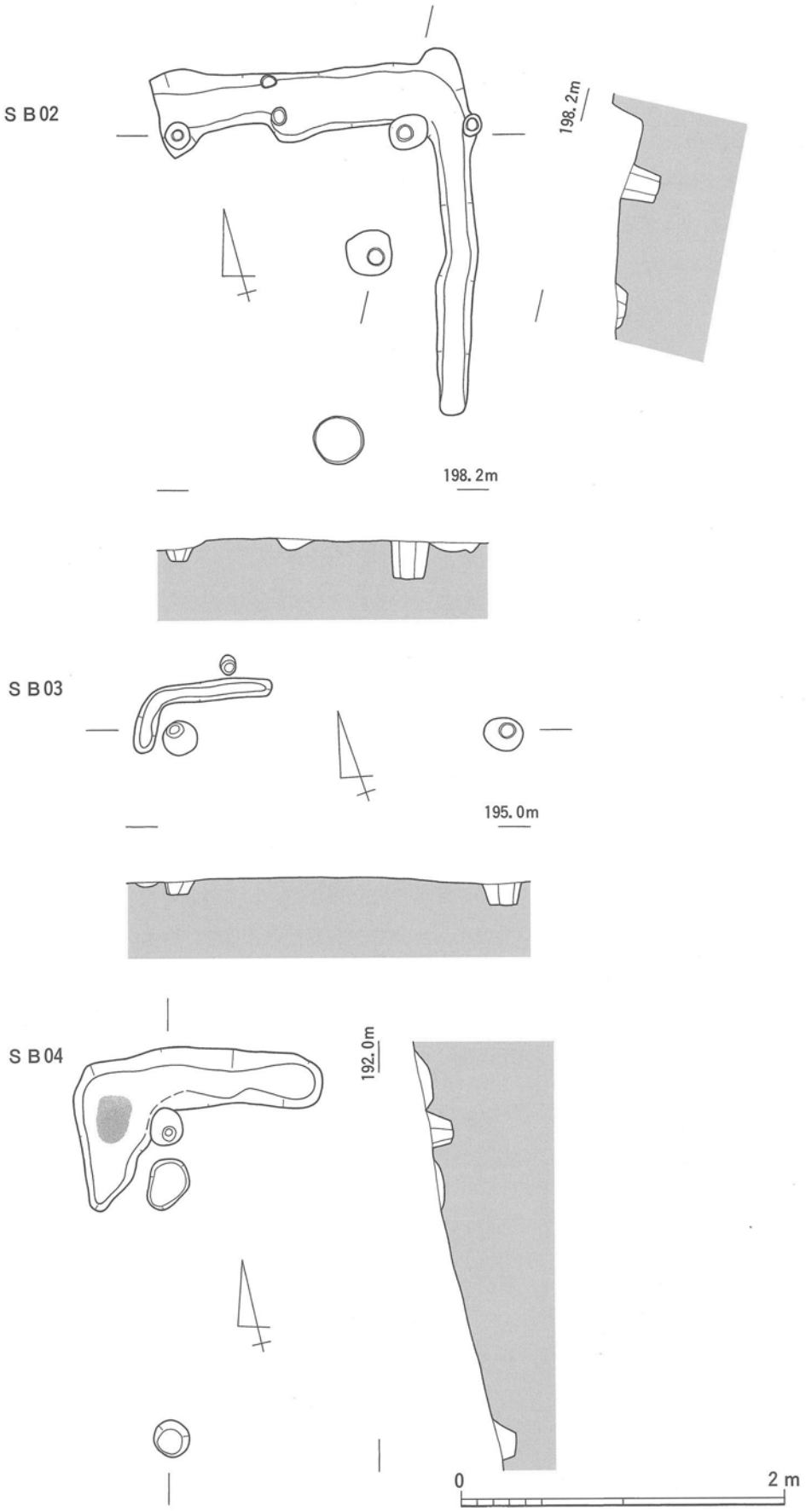
４棟が検出された。最高所に位置するＳＢ01の遺存状況が最も良好で、ある程度全容を復原できる。いずれも斜面上方側に、水の流入を防止するためと考えられる溝を設け、その下方側に柱穴が検出されている。

ＳＢ01　標高202m付近に位置する。斜面上方側に長辺８ｍのコの字形の溝を設け、その下方に長辺6.8m（３間）、短辺3.8m（２間）の建物跡が検出された。柱穴は２棟分が重複しており、１回の建て替えがおこなわれたことを示している。

ＳＢ02　標高197～198mで検出された。その北半はすでに破壊されており、建物跡の南端部のみが依存していた。斜面上方側から建物跡南辺にＬ字形の溝が設けられており、その内側に短辺側の柱穴３基が検出された。現状では柱穴に重複は認められない。

ＳＢ03　標高195m付近に位置する。建物跡の北側角を示す溝がＬ字形に検出された。柱穴は２基が検出されたのみであり、他の部分は斜面の浸食によって流失したものと思われる。建物跡の規模は不明である。溝内より須恵器杯が出土している（第５図３）。３は杯底部である。高台は外方に張り出した形状をみせる。小片のため詳述しがたいが、概ね８世紀代に属するものと思われる。

第６図　掘立柱建物跡１



第７図　掘立柱建物跡２～４

ＳＢ04　　標高192mで検出された。建物跡の北側角を示す溝がＬ字形に検出された。ＳＢ03と同様の状況であり、柱穴は２基が検出されたのみである。

その他の遺構と遺物

掘立柱建物跡以外の遺構としては、土坑および建物跡を復原できない柱穴等がある。いずれも出土遺物は僅少で、その性格は不明である。

出土遺物（第５図４～12、第６図Ｆ１）

４・Ｆ１はＳＸ02より、５・６、10・11は遺物包含層からの出土、12は表面採集の遺物である。また７～９は確認調査Ｂトレンチ内で検出された溝より出土した。６のみが土師器であり他は須恵器である。

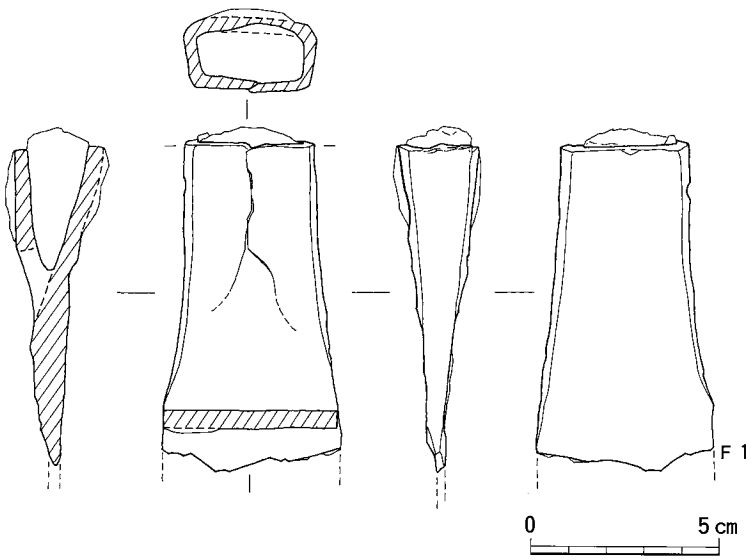
須恵器　　５・10・11は概ね奈良時代～平安時代前半に属していると思われる。また７～９・12は７世紀代に含められるものであろう。

土師器　　６は内面に同心円タタキが見られ、須恵器と同様の製作技術が用いられている特異な甕である。

鉄斧　　Ｆ１はＳＸ02より出土した。袋状に折り曲げて、基部を作出している。

小結

西山西遺跡は、奈良時代～平安時代前半の掘立柱建物を中心とした遺跡である。丘陵斜面という立地条件からは、一般集落とは異なる性格が推定されるが、今回の調査では特に遺跡の機能・性格を判断する根拠となるような遺物は出土しなかった。敢えて想像をたくましくするならば、近接する奈良山遺跡のような工房的機能、山林資源の開発に伴う機能などが挙げられようが、想像の域を出ない。ただ当該時期の遺跡に対する、われわれの一般的な理解にない立地を示す遺跡があるという点で、今後の丘陵地における調査に示唆するところは大きいであろう。



第８図　出土遺物（２）鉄斧

第　4　章

西山古墳群の検討

第４章　西山古墳群の検討

第１節　西山古墳群の変遷と群構成

西山古墳群は『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅰ』(以下『北摂Ⅰ』とする）所収の１～８号墳；16基の埋葬施設と、今回の『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅴ』に掲載した２・９～20号墳；11基の主体部を併せて、計20基の古墳；27基の主体部からなる。削平などで失われた分を除くとこれで１つの古墳群をほぼまるごと調査できたことになる。しかも主体部の大半は須恵器を副葬した木棺墓であることから、埋葬後の混入の少ない一括資料で古墳の変遷を追うことが可能である。そこでまず須恵器の型式変化に基づいて副葬品の一括資料を時期区分し、その上で古墳築造の変遷を復原したい。

１．副葬品からみた時期区分（第１～４図）

主体部の一括資料をもとにⅠ～Ⅴ期を設定し、『北摂Ⅰ』報告分と併せて掲載したのが第１～４図である。この図を子細にみると１つの主体部の資料の中でも結構ばらつきがあることが判る。つまり副葬の時点で型式的な差異をもった個体が同じ墓壙に入っている訳である。従ってこの図は土器の編年を表したものではなく、あくまでも時期ごとの古墳の様相や流れを示す程度のものだということをあらかじめ断っておく。

須恵器の型式名は田辺昭三氏の「陶邑編年」(田辺1981）を使用する。また実年代は近年の研究でかなり揺れ動いているが、ここでは『古代の土器５－１　７世紀の土器（近畿東部・東海編)』(古代の土器研究会1997）の年代観を用いる。

なお『北摂Ⅰ』の実測図の断面は須恵器が白抜き、土師器がトーンになっており本書とは異なっているのでご注意いただきたい。また主体部の名称についても「埋葬施設」という報告時の呼び方を踏襲している。

Ⅰ期

主体部　６号墳埋葬施設１

須恵器　蓋杯しかないが、法量の似通った良好なセットである。

蓋杯　器高が高く、口縁端部に沈線状の面をもつ。蓋の肩部にはまだ稜線が残っている。口径は蓋が13.5～14.5cm、身が12～13.5cm程度、器高は５cm前後である。

時期　陶邑編年のＭＴ15の段階で、６世紀前葉に位置付けられる。

Ⅱ期

主体部　４号墳埋葬施設２、６号墳埋葬施設５（墓壙内)、６号墳埋葬施設６、19号墳主体部

６号墳埋葬施設５は墓壙内と墓壙外の遺物に明らかな時期差があるので、別の主体部に伴う副葬品として扱う。

須恵器　蓋杯が中心で、高杯・瑕がセットに加わる。須恵器は墓壙の棺外に置かれている。

蓋杯　器高・受け部の立ち上がりがやや低くなり、口縁端部は丸くなる。口径が最も大きくなる段階で、口径は蓋が14～16.5cm、身が13～15cm程度、器高は４～５cmである。

高杯　短脚の有蓋高杯は長方形１段の透かしがあり、端部に段をもつ。長脚の無蓋高杯は長方形１段の透かしがある。

瑟　頸部は付け根が比較的太く、細かい波状文を施す。

時期　陶邑編年のＴＫ10の段階で、６世紀中葉に位置付けられる。

Ⅲ期

主体部　６号墳埋葬施設４、８号墳埋葬施設

須恵器　６号墳埋葬施設４は棺内の蓋杯Ｐ14～17と棺外の遺物にやや時期差が認められる。

蓋杯　受け部の立ち上がりがさらに短くなり、内傾が強まる。口径は蓋が14～15cm、身が12～13cm程度、器高は４～５cmである。

提瓶　６号墳埋葬施設４のＰ13は口縁端部に玉縁状の面をもつ。８号墳埋葬施設のＰ４は体部の幅が分厚い。

時期　陶邑編年のＴＫ43の段階で、６世紀後葉に位置付けられる。

Ⅳ期

主体部　１号墳埋葬施設１、２号墳木室、３号墳埋葬施設、５号墳埋葬施設１、６号墳埋葬施設２、６号墳埋葬施設３、６号墳埋葬施設５（墓壙外）、９号墳主体部、12号墳主体部、16号墳主体部、18号墳木室奥壁、18号墳木室中央

主体部の数が最も多いのは造墓活動が活発であるというよりも、時期幅の設定が長いことによると思われる。

須恵器　時期幅が長いことと相まって変異の幅が大きく、さらに細分が可能である。

蓋杯　口径は蓋が12.5～15cm、身が10～14cmの幅があり、器高は3.5～4.5cmである。しかし例えば杯身の口径が９号墳主体部で12～14cm、２号墳木室や12号墳主体部で11.5cm前後、16号墳主体部や18号墳木室中央で10～11cmというように段階的なまとまりを示す。

高杯　18号墳木室奥壁の有蓋高杯（76～78・82～84・87）は口径12～14cmで、９号墳主体部の杯身とほぼ同じ値を示す。無蓋高杯の法量は９号墳主体部の18が口径16.3cm、器高17.6cm、18号墳木室奥壁の89が口径14.3cm、器高15.2cm、５号墳埋葬施設１のＰ27が口径12.2cm、器高10.3cmで、小型化・扁平化の傾向を示す。

提瓶　９号墳主体部の22・23に比べ、５号墳埋葬施設１のＰ14は耳部が粘土円板の貼り付けで体部が両面とも丸く、底部が尖り気味になるなど提瓶として新しい様相を示す。

平瓶　１号墳埋葬施設１のＰ７は耳部が鉤状で底部が丸く、平瓶の中でも古い様相を示す。

時期　陶邑編年のＴＫ209の段階で、７世紀前半に位置付けられる。その中で主体部を古相・中相・新相の３段階に細分すると以下のようになる。

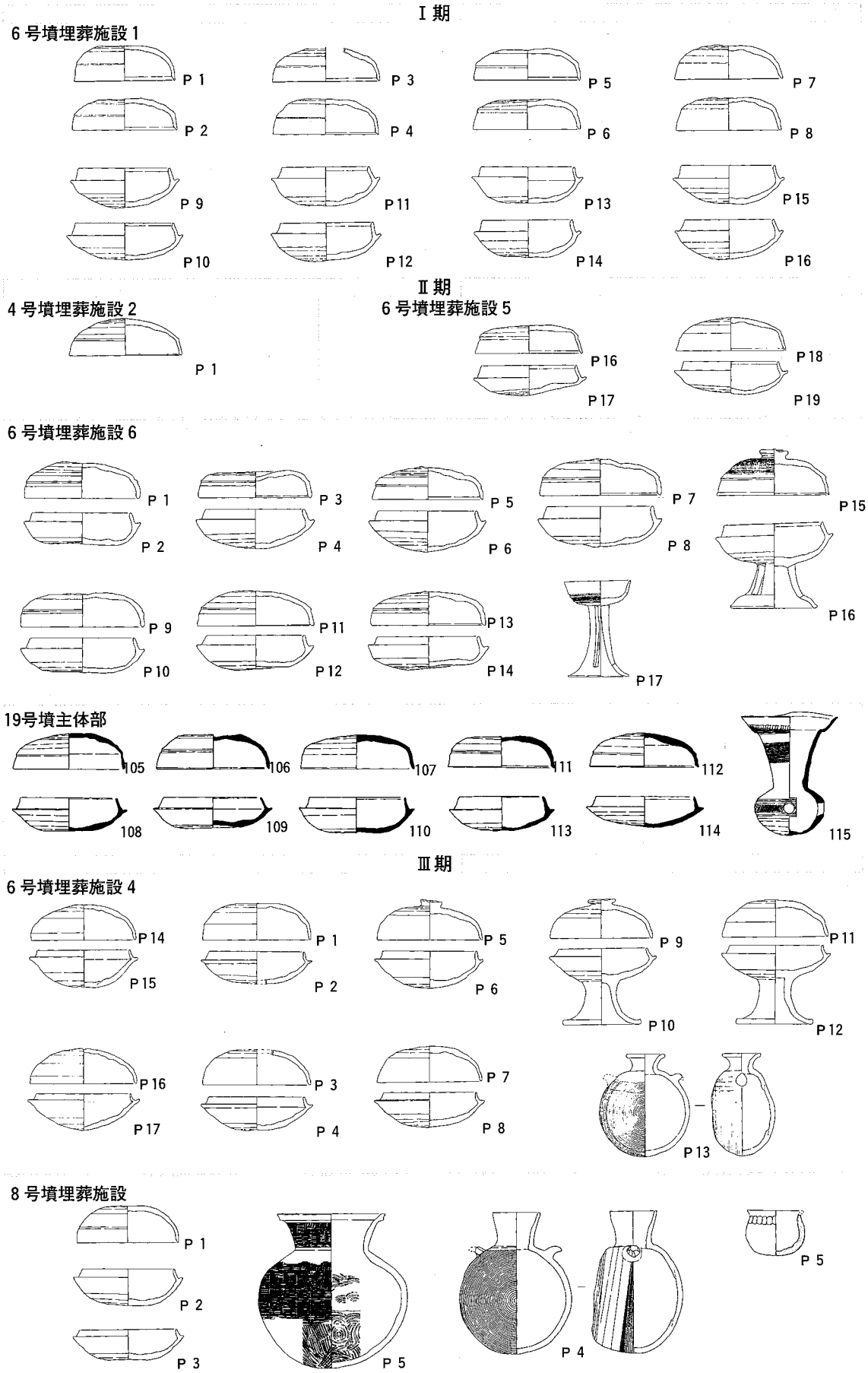
古相　６号墳埋葬施設２・９号墳主体部・18号墳木室奥壁

中相　１号墳埋葬施設１・２号墳木室・５号墳埋葬施設１・６号墳埋葬施設３・６号墳埋葬施設５（墓壙外）・12号墳主体部

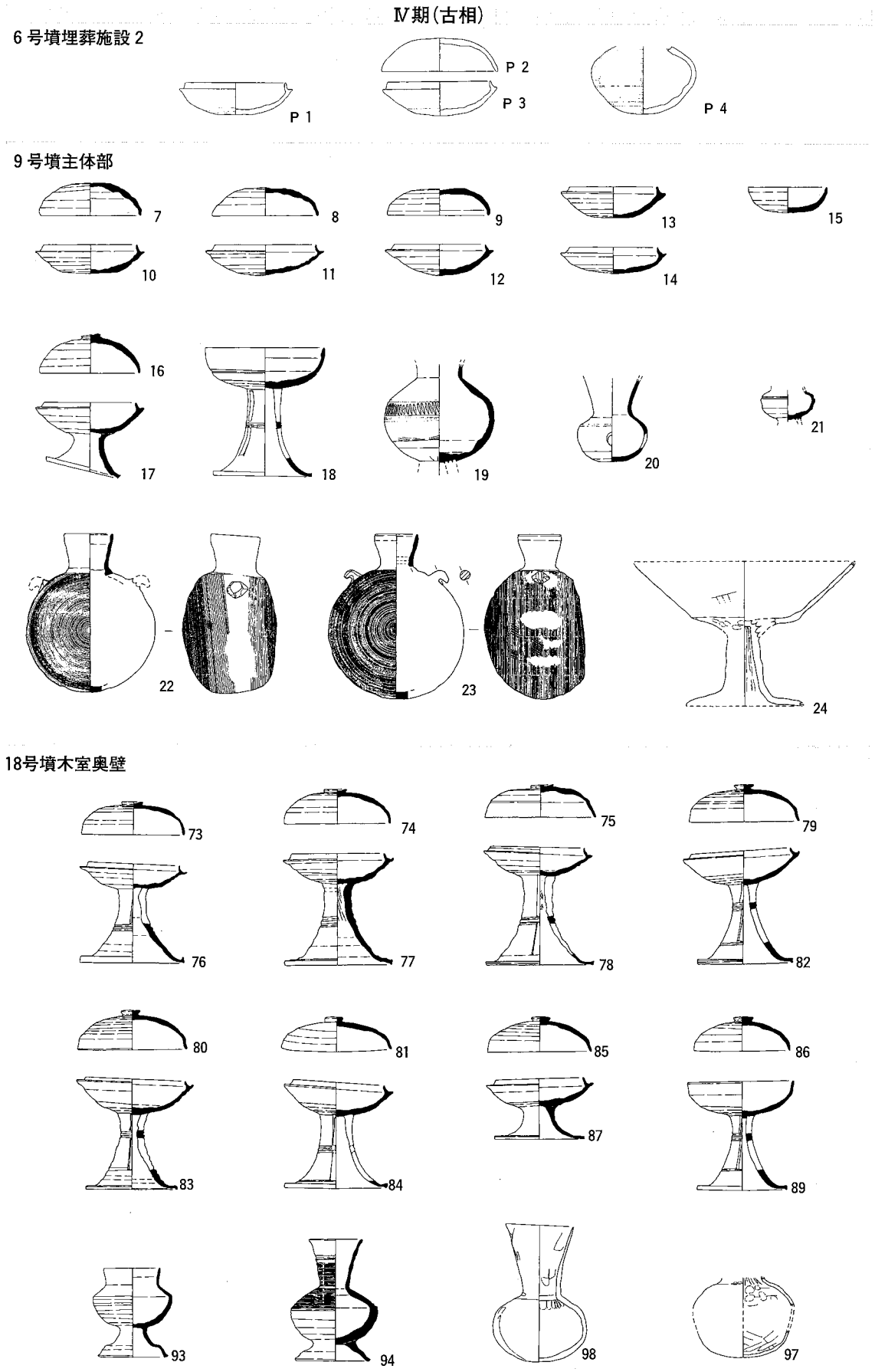
新相　３号墳埋葬施設・16号墳主体部・18号墳木室中央

Ⅴ期

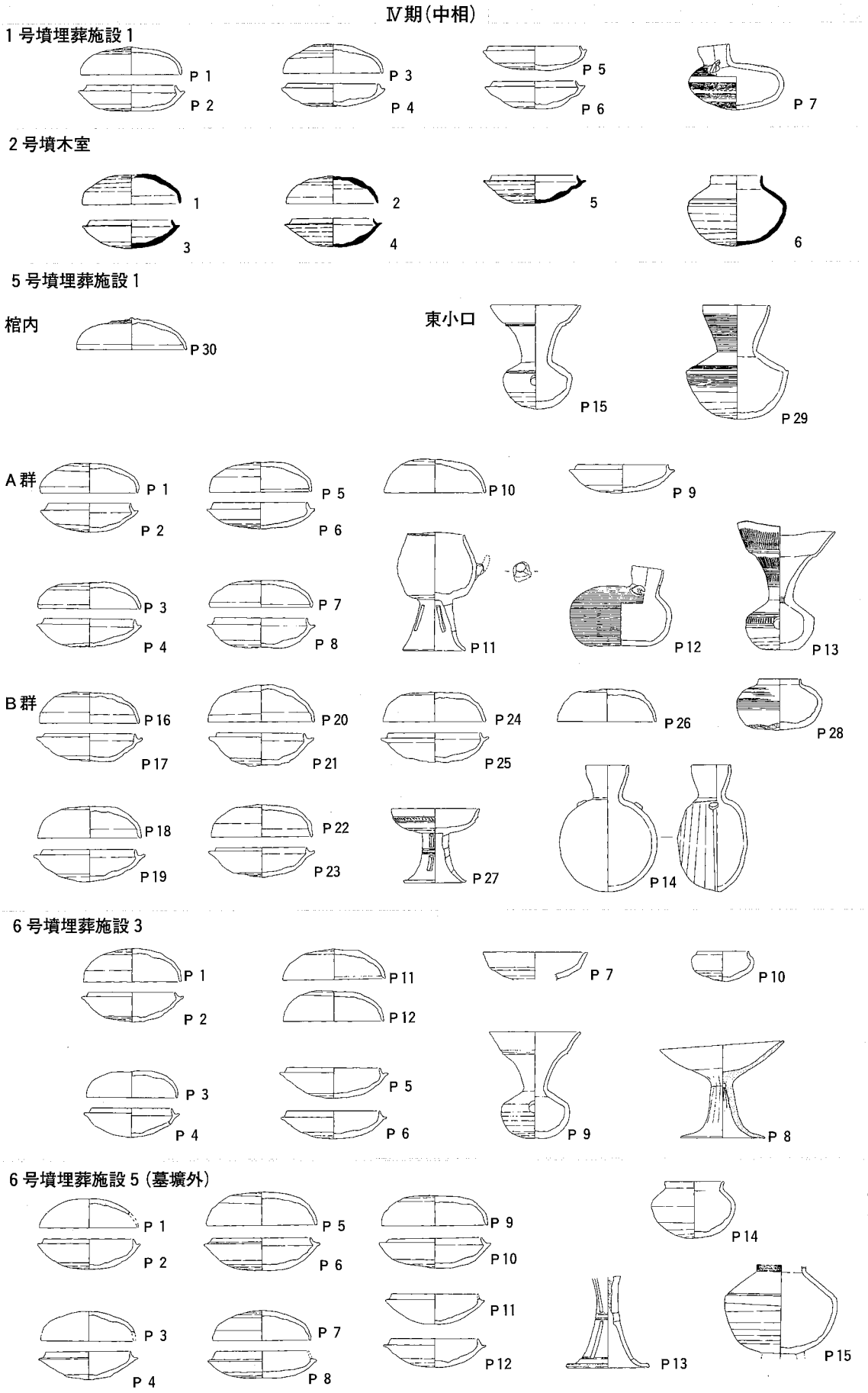
主体部　１号墳埋葬施設２、５号墳埋葬施設３、７号墳横穴式土壙、13号墳木室、15号墳主体部、18号墳木室東主柱



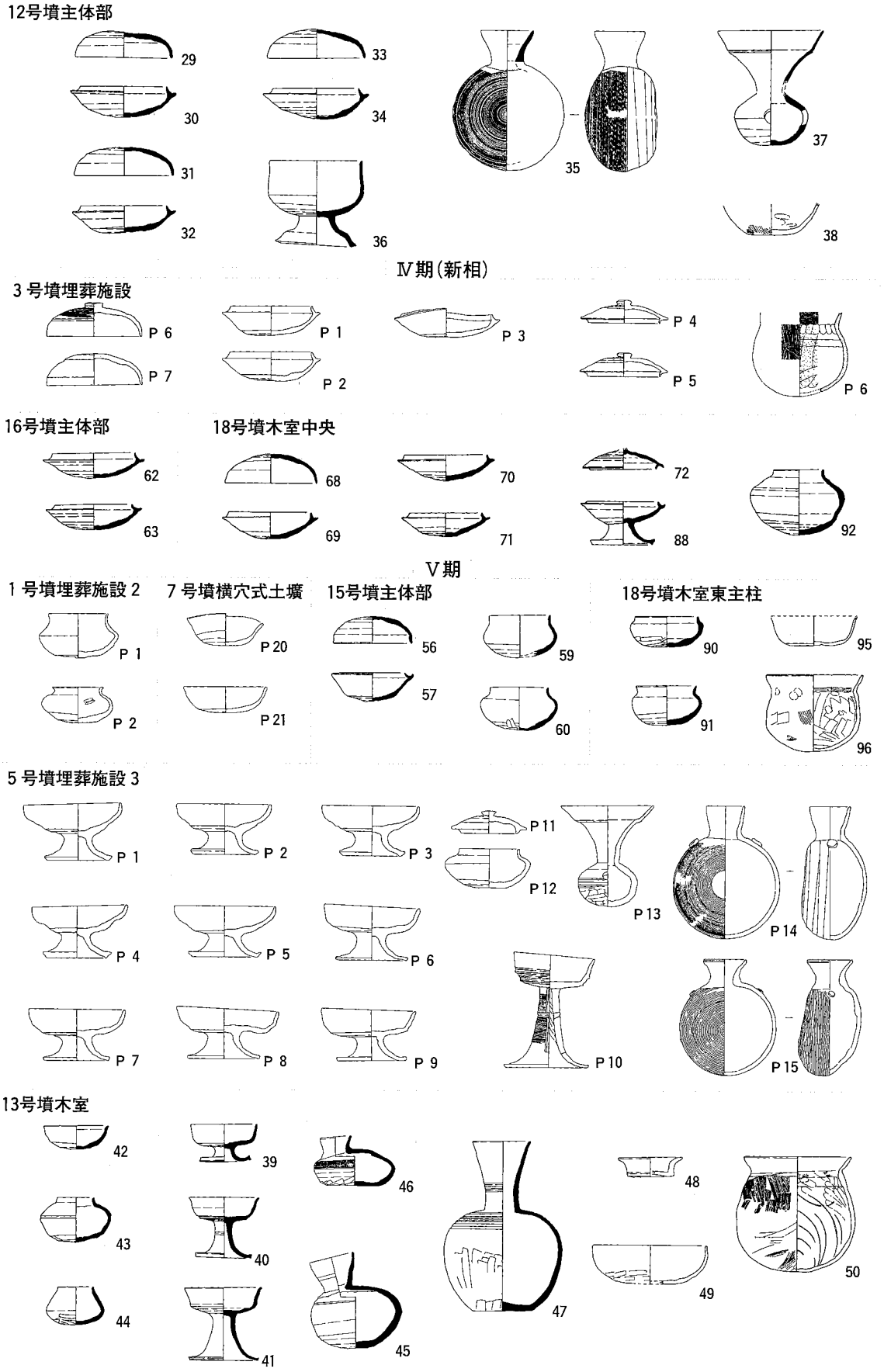
第１図　Ⅰ～Ⅲ期の土器（S＝1/8）



第２図　Ⅳ期（古相）の土器（Ｓ＝1/8）



第３図　Ⅳ期（中相）の土器（S＝1/8）



第４図　Ⅳ期（中～新相）・Ⅴ期の土器（S＝1/8）

須恵器　副葬品用に作られた小型品が多くみられ、全体に小型化・扁平化している。

蓋杯　個体数自体が非常に少なくなり、口径も蓋が10cm、身が９cm程度に矮小化する。

高杯　有蓋高杯は無くなり、無蓋高杯も小型化する。長脚の高杯は器高が口径を割り込む。ただし５号墳埋葬施設３のＰ10は古い形態を残す。

平瓶　耳部が消失し、13号墳木室の45は頸部に凹線がめぐる。

長頸壺　肩部が丸く底部が平らで、頸部と肩部に凹線をめぐらす。

時期　陶邑編年のＴＫ217の段階で、７世紀後半に位置付けられる。そのうち15号墳の蓋杯のセット（56・57）は７世紀第３四半期に比定できるもので、13号墳はさらに後出するとみられる。

２．古墳群の変遷（第５図）

前項では主体部に副葬された須恵器の型式変化からⅠ～Ⅴ期を設定した。これをもとに古墳群全体の変遷を表したのが第５図である。築造後の古墳にはトーンをかけ、その時期に埋葬した主体部を黒ベタ、前の時期までに埋葬の終わっている主体部を斜線にしている。この図から読み取れる古墳群の変遷を時期ごとに述べる。

Ⅰ期（６世紀前葉）

尾根の先端に前方後円墳である６号墳を最初に築造する。ただし最も早い段階の主体部は前方部の埋葬施設１で、中心主体の埋葬は遅れるようである。

Ⅱ期（６世紀中葉）

尾根の稜線上に６号墳に続いて４・５号墳を連続的に築き、各古墳に埋葬を行う。この３基が他の古墳よりも規模が一段大きく、西山古墳群の母集団の有力家長層の第１世代の墓とみられる。６号墳後円部の埋葬施設６からは金銅製冠や飾金具の付いた大刀などが出土しており、古墳築造の契機となった中心主体であろう。なお４号墳の埋葬施設１と５号墳の埋葬施設２からは土器が出土していないため時期が不明で、仮にⅡ期に含めたがⅠ期に遡る可能性もある。

また斜面の裾部には19号墳を築いており、次世代の家長層が枝分かれしていく現象の萌芽とみられる。

Ⅲ期（６世紀後葉）

６号墳の周囲に７・８・20号墳が現れ、最有力勢力の第２世代の中から新たな家長が生まれていく過程とみられる。その一方６号墳にも埋葬は続くが副葬品に顕著な差は認められない。かえって破壊された７号墳に伴うとみられる遺物に馬具が含まれる。19号墳の横の竪穴住居ＳＨ02は古墳築造に関連する施設だろう。

因みに７号墳は横穴式土壙で壊されていて元々何基の主体部があったか判らないが、土壙埋土の須恵器で築造時期を決定した。20号墳も主体部が完全に失われているが、覆土から出土した鉄鏃に５号墳埋葬施設２と同型式のものがあるところから、この時期までには成立しているだろうと判断した。

Ⅳ期（７世紀前半）

４・５号墳の周囲に１・２・３・９号墳、19号墳と20号墳の間に12・16・18号墳を造り、

第５図　西山古墳群の変遷

６号墳以外の系統でも新しい家長層が成立してくる。そのうち２・18号墳は主体部が横穴式木室で、この時期になって初めて横穴系の埋葬施設を導入し、18号墳では追葬も行う。３・９・12・16号墳はほとんど墳丘をもたないが、木棺の規模や副葬品は墳丘上の主体部と遜色ない。５・６号墳でも埋葬は続くが、竪穴住居ＳＨ02はこの時期までに廃絶している。

Ⅳ期は主体部の数が最も多くかつ時期幅もあり、第３～４世代の埋葬が想定できる。

Ⅴ期（７世紀後半）

稜線上の有力家長層の墓での埋葬は５号墳の１基のみで、６号墳では新たな埋葬は認められない。18号墳では第３次の追葬を行っており、これは古墳群全体の第５世代の埋葬に相当する。

この段階になってそれまで空閑地であった西側斜面に、横穴式木室を主体部とする13号墳を軸に10・11・13～15号墳を短期間に連続的に築くグループが出現する。17号墳についても造営はこの時期に属する可能性が高い。13号墳以外は小規模な墳丘をもつものの主体部が小さく、遺物に乏しく、単次葬に終わるという共通点をもつ。このグループの北西側に竪穴住居ＳＨ01があり造営に関わったとみられるが、この住居は煮沸具を放置したまま廃絶している。

７号墳では横穴式木室の亜形態である横穴式土壙の中に、凝灰質砂岩の板石で箱式石棺を拵えている。10・11号墳でも凝灰質砂岩を用いており、奈カリ与古墳・奈良山12号墳・西山西２・３号墳・平方１号墳も含めて、埋葬施設にこの石材を使用するのがⅤ期の特徴の１つである。また13号墳では鉄釘を用いた木棺を使い始めている。

この時期をもって西山古墳群の造営は終わりを告げる。

３．西山古墳群の群構成（第６図）

第５図に示した古墳群の位置関係や内容などから、いくつかのグループの抽出が可能である。それらは各々の系統の中で互いに重なり合い、重層的な構造をなしているとみられる。以下グルーピング作業の後、西山古墳群の群構成についての復原案を提示する。

Ａ群：４～６号墳

この３基は他の古墳に先駆けて尾根上の好所に築造され、墳丘の規模も一回り大きい。埋葬はⅠ～Ⅴ期まで継続的に行われており、西山古墳群の母集団の中でも最も有力な家長層の家族墓とみられる。

Ａａ群：６～８・20号墳

６号墳を盟主としてそれに従位的なＡ群のサブグループである。墳丘の大きさはＡ群に及ばないが、それに次ぐ規模を有する。

Ａａ－１群：20・12・16号墳

20号墳に対して従位的なＡａ群のサブグループである。12・16号墳はほとんど墳丘をもたないものの、副葬品の内容は上位の主体部に劣らないものがある。

Ａｂ群：５・２・３号墳

５号墳を盟主としてそれに従位的なＡ群のサブグループである。２号墳は横穴式木室墳

であるが、追葬があったかどうかは不明である。３号墳も削平のため実態がよく判らない。

Ａｃ群：４・１号墳

４号墳を盟主としてそれに従位的なＡ群のサブグループである。

Ａｃ－１群：１・９号墳

１号墳に対して従位的なＡｃ群のサブグループである。１号墳埋葬施設２・９号墳はほとんど墳丘をもたないものの、木棺の規模・副葬品の内容は上位の主体部に劣らないものがある。

Ｂ群：18・19号墳

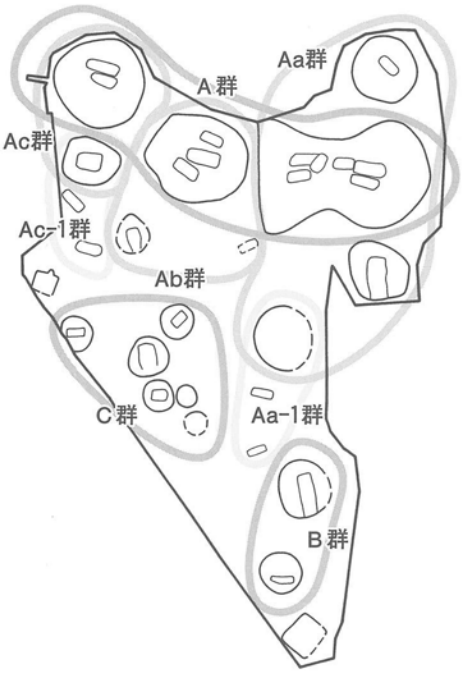
19号墳はＡ群に続いて単独に築かれているが、現状では追葬のないまま18号墳に移っている。18号墳の横穴式木室では２回以上の追葬を行って、Ｖ期まで継続している。Ａ群に次ぐ系統の家長層の家族墓とみられる。

Ｃ群：10・11・13～15・17号墳

グループの中心となる13号墳は横穴式木室墳であるが、追葬があったかどうかは不明である。その周りを取り巻く古墳は墳丘・木棺とも小規模で、副葬品もほとんど持たない。これらはＶ期になって初めて現れて、短期間に集中的に築造されており、Ｃ群全体で１つの家族墓とみることもできる。

群構成の復原

以上のグルーピングには異論もあろうが、Ａ～Ｃ群の３つの系統は概ね了解できると考える。Ａ～Ｃ群は存続期間・墳丘規模・木棺の大きさ・副葬品の内容などからＡ＞Ｂ＞Ｃの優劣関係を示している。さらにＡ群の中にもＡａ～Ａｃ群の３つの系統がＡａ＞Ａｂ＞Ａｃの優劣関係で存在し、それにＡａ－１・Ａｃ－１群を加えるとそれぞれの系統ごとの階層が２～３重の構造を成していることになる。



第６図　西山古墳群の群構成

こうした階層の多重構造が上位のグループほど複雑なのは「家長が、古墳の造営にあたって、水田開発・集落の始祖たる小首長との系譜関係を意識していた」(山中1986) ことを示し、最上位のＡ群の４～６号墳が同じ墳丘に追葬を繰り返しているのは「被葬者の社会的職務や地位が世襲・固定された」(同前) ことを示唆しているとみられる。

なお横穴式木室は最上位であるＡ群の４～６号墳には採用されず、却って一段下の中核的な古墳に用いられている。新しい埋葬構造の受容に上位の保守性と二番手の革新性が窺え、横穴式木室の性格も暗示するようである。

今回の復原案は前方後円墳を頂点として約150年間継続した群集墳の中身を、ある程度解きほぐしてみた１つの結果である。こうした作業が古墳の背後にある集団内の家族単位・階層差・世代差などの実態に迫るヒントにつながることを期待する。

第２節　横穴式木室について

北摂ニュータウン（中央地区）の調査では、西山２・13・18号墳、平方１・２号墳の５基の横穴式木室墳が見つかった。西山７号墳の横穴式土壙と呼ばれる主体部もその流れを汲むものである。同様の主体部をもつ古墳は近畿地方から東海・北陸地方にかけて数十例見つかっていてその関連が注目されており、これまでにいくつもの論考が行われている（柴田1983、北野1983、森下1984、樫田1989、鈴木1991、岩中1993、藤井1994、松井1996など）。

ここではまず横穴式木室の概要を述べるために、藤井1994論文で設定されている横穴式木室の分布圏を一部改変して、地域ごとの特徴を紹介する。次いで三田盆地の横穴式木室墳を分類し、周辺地域の中での位置付けを行う。さらに類例や三田盆地での遺跡の在り方などから、古墳群の性格や成立の背景に言及したい。

なお横穴式木室墳および北陸の木芯粘土室墳の集成表を掲示しておく。これは鈴木1991・北野1983論文の集成の上に知り得た新資料を付け足したものである。ただし内容が不明確で、分布圏としてのまとまりを示していない事例は省いている。このうち「玄室の規模」は掘り方の大きさを基本にしているが、資料によって上端でとるもの、下端でとるもの、内法でとるものなどがあり、不統一となっている。また時期は人によって年代観が異なるので「須恵器の型式」に読み変えているが、過誤があれば当方の責任である。

１．横穴式木室の分布圏とその特徴

Ａ：遠江（磐田原台地）

棟持柱の主柱２本で棟木を渡し、壁際から垂木を架ける。木室の断面は合掌形で、粘土で被覆する。火をかけるものは少ない。

Ｂ：遠江（三方原台地）

壁際から垂木を架けて、断面合掌形とする。粘土で被覆し、火をかけるものは少ない。一部に伊勢地域からの影響で四隅に柱を立てるものがある。

Ｃ：伊勢

主柱のみを４本以上立てて、断面箱形の深い部屋を造る。粘土は使わず、当初は火もかけないが、ＴＫ217期以降になると火をかけるようになる。同時に壁際から垂木を架けて、断面合掌形とするタイプが現れ、火をかけるのが一般化する。

Ｄ：近江・摂津・河内・和泉・播磨・丹波

畿内の中でも周縁に近い所とその外側に接した地域である。壁際から垂木を架ける点だけは共通するが、他の要素は地域ごとに異なるため細分する。

Ｄ－１：近江・摂津・河内

主柱４本で梁・桁を組み、壁際から垂木を架けて断面台形にするものと、主柱２本か無しで壁際から垂木を架けて断面合掌形にするものがある。

そのうち近江・摂津（東摂）では粘土をよく用いて火をかける場合が多く、摂津（北摂）・河内では粘土を使わず、火をかけることも少ない。

横穴式木室墳集成表

分布圏		No	古墳名	所在地	墳形・規模	玄室の構造と規模	粘土	火化	須恵器の型式	備考	参考文献
分布圏A	遠江（磐田原台地）	1	堀ノ内13号墳	静岡県掛川市	円 25						
		2	高尾向山５号墳	静岡県袋井市	円 12	合掌 3.8× 2.2	○	×	ＴＫ43-ＴＫ209		袋井市1996
		3	高尾向山７号墳	静岡県袋井市	円 11	合掌 3.7× 3.0	○	×	ＴＫ43-ＴＫ209		袋井市1996
		4	団子塚10号墳	静岡県袋井市	円						袋井市1992
		5	北山１号墳	静岡県磐田郡浅羽町	円 7	合掌 3.0× 1.8	○	×	ＴＫ43		浅羽町1987
		6	北山２号墳	静岡県磐田郡浅羽町	円 11	合掌 3.5× 2.2	○	○	ＴＫ43		浅羽町1987
		7	北山３号墳	静岡県磐田郡浅羽町	円 11	合掌 4.0× 2.0	○	×	ＴＫ43		浅羽町1987
		8	北山４号墳	静岡県磐田郡浅羽町	円 11	合掌 3.5× 2.0	○	×	ＴＫ43		浅羽町1987
		9	明ヶ島10号墳	静岡県磐田市	方 10	合掌 3.75×2.15	○	○	ＴＫ43		柴田1983
		10	権現山２号墳	静岡県磐田市	前方後円 18	合掌 3.6× 2.8	○	×	ＴＫ10-ＴＫ217		柴田1983
		11	権現山３号墳	静岡県磐田市	円 10	合掌 4.2× 3.0	○	×	ＴＫ43-ＴＫ217		柴田1983
		12	屋敷山１号墳（南）	静岡県磐田市	前方後円 17	合掌 4.5× 約3	○	×	ＴＫ10		柴田1983
		13	屋敷山１号墳（北）	静岡県磐田市	前方後円 17	合掌 4.1× 3.0	○	×	ＴＫ10		柴田1983
		14	屋敷山３号墳	静岡県磐田市	円 9	合掌 4.5× 2.9	○	×			柴田1983
		15	匂坂下原17号墳	静岡県磐田市	円 12	合掌 2.4× 1.0		×	ＴＫ217		磐田市1996
分布圏B	遠江（三方原台地）	16	半田山Ｂ4号墳	静岡県浜松市	前方後円21.5	合掌 × 1.8	○	×			浜松市1970
		17	半田山Ｄ10号墳	静岡県浜松市	円 8	合掌 3.6× 1.8	×	×	ＴＫ43-ＴＫ217		浜松市1988
		18	半田山Ｅ４号墳	静岡県浜松市	前方後円12.5	合掌 4.2× 1.7	○	×	ＴＫ43-ＴＫ217		浜松市1988
		19	瓦屋西Ｂ１号墳	静岡県浜松市	円 5	1.9× 1.2	○	×			浜松市1991
		20	瓦屋西Ｂ３号墳	静岡県浜松市	前方後円 28	3.4× 2.1	△	×	ＭＴ15-ＴＫ209		浜松市1991
		21	瓦屋西Ｂ５号墳	静岡県浜松市	円 8	合掌 4.1× 2.2	○	×	ＴＫ10-ＴＫ43		浜松市1991
		22	瓦屋西Ｂ７号墳	静岡県浜松市	円 10	合掌 3.7× 1.8	○	×			浜松市1991
		23	瓦屋西Ｄ１号墳	静岡県浜松市	方 11	箱形 × 1.9	○	○	ＴＫ209		浜松市1991
		24	瓦屋西Ｃ５号墳－１	静岡県浜松市	前方後円 23	合掌 3.8× 1.8	×	△	ＴＫ209		㈶浜松1991
		25	瓦屋西Ｃ５号墳－２	静岡県浜松市	前方後円 23	合掌 4.9× 2.4	×	×	ＴＫ43		㈶浜松1991
		26	瓦屋西Ｃ10号墳－２	静岡県浜松市	円 17.5	合掌 3.9× 1.5	×	×	ＴＫ43		㈶浜松1991
		27	瓦屋西Ｃ14号墳	静岡県浜松市	円 12	合掌 3.9× 1.9	○	×	ＴＫ209		㈶浜松1991
		28	瓦屋西Ｃ17号墳	静岡県浜松市	円 10	合掌 5.0× 2.1	×	×	ＴＫ43		㈶浜松1991
		29	瓦屋西Ｃ19号墳－１	静岡県浜松市	円 10	合掌 4.0× 1.9	△	×	ＴＫ43		㈶浜松1991
		30	瓦屋西Ｃ19号墳－２	静岡県浜松市	円 10	合掌 3.9× 1.9	○	×	ＴＫ43		㈶浜松1991
		31	瓦屋西Ｃ24号墳	静岡県浜松市	円 9	合掌 2.8× 1.5	○	×	ＴＫ10		㈶浜松1991
分布圏C	伊勢	32	南山古墳	三重県伊勢市	円 17	箱形 5.7× 4.1	×	×	ＴＫ10		伊勢市1982
		33	昼河Ａ２号墳	三重県伊勢市	円 13	箱形 5.3× 1.9	×	○	ＴＫ217		伊勢市1993
		34	昼河Ｃ12号墳	三重県伊勢市	不明	台形 3.5× 1.5	×	○	ＴＫ217		伊勢市1993
		35	昼河Ｃ13号墳	三重県伊勢市	不明	合掌 3.08× 1.5	×	○	ＴＫ217		伊勢市1993
		36	昼河Ｃ14号墳	三重県伊勢市	不明	合掌 2.57×1.35	×	○	ＴＫ217		伊勢市1993
		37	君ヶ口古墳	三重県津市	前方後円 18	箱型 5.60×3.48	×	×	ＭＴ15		津市1974
分布圏D－1	近江	38	小御門Ⅱ－２号墳	滋賀県蒲生郡日野町	円 14	台形 ×2.26	○	○			滋賀県1966
		39	塚原古墳	滋賀県愛知郡愛知川町							
	摂津（東摂）	40	新芦屋古墳	大阪府吹田市	方 20	合掌 ×2.92	○	×	ＴＫ209	家形石棺	吹田市1979
		41	上寺山古墳	大阪府茨木市		台形 約4× 約3	○	○	ＴＫ209		茨木市1972
		42	上穂積神社西古墳	大阪府茨木市			○	○			
	摂津（北摂）	43	西山２号墳	兵庫県三田市	円 7	合掌 3.1× 2.1	×	×	ＴＫ209		兵庫県1999
		44	西山７号墳	兵庫県三田市	円 11.8	7.65× 2.9	×	×	ＴＫ217	横穴式土壙	三田市1983
		45	西山13号墳	兵庫県三田市	円 8.3	台形 3.5× 2.4	×	×	ＴＫ217		兵庫県1999
		46	西山18号墳	兵庫県三田市	円 11	合掌 5.8× 2.8	×	×	ＴＫ209-ＴＫ217		兵庫県1999
		47	平方１号墳	兵庫県三田市	円 7.5	合掌 4.2× 2.0	×	×	ＴＫ217		兵庫県1993
		48	平方２号墳	兵庫県三田市		合掌 × 2.2	×	○			兵庫県1993
	河内	49	宇山１号墳	大阪府枚方市	円 13	合掌 4.5× 2.8	×	×	ＴＫ209		㈶枚方1989
分布圏D－2	和泉	50	道田池２号墳	大阪府和泉市	円 14	合掌 3×2.45	○	○	ＴＫ209		信太山1966
		51	道田池４号墳	大阪府和泉市	円 15	合掌 4.7× 2.4	○	×	ＴＫ209		信太山1966
		52	菩提池西古墳	大阪府和泉市		合掌 4.6× 2.5	○	○	ＴＫ209		信太山1966
		53	聖神社２号墳（東）	大阪府和泉市	円 30	合掌 3.6× 2.8	○	○			森1959
		54	聖神社２号墳（西）	大阪府和泉市	円 30	合掌 3.15× 2.3	○	○			森1959
		55	明神原古墳	大阪府和泉市	円 18	3.4× 2.3	○	×	ＭＴ85		和泉1992
		56	桧尾塚原８号墳	大阪府堺市	円 13	合掌 3.5× 2.1	○	×	ＴＫ10-ＴＫ209		大阪府1990
		57	桧尾塚原９号墳－３	大阪府堺市	前方後円 17	合掌 約5× 2.4	○	○	ＴＫ10-ＴＫ209		大阪府1990
		58	牛石５号墳	大阪府堺市	円			×			㈶大阪1977
		59	野々井30号墳	大阪府堺市	円 13	合掌 5.8× 3.3		×	ＴＫ209		大阪府1987
		60	陶器千塚３号墳	大阪府堺市	円 16	合掌 × 約2	○	×	ＴＫ209		大阪府1994
		61	陶器千塚21号墳	大阪府堺市	円 15		○	○			森1961
		62	陶器千塚29号墳	大阪府堺市		合掌 × 2.0	○	×	ＴＫ43-ＴＫ217		堺市1986
	播磨	63	名草３号墳	兵庫県加東郡社町	円 13	合掌 6.1× 2.8	×	○	ＴＫ209-ＴＫ217		加東郡1984
		64	名草４号墳	兵庫県加東郡社町	円 10	合掌 5.4× 3.1	×	○	ＴＫ43-ＴＫ217		加東郡1984
		65	中番２号墳	兵庫県小野市	円 9	合掌 2.5× 2.5	○	○	ＴＫ217		小野市1969
		66	中番18号墳	兵庫県小野市	円 9.5	合掌 5.5× 1.7	○	○	ＴＫ217		小野市1969
D－3	丹波	67	中坂５号墳	京都府福知山市	円 18	合掌 約3× 2.4	○	×	ＴＫ217		京都府1972
		68	中坂７号墳	京都府福知山市	円 13	合掌 5.5×2.85	○	×	ＴＫ217		京都府1972
		69	仏山１号墳	京都府福知山市	円 12	合掌 4.2× 2.6	○	×	ＴＫ209-ＴＫ217		京都府1973
分布圏E	加賀	70	蓑輪塚古墳	石川県小松市	前方後円 40	2.8× 2.3	○	×	ＭＴ15-ＴＫ43	木芯粘土室	北野1983
		71	念仏林古墳	石川県小松市	円 10	2.7× 2.2	○	×	ＭＴ15-ＴＫ43	木芯粘土室	北野1983
		72	矢田借田２号墳	石川県小松市	円 9	3.6× 2.0	○	×	ＭＴ15？	木芯粘土室	北野1983
		73	矢田借田４号墳	石川県小松市	円 13	3.2× 1.6	○	×	ＭＴ15-ＴＫ10	木芯粘土室	北野1983
		74	後山無常堂古墳	石川県小松市	円 23.5	2.9× 1.9	○	×		木芯粘土室	小松市1989
		75	後山明神３号墳	石川県小松市	円 11.5	2.7× 1.8	○	×	ＭＴ15	木芯粘土室	小松市1989
		76	分校山王１号墳	石川県加賀市	円 15	約3× 約2	○	×	ＴＫ10-ＴＫ43	木芯粘土室	北野1983
		77	二子塚37号墳	石川県加賀市	円 12	× 1.7		×	ＴＫ43	木芯粘土室	北野1983
		78	末寺山７号墳	石川県寺井町	円 7	2.2× 1.5	○	×	ＭＴ15-ＴＫ43	木芯粘土室	北野1983

Ｄ－２：和泉・播磨

主柱無しで、壁際からの垂木で断面合掌形にする。粘土を被覆するものが目立つが、播磨では使わないものもある。火をかけるものは多い。

Ｄ－３：丹波

棟持柱の主柱２本を直接床面に立て、壁際からの垂木で断面合掌形にする。粘土で被覆するが、火をかけた例は無い。

Ｅ：加賀

「木芯粘土室」と呼ばれ横穴式木室とは区別されてきたが、原理的には同じ横穴系の木室の一類型である。今のところ木組みは未発見だが、主柱穴（棟持柱）２本を検出した調査例がある。粘土を使用して断面合掌形の部屋を造り、火はかけない。築造開始は６世紀前半にまで遡る。

以上のように見ると、横穴式木室は特定の地域に固有の特徴をもって分布していることが判る。分布圏Ａ～Ｃ・Ｅはその傾向がより明らかで、関与する集団が限られていたとみられる。一方畿内周縁部ともいえる分布圏Ｄは分布や特徴に多様性を内在しており、複雑な状況を呈している。

さて三田盆地のある摂津（北摂）は分布圏Ｄ－１に含まれ、摂津（東摂）・河内との関わりが窺える地域である。そこでまず三田盆地の横穴式木室を概観して周辺地域と比較し、分布圏Ｄにおける三田盆地の在り方を問いたい。

２．三田盆地の横穴式木室

西山18号墳（59頁－第42図）

構造　玄門両脇の２本の主柱（石室と対比させるならば袖柱と呼ぶこともできる）と壁際のピット列からなる。ピット列は掘り方が認められず、検出状況だけを見ると社町名草古墳群や和泉地方の木室と共通しているが、火は受けていない。

規模　玄室の大きさは掘り方の下端で長さ5.8m、両側壁間の幅2.6～2.9m、玄室の長／幅指数2.23～2.00である。この数字は社町名草３号墳（第７図４）の6.1m／2.4～2.8m；2.54～2.17に近い値となる。

時期　築造時期は西山古墳群Ⅳ期（ＴＫ209）の古相段階で、その後２回以上の追葬が行われている。

横穴式木室の復元（図版47～50）

なお18号墳では周辺で伐採した雑木を使って、柱穴に実際に木柱を立てて復元を試みた。以下、復元の手順を述べる。

骨組み　まず四隅の垂木を組み合わせて（図版47－１）その上で棟木を受け（同－２）、そこに三方から垂木を立て架ける（同－４）。棟木と垂木の結縛（同－６）には藤や葛の蔓の樹皮を剥いたものを使っている（同－５）。復元による垂木の角度は60°前後で（同－３）、柱穴の角度（70～80°）よりも緩くなってしまったが、この辺りは微妙なところである。２本の主柱は玄門の構えにのみ用いた（同－７）。垂木には部分的に筋違いを入れて補強し、合掌

形の骨組みに仕上げた(図版48)。

葺き上げ　次に茅葺きの屋根を葺くように、雑木から刈り払った粗朶を使って骨組みの下から順に葺き上げてゆき（図版49)、横穴式木室を完成させた（図版50)。現地の復元作業は福島県奥只見地方出身で茅葺きの屋根を葺いた経験のある五ノ井氏（図版47－８の前列中央）に負うところが大きく、それはあたかも合掌作りの屋根を地面に伏せたような構造物となった。

床面　復元の際には検出したピットに丸太を差し込んだが、ピット列自体には掘り方が認められなかったため、本来は木を組んだ後に掘り方の底面全体に粘質土を貼って床面を造る手順であっただろう。一方２本の主柱については床面の上で掘り方を検出しており、木室の構造に使われていたとすると齟齬が生じるが、玄門であれば問題ない。

因みに13号墳についても触れておくと、この場合はピット列に溝状の掘り方が伴っているため、床面を造った後に木を組んだと解することができる。

この復元は遺構に則して無理のないように考えた一案であるがもとより証拠はなく、より良好な資料が出土すればまったく違った復元も可能であろう。

西山２号墳（21頁－第４図）

構造　壁際の溝を掘り方とするピット列のみで主柱がないことから、合掌形の小木室であったとみられる。玄室内は礫床で、火は受けていない。

規模　玄室の掘り方の長さ3.1m、両側壁間の幅1.8～2.1mで、玄室の長／幅指数は1.72～1.47である。

時期　築造時期は西山古墳群Ⅳ期（ＴK209）の中相段階である。

西山13号墳（42頁－第23図）

構造　４本の主柱と壁際の溝を掘り方とするピット列からなる。４本の主柱で梁・桁を組む茨木市上寺山古墳のような復元案が想定できる。火は受けていない。

規模　玄室の掘り方の長さ3.5m、両側壁間の幅2.2～2.6mで、玄室の長／幅指数は1.59～1.34である。

時期　築造時期は西山古墳群Ｖ期（ＴK217)の中でも新しい段階である。

西山７号墳（第７図１）

構造　横穴式土壙と呼んでいる大きな掘り方の床面に凝灰質砂岩の板石で組んだ箱式石棺を据え、開口部へ向かって排水口を設ける。横穴式木室とは異なるが、同じ横穴系の亜流の埋葬施設として含めて考える。

規模　掘り方床面の全長7.65m、幅2.9～3.3mである。

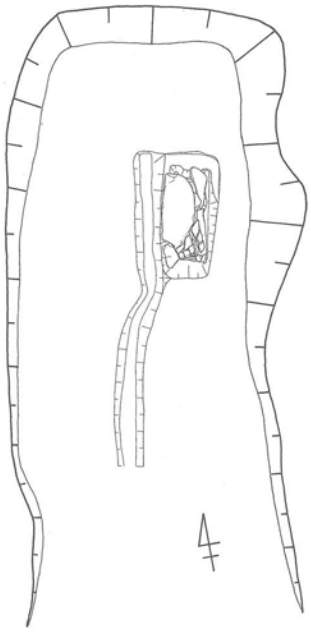
時期　遺構に伴う遺物が少ないが、築造時期は西山古墳群Ｖ期（ＴK217)とみられる。

平方１号墳（第７図２）

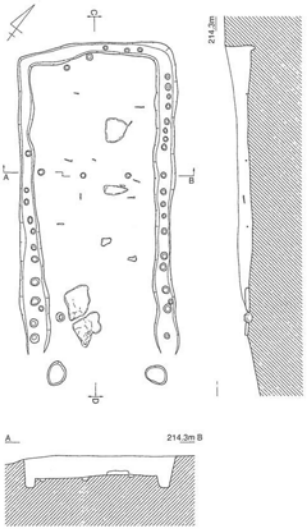
構造　２本の主柱と壁際の溝を掘り方とするピット列からなる。また奥壁から約１／３の所に３箇所の小ピットがあり、構造に関係する可能性がある。残りが悪く詳細は不明だが、西山18号墳に似た復元案を想定したい。床面から凝灰質砂岩の板石が出土している。炭化材も少量出土しているが、火は受けていない。

規模　玄室の掘り方の長さ4.2m、両側壁間の幅2.0mで、玄室の長／幅指数は2.10である。

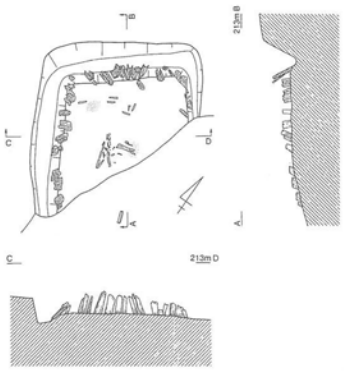
時期　出土遺物と凝灰質砂岩・鉄釘の使用からみて、築造時期は西山古墳群Ｖ期（ＴK217)に



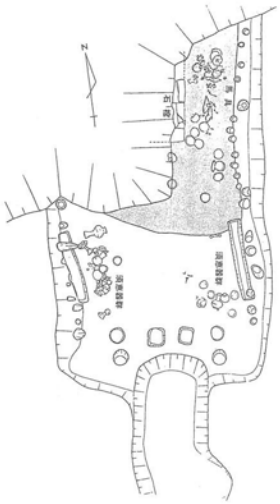
1．西山７号墳（三田市1983より作図）



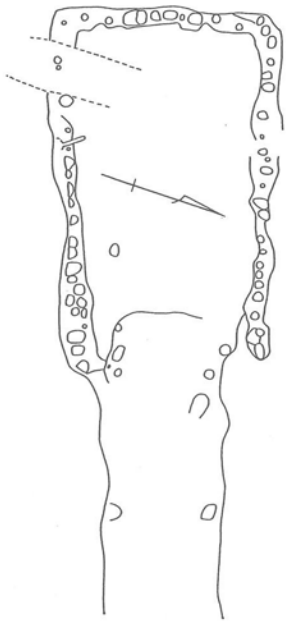
2．平方１号墳（兵庫県1993）



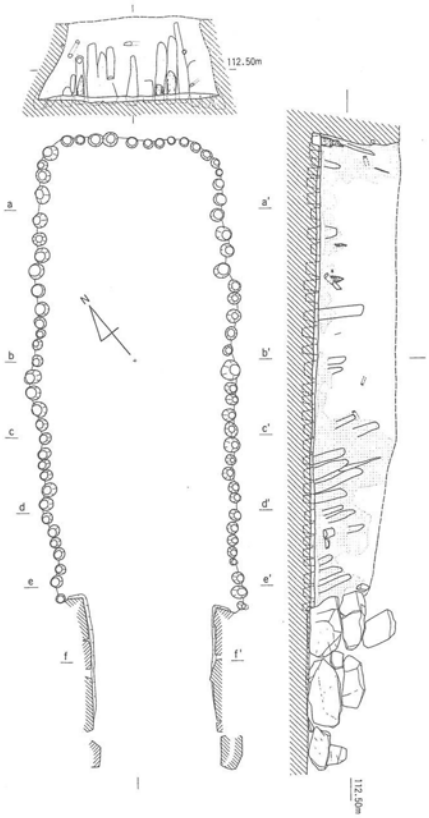
3．平方２号墳（兵庫県1993）



5．吹田市新芦屋古墳（藤原1979）



6．枚方市宇山１号墳（㈶平方1988）



4．社町名草３号墳（加東郡1984）

7．茨木市上寺山古墳（茨木市1972）

第７図　摂津・河内・播磨の横穴式木室（Ｓ＝1/100）

下るとみられる。

平方２号墳（第７図３）

構造　大半が削平されており、北半部の壁際の溝を掘り方とする炭化した柱材のみ遺存している。柱材はスギの割り木で、火を受けて立ったまま炭化している。北摂ニュータウン内の木室の中で火を受けているのはこの１例のみである。現状で構造の復元は難しいが、おそらく１号墳と同様であったと考えられる。

規模　玄室の掘り方の残存長2.2m、両側壁間の幅2.2mである。

時期　時期の判る出土遺物はないが、鉄釘の使用からみて、西山古墳群Ｖ期（ＴＫ217）の所産とみておく。

三田盆地の横穴式木室の類型

三田盆地の横穴式木室（土壙）を構造から分類するとＡ類「玄門の２本の主柱と壁際のピット列をもつもの（西山18号墳・平方１号墳）」、Ｂ類「４本の主柱と壁際のピット列をもつもの（西山13号墳）」、Ｃ類「主柱をもたず壁際のピット列だけのもの（西山２号墳）」、Ｄ類「掘り方のみでピット列のないもの；横穴式土壙（西山７号墳）」の４つの類型に分けられる（平方２号墳は不明）。

Ａ類　玄門の両脇にのみ２本の主柱を使う断面合掌形の木室は、枚方市宇山１号墳（第７図６）に類例がある。また構造は異なるものの、西山18号墳のピット列の検出状況や玄室プランは社町名草３号墳（第７図４）に類似している。

Ｂ類　４本の主柱で梁・桁を組む断面台形の木室は、茨木市上寺山古墳（第７図７）に類例がある。また玄門の両脇に２本の柱を据えるという手法はＡ・Ｂ類に共通しており、両者は近い関係と言える。

Ｃ類　主柱を使わずに壁際の柱だけで構築する断面合掌形の木室は、播磨から和泉方面に類例が多い。ただし三田盆地では粘土を顕著に使う例はなく、火をかけるものも５例中１例のみである。

Ｄ類　西山７号墳は排水口を備えるところから「室」としての空間があったとみられるが、構造は不明である。奈良県広陵町馬見古墳群中の安部山第４号墳南土壙（奈良県1974）も床面に凝灰岩製の組合式石棺を据える。横穴式木室が13基集中する静岡県浜松市瓦屋西古墳群のＣ33・Ｃ34号墳（㈶浜松1991）は「横穴式土室」と呼ばれており、木室墳との共存が注目できる。西山７号墳も「室」である点を強調するならば「横穴式土室」の方が適当であろう。

畿内周縁部の中の三田盆地

以上のように木室構造からみると三田盆地の状況はバラエティに富んでおり、畿内周縁部（分布圏Ｄ）のうちの播磨・摂津・河内・和泉の木室とそれぞれに共通する部分をもっている。同じことは分布圏Ｄの他の地域にも当てはまり、互いに似た要素を少しずつ共有しあっている状況である。こうした在り方は畿内周縁部に点在する各地域同士が横の連絡を取り合っていたというよりも、畿内中枢部に想定できる各集団の故地（１箇所とは限ら

ない）を中心にした放射状の関係を表すものと考えた方が理解しやすい。「横穴系の掘り方」の中に「壁際の柱で支える上部構造」をもつ墓を造る集団が、各地で時と場合に応じて柔軟に手法を使い分けて地域ごとに独自の形態を生み出しているようである。

三田盆地の場合「顕著な粘土の使用」や「木室に火をかける」行為は抜け落ちている例が多く、主柱を用いる頻度が高い。三田盆地だけで眺めていると、木室を焼くという行為自体に他の地域で言われているほど本来的な意味合いがあるか疑問で、後から付加した要素ではないかと思われる。

３．造墓集団の性格と系譜

西山古墳群を造り、そこに葬られた集団を考察するにあたり、まず北摂ニュータウン内の他の遺跡との関係を整理しておく（４頁、第３図）。

平方遺跡・平方西遺跡（兵庫県1993）

須恵器の窯跡３基と工房となる建物、工人の住居、横穴式木室墳２基が見つかっており、西山古墳群の母集団の１つである可能性が強い。見つかった須恵器窯の操業は西山古墳群のⅢ期の終わり頃からⅣ期にかけてである。Ⅴ期になると新たな墓域となっており、集落および生産の場は調査以前に造成された別の地点に移ったようである。

中西山古墳群（兵庫県1993）

４基の古墳のうち発掘調査した３・４号墳はいずれもⅣ期のもので、特に３号墳は調査されたものの中では唯一の横穴式石室である。石室の石材は武庫川の対岸から供給を受けたとみられるが、平方窯の操業時期に尾根続きの中西山にこうした古墳ができるということは、平方・西山の集団が対岸の在地勢力と一定の関係を保っていたことを裏付ける。

西山西古墳群（兵庫県1999）

西山古墳群から約150m西側の南向き斜面に３基の方墳が並んでいる。主体部内には厚い炭層が堆積し、２号墳では凝灰質砂岩の板石も使われていた。出土遺物が少なく築造時期がはっきりしないが、主体部の構造からみて少なくともⅤ期以降の所産であろう。

奈良山古墳群（三田市1983）

奈良山の尾根伝いに14基の古墳が点在しており、１箇所に集中する西山古墳群の在り方とは対照的である。14基のうち１・２号墳は古墳時代前期かそれ以前のもので、在地の系譜を辿ることができる。調査された７号墳はⅢ～Ⅳ期の木棺直葬墳で、他も木棺直葬のものが多いとみられる。ただし奈良山12号墳は凝灰質砂岩の板石を用いた横口式石棺を主体部とするⅤ期の古墳である。

奈カリ与古墳・五良谷古墳群（兵庫県1983）・貴志古墳群（三田市1989）

奈カリ与古墳は凝灰質砂岩の板石を組み合わせて作った横口式箱式石棺様石室を主体部とし、奈良山12号墳と同時期とみられる。同じ尾根の先端にある五良谷11号墳はⅠ期の木棺直葬墳で、西山古墳群の開始時期に合致する。

さらに五良谷古墳群北東側の段丘上に、横穴式石室を内蔵するとみられる方墳２基を含む貴志古墳群がある。

北摂ニュータウン内の古墳時代の遺跡群の様相

吉士　古墳時代の遺跡は貴志から西野上にかけての丘陵上に営まれており、有鼻遺跡のある下井沢までいくと遺構は希薄になる。丘陵上の開発が始まったのは６世紀前葉（ＭＴ15期）で、古墳群の造営は７世紀後半（ＴＫ217期）まで続いている。この地域の古墳群は最後まで横穴式石室が一般化せず、特異な形態の終末期古墳や金銅製冠といった特殊な遺物の存在など、在地の多くの古墳群とは様相を異にしている。井守徳男氏は「貴志」の地名の由来などから渡来系氏族で安倍氏と同族の「吉士」氏の介在を想定している（井守1986）。だとすると貴志古墳群はその氏族長層クラスの墓とみられ、西山古墳群以下はそれに連なる各集団が造営した墓と言える。その中には奈良山古墳群のような在来の勢力も取り込まれているようである。

須恵器生産　この貴志から西野上にかけての集団の生業の一端は須恵器生産にあった。市内最古の須恵器窯跡は市域北部にあたる三田市末野の郡塚１号窯（兵庫県1987）の５世紀後葉である。そこまでは行かなくとも遺跡群の成立期に見合う６世紀前葉頃の須恵器窯が、北摂ニュータウン内に存在した可能性は高い。

分布圏Ｄの中で須恵器生産が行われている例は和泉・摂津（東摂）にあり、特に陶邑で名高い和泉丘陵では構造の類似から須恵器工人との関わりが早くから指摘されており（森1959）、三田盆地でもその関係を確認することができた。ただしすべての地域で満たされる条件ではなく、多くの要素の中の１つとして捉えるべきである。

凝灰質砂岩　三田盆地の古墳群でよく使われる石材に「凝灰質砂岩」がある。凝灰質砂岩層は三田市と神戸市の市境付近から猪名川町にかけての北摂山地に分布し（神戸市1989）、近くでは三田市横山町から神戸市北区長尾町宅原一帯の山塊に露頭がみられる（兵庫県1983）。この石材は北摂ニュータウン内の西山７・10・11号墳、奈良山12号墳、奈カリ与古墳、平方１号墳で使われている他、武庫川の対岸にある青龍寺裏山２号墳（高島・畠中1984）でも使用されており、三田盆地の終末期古墳に特徴的な遺物となっている。

同様な石材を用いた類例として、吹田市新芦屋古墳の横穴式木室に納められた組合せ式家形石棺がある（吹田市1993）。また兵庫県美嚢郡吉川町実楽古墳（兵庫県1972）の玄室床面からも凝灰質砂岩の板石多数が出土している。この主体部は石室とされているが石材がまったく無く、墓壙壁に沿って溝状の掘り込みがあるなど不自然な状況を呈しており、木室であった可能性も捨てきれない。この他、神戸市北区北神ニュータウン内第２・３・20地点古墳でも横穴式石室に凝灰質砂岩の板石を使用している（神戸市1989）。ともかく凝灰質砂岩を用いた古墳がその産地である北摂山地を東西に横断するように分布しており、この石材を扱う集団が展開していたようである。

造墓集団の性格

三田盆地の武庫川右岸では６世紀代になっても横穴式石室が乏しく、西山古墳群や内神古墳群などのように小規模な木棺直葬墳で数十～百基単位の群集墳を造っている。同じような状況は加古川中流域左岸の小野市から社町域にかけての段丘～丘陵上に認めることができ、樫山古墳群、焼山古墳群、船木・中番古墳群など百基を超える木棺直葬の大群集墳

が知られている（岸本1997)。その中に中番2・18号墳、名草3・4号墳といった横穴式木室墳が含まれており、三田盆地に通じる在り方を示している。

上記の地域に共通する事象としては、古墳群や集落の立地する段丘・丘陵が6世紀頃に開発された新開地であったという点にある。新たな開拓にあたっては山林の伐採、耕地の開墾、灌漑工事の他、先に述べたような須恵器生産、石材の開発など形に残るもの残らないものを含めて多種多様な技術・知識が必要であっただろう。こうした作業に従事したのは恐らく既存の勢力だけではなく、畿内の有力氏族と同族関係を結びかつ土木技術をもった集団が大きな役割を果たしたとみられ、三田盆地の武庫川右岸にあっては安倍氏と同族で渡来系氏族の「吉士」氏に連なる集団の存在が想定できるのである。

5世紀から6世紀にかけて飛躍的に進んだ段丘の開発は、新しい土木技術の普及・標準化を全国的に促し、津々浦々に古墳が造られるような原動力として働いたであろう。その背景には新しい技術を携えた渡来系氏族の存在があり、彼らの墓の中にドーム型の天井をもつ石室・ミニチュアの炊飯具一式の副葬・横口式石室といった特徴的な古墳が含まれており（水野1970)、横穴式木室もそういった性格をもつ古墳の末席を占めるものではないか。ともかくこうした事象は渡来系氏族が各地に定着する過程を示すものであろう。

思えば昭和30年代に戦争引揚者などに対する農地の確保のために焼山古墳群が開拓で破壊された事件（岸本1997）などは、1400年の時を経て繰り返された極めて象徴的な出来事だったのだと言えよう。

なおこの執筆にあたって、村上賢治・藤井太郎の両氏から入手しにくい文献の提供を受け、かつ御教示を頂いた。また高島信之・樫田　誠の両氏からも有益な御教示を頂いた。兵庫県教育委員会関係の調査成果については、山本三郎・吉識雅仁・篠宮　正・長濱誠司・中村　弘・深江英憲の各氏から情報を得た。記して感謝の意を表す。

参考文献

浅羽町教育委員会1987『北山遺跡』

和泉丘陵内遺跡調査会1992『和泉丘陵の古墳－槇尾川中流域周辺の古墳群の調査－』(和泉丘陵内遺跡発掘調査報告書Ⅲ)

伊勢市教育委員会1982『南山古墳発掘調査報告』

伊勢市教育委員会1993『昼河古墳群』

茨木市教育委員会1972『上寺山古墳発掘調査概要』

井守徳男1986「畿内周縁部における古墳の展開と終末－兵庫県三田盆地における群集墳と終末期古墳の関連を例として－」『北山茂夫追悼日本史学論集　歴史における政治と民衆』日本史論叢会

磐田市教育委員会1996『匂坂下原古墳群・匂坂上5遺跡発掘調査報告書』

岩中淳之1993「昼河古墳群のまとめ」『昼河古墳群』伊勢市教育委員会

大阪府教育委員会1987『陶邑Ⅵ』

大阪府教育委員会1990『陶邑Ⅶ』

大阪府教育委員会1994『府営圃場整備事業陶器北地区に伴う陶器千塚発掘調査概要・Ⅲ』

小野市教育委員会1969『小野市中番地区群集墳調査概報』

樫田　誠1989「考察－所謂箱形粘土槨について－」『後山無常堂古墳・後山明神３号墳』小松市教育委員会

加東郡教育委員会1984『名草３号墳・４号墳』

岸本直文1997「小野市の考古資料」『小野市史』第４巻（史料編Ⅰ）

北野博司1983「箱形粘土槨の再検討と横穴式木室の関連性について」『北陸の考古学』石川考古学研究会

京都府教育委員会1972「中坂古墳群発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』

京都府教育委員会1973「仏山１号墳」『上野平遺跡発掘調査報告書』

古代の土器研究会編1997『古代の土器５－１　７世紀の土器（近畿東部・東海編）』

小松市教育委員会1989『後山無常堂古墳・後山明神３号墳』

㈶大阪文化財センター1977『陶邑Ⅱ』

㈶浜松市文化協会1990『瓦屋西古墳群Ⅱ』

㈶浜松市文化協会1991『有玉西土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』上巻－瓦屋西Ｃ古墳群－

㈶枚方市文化財研究調査会1988『宇山１号墳現地説明会資料』

㈶枚方市文化財研究調査会1989『枚方市文化財年報Ｘ』

堺市教育委員会1986「陶器千塚29号墳発掘調査報告」『平井遺跡』（堺市文化財調査報告第25集）

三田市教育委員会1983『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅰ』

三田市教育委員会1989『三田市遺跡分布地図』

滋賀県教育委員会1966『蒲生郡日野町小御門古墳群調査概要』

信太山遺跡調査団1966『信太山遺跡調査概報』

柴田　稔1983「横穴式木芯粘土室の基礎的研究」『考古学雑誌』68-4

吹田市教育委員会1979『吹田市文化財ニュース』No.2

吹田市立博物館1993『吹田の歴史と文化』（吹田市立博物館常設展示図録）

鈴木敏則1991「横穴式木室雑考」『三河考古』第４号

高島信之・畠中　剛1984「三田市青龍寺裏山１号墳出土の塼」『兵庫考古』第19号

田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店

津市教育委員会1974『君ヶ口古墳発掘調査報告』

奈良県教育委員会1974『馬見丘陵における古墳の調査』（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第29冊）

浜松市教育委員会1988『半田山古墳群（Ⅳ中支群－浜松医科大学内－）』

浜松市教育委員会1991『瓦屋西古墳群』

兵庫県教育委員会1972「実楽古墳調査報告書」『中国高速道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』

兵庫県教育委員会1983『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅱ』

兵庫県教育委員会1987「郡塚窯（ＡＮ－88）」『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(1)』

兵庫県教育委員会1993『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅲ』

兵庫県教育委員会1999『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅴ』

袋井市教育委員会1992『団子塚遺跡－遺構編－』

袋井市教育委員会1996『高尾向山遺跡Ⅱ』

藤井太郎1994「横穴式木室に関する一試考」『文化財学論集』

藤原　学1979「大阪府吹田市新芦屋古墳の発掘調査」『日本考古学協会第45回総会研究発表要旨』

松井一明1996「高尾向山遺跡の横穴式木室墳について」『高尾向山遺跡Ⅱ』袋井市教育委員会

水野正好1970「群集墳と古墳の終焉」『古代の日本第５巻　近畿』角川書店

水野正好1974「群集墳の群構造とその性格－小野市東野中番地区古墳群をめぐる分析－」『高山古墳群調査報告書』(小野市文化財調査報告書第６冊）小野市教育委員会

森　浩一1959「窯槨を主体施設とする火葬古墳の新例－初期仏教受容の様相に関して－」『日本考古学協会第23回総会研究発表要旨』

森　浩一1961「大阪府泉北郡陶器千塚」『日本考古学年報』９

森下大輔1984「横穴式木室について」『名草３号墳・４号墳』加東郡教育委員会

山中敏史1986「律令国家の成立」『岩波講座　日本考古学６　変化と画期』岩波書店

和田晴吾1992「群集墳と終末期古墳」『新版古代の日本第五巻　近畿Ⅰ』角川書店

和田晴吾1998「古墳時代は国家段階か」『古代史の論点４　権力と国家と戦争』小学館

補遺

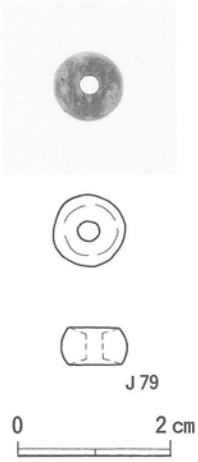
西山13号墳出土石製平玉（Ｊ79）

事実報告の原稿を入稿した後にこの遺物が洩れていたことが判明したので、ここで補足する。

側縁は球面を成し、上下端はシャープな稜線をもつ。上下の小口面は中央へ向かって薄くなり、臼状の面を成す。小口面中央の孔はおそらく片面穿孔であろうが、孔の直径がほぼ一定で穿孔方向は不明である。

大きさは直径が最大径で約９mm、上下端で約７mm、厚みが側縁で約５mm、中央で約３mm、孔の直径が約2.5mm、重さ0.7ｇである。

色調は灰オリーブ色で、所々に白斑が入る。石材はやや軟質であるが、緻密で平滑に磨かれているために、質の良い部分は光沢がある。材質はメノウ系の、比較的質の悪い石材かと思われる。



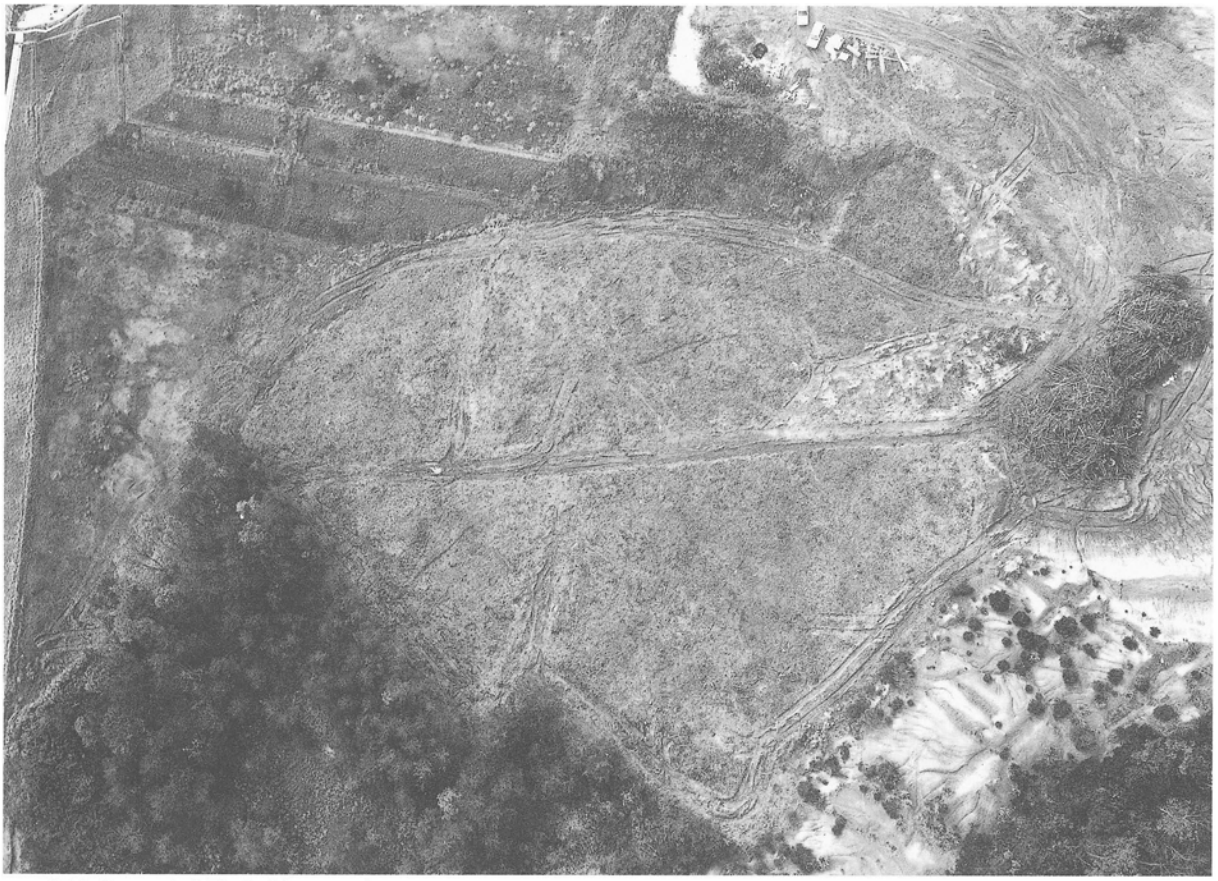
第99図　出土平玉

1．北摂ニュータウン中央地区（ウッディタウン）南東から

2．調査前の西山遺跡群と西山西遺跡群（北西から）

図版 2

1．調査前の西山遺跡群と西山西遺跡群（真上から）



2．調査前の西山古墳群（真上から）

西山古墳群

1．西山古墳群全景（西上空から）

2．　同　上　（南上空から）

図版 4

西山古墳群

1．西山古墳群と西山西古墳群
（真上から）

2．西山古墳群全景（真上から）

西山古墳群

1．西山古墳群全景（南上空から）

2．　同　上　（真上から）

図版 6

西山古墳群

1．西山古墳群（南上空から）

2．　同　上　（　同　上　）

1．調査前全景（南西から）

2．　同　上　（南から）

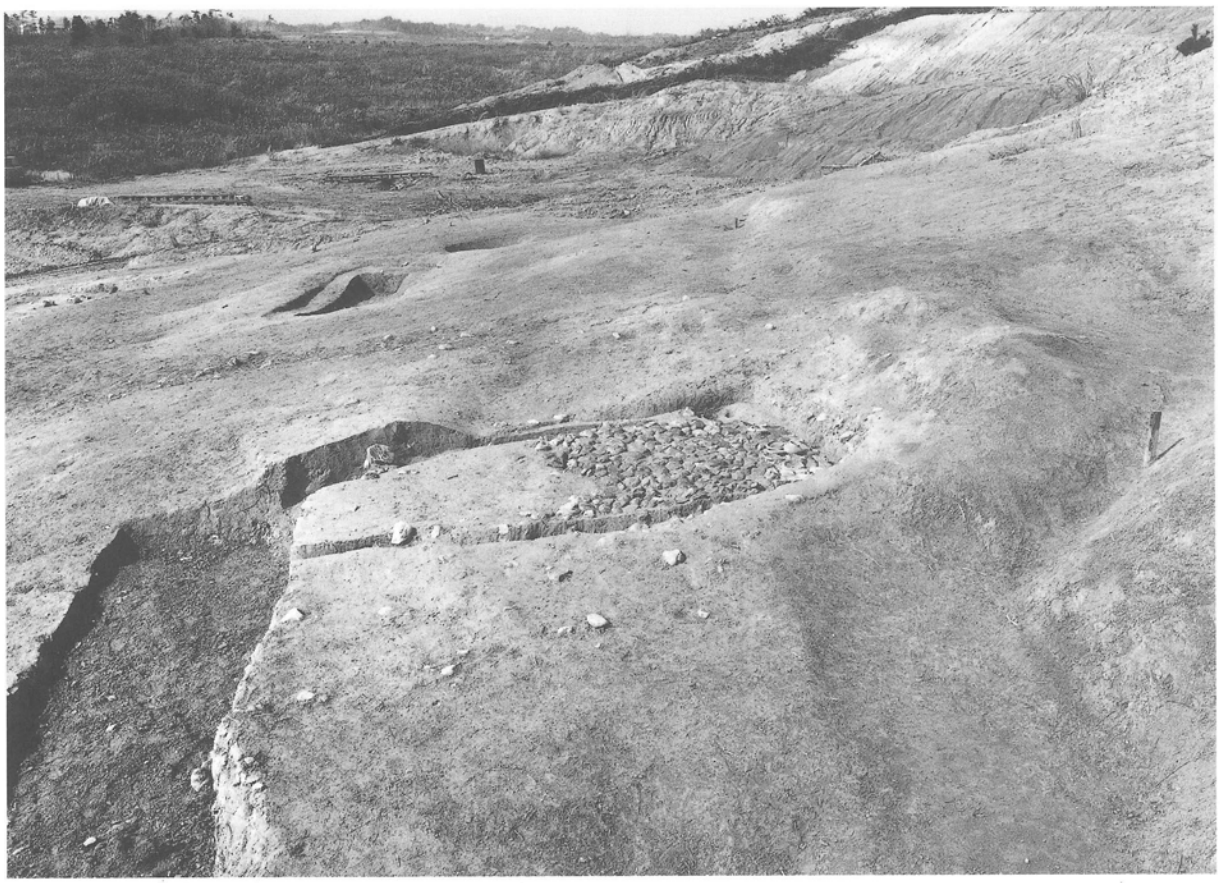
図版 8

西山古墳群

1．表土掘削後（北西から）

2．　同　上　（南から）

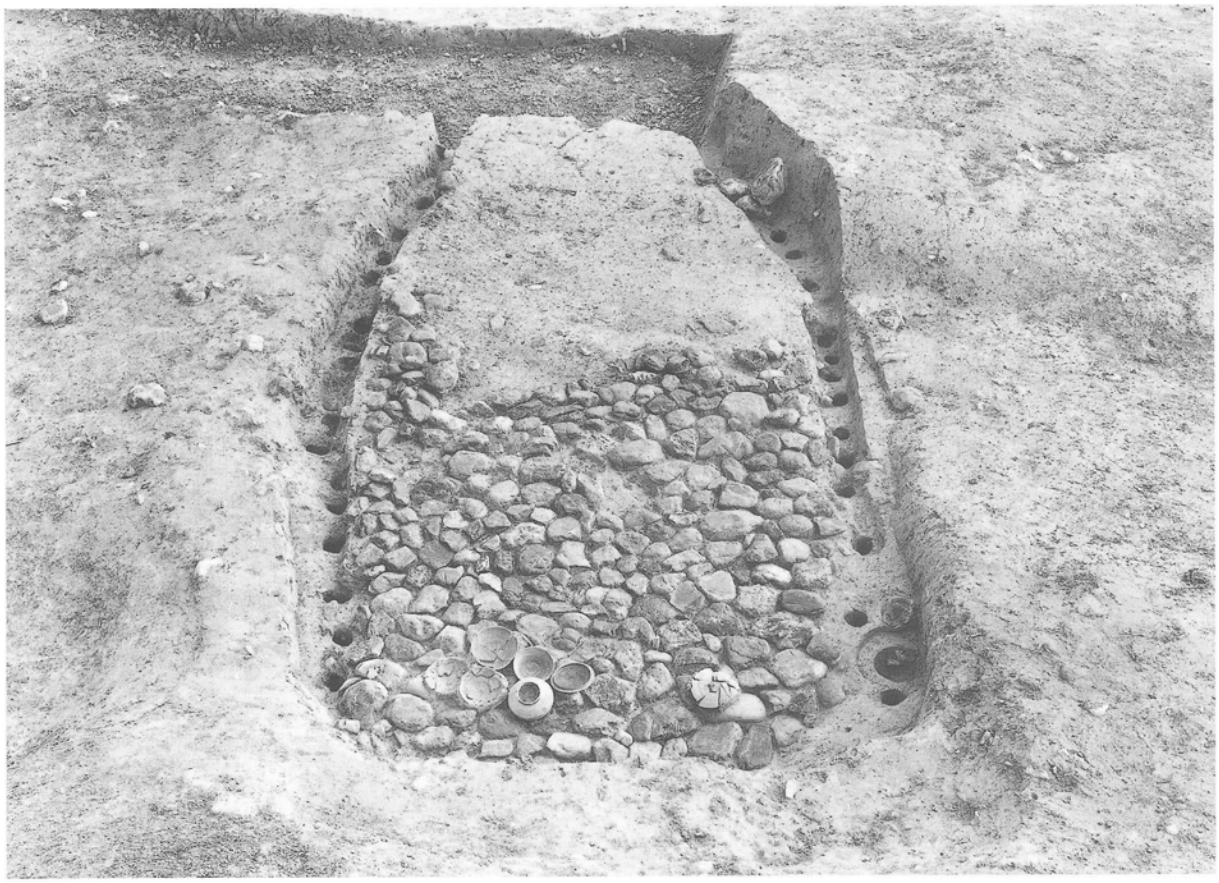
1．2号墳全景（南から）



2．　同　上　（東から）

1．２号墳主体部（南から）

2．　同　上　（前庭部から）



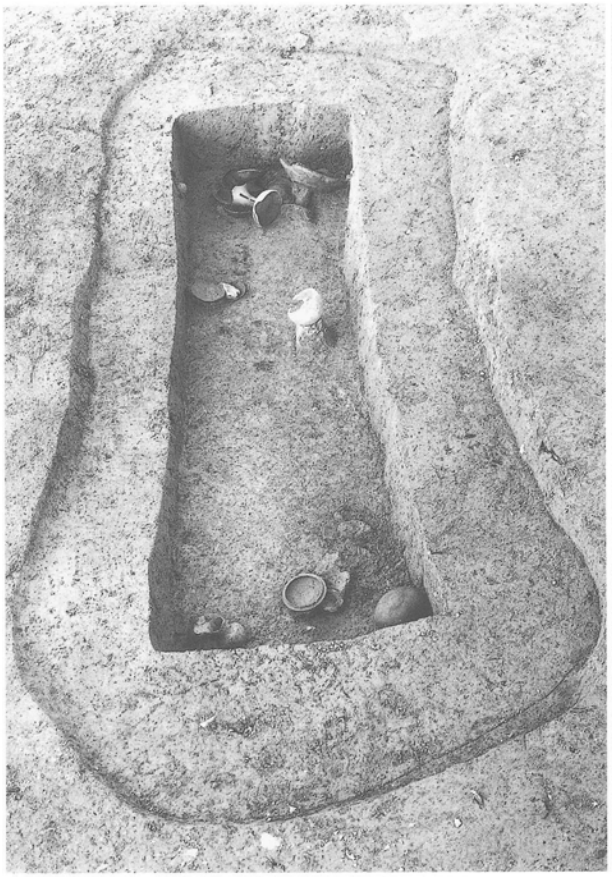
1．２号墳主体部（北から）

2．奥壁付近の副葬品出土状況（南から）

1．２号墳礫床面の鉄鏃出土状況（南西から）

2．２号墳墳丘断ち割り（西から）

1．９号墳主体部（南から）



2．　同　上　（東から）

3．　同　上　（西から）

9号墳副葬品の出土状況

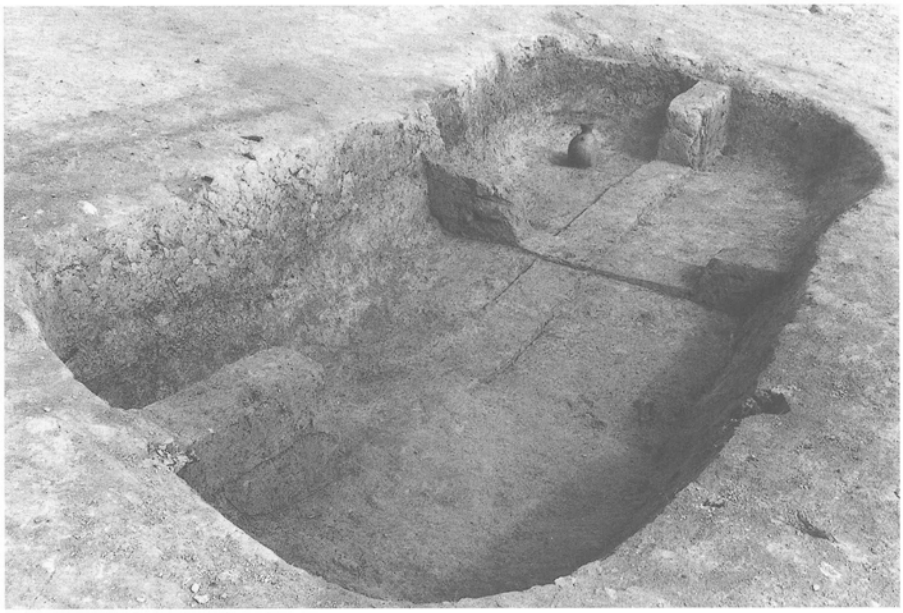
1．西小口側（東から）

2．中央部（東から）

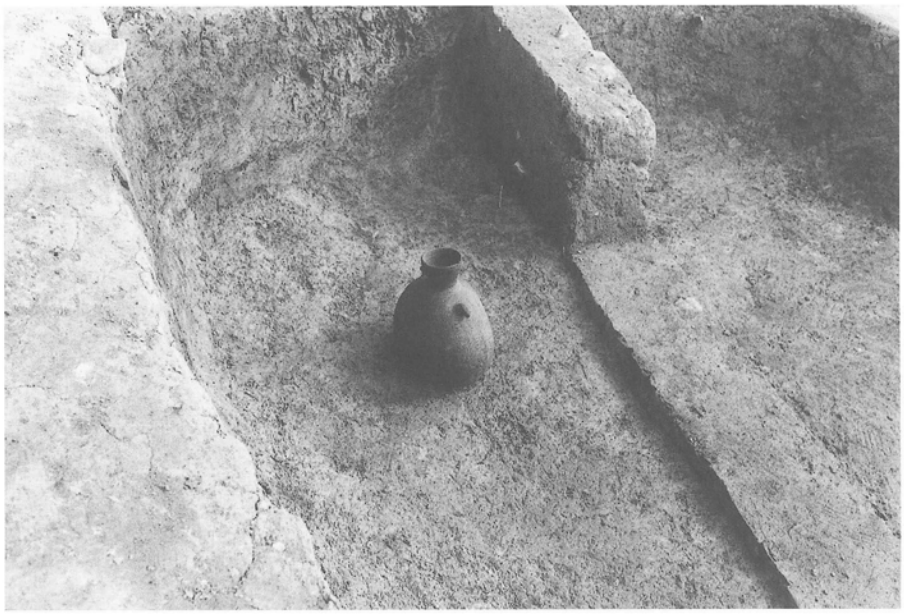
3．東小口側（西から）

9号墳主体部

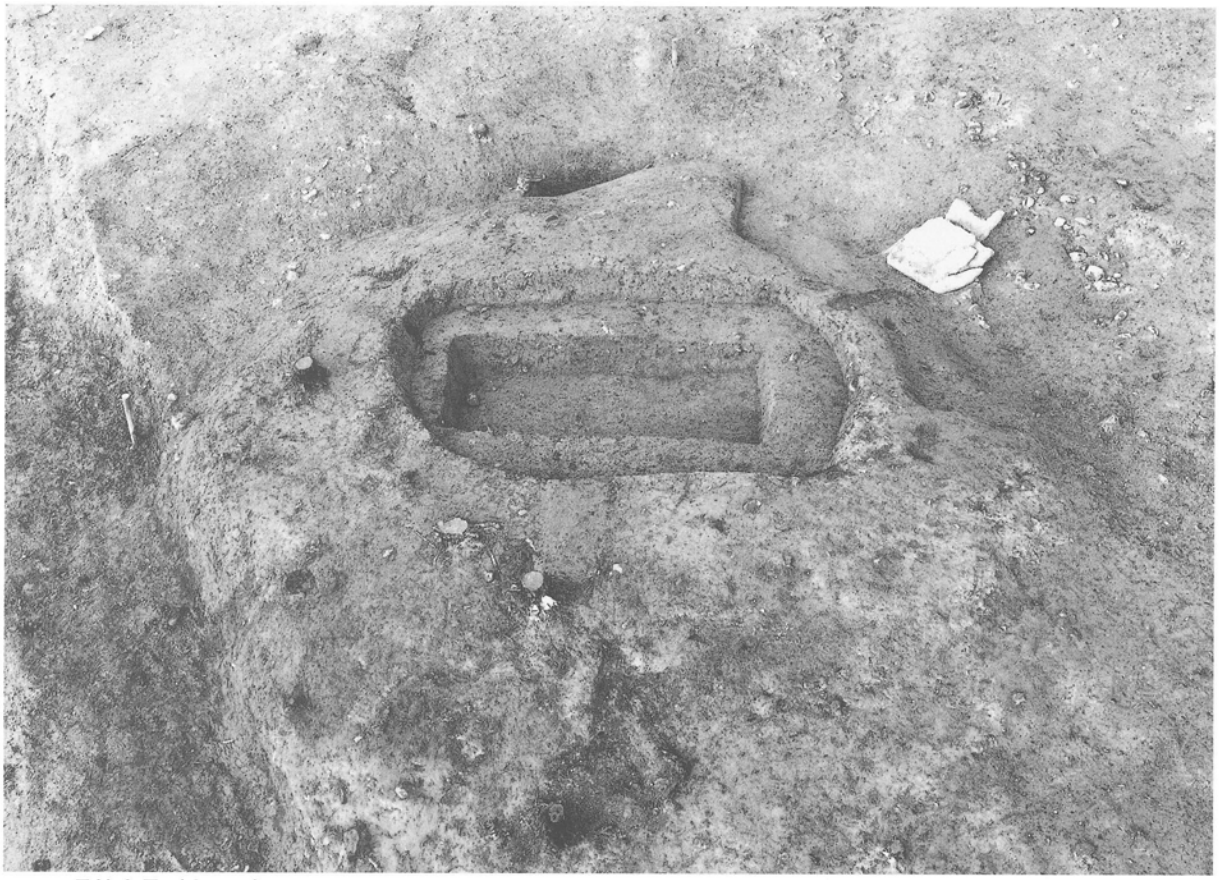
1．長軸断面（南西から）



2．掘り方断ち割り状況（南西から）

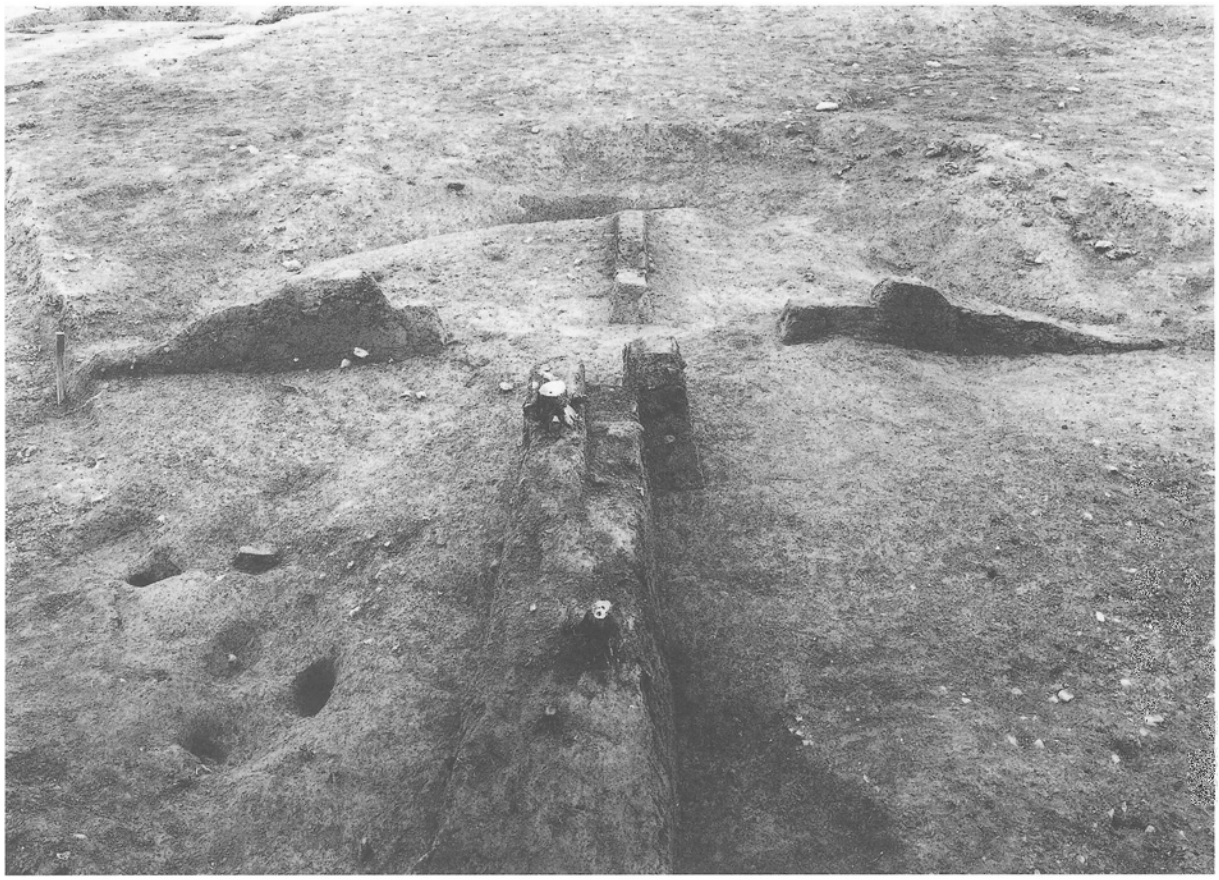


3．掘り方の遺物（西から）



1．10号墳全景（南から）

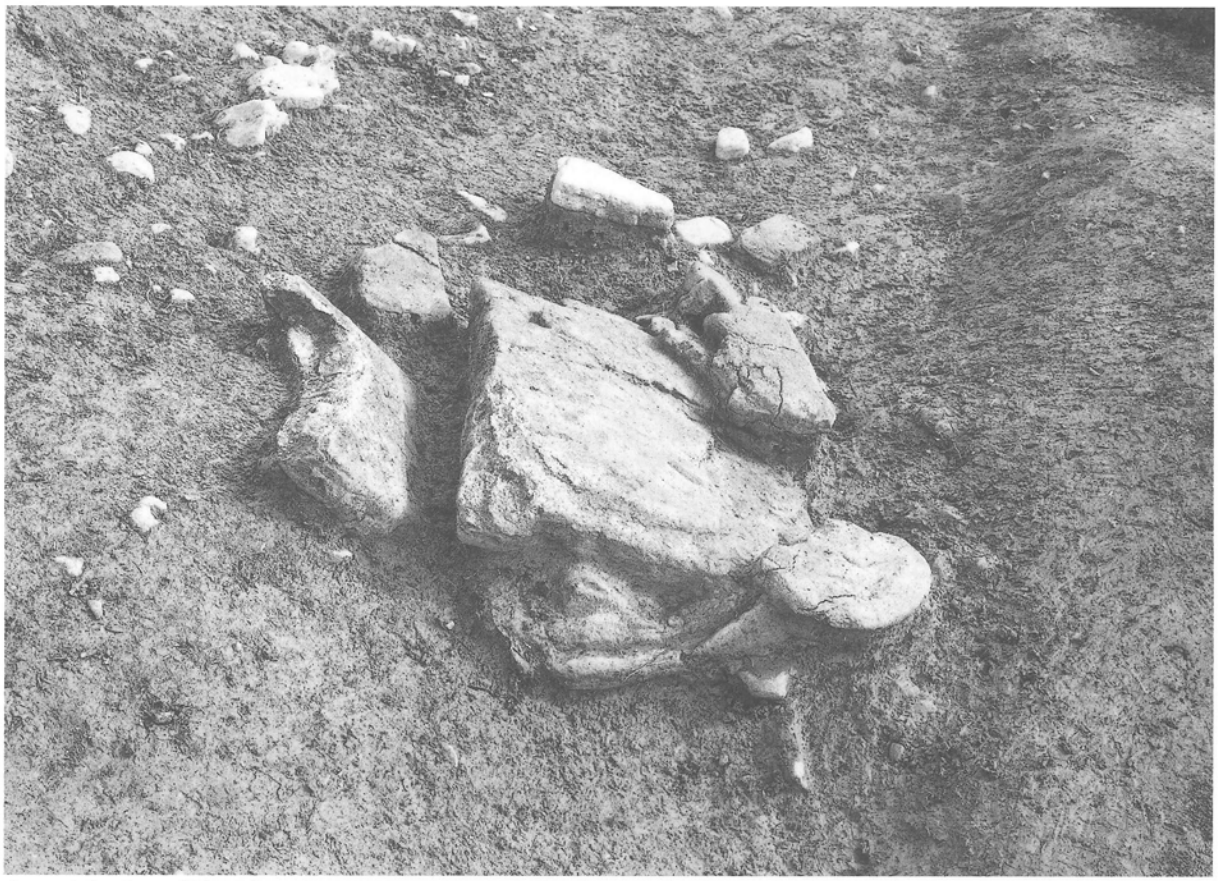
2．　同　上　（東から）



1．10号墳墳丘断ち割り（南から）

2．　同　上　（東から）

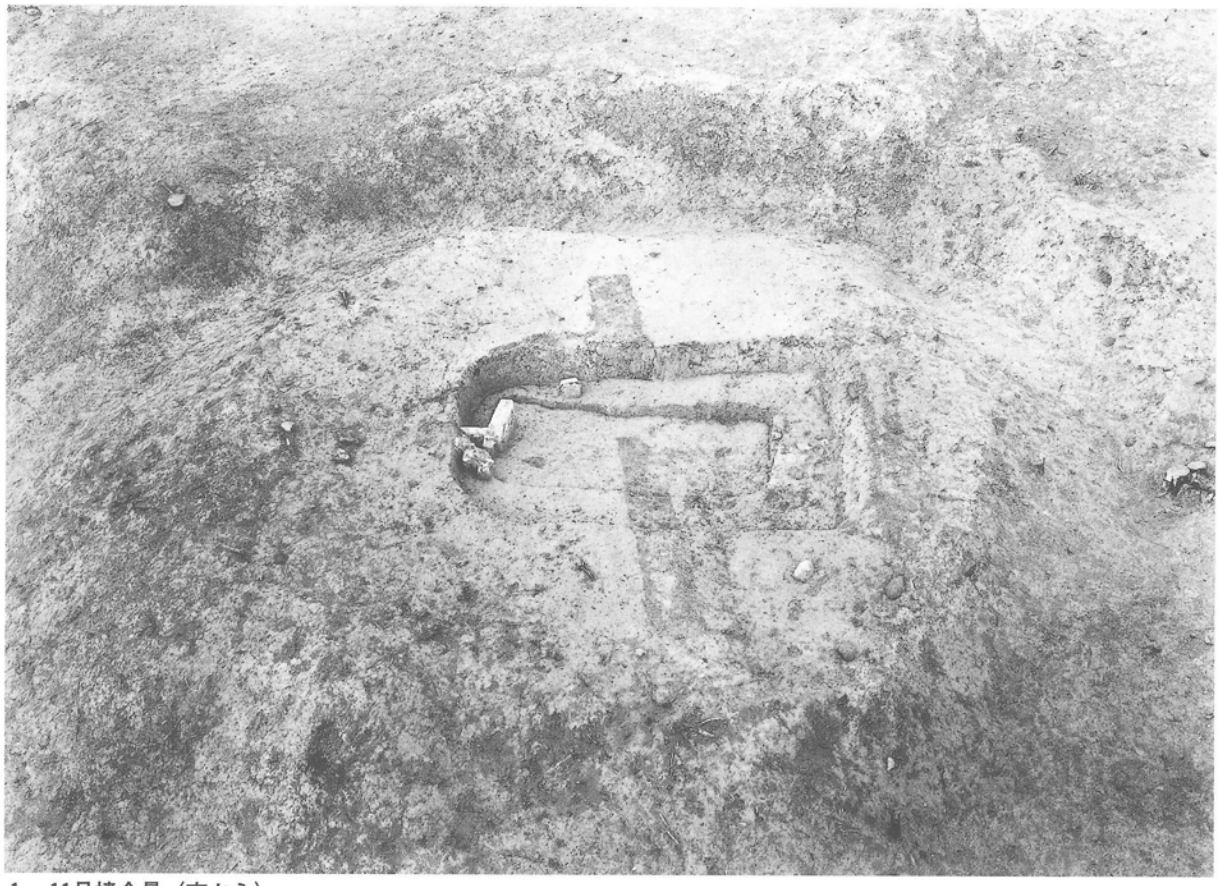
1．10号墳周溝内の箱式石棺（北から）



2．　同　上　（西から）

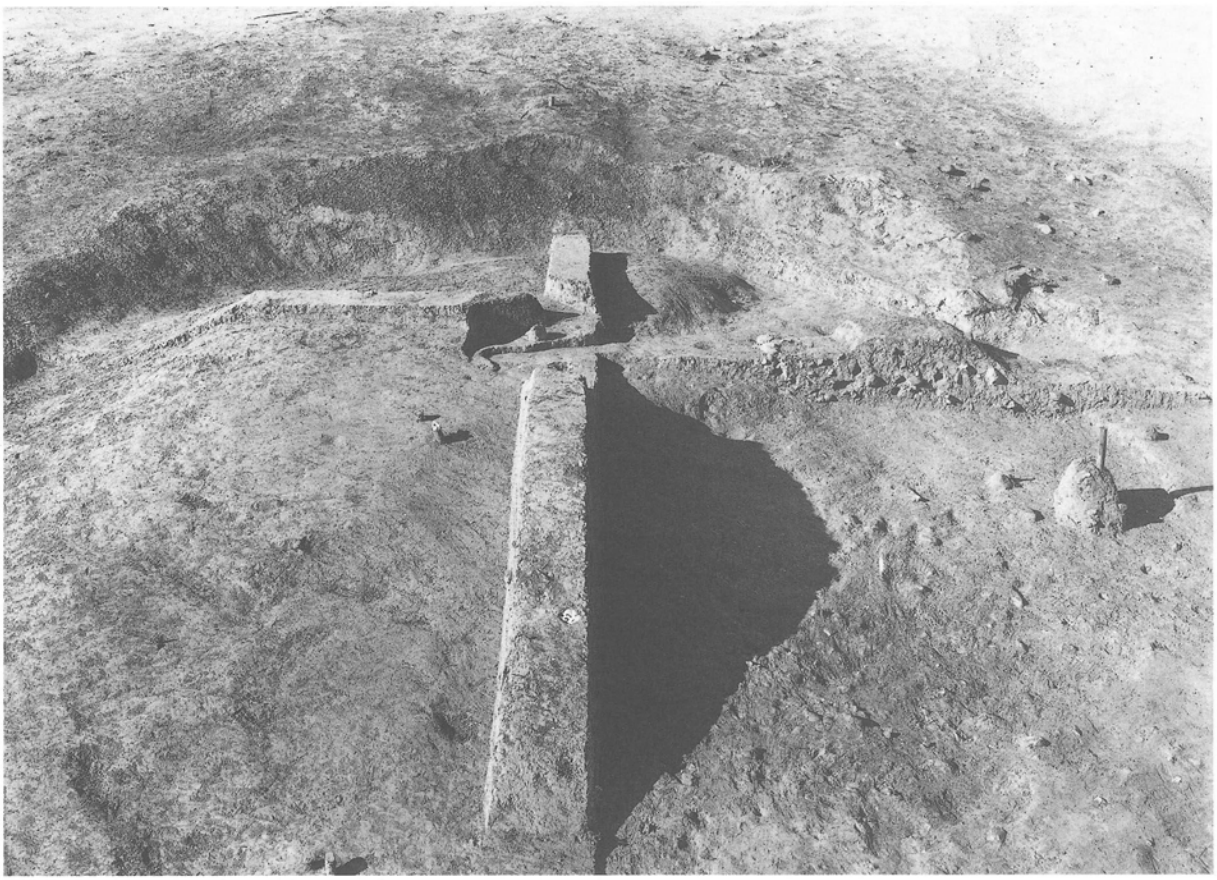
1．10号墳周溝北側断面（西から）

2．10号墳周溝内の土坑SK01（西から）



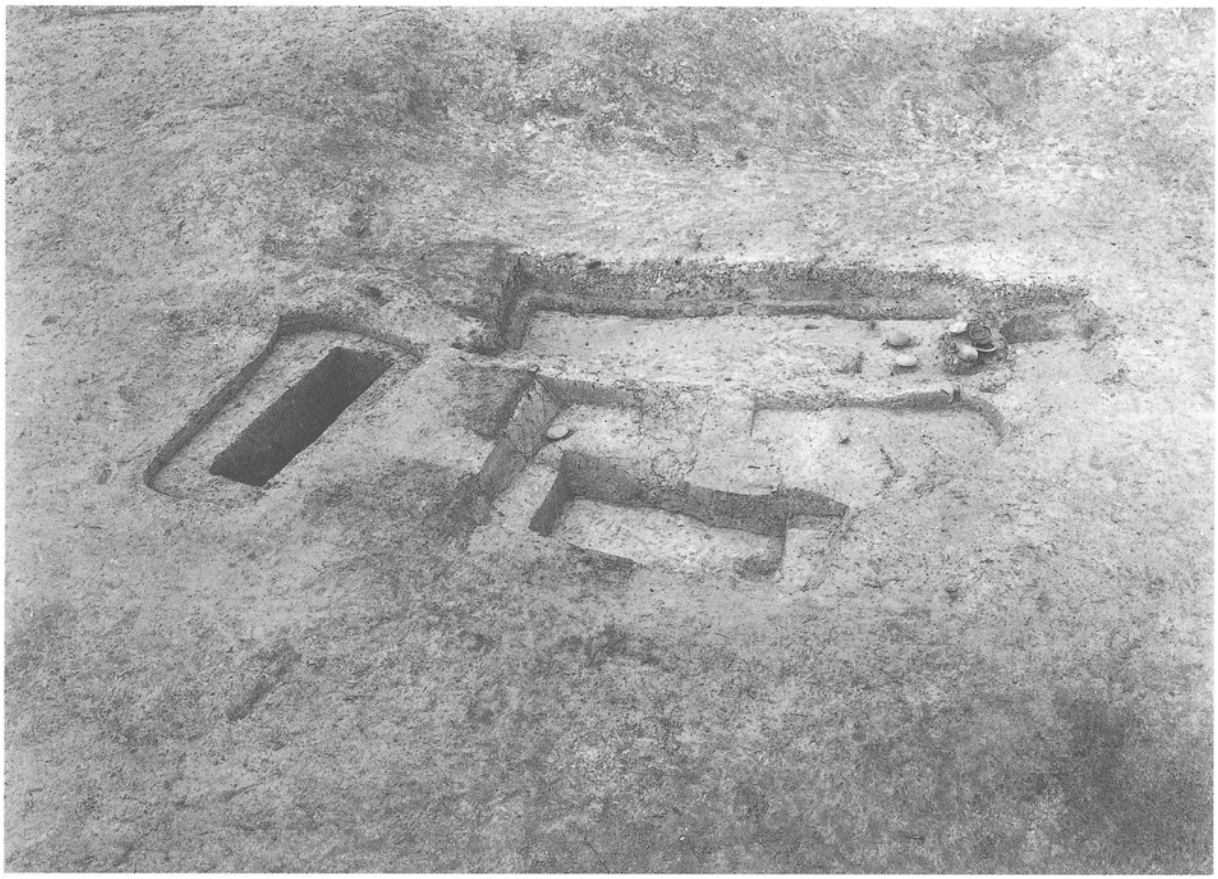
1．11号墳全景（南から）

2．11号墳主体部（南東から）

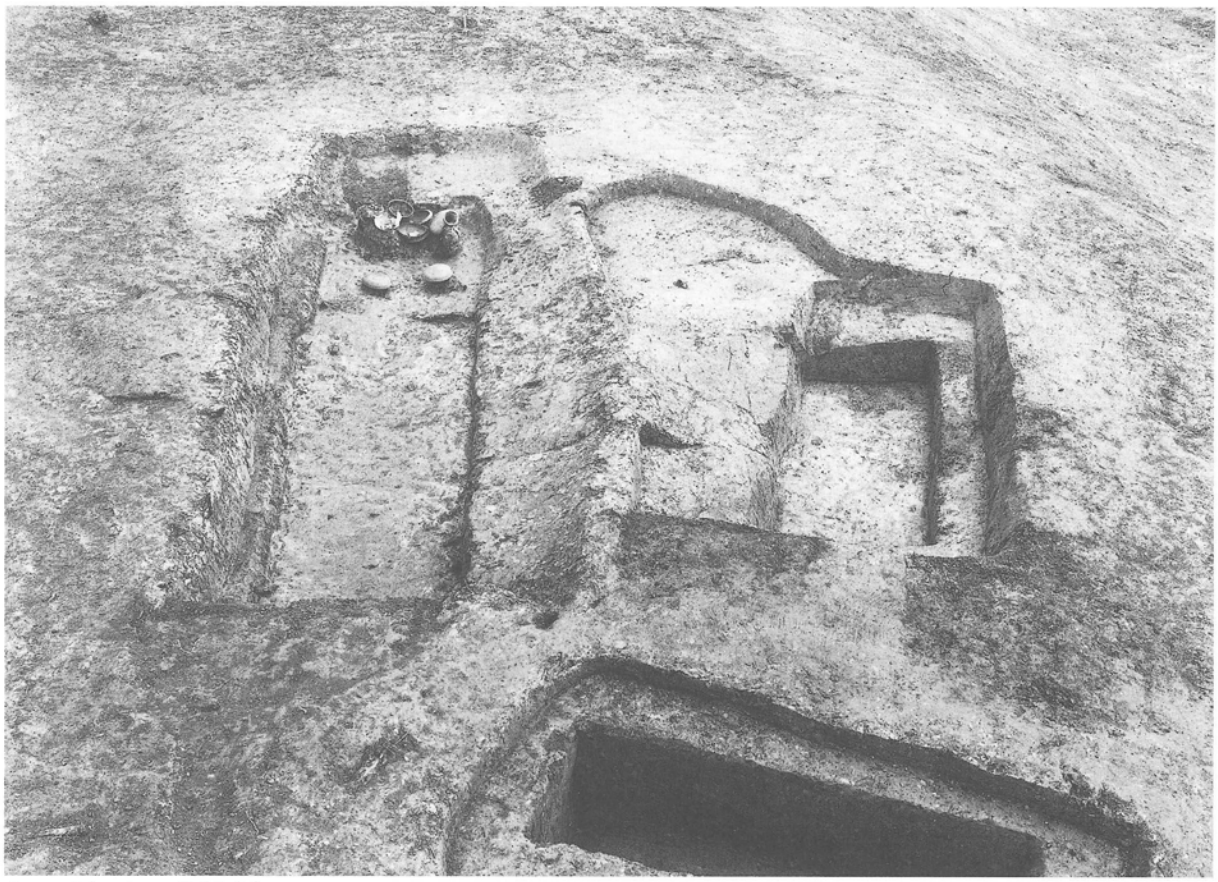


1．11号墳墳丘断ち割り（南から）

2．　同　上　（西から）



1．12号墳と弥生時代の木棺墓群（南から）



2．　同　上　（西から）